

博 士 論 文

晩清官僚文化における  
張裕釗書法の研究

令和 3 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科  
博士後期課程芸術専攻 陳 奕君

筑波大学



# 目次

序章	1
第一節 本研究の目的と意義	1
第二節 先行研究の成果	2
一、 晩清幕府及び胡林翼・曾國藩幕府の研究	2
1. 晩清幕府の研究	2
2. 胡林翼・曾國藩幕府の研究	3
二、 桐城派文学者と官僚の研究	5
1. 吳汝綸	6
2. 黎庶昌	7
3. 莫友芝	10
三、 張裕釗を対象とする研究	13
1. 詩文著作及び書簡	15
2. 年譜・伝記資料と交友関係の作成	17
3. 伝存する遺品による書風の研究	20
第三節 研究の方法	23
一、 問題点の提起	23
二、 研究対象	24
三、 検討手法	25
1. 清代晩期の官僚との交流	25
2. 張裕釗の書作	26
3. 張裕釗の書法にみる時期区分	29
4. 真偽・編年から分期・書風検証へ	29
表	32

<b>第一章 咸豊年間の胡林翼幕府における張裕釗書法</b> .....	39
序 .....	39
<b>第一節 張裕釗の家学と早年期の書作品</b> .....	39
一、 張裕釗の家学 .....	39
二、 早年期の書作品 .....	41
<b>第二節 入幕直前の書作品</b> .....	43
<b>第三節 曾国藩への従学と胡林翼への入幕時期</b> .....	45
<b>第四節 幕府の官僚たちとその書作品</b> .....	49
一、 胡林翼の小楷 .....	49
二、 汪士鐸の小楷 .....	51
三、 張裕釗の小楷 .....	52
小 結 .....	55
図 表 .....	57
<b>第二章 同治前半期の曾国藩幕府における張裕釗書法</b> .....	71
序 .....	71
<b>第一節 曾国藩幕府における活動</b> .....	72
一、 張裕釗の游幕活動 .....	72
二、 勺庭書院の勤務時期 .....	75
<b>第二節 莫友芝・何璟との交流</b> .....	81
一、 莫友芝との交流 .....	81
1. 咸豊 11 年及び同治 7 年の交流 .....	81
2. 莫友芝の曾国藩幕府における位置とその書学評価 .....	84
二、 湖北の幕府における何璟との交流 .....	91
<b>第三節 張裕釗及び書家たちの書風検証</b> .....	95
一、 張裕釗の大楷 .....	95



二、	張裕釗及び同時期書家の書風検証	96
三、	張裕釗の書簡	100
	1. 曾国藩宛書簡	101
	2. 汪士鐸宛書簡	104
	3. 蔣光燾宛書簡	107
	4. 徐宗亮宛書簡	110
四、	咸豊時期と同治前半期の書簡の書風比較	112
小 結		114
図 表		116
<b>第三章</b>	<b>同治後半期・光緒前半期における張裕釗書法</b>	<b>151</b>
序		151
第一節	同治後半期における莫友芝との交流	154
	一、張裕釗と莫友芝の交友関係	154
	二、曾国藩の幕府における梁碑の過眼	158
第二節	同治前半期からの書作品変遷	163
	一、張裕釗の書作	163
	1. 大字書作	163
	2. 中字書作	164
	3. 小字書作	170
	二、同治前半期からの書作品の変遷	174
	1. 大字書作	174
	2. 小字書作	175
第三節	梁碑の影響	176
	一、中字書作における梁碑からの影響	177
	二、中字書作における梁碑からの結構法の影響	178

1. 払いとその他の部分の幅	178
2. 乙脚のある横画の斜度	178
3. 他の横画の斜度	179
三、 同治前半期との共通点及び梁碑からの影響	179
四、 独自の点画特徴	180
1. 払い	180
2. 縦画の強調	181
3. 点から横画への変化	181
小 結	182
図 表	184
<b>第四章 光緒中期以降における張裕釗書法</b>	<b>223</b>
序	223
第一節 張裕釗による「弔比干文」の学習及び翻刻情報の交流	227
一、 袁昶・沈曾植・鄭孝胥との交流による「弔比干文」の学習記録	227
1. 光緒中期における袁昶・沈曾植との交流	228
2. 光緒中期における鄭孝胥との交流	233
二、 莫友芝・莫繩孫による「弔比干文」の翻刻情報の交流	237
1. 咸豊年間における莫友芝との交流	237
2. 光緒中期における莫繩孫との交流	239
第二節 同治後半期・光緒前半期からの書作品変遷	242
一、 張裕釗の書作	242
1. 大字書作	243
2. 中字書作(碑碣書作)	244
(1)「蒯徳模神道碑」(光緒13年推定)	244

(2) 「李剛介公殉難碑記」(石印・湖北本)(光緒9～14年推定) ……	248
(3) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒19～20年推定) ……	254
3. その他 ……	256
二、 同治後半期・光緒前半期からの書作品の変遷 ……	258
1. 大字書作 ……	258
2. 中字書作(碑碣書作・その他) ……	260
(1) 縦画・横画における線の太さ ……	261
(2) 間隔の広さ ……	262
(3) 外方内円 ……	263
第三節 「弔比干文」の書風の影響 ……	263
第四節 同治後半・光緒前半期との共通点 ……	265
第五節 宿墨の運用 ……	266
小 結 ……	267
図 表 ……	269
<b>終 章</b> ……	311
第一節 各章の研究成果とまとめ ……	311
第二節 今後の課題 ……	313
一、 年代・真偽未解明の張裕釗書作 ……	314
二、 莫友芝の生涯及び書学 ……	315
三、 張裕釗書法の受容 ……	315
表 本論における研究成果の整理 ……	317
参考文献 ……	318
謝辞 ……	337

## 凡 例

- 一、 本論では、新仮名遣いを用いている。
- 二、 本論では、漢文原文の引用のまま引用し、常用漢字体を優先して用いている。異体字についても、常用漢字体もしくは本字に改めた。
- 三、 漢文引用文の標点は、原文のままか底本を参考にし筆者が付したものである。傍線は、筆者が論を進める上で必要な箇所に施したものである。
- 四、 人名、生卒年、作品名などの名称は、主に『中国近代の書人たち』、『中国書人名鑑』が収録したものに依拠した。
- 五、 書物の名前には『』、書画の作品には「」を付した。論考名や引用は「」を付した。
- 六、 図版、表は、各章末に一括して掲載した。
- 七、 本論では、筆者が作成した図表は、全て図版出典を明記した。

# 序 章

## 第一節 本研究の目的と意義

張裕釗（清・道光3年～清・光緒20年、1823～1894）、字は方侯、または廉卿。号は圃孫、または濂亭。湖北省武昌県、樊溪鎮符石郷、龍塘張村（現在鄂州市梁子湖区、東溝鎮）の人である。道光丙午（26年、1846）科の挙人で、宮中の文書・詔勅を司る内閣中書の官を授けられている。清末の桐城派の文学者・書家であり、曾國藩（1811～1872）の四大門徒の一人に数えられている。湖北勺庭書院・江寧鳳池書院・保定蓮池書院・湖北江漢、經心書院・襄陽鹿門書院に務めた。

彼の書法について、康有為（1858～1972）は『広芸舟双楫』の中で、「集碑之成（碑学の成を集めた）」と述べて称賛している<sup>1</sup>。張裕釗の晩年の門徒である宮島詠士（1867～1943）は明治20年（光緒13年、1887年）に保定の蓮池書院に張裕釗の門を叩いた。宮島は張裕釗の晩年7年間を随行し、張裕釗書法の真髓を会得した。その後、明治28年（光緒21年、1895）に東京で善隣書院を設立し、張裕釗の書法を称揚した。さらに、宮島の門人である上條信山（1907～1997）は張裕釗の書法をさらに押し進め、書象会を設立して張裕釗の書法を広めていった。

このように張裕釗の書法は現代書流にまで展開し、影響を与えているが、清朝晩期の書法史の展開においては、そもそもどういう意義を持つものと言えるのか、その点の解明は重要であると考えられる。張裕釗に関し

---

<sup>1</sup>（清）康有為著、崔尔平注『広芸舟双楫注』巻4、餘論第19（上海書画出版社、1981年）、186頁。

ては、文学や書法など各分野で盛んに研究されている。しかしながら、従来の研究では、彼が晩清の官僚文化の中心にいたことに焦点を当て、書法の観念上どのような影響を受けてさらに与えたかについて詳細に説明されていない。

本研究の目的は張裕釗の書法に対し、官僚たちが重要な役割を果たしたことに注目し、それを手がかりに彼の中国晩清書道史におけるその新たな位置づけを明確にすることである。張裕釗の書法の形成過程において官僚たちが集う幕府と書院は重要な役割を果たしたという仮説のもと、書法史研究へ官僚文化の視点を投ずることに本研究の意義がある。

## 第二節 先行研究の成果

張裕釗は曾国藩の四大門徒の一人であり、書法家としてのみならず桐城派である文章家として高く評価されている。以下、先行研究において彼が存在していた晩清幕府の背景・入幕時点、また幕府中の官僚・桐城派の文人との交友経緯について明らかにしたい。最後は張裕釗を対象とする研究を検討してみる。

### 一、晩清幕府及び胡林翼・曾国藩幕府の研究

#### 1. 晩清幕府の研究

まず、「晩清幕府」・「幕府」・「游幕」の語義を明らかにする。「晩清幕府」という言葉を先駆的に提示したのは李志茗氏である。彼は嘉道年間の清代地方での大員（官僚）、特には督撫（総督、巡撫を指す）大員の幕

府を定義している。翌年それに加筆し一著として出版した<sup>2</sup>。李氏は陶澍・曾国藩・李鴻章・袁世凱の幕府に焦点を絞り、それぞれの幕府の組織や影響を考察し、晩清幕府に賓僚（客様、幕僚）の職官化または幕府の政府化という特徴を挙げている。李氏はまた張裕釗が元は胡林翼（1812～1861）の幕僚だったが、その後、曾国藩の幕府に入ったと指摘している<sup>3</sup>。また、李氏の別稿にも張裕釗は元胡林翼の幕僚であり、官書局に務めていたと述べている<sup>4</sup>。

「幕府」という概念について、清代における学術の発展と幕府との関係から論じた専著に、尚小名の論考がある。幕府とは、中国で古代の官僚が地方政務または軍務を管理する組織である。一方、尚小明氏は「游幕」という概念を提示し、道光以降、游幕学者の学術活動は古籍の整理と保護や各省に官書局を設立して書籍を刊刻することと定義している。また、尚氏は清代にかけて游幕の発展と変遷を考察した上で、清代におけるそれぞれの幕府を紹介しつつ、張裕釗が曾国藩幕府に滞在した期間については、百瀬弘の『清代名人伝略』（下）に基づき咸豊3年（1853年）以降としている<sup>5</sup>。

## 2. 胡林翼・曾国藩幕府の研究

---

<sup>2</sup> 李志茗『晩清幕府研究—以陶、曾、李、袁幕府為例』（上海華東師範大学博士論文、2001年4月）、5頁。李志茗『晩清四大幕府』（上海人民出版社、2002年1月）。原文には「晩清幕府是指始於嘉道年間的清代地方大員尤其是督撫大員的幕府。」とある。

<sup>3</sup> 前掲注2、李氏著、69～70頁。

李志茗氏の幕府に関する論考には以下がある。

① 李志茗「衆流之匯：曾国藩幕府盛況探源」（『歴史教学問題』2008年4期、2008年）、13頁・37～39頁。

② 李志茗「伝統与現代之間：晩清幕府制度之演進」（『学術月刊』第40巻9号、2008年）、140～146頁。

<sup>4</sup> 李志茗「旧籍新刊与文化伝衍—以晩清官書局為中心的考察」（『福建論壇（人文社会科学版）』、2015年2期）、112～117頁。

<sup>5</sup> 尚小明『学人游幕与清代学術』（社会科学文献出版社、1999年10月）、47～48頁・302頁。

次に、張裕釗が滞在していた胡林翼・曾国藩幕府に関する研究を概観していく。張裕釗が曾国藩の弟子や幕僚となったことは周知のとおりで、先学も多数論及しているが、管見では張裕釗が胡林翼の幕友であったことについては、十分に顧みられていない。

唐浩明氏は胡林翼を研究する一環として、張裕釗が胡の下で『読史兵略（上）（下）』『読史兵略続編』を編集した事実を指摘している。また、張の書簡には胡林翼・門人や幕僚に宛てたものが残り、幕府生活の概況について詳細が知られる<sup>6</sup>。一方、杜春和氏・耿来金氏は、胡林翼の書簡を集成しており、そこには官僚たちとの交際記録や書法に関する証言が窺える<sup>7</sup>。これらは張の書学を探る基礎資料となろう。

一方、曾国藩の研究について唐浩明氏は、曾の資料集大成に挑み、奏稿・批牘・詩文・読書録・日記・家書・書信の七部分に分類した。これも基礎的な研究で不可欠の材料であることは言うまでもない<sup>8</sup>。これに加え、幕府をめぐる幕僚活動に関しては、張蔭麟氏・李鼎芳氏を皮切りに、主要な人物が提示されつつある<sup>9</sup>。なお、李鼎芳氏はこの成果に加筆し、張裕釗については彼の詩文の才能が曾国藩から認められたと指摘している<sup>10</sup>。

これに対し、繆全吉氏は、晩清における地方権力の変化に注目するもので、張裕釗の入幕時期については「碑伝集補（第51巻）」に基づき同治7年（1868年）だったことを提示している<sup>11</sup>。

続いて朱東安氏の研究について触れたい。朱東安氏は、幕僚の才能に

<sup>6</sup> 胡林翼著、唐浩明編『胡林翼集』（岳麓書社、1999年5月）。

<sup>7</sup> 杜春和、耿来金編『胡林翼未刊往来函稿』（岳麓書社、1989年7月）。

<sup>8</sup> 曾国藩著、唐浩明責任編輯『曾国藩全集』（岳麓書社、1994年第一版、2011年9月）。

<sup>9</sup> 張蔭麟、李鼎芳「曾国藩与其幕府人物」（『大公报・史地周刊』1935年5月24日）。

<sup>10</sup> 李鼎芳編『曾国藩及其幕府人物』（岳麓書社、1985年）、49頁。

<sup>11</sup> 繆全吉「曾国藩幕府盛況与晩清地方権力之变化」（『中国近代現代史論』第5編、中山學術文化集刊第4集、1969年）、総327～380頁。



よって幕府での専門的職掌が増えているという。加えて、曾国藩幕府を中心とした人材の組織、または幕僚の分類について系統的な論考を提示した。とりわけ「組織」の概念を援用することは注目に値する<sup>12</sup>。なお、朱氏は別著でも張裕釗に焦点を当てて、張裕釗が曾国藩幕府に入る前に、胡林翼の幕友であったことを明らかにしている<sup>13</sup>。

その後、凌林焯氏は博士学位論文を加筆し『曾国藩幕賓探究』（2002年）<sup>14</sup>を上梓した。凌氏は曾国藩幕府の研究の専門家として知られ、曾国藩幕府に関する論考を多数発表した。また、彼は定量的な分析で、曾国藩幕府は497人を擁していたとし、先学に対し異論を提起した。

上述により、張裕釗による晚清幕府の研究について、先学は胡林翼と曾国藩の幕僚だったことを明らかにしてきたが、詳細な検討には至っていない。とりわけ、張裕釗が曾国藩幕府に入る時期に関しては、定説になるには至っていないので、詳細な検討が必要である。

## 二、桐城派文学者と官僚の研究

晚清文壇の勢力を誇った古文の一派に曾国藩を中心とする桐城派がある。桐城派に関連した研究は、これまで数多くなされており、張裕釗はその代表の一人で、曾国藩の四大門徒の一人として周知されている。ほかの三人は呉汝綸（1840～1903）・黎庶昌（1837～1897）・薛福成（1838～1894）だが、張裕釗と密接な関係を持つ人物について、主要な研究成果として挙げられるのは呉汝綸と黎庶昌に関するものである。張裕釗の

---

<sup>12</sup> 朱東安『曾国藩幕府研究』（四川人民出版社、1994年12月）を参照。数十年後、朱氏がその著作に修正加筆し、朱東安『曾国藩幕府』（遼寧人民出版社、2018年1月）を上梓した。

<sup>13</sup> 朱東安「附録一：主要成員簡歴」（『曾国藩集团与晚清政局』華文出版社、2003年1月）、387頁。

<sup>14</sup> 凌林焯『曾国藩幕賓探究』上、下（文史哲出版社、2002年8月）。

場合は、彼が呉汝綸に宛てた 56 通の書簡「論学手札」は張の代表作として知られている。また、曾国藩の幕友である莫友芝（1811～1871）を加えて、ここでは呉汝綸・黎庶昌と莫友芝の先行研究を改めて検討しながら、張裕釗との交際について明確にしていきたいと思う。

## 1. 呉汝綸

まず、呉汝綸について触れたい。書簡の整理について、『桐城呉先生（汝綸）尺牘』が挙げられ、その序文に「光緒癸卯冬十二月門人賀濤、宋朝楨等集貲刊行。男闈生謹編次。（光緒癸卯の冬、十二月。門人である賀濤、宋朝楨などの支援で刊行し、息子の呉闈生が編集した）」と明記される。光緒癸卯とは、光緒 29 年（1903 年）を指しており、その後、文海出版社より 1966 年に出版されている<sup>15</sup>。また、呉汝綸の基礎的な資料の集大成として『呉汝綸全集』（2002 年）<sup>16</sup>がある。これは文集・詩集・尺牘・日記を含めるもので、黄山書社より出版された。呉汝綸については、このように豊富な資料がある。

したがって、呉汝綸の先行研究に関しては、これまでに多くの成果が上がっている。例えば、呉汝綸が曾国藩の幕僚として活躍していたことについては、黄海龍氏<sup>17</sup>、張濤氏<sup>18</sup>、曾光光氏・唐靈氏<sup>19</sup>などが論じており、呉汝綸が曾国藩の幕僚として果たしていた役割の大きさを窺い知ることができる。さらに、呉汝綸の研究は教育面でも展開されている。

---

<sup>15</sup> 沈雲龍主編『桐城呉先生（汝綸）尺牘』（『近代中国史料叢刊』第 37 輯、文海出版社、1966 年 10 月）。

<sup>16</sup> 呉汝綸撰、施培毅・徐寿凱校点『呉汝綸全集』（黄山書社、2002 年 9 月）。

<sup>17</sup> 黄海龍「呉汝綸受曾国藩影響之探析」（『伝奇、伝記文学選刊』安徽省文学芸術界聯合会、2011 年 9 月）。

<sup>18</sup> 張濤「論曾国藩对呉汝綸的影響—以用人思想為例」（『湖南人文科技学院学报』湖南人文科技学院、2011 年 12 月）。

<sup>19</sup> 曾光光・唐靈「呉汝綸与曾国藩關係弁析」（『蘭台世界』、蘭台世界雜誌社、2014 年 2 月）。

呂順長氏<sup>20</sup>、周恩文氏<sup>21</sup> は日本教育を考察する立場から扱おうとするものである。

なお、張裕釗と吳汝綸の関係については、蓮池書院期間の頻繁な交流が知られる。柳春蕊氏は、河北省で清代の晩期における蓮池書院を中心に張裕釗・吳汝綸の助力によって、古文が盛行した点を論じている<sup>22</sup>。一方、靳志朋氏は張裕釗・吳汝綸は蓮池書院での職務を通じて、清代の晩期における桐城派の継承を可能としたことを指摘している<sup>23</sup>。両者の書簡交流については、上述した張裕釗の代表作『論学手札』があり、次項<sup>24</sup> で検討する。

## 2. 黎庶昌

黎庶昌の先行研究を列挙すると、以下のようになる。

第一に年譜・史料集では、黎庶昌の後人である黎鐸氏が編集した年譜が挙げられる。黎庶昌の生涯の輪郭を描き込んだ、最初の年譜である<sup>25</sup>。また、黎鐸氏・龍先緒氏が校正した『黎庶昌全集』は、黎庶昌の詩稿・信稿・遺札・黎氏家譜を含んだ全面的な資料の集大成といえ、史料集として重要な意味をもっている<sup>26</sup>。したがって、今後は黎庶昌と張裕釗の信稿の利用が期待される。加えて、1992年に黎庶昌の生誕155周年を記

<sup>20</sup> 呂順長「吳汝綸日本教育視察の筆談記録（訳注）」（『四天王寺大学紀要』第57号、2014年3月）、371～388頁。

<sup>21</sup> 周恩文「吳汝綸日本教育考察与对晚清学制建立影響程度的再探討」（『師大学報：教育科学研究期刊』第60卷第3期、台湾師範大学、2015年）、127～151頁。

<sup>22</sup> 柳春蕊「蓮池書院与以吳汝綸為中心的古文圈子的形成」（『東方論壇』2008年第1期、青島大学東方論壇雜誌社、2008年9月）

<sup>23</sup> 靳志朋「蓮池書院与晚清直隸文化」（『燕山大学学报（哲学社会科学版）』第10卷第1期、燕山大学、2009年3月）

<sup>24</sup> 本節の「三、張裕釗を対象とする研究／1. 詩文著作及び書簡」を参照。

<sup>25</sup> 黎鐸「黎庶昌年譜」、（『遵義文史資料 第九輯（關於遵義人物1）』遵義市政协文史資料研究会、1986年7月）、57～105頁。

<sup>26</sup> 黎庶昌著、黎鐸・龍先緒校正『黎庶昌全集（1～8冊）』（上海古籍出版社、2015年11月）。

念する国際学術討論会が行われ、その際出版された『貴州文史叢刊（黎庶昌專輯）』には、黎庶昌に関わる各種の論文が掲載されている。例えば、葛鎮亜氏の「關於黎庶昌的文物和古迹」には、「黎安理墓表」が挙げられる。黎安理は黎庶昌の祖父であり、墓表の内容は張裕釗が撰文し、黎庶昌が書丹した。この墓表は、黎庶昌の書法と彼の家族史を研究する上で重要な資料といえ、両者は文学と芸術において交際があったことが分かる<sup>27</sup>。

第二に伝記については、黄萬機氏『黎庶昌評伝』（1989年）がある。この伝記は黎庶昌の政治・外交・学術・文学活動に対し、全面的な評価を試みるもので、歴史主義的態度で執筆されている。黎庶昌研究の唯一の専著であり、黎庶昌に関する史料を大量に引用し、黎庶昌の人生をいきいきと再現している。また、内容に見える黎庶昌と張裕釗の姻親関係に関する記述も散見される<sup>28</sup>。

第三は黎庶昌は晩清の外交官としての文化に関する研究である。例えば幸必沢氏は、黎庶昌が当時中国の文物や古籍に対する日本への流出の動向を把握し、日本との接触によって善本・孤本古籍・金石書画の収集に協力したことに基づき、日中交流について大きな貢献を残した点を指摘している<sup>29</sup>。次に、楊艷氏・李仕波氏は黎庶昌が清代の外交官のような「洋務派」「維新派」に分類されず、「文化外交」に特有の風格がある漢文化によって日本の文化人と接触することになったと指摘している<sup>30</sup>。加えて、これらの日本の文化人との交流をめぐる人々について、石田肇

<sup>27</sup> 黎庶昌国際学術研究会組織委員会編『貴州文史叢刊（黎庶昌專輯）』1992年第3期（総第46期）（貴州省文史研究館、1992年9月）。葛鎮亜「關於黎庶昌的文物和古迹」、125～131頁。

<sup>28</sup> 黄萬機『黎庶昌評伝』（貴州人民出版社、1989年5月）、51・58頁を参照。のち黄萬機『黄萬機全集之二：黎庶昌評伝』（中華集経文化事業有限公司、2013年10月）として再版された。

<sup>29</sup> 幸必沢「黎庶昌的文化外交和文史研究業績」（『貴州文史叢刊』貴州省文史研究館、1990年3月）、69～113頁。

<sup>30</sup> 楊艷・李仕波「試論黎庶昌的文化外交」（『六盤水師範高等専科学校学報』第19巻第1期、六盤水師範高等専科学校編輯部、2007年2月）、41～45頁。

氏は、漢学者である藤野正啓（1826～1888）を取り上げ、藤野正啓・黎庶昌両者ともに桐城派の文章観などの立場は同じであり、親しかったという見解を示している<sup>31</sup>。この他、政治思想と外交の先行研究では李世模氏の成果がある。李氏は黄萬機氏の議論に対し、黎庶昌が外交官として、政治革新のために洋務派の「中学為体、西学為用」を標榜する点に注目している<sup>32</sup>。これに加え、西里喜行氏<sup>33</sup>などの成果が挙げられるが、膨大な数に上るため、ここでは割愛する。

第四として、黎庶昌に関する古籍や蔵書の研究も蓄積がある。まず、古籍について張新民氏は『古逸叢書』における『尚書積音』は張裕釗の蔵本と述べている<sup>34</sup>。また、石田肇氏も、黎庶昌が日本へ流出した中国古籍を収集し、日本で木村嘉平（1873～1945）が『古逸叢書』として刊刻することになり、張裕釗がそれを見て日本の刻版を賞賛したと指摘される<sup>35</sup>。さらに、黎庶昌の蔵書目録『拙尊園存書目』については日本側の石田肇氏を始めとする多くの研究があり、『拙尊園存書目』が貴州省博物館に蔵されていることに触れ、内容・背景や特色について考察している。その中の「碑帖目録」には先秦から元代まで各時代の拓本がかなり挙げられていると指摘されている。これによって、黎庶昌は金石に関心があったというのが石田氏の見解である<sup>36</sup>。日本側の研究については、陳捷氏も挙げられ、陳氏は貴州省における日本関係資料の伝存状況、黎

<sup>31</sup> 石田肇「黎庶昌をめぐる人々」（『中国近現代文化研究』第11号、中国近現代文化研究会、2010年3月）、1～8頁。

<sup>32</sup> 李世模「黎庶昌政治思想傾向弁析—兼与黄萬機先生商榷」（『貴州師範大学学报 社会科学版』1993年第2期、総第75期、貴州師範大学、1993年）

<sup>33</sup> 西里喜行氏「黎庶昌の対日外交論策とその周辺：琉球問題・朝鮮問題をめぐって」（『東洋史研究』第53期、東洋史研究会、1994年）、443～478頁。

<sup>34</sup> 張新民「黎庶昌的版本目錄学一読『古逸叢書』札記」、前掲注27編著、33～40頁。

<sup>35</sup> 石田肇著・孔繁錫訳・張新民校「『古逸叢書』的刊刻及刻工木村嘉平史略」、前掲注27編著、41～53頁。

<sup>36</sup> 石田肇「『拙尊園存書目』翻印—黎庶昌の蔵書目録—」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第49巻、群馬大学教育学部、2000年）、13～60頁。石田肇「黎庶昌の蔵書—『拙尊園存書目』について—」（『汲古』第38号、古典研究会、2000年12月）、44～49頁。

庶昌の蔵書とその行方について調査している<sup>37</sup>。

第五に黎庶昌の書法についてである。中村義氏は日本国会図書館が蔵している黎庶昌の書簡を初公開し<sup>38</sup>、数年後、王宝平氏はその内容を翻刻した。それによれば、黎庶昌と宮島詠士の父である宮島誠一郎との交流をもとに、中国と日本の交渉の一斑が明らかになっている<sup>39</sup>。しかし両者の交流経緯については述べるが、金石や書法に関しては言及していない。

一方、張裕釗と黎庶昌の交流について、張小龍氏は、両者の関係を分析し、曾国藩の幕府における初対面の時点を考察している。また、姻親関係を持つことから、張裕釗が黎庶昌を支援していたことを述べている<sup>40</sup>。

以上のように、これらの黎庶昌の先行研究では基本的な史料集・伝記に基づいた研究の他、晩清の外交官としての政治思想や、古籍や蔵書などの文化に関する研究に集中している。しかし、黎庶昌と張裕釗との書法に関する交流資料は明らかになっていない。

### 3. 莫友芝

莫友芝の先行研究では文学・版本目録学・書法などが盛んに研究されている。まず、1990年2月に「黔南自治州莫友芝研究会」が成立し、莫友芝の故郷独山で第一回のシンポジウムが開催され、論文集が刊行され

---

<sup>37</sup> 陳捷「貴州省における日本関係典籍について—黎庶昌の古典籍蒐集およびその旧蔵書の行方を中心として—」(『中国に伝存の日本関係典籍と文化財』国際日本文化研究センター、2002年)、201～206頁。

<sup>38</sup> 中村義「日本国会図書館珍藏的黎庶昌手迹」、前掲注27編著、106～115頁。

<sup>39</sup> 王宝平「日本国会図書館蔵黎庶昌遺札」(『文献』2008年第3期、2008年7月)、56～72頁。

<sup>40</sup> 張小龍「張裕釗和黎庶昌交游考」(『青年与社会：上』2015年第7期、青年与社会雜誌社、2015年)、267～268頁。

た。この論文集では、論者がそれぞれの視点で執筆した多数の論文を収録しており、あわせて莫友芝に関する伝記・序文・跋文も掲載している<sup>41</sup>。

また、史料による基礎研究である年譜・伝記と詩文集については、以下のように備わる。

年譜については、管見では張劍氏<sup>42</sup>・黄萬機氏<sup>43</sup>と徐恵文氏<sup>44</sup>の三氏が編んだ年譜を確認できる。張劍氏が編集した年譜は莫友芝の家族に関する著作百種余りを集め、稀覯な抄本が多く、日記と書簡などの文献も多い。張劍氏によると、黄萬機氏が作成した莫友芝年譜は厳密ではあるが、時代の制約によって、多量な莫友芝の抄本を閲していないと述べている。徐恵文氏が編集した年譜は莫友芝の家書が数十通、掲載されているが、張劍氏によれば、資料に制限もあったという<sup>45</sup>。なお、黄萬機氏は、年譜の他に莫友芝の周囲の一群書人の関連資料を整理するなど莫友芝研究に大きく貢献しているといえよう<sup>46</sup>。

莫友芝の詩文集・日記では、張劍氏が編集したものが、基礎研究として最も充実した内容となっており、莫友芝の交流関係を研究する上で最も重要な一つである。2017年にはこれらの日記・書簡・詩文集を補足・

<sup>41</sup> 裴漢剛主編『莫友芝研究文集』（貴州人民出版社、1991年6月）

<sup>42</sup> 莫友芝著、張劍撰『莫友芝年譜長編』（中華書局出版社、2008年11月）

<sup>43</sup> 謝以蓉主編『遵義文史資料（内部資料）第二十輯』（『遵義文史資料』編輯部、1991年6月）。莫友芝の生誕180周年・逝去120周年を記念するため編集したものである。

<sup>44</sup> 徐恵文編『莫友芝年譜』（独山県政協文史資料委員会、1996年）。莫友芝の誕生185周年を記念するため編集したものである。

<sup>45</sup> 前掲注42、莫友芝著、張劍「前言」、3頁。

<sup>46</sup> 黄萬機『莫友芝評伝』（貴州人民出版社、1992年9月）。再版とする黄萬機『黄萬機全集之一：莫友芝評伝』（中華書局文化事業有限公司、2013年10月）がある。

2019年5月22日から6月3日にかけて、筆者は黎庶昌・莫友芝の関連資料を収集するため、貴州省の貴陽市と遵義市を訪ねた。張裕釗の後人黄瑜勝氏、黄氏の友人『貴州文史』副編集長である姚盛祥氏の紹介により、貴州文化界の関係者に会い、黎庶昌と莫友芝の関連史料の提供を受け、教示されることが多かった。また、貴州省文史研究館『貴州文史叢刊』編輯部の編輯である王堯礼氏の紹介によって、黎庶昌・莫友芝の研究権威である黄萬機氏と知り合った。さらに、貴州歴史文献研究会会員である龐思純氏の紹介で、遵義の史学専門家の李連昌氏・遵義図書館文献室の代驪氏・沙灘翰林王青蓮の後人王信氏の案内により、遵義の黎庶昌の故居を訪ね、莫友芝の墓を詣でることができた。

再校正し、全面的な莫友芝の基本資料となる全集に再編集している<sup>47</sup>。

こうした莫友芝の交友を中心に、張裕釗を含む官僚文人たちの書法を媒介とした交流に関する記載があり、本研究でも参考になる。

張釗氏は、莫友芝の文学や文献学、学術上の業績についても研究している。例えば、張釗氏・易聞暁氏<sup>48</sup> 或いは張釗氏単著の研究は、一次資料に基づいた基本研究である<sup>49</sup>。一方、莫友芝の版本目録学研究も盛んに行われており、薛雅文氏<sup>50</sup> が代表的な研究として挙げられる。

莫友芝の書法に関して、近年刊行された作品集は葛明義氏、貴州省博物館がそれぞれ編集した二種類が挙げられる。まず、葛明義氏は 10 年の歳月をかけて収集した 187 点の書法作品を掲載しており<sup>51</sup>、貴州省博物館は、収蔵している莫友芝の書法その他、篆刻も公開している<sup>52</sup>、二種の作品集は、ともに莫友芝の書法を世に広めるための礎石といえよう。

莫友芝書法研究の権威としては、貴州師範大学の呉鵬氏<sup>53</sup> と貴州省博物館の元副館長の朱良津氏<sup>54</sup> とが挙げられる。両者とも貴州省博物館が刊行した作品集の副編集者・執行編集者となり、莫友芝書法に研究対象を絞り、これまで数多くの成果を発表されている<sup>55</sup>。さらに、莫友芝と

<sup>47</sup> 張釗・張燕嬰整理『莫友芝全集（全 12 冊）』（中華書局、2017 年）

<sup>48</sup> 張釗・易聞暁主編『莫友芝文学及文献学研究』（中国社会科学出版社、2012 年 3 月）

<sup>49</sup> 張釗「莫友芝人生及学術成就譚論—兼論『莫友芝全集』的編纂」、(『中国政法大学学报』2015 年第 2 期（総第 46 期）、2015 年）、137～146 頁。

<sup>50</sup> 薛雅文『莫友芝版本目録学研究』（花木蘭文化工作坊、2005 年 12 月）

<sup>51</sup> 葛明義編『莫友芝書法集』（貴州人民出版社、2014 年 7 月）

<sup>52</sup> 王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範大学出版社、2014 年 12 月）

<sup>53</sup> 筆者は 2019 年 5 月から 6 月にかけて貴陽を訪ね、中国書法研究院院長である張杰氏の紹介により、貴州書法協会の主席である楊昌剛氏と知り合った。また、楊昌剛氏のご紹介で貴州師範大学の呉鵬氏からご教示いただく機会を得た。

<sup>54</sup> 筆者は 2019 年 5 月から 6 月にかけて貴陽を訪ね、貴州省文史研究館『貴州文史叢刊』編輯部の編輯である王堯礼氏の紹介によって、貴州省博物館の元副館長朱良津氏のご快諾のもと、貴州省博物館に所蔵される資料を調査した。朱良津氏の研究室では、朱氏が莫友芝の楷書風の作品を揮毫している様子を拝見することができた。

<sup>55</sup> 年代順によれば、管見では 13 冊が数えられる。

①張双錫「莫友芝的書法藝術」(『貴州文史叢刊』1982 年第 4 期、貴州省文史研究館、1982 年)、146～148 頁。②劉錦「莫友芝書法成就淺識」(『書法叢刊』1994 年第 1 期、文物出版社、1994 年)、46～48 頁。③郭堂貴「莫友芝書法与碑学」(『貴州文史叢刊』2004 年第 3 期（貴州省文史研



曾国藩との交友に関して議論しているのは、梁光華氏<sup>56</sup>・隋邦平氏<sup>57</sup>であり、莫友芝が曾国藩の幕府において長い時間滞在し、お互いに交流していたことを明らかにした。これによって、碑学に熱中した莫友芝の書法に対し、曾国藩の幕府が果たす役割は、さらに注目されることになるだろう。

しかし、管見の限りでは、人との交流という視点から、書法に関してはさほど考察されておらず、これら交流場についての研究も少ないのが実状である。特に張裕釗と莫友芝の書法交流の関係に関する資料は乏しく、その交流内容については十分に解明されていない。それが本研究の課題となる。

### 三、張裕釗を対象とする研究

前項まで、張裕釗を曾国藩の幕僚・桐城派の文学家として論ずる先行研究について取り上げてきた。本項では、張裕釗自体を対象とする研究について、中心的な主題となる書法に関する研究の他、それに関する資料や伝記の研究も含め確認しておきたい。

---

究館、2004年)、77～80頁。④華佳強「莫友芝題跋文集中所見書学思想研究」(『神州』第24期、中国通俗文芸研究会、2011年)、102～103頁。⑤吳鵬「莫友芝：晚清碑学的一个面向」(『中国書法』2011年第4期、中国書法家協会、2011年)、61～65頁。⑥隋邦平「治学游芸書学融通—莫友芝書法研究」(『遵義師範学院学報』第14卷第3期、遵義師範学院、2012年6月)、117～120頁。⑦吳鵬「贵州省博物館藏莫友芝題跋雜稿考积」(『文献』2012年第3期、2012年7月)、108～114頁。⑧朱良津「從伝世作品看莫友芝書法」(『文物天地』、中国文物報社、2015年5月)、46～49頁。⑨朱良津「大師頻出 黔書伝遠—清代貴州書法談之六」(『貴陽文史』2015年第5期、貴陽市政協文史和學習委員會、2015年)、77～80頁。⑩吳鵬「贵州省博物館藏莫友芝家書考积」(『文献』2015年第6期、2015年11月)、126～142頁。⑪劉雨婷『莫友芝書法芸術研究』(南京大学美術学修士論文、2017年4月)。⑫章国新『莫友芝隸書研究』(中国芸術研究院美術学修士論文、2017年5月)。⑬帥幸微『晚清貴州文人書家的儒学思想研究—以莫友芝為例』(西南大学美術学修士論文、2018年3月)。

<sup>56</sup> 梁光華「莫友芝曾国藩交往述論」第29卷第4期(貴州大学学报 社会科学版、2011年7月)、121～125頁。

<sup>57</sup> 隋邦平「莫友芝京城書法交游考」(『文芸研究』2014年第9期(総第465期)、中国芸術研究院、2014年)、233～234頁。

張裕釗の書法の回顧展は、今に至る 30 年間にかけて、幾度も開催され、あわせて張裕釗の学術研究についても回顧したものが認められる<sup>58</sup>。特に注目すべきは、1988 年 10 月に河北省南宮市で開催された「張裕釗書法芸術理論討論会」であり、『張裕釗書法研究論文集』<sup>59</sup> が出版された。その後、2003 年 10 月には湖北省の鄂州の建市 20 周年・張裕釗の生誕 180 周年を記念し、鄂州市で張裕釗国際学術シンポジウム開催され湛有恒主編『張裕釗国際学術研討会文集』<sup>60</sup> が刊行されている。

日本側で、最初に張裕釗に対し体系的な研究を施した第一人者は、魚住和晃氏である。上條信山の門徒である魚住氏は、その書法の伝承に関する研究を行う上で第一次資料を多く取得しており、上條信山の師である宮島詠士が所蔵した資料を中心に張裕釗の壮年と晩年の書法を検討してきた。それにより、魚住氏は張裕釗が書家という立場よりも学者であること、また、師である曾國藩の古文学の継承者であることを自負していたことを挙げている。それゆえ詩文の創作にもそのような学者としての背景があること、そして書家になることが彼自身の目標ではなかったことを説かれている<sup>61</sup>。なお、魚住氏の研究経緯は、「張廉卿・宮島詠士書法研究回想記」（1987 年）<sup>62</sup> に記されている。中国側の研究では、陳啓

---

<sup>58</sup> 中国で行われた張裕釗の展覧会とシンポジウムは以下のように挙げられる。

1985 年 12 月、「第一回張裕釗書派作品巡展」

1990 年 11 月、「第二回中日張裕釗書派作品展」

1992 年 10 月、「第三回中日張裕釗書派作品展暨第二回中日張裕釗学術討論会」

1996 年 7 月、「第四回張裕釗書派作品展」

2011 年 1 月、「全国第五回張裕釗書法展」

2015 年 1 月、「第六回全国南宮碑体（張裕釗流派）書法展」

2017 年 7 月、「2017 国際張裕釗流派書法邀請展」

2018 年 8 月、「2018 張裕釗書法流派作品展暨国際書法邀請展」

<sup>59</sup> 田野上人編集『張裕釗書法研究論文集』（華夏文芸出版社、2010 年 12 月）1989 年 5 月初印刷。

<sup>60</sup> 湛有恒主編『張裕釗国際学術研討会文集』（接力出版社、2004 年 3 月）

<sup>61</sup> 魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』（研文書局、2002 年 6 月）。この著作は魚住氏の博士論文『張裕釗書法における理念形成と形象の研究』（神戸大学 総合人間科学研究科 博士論文、2000 年）に少し加筆し、題を改めて上梓したものである。

<sup>62</sup> 魚住和晃「張廉卿・宮島詠士書法研究回想記」『渠荷の歴「宮島詠士書法展」』（書法文化交流会、1987 年 7 月）、24～31 頁。

壯氏が2007年6月からウェブサイト<sup>63</sup>で系統的な資料を共有しており、2015年9月から中国張裕釗書法研究会の会長として、現在に至るまで熱心に張裕釗を研究している。

筆者はこれらの先生方から、多大な資料の支援を賜っている。ここでは、魚住氏、陳氏の体系的研究に至る張裕釗の研究史を中心に整理してみたい。以下、1. 詩文著作及び書簡、2. 年譜・伝記資料と交友関係の作成、3. 伝存する遺品による書風研究と分類し、張裕釗の書法研究がどのような成果を上げたかについて整理しておきたい。

## 1. 詩文著作及び書簡

張裕釗の詩文に関する著作は、張裕釗の自筆本が残っている。台湾の国家図書館に収蔵されている『張濂<sup>64</sup> 卿先生詩文稿不分卷三冊』<sup>65</sup>は張裕釗が清書した肉筆本であり、文海出版社は、その稿本を影印し、『張濂卿先生詩文手稿』<sup>66</sup>として刊行した。

また、近代の学者の整理を経た詩文集は何冊か確認できる。まず、張裕釗の詩や文章を全面的に掲載するのは王達敏氏が校正した『張裕釗詩文集』(2007年)<sup>67</sup>である。張裕釗の詩文集の初刻本に基づくもので、内容は、『濂亭文集』8巻(光緒8年1882、門人查燕緒の編集)、『濂亭遺

<sup>63</sup> 張裕釗書道研究網一学古堂論壇 <http://www.zhangyz.com/> (2018年8月最終閲覧)

<sup>64</sup> 張裕釗の字は廉卿で号は濂亭である。張「濂」卿の「濂」は「廉」の誤り。ここでは原作のままの表記とする。

<sup>65</sup> 張裕釗撰『張濂卿先生詩文稿不分卷三冊』、番号：13456、台湾国家図書館蔵。自筆清書の本は国家図書館特蔵組編『国家図書館善本書志初稿・集部』(国家図書館出版、1999年6月)、251頁を紹介されている。

<sup>66</sup> 沈雲龍主編、張裕釗撰『張濂卿先生詩文手稿』(『近代中国史料叢刊続編』第十輯、文海出版社、1974年)。

<sup>67</sup> 張裕釗著、王達敏校点『張裕釗詩文集』(上海古籍出版社、2007年10月)。『濂亭集外文輯存』には書後・序論・贈序・寿序・墓表・墓誌銘・誄碑・伝・雑記とある。また、附録において、書札・論文・『古文辞類纂』批語・『韓昌黎文集』批語・『五言選読』批語・課卷批語・評伝資料輯存・世系簡録・年譜に分類されている。

文』5巻・『濂亭遺詩』2巻（光緒21年1895、友人・姻親黎庶昌の編集）、『濂亭集外文輯存』から構成され、参考・校正した版本は張裕釗の自筆版本を含め7種類が数えられる<sup>68</sup>。本論で引用した張裕釗の詩文はこの本が収録したものに基づいている。

また、張裕釗が同門の後輩吳汝綸に宛てた56通の書簡『論学手札』は張裕釗の書簡の代表作といえ、北京九思堂書局が稿本を石印に附したもので『張裕釗先生論学手札』<sup>69</sup>として刊行されており、加えて日本側の書法研究雪心会より非売品としてカラー印刷にて発行された『名人翰札墨蹟一張廉卿』<sup>70</sup>がある。1980年代にかけて杉村邦彦氏・魚住和晃氏は北京九思堂書局の版本（京都大学人文科学研究所蔵）に基づいて解説を加え覆刻することになった<sup>71</sup>。杉村邦彦氏はその解題において所収56通の内容を6項に分類し、それらの書写時期について張裕釗が蓮池書院主講として在任した光緒9年から同14年（1883～1888）までの足かけ6年間に書かれたものと推定している<sup>72</sup>。これに対し、范文邦氏は、光緒10年から同18年（1884～1892）にかけて書かれた書簡と推定し、内容を5項に分けている<sup>73</sup>。范氏によれば、その書体は行書であるが、草書も交えているとの見解であり、若年に比べて円熟した書法で唐楷・篆籀・魏碑という三者の融合が進み、縦長の結構となる点を述べている。范氏は30枚の書簡から、内容や書風について考察し、張裕釗の草・行・楷書体完成へ向う成熟期の作品として意義があると説く<sup>74</sup>。さらに、陳啓壯

<sup>68</sup> 前掲注67、張裕釗、王達敏校点著、27～28頁。

<sup>69</sup> 『張裕釗先生論学手札』（九思堂書局）。（民国石印モノクロ版本）。

<sup>70</sup> 書法研究 雪心会『名人翰札墨蹟一張廉卿』。（カラー版本）。

<sup>71</sup> 張廉卿著、王双啓・杉村邦彦・魚住和晃編『張廉卿先生論学手札（覆刻版）』（張裕釗宮島詠士師弟書法展覽実行委員会、1984年）

<sup>72</sup> 杉村邦彦「I 中国書法史研究 七『張廉卿先生論学手札』解題」『書学叢考』（研文出版、2009年4月）、208～209頁。

<sup>73</sup> 范文邦『張裕釗《論学手札》研究』（高雄師範大学国文教学修士論文、2014年6月）。

<sup>74</sup> 前掲注73、范氏著「書写年代考」85～114頁、また115～163頁、205頁も参照。

氏は『論学手札』について張裕釗の晩年における碑学から帖学に回帰した書と述べている<sup>75</sup>。

なお、丁有国氏が編集した『張裕釗〔論学手札〕助読』（1994年）<sup>76</sup>・『濂亭遺詩注評』（2004年）<sup>77</sup>・『張裕釗詩文『濂亭文集』注釈』（2010年）<sup>78</sup>は、張裕釗の基本資料を活用するための一大貢献といえる。丁氏は1980年代にかけて、湖北省図書館に蔵された清代木刻版である『濂亭文集』・『濂亭遺文』・『論学手札』を収集し、再校正と内容の追加によって新たな注釈もまとめ、大きく貢献している<sup>79</sup>。これらの詩文著作・書簡の解釈は、年譜・伝記資料を理解する上でも有用である。

## 2. 年譜・伝記資料と交友関係の作成

年譜・伝記資料では、魚住氏の研究が最初の取り組みと見られる<sup>80</sup>。その後、魚住氏は、張裕釗について以下のような専著を著している。(1)『張裕釗書作集』（1980年）<sup>81</sup>、(2)『張廉卿「悲憤と憂傷の書人」』（1993年）<sup>82</sup>、(3)『張廉卿の書法と碑学』（2002年）<sup>83</sup>。

まず、(1)では「張裕釗略年譜」を始めとして、張裕釗の各書院の就任年代や作品の揮毫時期を示している。また、歴史や重要な関係事項も表において対照させ、張裕釗生涯の大よその輪郭が描かれている<sup>84</sup>。次

<sup>75</sup> 陳啓壯『碑骨帖姿—張裕釗書道研究』（吉林文史出版社、2016年6月）、101～121頁。

<sup>76</sup> 丁有国主編、張雪華・胡念征副主編『張裕釗〔論学手札〕助読』（湖北美術出版社、1994年9月）。

<sup>77</sup> 湛有恒主編、丁有国注評『濂亭遺詩注評』（接力出版社、2004年3月）。

<sup>78</sup> 丁有国『張裕釗詩文《濂亭文集》注釈』（中国民航出版社、2010年5月）

<sup>79</sup> 張廉卿著、丁有国注釈『張廉卿詩文注釈』（復旦大学、2013年8月）

<sup>80</sup> 魚住和晃『張裕釗と宮島詠士』（東京教育大学大学院修士論文、1972年3月）

<sup>81</sup> 魚住和晃『張裕釗書作集』『張裕釗略年譜』（和泉書院、1980年1月）、178～179頁。

<sup>82</sup> 魚住和晃『「悲憤と憂傷の書人」』（柳原書局、1993年7月）、「二 張廉卿の流転について」「付録三 張裕釗略年譜」、73～87頁・243～248頁。

<sup>83</sup> 前掲注61、魚住氏著「第三章 張裕釗の流転について」、207～312頁。

<sup>84</sup> 前掲注81、魚住氏著「張裕釗略年譜」、178～179頁。

に、(2)の研究では「張廉卿の流転について」において張裕釗の郷試及第、書院主講転任、蓮池書院の退任、江漢書院の退任というそれぞれの時期に分け、彼の流転を辿るものであり、自己の誇り高きが故に、流転の道を選んだという結論を提起されている<sup>85</sup>。加えて、「張裕釗略年譜」には、前冊(1)を拡充し、張裕釗の関係事項による詩や文章を加え、及び曾国藩・李鴻章など官職の着任などの参考事項を新たに収めている<sup>86</sup>。さらに、(3)では張裕釗の三種の伝記、即ち『清史稿』・『碑伝集補』・「哀啓」を挙げ、また各書院の主講・退任、及び書作・文章・書簡による張裕釗の生涯における重要な転機を明らかにした<sup>87</sup>。

一方、杉村邦彦氏は21種類の主要な伝記資料を列挙し、張裕釗の略伝の特色を明らかにしている。杉村氏によれば、『清史稿』<sup>88</sup>の略伝は早い時期から盛んに引用されており、簡潔に張裕釗の行跡や文学や書法について帰納していることから、以降の伝記はほぼ『清史稿』の内容に基づいていることを述べている<sup>89</sup>。

中国における年譜・伝記資料の先導的研究は聞鈞天氏に見出される。聞氏は張裕釗の詩文集『濂亭遺詩』、『濂亭文集』などから年譜を作成し、張裕釗の家系を探查しており、生涯において3名の師や先輩、同僚・友人34名、門人10名を挙げ、交友関係表を作成している。また、湖北省博物館や図書館などに収蔵される張裕釗の著作・書作を調査し、収載している<sup>90</sup>。よって、張裕釗の基本資料として信頼の置ける研究となっている。

<sup>85</sup> 前掲注82、魚住氏著「第二章 張廉卿の流転について」、73～87頁。

<sup>86</sup> 前掲注82、魚住氏著「張裕釗略年譜」、243～248頁。

<sup>87</sup> 前掲注61、魚住氏著「第三章 張廉卿の流転について」、207～312頁。

<sup>88</sup> 趙爾巽主纂『清史稿』卷486、列伝273、文苑3(中華書局、1977年)、13442頁。

<sup>89</sup> 日本語では杉村邦彦「張廉卿の伝記と書法」(『渠荷的歴「宮島詠士書法展」書法文化交流会、1987年7月)、14～23頁。または『書苑彷徨 第三集』(二玄社、1993年)。中国語訳には「張裕釗的伝記与書法」『書法之友』第5期(1996年)、8～15頁がある。

<sup>90</sup> 聞鈞天「張裕釗年譜」(『張裕釗年譜及書文探討』湖北美術出版社、1988年6月)、1～22頁。

いる。楊祖武氏<sup>91</sup>、葉賢恩氏<sup>92</sup>、丁有国氏<sup>93</sup>も、基本的には聞鈞天氏の研究成果に追従したものである。なお、陳啓壯氏の「張裕釗年譜」<sup>94</sup>は葉賢恩氏の著書<sup>95</sup>に基づいて校正・追加した年譜である。

一方、王達敏氏は、上述の研究者が張裕釗の著作に主に基づき年譜を編むのに対して、張裕釗著作の以外に、張裕釗に関する友人などの文献の引用が多く認められる。例えば、曾國藩の関連資料である『曾國藩全集』、張裕釗の伝記『清儒学案』・『清代七百名人伝』及び友人吳汝綸の年譜『桐城吳先生年譜』・門人張謇の『張謇全集』・息子張後沆の「哀啓」などである<sup>96</sup>。

また、張小莊氏は楊峴・張裕釗・徐三庚・楊守敬四者の主な経歴を年表として示しており、書法芸術活動と交遊経歴も含まれている。この年表が引用する文献は、張裕釗の詩文・論学手札・作品などである<sup>97</sup>。

さらに、葉瑩瑩氏は張裕釗の著作『濂亭文集』・『濂亭遺詩』・『濂亭遺文』・『張濂卿先生詩文稿』・『張濂卿雜文』と彼の書作に基づいて、加えて大量の師友文集・年譜・日記を引用し、年代を考証した上で張裕釗の行跡が記録されている部分を取り上げ、長編の年譜として再編成を試みた。言及した人物は157名を数える<sup>98</sup>。とりわけ、葉氏の著作は参考文献を詳細に明記しており、張裕釗の交流経緯を明らかにする上で大きな役割を果たすものである。

<sup>91</sup> 楊祖武主編『張裕釗書法芸術』（華夏出版社、1997年5月）、141～160頁。

<sup>92</sup> 葉賢恩「附録二：張裕釗年譜」（『張裕釗伝』中国三峡出版社、2001年12月）、301～319頁。

<sup>93</sup> 前掲注77、張濂卿、丁有国注釈著「附録：張濂卿先生年譜」、1053～1076頁。

<sup>94</sup> 前掲注75、陳氏著「附録：張裕釗年譜」、340～359頁。

<sup>95</sup> 前掲注92、葉氏著「張裕釗年譜」、301～319頁。

<sup>96</sup> 前掲注67、張裕釗、王達敏校点著「附録九：張裕釗年譜」、595～635頁。

<sup>97</sup> 張小莊「楊峴、張裕釗、徐三庚、楊守敬年表」（陳伝席主編『中国書法全集』第73冊 張裕釗楊峴徐三庚楊守敬卷、榮宝齋出版社、2012年12月）、285～300頁。「主要引用参考書目」、同書303頁。

<sup>98</sup> 孫瑩瑩「附録五：人物小伝」（『張裕釗年譜長編』河南人民出版社、2014年12月）、262～292頁。

上述した研究が明らかにした張裕釗の交友関係に基づいて、近年に発見した張裕釗の書法作品及び活動を加筆し、年表の作成を試みた。結果は【表1】のとおりである。

### 3. 伝存する遺品による書風の研究

従来、伝存する張裕釗書法による書風について、多数の研究が備わる。以下、日本側・中国側、そして年代順に概要を記す。

日本側では、内藤湖南氏が張裕釗の書法の位置を論じており、以下のように述べる。「清朝末期の碑学派書道興隆について論じ、「北派至今極其盛運」として、趙之謙、楊沂孫、楊峴、楊守敬、吳昌碩らとともに張裕釗の名をあげているが、大きな歴史的潮流の中に張裕釗を位置づける場合、彼を碑学派を形成した一書家であったとすることは妥当であろう。しかし、そうした論理とは別に、改めて張裕釗を一個の人間としてその生涯を顧みたとき、実はその生きかたは、碑学派に列した諸家とは、あまりにも異なったものであった。」<sup>99</sup>。内藤氏によると、張裕釗は碑学派の書家として、生涯を再検討するべきだろうかと思えている。

神田喜一郎氏は、「(張裕釗は) 曾国藩の門人で、書法の専門家ではないが、北碑の書法のうえに唐宋の筆法を加味して、気品の高い書をつくった。これは趙之謙の書が当時の批評家から北魏書と称されたほどもつぱら北魏の書法に終始したのと、おもしろい対照をなしている」<sup>100</sup> と述べており、趙之謙の書と対照している。

<sup>99</sup> 内藤湖南『清朝史通論』（弘文堂書店、1944年）、「第六講・芸術」、232～250頁。

<sup>100</sup> 神田喜一郎「中国書道史14 清二」、(神田氏、田中親美兼修『書道全集』第24巻、平凡社、1961年初版第一刷)、7頁。



服部竹風氏は、張裕釗の書は北魏の「張猛龍碑」より悟ったといわれているが、その気品は六朝漢の諸碑を究めつくして沈着精妙で、「にじみ」が作品の上に新しいセンスをもたらし、東洋の美の一種を作り上げているのは大手腕であることを述べ、六朝漢の諸碑に基づく「にじみ」の特徴を提示されている<sup>101</sup>。

大沢義寛氏は、張裕釗・宮島詠士の書に関する周囲の人々の記録を取り上げ、それらの言説について検討した。大沢氏は、張裕釗の書の特徴は捺筆と中鋒で書かれている点であるとし、独特の「にじみ」の多い線が多用され、藏鋒と「外方内円」として表現される点を指摘する。また、それぞれの書には「九成宮醴泉銘」・「張猛龍碑」・米芾・顔真卿・漢隸といった多彩な古典が混入していることを看取できるとしている<sup>102</sup>。

中村伸夫氏によれば、「張裕釗の書の様式は、北碑や唐碑を主たる拠りどころとして完成された。そして、それら碑刻の書を追求する上での彼の着眼はきわめて特異なものであった。それは碑刻独特の鋭い刀鑿の跡をも、みずからの運筆操作によって忠実に再現しようとした点にあったが、その実践の中で育まれた一種独特の運筆法が、従来になかった斬新な表現手段を生む端緒となった。」<sup>103</sup>とあり、北碑や唐碑から書を完成させたという論点で捉えている。

魚住氏は「(張裕釗) 書法の総合性は、まさしく曾国藩が構想し、張に継承せしめた古文派の理想と合致するものである」と述べている。また、歴代の古典から字例を活用し、張裕釗の書丹碑碣6件の異体字の出典表を作り上げ、異体字使用頻度を比較した。その結果、「(張裕釗は) 楷書

<sup>101</sup> 服部竹風「張廉卿とその書」(『心画 張廉卿号』第15巻第4号、書道心画院、1962年4月)、2・13～15頁。

<sup>102</sup> 大沢義寛「張廉卿・宮島詠士の書表現上における工夫」(『渠荷的歴「宮島詠士書法展」書法文化交流会、1987年7月)、32～47頁。

<sup>103</sup> 中村伸夫「張裕釗」(『中国近代の書人たち』(二玄社、2000年10月)、59頁)。

が動かしがたい基盤であり、その基盤である楷書に、唐碑・北碑・漢隸・秦篆、さらに二王の行書を注ぎ込むことに、つとめていたのではなかったのか」という。さらに、「張裕釗が展開した特異の書法は、技巧的には既述の古法獲得がもたらしたものであろう」との見解が示されてきた<sup>104</sup>。

中国で張裕釗の書法に対する系統的な分類を試みたのは楊祖武氏である。楊氏は張裕釗の周り友人や弟子と近現代の学者の説によって、張の書風を九種に分けている。さらにその九種を三グループ、即ち「秦篆説、漢隸説、包世臣説」、「龍藏寺説、歐陽詢説、帖学（館閣体）説」、「張猛龍説、弔比干説、斉碑説」に分類している<sup>105</sup>。なお、葉賢恩氏の説は楊祖武氏の成果（1997年）に従うものであり<sup>106</sup>、両者の研究では、各説の紹介はあるものの、それを踏まえた張の書風の検証まで進めるものではない。劉恒氏は碑学理論と碑派書法の発展過程から、張裕釗は同時期の趙之謙と清代の末期における代表者として、独特な人物だと説く<sup>107</sup>。

さらに、張小莊氏は、張裕釗の若年作の風格は唐宋の各家に吸収したもので、碑楷の風格は魏碑・唐碑に基づいて篆隸の碑意を融合したと指摘する。また、小行書は帖派技法を用い、王羲之「集王聖教序」と顔真卿「争座位帖」の結体に近いとの見解である。帖学の基礎の上、碑体の用筆を加え、また帖学の再研究によって、碑帖融合の風格が形成され、その碑帖融合の観念は曾國藩から影響を受けたと述べている<sup>108</sup>。

なお、陳啓壯氏は技法・理論・鑑賞・伝承といった観点から全面的に張裕釗の書法を紹介している。張裕釗の各時期の書法を挙げ、若年期に

---

<sup>104</sup> 前掲注 61、魚住氏著「第一章 張裕釗—その人間性と書法」、110頁。「第二章 張裕釗における書法形成」、168～205頁。「第三章 張裕釗の流転について」、307頁。

<sup>105</sup> 前掲注 91、楊氏著「張裕釗書芸成就及分期」、14～36頁。

<sup>106</sup> 前掲注 92、葉氏著「書壇泰斗」、223～239頁。

<sup>107</sup> 劉恒『中国書法史（清代卷）』（江蘇教育出版社、2007年9月）、「第三章 碑学的完善与發展」、213～214頁。

<sup>108</sup> 前掲注 97、張氏著「張裕釗書法評伝」、24～46頁。

において帖学の影響を受け、壮年期から晩年期にかけて碑学の環境に入ったことで、帖学と碑学を混在させた独自の「外方内円」の書風を形成したという結論を導いている<sup>109</sup>。

以上の先行研究では、張裕釗書法の由来として唐碑・北碑・漢隸・秦篆、さらに二王が指摘されているが、十分な書風検討が行われていない。また、碑帖の提供者にも異なる説がある。これについては、文人・官僚たちの記録が有力視されるが、先行研究では、それほど深く考えられていない。また、当時の研究環境や資料の制限、または新資料の出現により、どの研究も張裕釗書法の作品編年・分期の判断基準は再検討の必要があるのではないかと考える。

### 第三節 研究の方法

#### 一、問題点の提起

先行研究では、張裕釗書法の総合性や碑帖融合の観念は曾国藩から影響を受けたとする傾向が強いが、彼の書法に対しては直接的な師は言及されず、彼の書学と生涯が如何に織り交ぜられたのか、そこに疑問が生じることになる。そこで、本論文では以下の問題を提起したい。

張裕釗はどのような官僚文化を背景に、どのような書法を形成したのか。また、彼の書法は道光時期から光緒時期に至るまで、どのように変遷し、どのように時期区分できるか。

この問題を解明するため、本論文では以下の各章を設け、各論的な問

---

<sup>109</sup> 前掲注 75、陳氏著「張裕釗書道研究之理論篇／八、書以功深能跋屨—張裕釗書風流變之探討」、188～228 頁。

題に取り組むことから着手していきたい。

#### 第一章、咸豊年間の胡林翼幕府における張裕釗書法

咸豊年間の張裕釗は、胡林翼の幕府の文人と交流し、書法面でどのような影響を受けたか。

#### 第二章、同治前半期の曾国藩幕府における張裕釗書法

同治前半期における曾国藩幕府での活動を通じて、張裕釗は書法上でどのような影響を受けたか、また張裕釗は新たにどのような書法を形成したのか。

#### 第三章、同治後半期・光緒前半期における張裕釗書法

同治後半期・光緒前半期における張裕釗は曾国藩幕府において、当時の官僚たちとどのように交わり、それによって張の書法はどう展開したか。

#### 第四章、光緒中期における張裕釗書法

光緒中期以降の張裕釗はどのような旧曾国藩幕府の幕僚と交流し、さらに自身の書法をどのように発展させたか。

## 二、研究対象

管見では、張裕釗の書論や題跋がほとんどなく、その書作品、あるいは交友のあった周辺の書人の資料から考察を進めざるを得ない。こうした資料上の制約があるため、本研究は張裕釗の書学・書法に対し彼の文化交流からの影響を検討対象として設定し、特に官僚文化の視点から、彼と高級官僚の交流活動を追跡する。官僚文化とは高級官僚が相互に文学や書道、金石学や教育などについて交流し、その中から形成された文化現象を指す。晩清幕府において高級官僚間で交わされた題跋や酬唱は、

相互に切磋琢磨し合う文化的交流の一端が示されるものと考えられる。その前提から、張裕釗は交流の場である幕府と書院で行われた活動についての検討を試みる【表 1】。その交流活動を検証することによって、晩清の中国書法史における交流の場の重要性を明確にすることができると思われる。

### 三、検討手法

本論は、張裕釗は清代晩期の官僚との交流に関する検討と、張裕釗の書作に関する検討とを、それぞれの時期において組み合わせる方法で進める。以下に、官僚との交流、及び書作について、それぞれの具体的な検討方法について述べる。

#### 1. 清代晩期の官僚との交流

近年、清代晩期の筆記、日記などの資料は盛んに翻刻が行われており、官僚の生活や書法交流について明らかにされつつある。例えば、張小莊氏によって清人の日記資料における書法論が網羅的抽出されており<sup>110</sup>、白謙慎氏は清代晩期官僚の書法研究の専門家として知られ、「応酬書法」に関する論考を多数発表している<sup>111</sup>。

本研究で主に対象とするのは、張裕釗と交わった晩清官僚の日記・詩文著作・年譜・書簡の内容である。これらの晩清官僚は、具体的には胡

---

<sup>110</sup> 張小莊『清代筆記、日記中の書法史料整理研究 上下冊』（中国美術学院出版社、2012年）。  
<sup>111</sup> 白謙慎、徳泉さち訳「清代晩期官僚の日常生活における書法」（『美術研究』第418号、東京文化財研究所、2016年3月）、240～269頁。白謙慎「晩期官僚の応酬書法」『中国近現代文化研究』第15号（中国近現代文化研究、2014年3月）、1～16頁。

林翼・汪士鐸・范志熙（第一章で検討）、曾国藩・莫友芝（第二・三章で検討）、袁昶・沈曾植・鄭孝胥・莫繩孫（第四章で検討）等である。

このうち、日記について言えば、『曾国藩日記』<sup>112</sup>・『莫友芝日記』<sup>113</sup>・『鄭孝胥日記』<sup>114</sup>・『袁昶日記』<sup>115</sup>等が翻刻されており、莫繩孫の日記の原本は台湾の国家図書館で所蔵している<sup>116</sup>。

また、張裕釗の若年期の交流としては、汪士鐸・范志熙という知友が注目される。汪・范には詩文集が備わるが、従来これらが論じられることは少なかった。筆者が汪士鐸・范志熙の詩文を調査したところによれば、中国の南京図書館には汪士鐸に関する文献が所蔵され、また、范志熙に関する文献は中国国家図書館に所蔵されている。

これらの文献資料は新しい角度から張裕釗の活動を跡付ける貴重な素材であり、従来張裕釗の書法研究の不足を補うことも可能となろう。

## 2. 張裕釗の書作

張裕釗の書は今日、書法作品として博物館・美術館もしくは個人に収蔵されることが多く、オークション会社によって競売される場合もある。本論では、紀年を有するものや年代推定できる張裕釗の書作品を主たる考察対象とするが、確認できる彼の書作品を【表2】に整理してみた。

彼の書法が初めて世に伝わった時期は清代晩期から民国の初期といえる。その時期にかけて、碑帖の出版を中心として経営している出版社が

<sup>112</sup> 前掲注8、曾国藩著、第16～19冊、日記之一～之四。

<sup>113</sup> 莫友芝著、張釗整理『莫友芝日記』（鳳凰書局、2016年4月）。張釗・張燕嬰整理『莫友芝全集（全12冊）』（中華書局、2017年）、第六冊邵亭日記。

<sup>114</sup> 勞祖德整理、中国国家博物館編『鄭孝胥日記（全五冊）』（中華書局、2016年4月）

<sup>115</sup> 袁昶著、孫之梅整理『袁昶日記（上）（下）』（鳳凰出版社、2018年6月）

<sup>116</sup> 『独山莫氏遺稿不分卷十三冊／清莫繩孫撰『日記四冊』』「手記 壬辰十月至甲午九月」台湾、国家図書館蔵、古籍与特蔵文献資源、書号:15360-005。

いくつか残っている。菅野智明氏はこの期間の出版社に関する情報をいくつか挙げて<sup>117</sup>。その中で、張裕釗の書法が最も多く出版されたのは上海文明書局と上海有正書局である。菅野氏によると、上海文明書局の出版物は『張廉卿書千字文』（張裕釗若年期の千字文を指す、第一章で検討）、『張廉卿書李剛介公殉難碑』（第四章で検討）及び『張廉卿書箴言「崔瑗座右銘」』（第四章で検討）三冊を数え、また、上海有正書局の出版物は『張廉卿書南宮鼎学記（大楷）』（第四章で検討）、『（大楷）張廉卿墨蹟』、『張廉卿大楷習字範本』、『張廉卿行書小屏』、『張廉卿行書大屏』、『張廉卿八言大対』、『張廉卿七言大対』等が出版されていたことが分かる<sup>118</sup>。

一方、宮島家の旧蔵による三件の書作「千字文」・「嚴維詩」・「対聯」は『書道全集』（1961年）<sup>119</sup>に掲載されている。それらを除き、作品集と言えるものには、『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』（1984年）<sup>120</sup>である。それは宮島詠士の令孫である宮島吉亮氏のご好意により、宮島詠士の旧蔵（東京善隣書院詠帰舎）として公開された作品であり、これに基づき、1984年8月23日から29日にかけて北京の中国美術館、1985年には武漢で「張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽」という展覧会が開かれた。同展では、張裕釗の書作に加え宮島詠士の書作も展示されている。なお、この作品集はほぼ張裕釗の壮年・晩年に書かれた書作・拓本に絞って編集している。

---

<sup>117</sup> 例を挙げると、延光室（光緒6年、1880）・商務印書館（光緒23年、1897）・文明書局（光緒28年、1902）・有正書局（光緒30年、1904）・西泠印社（光緒30年、1904）・神州国光社（光緒34年、1908）・中華書局（民国元年、1912）・芸苑真賞社（民国4年、1915）・故宫博物院（民国11年、1922）とある。菅野智明『近代中国の書文化』（筑波大学出版社、2009年10月）、44～47頁。

<sup>118</sup> 上掲書、菅野智明氏著、204頁。

<sup>119</sup> 前掲注100『書道全集』第24巻所収「千字文（図版66～67）」「嚴維・丹陽送韋參軍七言絶句（図版68）」「七言対聯（図版69）」。

<sup>120</sup> 張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会編『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』（張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会、1984年）。

また、湖北省博物館が所蔵している張裕釗の書法作品は、公立の組織において最も多いと言われ<sup>121</sup>、私人では、陳啓壯氏が「張公（蔭穀）墓碑」（陳氏：光緒6年推定）や「吳蘭軒墓表」（光緒4年、第三章で検討）といった初公開の資料を蔵しており、陳氏はその他にも、対聯や冊子本や聯屏など十点以上を収蔵している<sup>122</sup>。民間における張裕釗書法の収蔵の第一人者<sup>123</sup> と言えるだろう。

さて、張裕釗書法の新資料といえば、浙江図書館と安慶市図書館で収蔵されている張裕釗書簡が注目される。浙江図書館古籍部では、38通の張裕釗書簡「張裕釗致蔣光燾書札」（その中の1通は第二章で検討）があり、加えて同治2年（1863）に張裕釗が抄写した「張裕釗劉府君墓誌銘」（第二章で検討）も蔵している<sup>124</sup>。また、安徽省安慶市図書館古籍部では、張裕釗が徐宗亮に宛てた3通（その中の1通は第二章で検討、2通は第三章で検討）の書簡が収蔵されている<sup>125</sup>。これらの書簡は張裕釗の若年期にける書法形成において重要な役割を果たしている。その他、小莽蒼蒼齋も張裕釗が小行楷書で蔣光燾に宛てた書簡2通（第二章で検討）を蔵している<sup>126</sup>。

これらの書作品については、筆者は45点【表2】を把握している。それらは字の大きさや書体によって三類に分けられ、大字行楷書と中字楷書（碑碣書法・題字書作・その他）・小字書作（小字楷書、小字行書、小字行楷書）となる。

<sup>121</sup> 王曉鐘「鄂博館藏明清鄂籍名人書家概述」（書法叢刊編輯部『書法叢刊（湖北省博物館藏品專輯）』第5期、総第105期、文物出版社、2008年9月）、21～23、74～75頁。張小莊「張裕釗書法評伝」前掲注97『中国書法全集』第73冊所収。

<sup>122</sup> 前掲注75、陳氏著、「張裕釗書道研究之鑑賞篇」、230～239頁。

<sup>123</sup> 前掲注75、陳氏著、張書範「序言」を参照。原文には「拋我所知、民間收藏者陳啓壯可排榜首。」とある。

<sup>124</sup> 2017年7月4日から6日にかけて、筆者は浙江図書館にこれらの書簡を調査した。

<sup>125</sup> 2017年3月15日に、筆者は安徽省安慶市図書館古籍部にて『蔣元卿旧藏晚清和近代名人手札』を調査した。

<sup>126</sup> 陳烈主編『小莽蒼蒼齋藏清代学者書札』下（人民文学出版社、2013年7月）、789～790頁。



### 3. 張裕釗の書法にみる時期区分

本論文では、張裕釗の書法の変遷を窺うに際して、咸豊年間から同治前半期、同治後半期・光緒前半期、光緒中期以降へという時期区分を設けたい。この区分に至ったのはそれぞれの時期の官僚文化の影響を勘案した結果である。

張裕釗の書法が時期によって書風を異にするのは官僚らとの日常的交流活動の産物であったと考える。当時の官僚は、日常生活における学書の参考として碑帖を重視している。張裕釗の書法の研鑽も恐らくこうした碑帖を重視する環境のもとに行われたと考えられる。道を同じくする官僚たちによって碑帖の学習も切磋琢磨があったと予測され、それはそれぞれの時期に出会った官僚によって異なる状況を見せるであろう。従って、張裕釗の書法にも各時期に異なった風格が現れ出てくるであろうと考える。

### 4. 真偽・編年から分期・書風検証へ

書作の真偽を鑑定する際、基準を定めるべきであり、収蔵地や内容から考えたい。本論では、考察する予定の書作は書簡が多量で、張裕釗が官僚や知友に宛てた書簡の収蔵地や内容は真偽に対する重要な基準となる。

例えば、無紀年の書簡が多く見られ、有紀年の書簡を除き、無紀年の書簡について編年作業を検討しなければならない。内容から検討すれば、編年作業も明らかにできる。例えば、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡（『陶

『風楼蔵名賢手札』の四番目書簡)では「並賜所為先大父墓表(あわせて亡祖父の墓表を下さった。)」とあり、曾国藩の日記(咸豊9年9月)にも同一の墓表を話題としている(第一章で検討)。これによって、真跡である可能性も高い。

真偽・編年の基礎があってから、時期区分が可能となる。本論では、既述したように張裕釗の書法における時期区分を行いたい。それが官僚文化の影響と関わり、書風検証も大きな意味を持つと考える。

書風の検証については、一定の観点を設け、それに基づく比較によって、然るべき根拠を明示していきたいが、各章では、それぞれの書風に応じ、比較の観点は異なってくる。第一章では、避諱の字や唐楷の筆意という観点を比べ、早年期や晩年の千字文との区別を明らかにする。また、小行書や小楷書の書簡において、文字の概形や用筆の方法、線の質感を古碑帖と比較する。

第二章では、魚住氏の書法分析の方法「起筆」・「送筆」・「収筆」・「転折」などの観点を応用し、本章では「左払い」・「ハネ」・「乙脚」を加え、張裕釗の大楷や曾国藩幕府内で流行した書法との比較によって、張裕釗の書法形成を検証する。また、小行書と小行楷書には、咸豊時期と同治前半期の全体的な書風の造形において同じ文字「左」や「子」を持つ文字で比較する。

第三章では、中字書作における梁碑から概形の影響には、この時期と同治前半期と比べて、同治前半期とこの時期の概形、そして唐碑の欧陽詢・褚遂良・梁碑の同じ文字、同じ部分を持つ文字を、一斉に比較する。中字書作における梁碑から結構法の影響には、「払いとその他の部分の幅」・「乙脚のある横画の斜度」・「他の横画の斜度」という観点から検証する。また、前の時代との共通点も分析する。

第四章では、同治後半期・光緒前半期からの書法の変遷における大楷書作には五つの用筆の観点を取り上げ、中楷書作にはハネの六つのバリエーションから分析する。さらに「縦画・横画における線の太さ」・「間隔の広さ」・「外方内円」も観点として加える。

以上により、各章で比較する観点が異なるが、それが各時期に張裕釗はそれぞれ異なった官僚に出会い、官僚から提供された異なる碑帖を吸収したことによって、それを反映した独自の表現に至ったものと予測される。

【表 1】張裕釗の略年表

年代	行跡	交遊	備考
清道光 3 年 1823 年 1 歳	張裕釗生。		
清道光 30 年 1850 年 28 歳	国子監学正学録に及第した。 内閣中書に転ぜられる。	曾国藩の知遇を得る。彼の門人となる	
清咸豊元年 1851 年 29 歳	曾国藩の日記に、張裕釗の名前が最初に現れる。		
清咸豊 02 年 1852 年 30 歳	仕進の道を断念し、故郷の武昌に帰る。		
清咸豊 03 年 1853 年 31 歳	曾国藩が江忠源と左宗棠に宛てた書簡に、張裕釗の名前が現れる。		
清咸豊 08 年 1858 年 36 歳	7 月 1 日、4 日、5 日、曾国藩が張裕釗の古文を指導する。		
清咸豊 09 年 1859 年 37 歳	3 月 31 日にも曾国藩は張裕釗を指導する。 9 月 8 日に曾国藩が張裕釗のために、卷子を書く。 11 月 16 日に胡林翼が曾国藩に宛てた書簡に、張裕釗が胡林翼の代筆を担う旨が記される。	2 月に汪士鐸が胡林翼に張裕釗を推薦し、張裕釗は胡林翼の官書局（幕府）の一員となり、『読史兵略』の編集に従事する。	
清咸豊 10 年 1860 年 38 歳			
清咸豊 11 年 1861 年 39 歳		胡林翼が他界した後、曾国藩の幕府の一員になったことが推測される。 莫友芝と出会う。	
同治元年 1862 年 40 歳	游幕の立場で曾国藩の幕府に属す。		
同治 02 年 1863 年 41 歳	春、湖北勺庭書院の主講に就任。		莫友芝が何璟に「隸書節録漢楽府」「安世房中歌」を贈る
同治 03 年 1864 年 42 歳	冬まで、湖北勺庭書院に務めている。		
同治 04 年 1865 年 43 歳			
同治 05 年 1866 年 44 歳			4 月下旬：何璟が湖北に参る。
同治 06 年 1867 年 45 歳	游幕の立場で湖北鍾祥県志局を務めている。		
同治 07 年 1868 年 46 歳	前半期：湖北崇文官書局 8 月 24 日から：南京曾国藩幕府		

同治 08 年 1869 年 47 歳	湖北崇文官書局		
同治 09 年 1870 年 48 歳	湖北崇文官書局 11、12 月：南京曾国藩幕府		
同治 10 年 1871 年 49 歳	4、6、7、8、10、12 月：南京曾 国藩幕府。 5 月、曾国藩は張裕釗のため父親 である張樹程の墓志を書く。 夏、金陵鳳池書院の主講に就任。		9 月 14 日莫友芝が 逝去。
同治 11 年 1872 年 50 歳	金陵鳳池書院に務める。		2 月 4 日曾国藩が逝 去。
同治 12 年 1873 年 51 歳	金陵鳳池書院に務める。		
同治 13 年 1874 年 52 歳	金陵鳳池書院に務める。		7 月、張謇は張裕釗 の門人となる。
光緒元年 1875 年 53 歳	金陵鳳池書院に務める。		
光緒 02 年 1876 年 54 歳	金陵鳳池書院に務める。 正月、『史記』の校正に就任。		
光緒 03 年 1877 年 55 歳	金陵鳳池書院に務める。 『史記』の校正に務める。		
光緒 04 年 1878 年 56 歳	金陵鳳池書院に務める。 7 月まで、『史記』の校正に務め る。		
光緒 05 年 1879 年 57 歳	金陵鳳池書院に務める。		
光緒 06 年 1880 年 58 歳	金陵鳳池書院に務める。		
光緒 07 年 1881 年 59 歳	金陵鳳池書院に務める。 『高淳県志』を編集する。 年末、金陵鳳池書院を辞める。		
光緒 08 年 1882 年 60 歳			
光緒 09 年 1883 年 61 歳	4 月、保定蓮池書院の主講に就任。		
光緒 10 年 1884 年 62 歳	保定蓮池書院に務める。		
光緒 11 年 1885 年 63 歳	保定蓮池書院に務める。	北京に上り袁昶・沈 曾植と面会。(書学 観の交流)	
光緒 12 年 1886 年 64 歳	保定蓮池書院に務める。		
光緒 13 年 1887 年 65 歳	保定蓮池書院に務める。		
光緒 14 年 1888 年 66 歳	保定蓮池書院に務める。	袁昶・沈曾植と面 会。(筆法論の交流)	
光緒 15 年 1889 年 67 歳	武昌江漢書院及び經心書院の主 講に就任。		
光緒 16 年 1890 年 68 歳	武昌江漢書院及び經心書院に務 める。		

光緒 17 年 1891 年 69 歳	襄陽鹿門書院の主講に就任。		
光緒 18 年 1892 年 70 歳	襄陽鹿門書院に務める。 襄陽鹿門書院を辞め、西安に移住し隠棲している。		
光緒 19 年 1893 年 71 歳	西安に隠棲する。		
光緒 20 年 1894 年 72 歳	西安に隠棲する。		

【表 2】張裕釗の書作品一覧（本論で掲げた張裕釗の書）

時期区分	年代/干支	年齢	種類	作品名	図版出典	収蔵先	備考
第一章 咸豊年間 の胡林翼 幕府	不詳		小楷書（館閣体）	張裕釗「小楷千字文」	張裕釗『張廉卿書千字文楷書』石印本第 9 版（文明書局、1935 年 3 月）		
	咸豊 8 年 1858/戊午	36	小行書	張裕釗の范志熙宛書簡 2 通	北京師範大学主編『清代名人書札』（北京師範大学出版社、2009 年 1 月）、381～384 頁。		
	咸豊 9 年 1859/己未	37	小楷書	張裕釗の曾国藩宛書簡 2 通	『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年）		
	咸豊 10 年 1860/庚申	38	小楷書	張裕釗の曾国藩宛書簡 2 通	『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年）		
	咸豊 11 年 1861/辛酉	39					
第二章 同治前半 期の曾国 藩幕府	同治元年 1862/壬戌	40					
	同治 2 年 1863/癸亥	41	小楷書	張裕釗「劉府君墓誌銘」	書号：D605176、通号：XZ13717。	浙江図書館古籍部蔵	
			小楷書	張裕釗の曾国藩宛書簡	『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年）	南京図書館蔵	
			小楷書	張裕釗の蔣光焄宛書簡	書号：D605139、通号：XZ13680。書号：D605168、通号：XZ13709。	浙江図書館古籍部蔵	
			小楷書	張裕釗の蔣光焄宛書簡 2 通	陳烈主編『小莽蒼蒼齋藏清代学者書札』下（人民文学出版社、2013 年 7 月）、789～790 頁。	小莽蒼蒼齋	
		小行書	張裕釗の汪士鐸宛書簡 2 通	文物編輯委員会編『書法叢刊』第 28 輯（文物出版社、1991 年 12 月）、88～89 頁。			

	同治3年 1864/甲子	42	小楷書	張裕釗の曾國藩宛書簡	『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版(江蘇省立國學圖書館出版、1930年)	南京圖書館藏	
	同治4年 1865/乙丑	43	小行楷書	張裕釗の徐宗亮宛書簡	『蔣元卿旧藏晚清和近代名人手札』	安徽省安慶市圖書館古籍部藏	
	同治5年 1866/丙寅	44	大字書作 條幅四屏	張裕釗「鮑照飛白書勢銘」	劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第6冊(世界書局、1925年再版)。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』(湖北美術出版社、1998年3月)、344~345頁。	中図個人藏	康有為、林守長臨書作品。
	同治6年 1867/丁卯	45					
	同治7年 1868/戊辰	46	小楷書	張裕釗の曾國藩宛書簡	張裕釗「致曾國藩」、陶湘『昭代名人尺牘小伝続集』卷18、26頁(文海出版社、1980年)、総1327~1328頁。		
第三章 同治後半 期・光緒前 半期	同治8年 1869/己巳	47					
	同治9年 1870/庚午	48					
	同治10年 1871/辛未	49	小行書	張裕釗の徐宗亮宛書簡(同治10年以降同治12年にかけて)	『蔣元卿旧藏晚清和近代名人手札』	安徽省安慶市圖書館古籍部藏	
			中楷	張裕釗の碑文「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」	中国個人藏。	中国個人藏	代曾國藩撰書
	同治11年 1872/壬申	50	大楷	張裕釗の李鴻章贈對聯	陳啓壯『碑骨帖姿—張裕釗書道研究』、197頁。		
			小行書	張裕釗の徐宗亮宛書簡	『蔣元卿旧藏晚清和近代名人手札』	安徽省安慶市圖書館古籍部藏	
同治12年 1873/癸酉	51	大楷	張裕釗「事文類聚」	書象会発行『第四十回書象展記念—張廉卿・宮島詠士・上條信山作品集』(2001年7月6日)、26~27頁。			
		中楷	張裕釗の碑文「吳徵君墓誌銘」	趙金敏「張裕釗書『吳徵君墓誌銘』」『收藏家』第4期(北京市文物局、1994年)、27~29頁。			

	同治 13 年 1874/甲戌	52	中楷	張裕釗の題字『舒芸室隨筆六卷』	張文虎『舒芸室隨筆』(金陵冶城賓館刊、1874年)、哈佛燕京圖書館藏。		
	光緒元年 1875/乙亥	53	小楷	張裕釗の張裕錯(兄)宛書簡	魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』、164頁。		
中楷			張裕釗の碑文「吳母馬太淑人柩葬誌」	張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会編『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』、48頁。		与吳華甫母親書	
	光緒 2 年 1876/丙子	54	中楷	張裕釗の題字『史記』	張裕釗校刊、婦有光及び方苞評点『史記』。		
	光緒 3 年 1877/丁丑	55					
	光緒 4 年 1878/戊寅	56	中楷	張裕釗の碑文「吳蘭軒墓表」	中国個人家藏拓本	中国個人藏	
	光緒 5 年 1879/己卯	57					
	光緒 6 年 1880/庚辰	58	小楷書	張裕釗の富升宛書簡	購書 934、「清張裕釗致桂卿函 冊頁」。出典： <a href="https://goo.gl/qQuPn7">https://goo.gl/qQuPn7</a>	国立故宫博物館藏	
	光緒 7 年 1881/辛巳	59	中楷	張裕釗の題字『汪梅村先生集』	『汪梅村先生集』、中国国家図書館藏。		
中楷			張裕釗の碑文「金陵曾文正公祠修葺記」	魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』、30頁。			
中楷			張裕釗の碑文「屈子祠堂後碑」	『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』、51頁			
小楷書			政清徐沛齋「臨趙孟頫『道德經』」	瞿忠謀「從《評跋萃刊》看晚清書家對趙體書法的反思性評價」『書法』2012年第11期(2012年11月)、96頁。			
	光緒 8 年 1882/壬午	60	小行書	張裕釗の仲武(莫繩孫)宛書簡。	張裕釗專題「張裕釗作品選」『中国書法』第6期(2001年)、18~19頁。名家手稿欣賞「張裕釗致仲武函(局部)」『書友』第250期(2009年10月)、封底頁。『張裕釗集』、「致仲武姻世兄」、湖北省博物館藏、25~26頁。		
第四章 光緒中期 以降	光緒 9 年 1883/癸未	61					
	光緒 10 年 1884/甲申	62	中楷	張裕釗の碑文「李剛介公殉難碑記」(湖北本)	張裕釗專題『中国書法』第6期(2001年)、16頁。		



		中楷	張裕釗の碑文「李剛介公殉難碑記」(石印本)	張裕釗『張廉卿書李剛介公殉難碑』(文明書局、1941年3月第17版)。		
光緒11年 1885/乙酉	63					
光緒12年 1886/丙戌	64	大楷	齊令臣藏「齊公祠楹聯」 齊公祠楹聯(38字) 第二冊 【先祠楹聯五十一字】	張裕釗書、高陽齊令辰謹注『大楷・吳永巨記』。	日本個人藏	
		中楷	張裕釗の碑文「南宮縣學碑記」	『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』、52頁。	碑於南宮中學	張裕釗撰並書
光緒13年 1887/丁亥	65	中楷	張裕釗の碑文「蒯公神道碑」	清李鴻章楷書『蒯公神道碑帖』(文明書局、中華民國5年(1916)11月初版、13年(1924)4月再版)		
光緒14年 1888/戊子	66	中楷	蓮池書院期 張裕釗「宮島藏千字文」	宮島旧藏『宮島詠士旧藏張廉卿千字文』(同朋社、昭和58年7月、1983年)。	日本個人藏	
			蓮池書院期 張裕釗「張孝移藏千字文」	張孝移旧藏『千字文』(出版情報なし)		
光緒15年 1889/己丑	67	中楷	張裕釗「節東都賦・西京賦」(光緒15~17年)	張廉卿「節東都賦・西京賦」一~二十三、雜誌『雪心』連載、日本個人藏。5~14頁、11~14頁、5~8頁、5~8頁。	日本個人藏	
光緒16年 1890/庚寅	68					
光緒17年 1891/辛卯	69	大楷	張裕釗「箴言(崔瑗座右銘)」	張裕釗『張廉卿書箴言』石印本(文明書局、1911年口版、1937年4月13版)。	京兆劉氏。	弟子中魯贈書作
光緒18年 1892/壬辰	70					
光緒19年 1893/癸巳	71	中楷	張裕釗の碑文「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒19~20年)	中国個人藏。		与賀松坡双親書
光緒20年 1894/甲午	72					



# 第一章 咸豊年間の胡林翼幕府における張裕釗書法

## 序

張裕釗の早期をめぐっては、曾国藩との関係が言及されてきたが<sup>1</sup>、咸豊年間の張裕釗の詳しい活動実態についてはこれまであまり触れられてこなかった。特に筆者が関心を寄せるのは、咸豊年間に張裕釗が書学の上で、どのような影響を受けたかについてである。張裕釗の咸豊年間の書作品に関しては、張裕釗が曾国藩と范志熙（字は月槎、1815～1889）に宛てた書簡があり、陳啓壯氏はそれが唐人写経、二王と米芾の書風から出たものらしいと指摘している<sup>2</sup>。しかし、その書法の由来は十分に明らかにされてはいない。

そこで、本章では張裕釗の咸豊年間ににおける胡林翼の幕府での交流活動を確認した上で、張裕釗が胡林翼の幕府において形成した書法の実相を探ってゆく。

## 第一節 張裕釗の家学と早期の書作品

### 一、張裕釗の家学

<sup>1</sup> 曾国藩との関係を言及した先行研究として以下がある。

① 序章注 82、魚住氏著「第一章：張廉卿論—その人間性と書法—／一、張裕釗の人間性／（一）前期の張裕釗」、14～18 頁。

② 序章注 92、葉氏著「辞官南帰」、22～31 頁。

③ 序章注 61、魚住氏著「第一章：張裕釗—その人間性と書法—／一、張裕釗の人間性／（一）前期の張裕釗」、20～26 頁。

④ 序章注 75、陳氏著「緒論／四、張裕釗師承交游／（一）師承／3. 曾国藩」、6～9 頁。

<sup>2</sup> 序章注 75、陳氏著、7・153～156 頁。

張裕釗の先祖は張九雄（伯九公、第一代）で、安徽省修寧県の出身である<sup>3</sup>。元朝に入り、元乱を避けるため安徽省修寧県から湖北武昌へ移住する。張九雄の墓は1990年（庚午歳、清明）に再建立され、今は湖北省鄂州市沼山鎮にあることが分かる。張靖鳴氏によると、湖北省鄂州市沼山鎮の張裕釗文化園古墓区では、元代墓葬（第二代、第三代、第四代、第五代）と明代墓葬（第六代、第七代、第八代、第九代、第十一代）に分類されることが分かる<sup>4</sup>。今に至って二十代余、多量な歴史的な文物や書作品が残っており、これらを後世に伝える目的で保存されている<sup>5</sup>。

張裕釗の父張善準が清書した家譜では、張裕釗の高祖張維滄は太学生で、曾祖張新本は歳貢生、伯祖父張以謨は進士、祖父張以誥は太学生、父張善準は歳貢生と記している<sup>6</sup>。また、張裕釗の祖父張以誥は「贈奉大夫内閣中書加四級」、父張善準も「贈奉大夫内閣中書加四級」、官僚として活躍している<sup>7</sup>。張裕釗の祖先は代々学問に熱心であり<sup>8</sup>、若年における張裕釗の書法形成の上で重要な役割を果たしている。

湖北省鄂州市沼山鎮の張徳宝灣には、張裕釗の曾祖張新本（1730～1809）の題匾書作品（図1）が残っており、張靖鳴氏が「張裕釗曾祖題

<sup>3</sup> 家譜：「一世。始遷祖、伯九公：由徽州休甯遷居武昌符石郷、封北直大理寺左評事。」張善準手抄本『張廉卿先生家譜』（台湾国家図書館、清咸豊10年、1860年）、2頁。

<sup>4</sup> 張靖鳴氏（1968～）は湖北鄂州職業大学の副教授であり、鄂渚民間文化を研究されている。2018年3月21日から24日にかけて、筆者は張靖鳴氏の仲介を得て張裕釗文化園の園長である張紹銀氏・鄂州市博物館の元副館長である熊寿昌氏のご厚意により、張裕釗の出身地である中国の湖北省鄂州市沼山鎮に張裕釗一族の墓群を踏査した。その後、張靖鳴氏から「張裕釗文化園古墓区文史資料」（内部資料）を提供いただいた。

<sup>5</sup> 張靖鳴、黄彩萍、萬海訪「張裕釗家族書法群体調査研究」（『鄂州大学学报』第24卷第6期、2017年11月）、32～34・37頁。

<sup>6</sup> 前掲注3、家譜6～10頁：「十五世。斯錕公長子：維滄公、字傲凌、号順軒、太学生。」「十六世、維滄公之子新本公：官名本、字届十、号立堂、歳貢生。」「十七世。新本公長子以熨公：榜名以謨公、字会安、号訃亭、一号茂園、乾隆戊申（1788）科舉人、嘉慶戊辰（1808）科進士。」「十七世。次子以烈公、冊名以誥公、字競安、一字書升、号経圃、太学生。」「十八世。以烈公次子善塋：冊名善準、字樹程、号平泉、一号愚公、恩歳貢生。」

<sup>7</sup> 鍾桐山修、柯逢時纂『中国地方志集成33・湖北府県志輯 光緒武昌県志』卷15、封廕卷15（江蘇古籍出版社、清光緒11年（1885）刻本影印）、579頁。

<sup>8</sup> 『張氏家譜』『立堂家訓』には「立堂對長男以謨、次男以誥：入則課読、出則課耕、十数年如茲。」とある。序章注92、葉氏著、3頁で孫引したものがある。

匾書法及相關文史考略」において紹介している。本文は「賓堪聚敬」で、右の款文は「殿老賢弟張殿録暨弟媳夏老孺人六旬□□」、左の款文は「乾隆五十七年歲官壬子陰月吉旦、乙巳正貢族兄本拜題。」である。張靖鳴氏はその書作品には欧陽詢また趙孟頫の筆意があり、謹厳な結構を交えた伝統的な書風であると述べている<sup>9</sup>。款記の「殿老」は張殿録(1733～1794)であり、夏老孺人(1732～1812)はその妻である。1792年旧暦10月1日に夫婦の60歳の双寿を祝い、族兄張本(張新本)がこの匾額を書いたと述べている。張新本の伝記について、清光緒『武昌県志』に「張以謨、字会安、符石郷人。父本、歳貢生、任広済訓導。(張以謨、字は会安、符石郷人の出身。父は本であり、歳貢生として、広済訓導に任ぜられた。)」<sup>10</sup>とある。また、『張氏宗譜』にも「十六世、維滄之子新本、官名本、字届十、号立堂、歳貢生、黄州府広済県儒学訓導。(十六世、維滄の子新本、官名は本、字は届十、号は立堂、歳貢生となり、黄州府広済県の儒学訓導となった。)」<sup>11</sup>とある。広済訓導は黄州府広済県の儒学訓導で、今の教育局の副局長に相当する。

筆者は、張裕釗の曾祖張新本の書作品は、唐楷の筆意と謹厳な結構を交えた伝統的な書風であることから、張裕釗の祖先は代々官僚として、伝統的な書風を学んでいたと推測する。「賓堪聚敬」の写真は判読が難しいところもあるが、縦長な初唐の結構をよく学んでいたことが看取される。

## 二、早年期の書作品

<sup>9</sup> 張靖銘、李景燕「張裕釗曾祖題匾書法及相關文史考略」(『鄂州大学学报』第21卷第4期、2014年4月)、22～24頁。

<sup>10</sup> 前掲注7、鍾桐山修、柯逢時纂県志卷20、文苑卷16、633頁。

<sup>11</sup> 『張氏宗譜』卷47(敦義堂)、3頁。

ところで、若年における張裕釗の書作品はどのような書風であったのだろう。先行研究では、張裕釗「小楷千字文」（上海文明書局）（図 2）が残っており、上條信山氏は「この千字文は、張廉卿としては、若書きの部類に属するものと思われる。」と述べている<sup>12</sup>。また、楊祖武氏はこの「小楷千字文」について以下のように述べている。

三十年代有正書局<sup>13</sup> 出版一冊『張廉卿小楷千字文』、為卷折体、勻淨方正有力、可能為其早期之作。惜無書写年月、不便定論<sup>14</sup>。

三十年代に有正書局から出版した『張廉卿小楷千字文』は卷折体であり、均淨方正で力がある、初期の作の可能性はある。惜しむらくは書写年代がないため、説を定められない。

更に、陳啓壯氏は以下のように述べている。

此作小楷欧体風格極為明顯、並帶有館閣体痕跡、雖無紀年和落款、但偶爾在筆画轉折出均処略顯外方内円特徴、故訂為張裕釗早年時期欧体風格書法作品無疑<sup>15</sup>。

この小楷は欧体の風格がはっきり見られ、館閣体の痕跡も窺える。紀年と落款はないが、時折、転折筆画に外方内円の特徴を現しており、張裕釗の初期における欧体の書法作品であることは間違いない。

---

<sup>12</sup> 上條信山「解説」（張裕釗『宮島詠士旧蔵 張廉卿千字文』同朋舎、1983年7月）、23頁。

<sup>13</sup> 文明書局の誤りと見られる。この「小楷千字文」を指すものと見なす。

<sup>14</sup> 序章注 91、楊氏著、37頁。

<sup>15</sup> 序章注 75、陳氏著、192頁。

以上により、この「小楷千字文」は張裕釗が若年に書いた作品と推測できる。

ここで、筆者はこの小楷千字文と、晩年の張裕釗の二つの千字文を比較してみた（図 3）。「玄」字を見ると、小楷は「玄」字が書かれ、晩年二作では「元」字となっている。「元」字を書いた理由は清代の聖祖、名は玄燁に対する避諱である。筆法においては、晩年の特徴の「外方内円」が「小楷千字文」には見られず、唐楷の筆意に忠実である。結構でも、「釗」・「号」を見ると、唐楷の結体そのままに書いている。

以上に検討したように、張裕釗の曾祖張新本は官僚であり、題匾書作品で欧陽詢と趙孟頫における筆意と謹厳な結構を交えた伝統的な書風が窺え、張裕釗は家学を継承し、若年の小楷は唐楷に忠実な書風であった。

## 第二節 入幕直前の書作品

道光 30 年から咸豊 2 年（1850～1852）にかけて、張裕釗は北京で職務に従事していた。張裕釗の「范鶴生六十寿序」<sup>16</sup>によると、その頃張裕釗は常に范鳴珂（字は子瑊）、范鳴猷（字は鶴生）兄弟<sup>17</sup>などの文人たちと宴を開き、吟詩を通じて繋がりがあった。范鳴猷・范鳴珂の他、この期間に張裕釗に深く関与した人物として挙げられるのは、湖北の蔵書家で張裕釗と同郷の范志熙（1815～1889）である。范志熙、字は月槎、子穆。号は仕隱、湖北武昌の出身である<sup>18</sup>。范鳴猷・范鳴珂はこの范志

<sup>16</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点「范鶴生六十寿序」、78～79 頁。

<sup>17</sup> 范鳴珂、范鳴猷兄弟たちは官僚としての文献は以下のようにある。「范鳴猷、授通奉大夫江西候補道加三級。」「范鳴珂、晋贈中憲大夫吏部文選司主事工部主事。」前掲注 7、鍾桐山修、柯逢時纂県志卷 15、封廡卷 11・12、577 頁。

<sup>18</sup> 范志熙は官僚としての文献は以下のようにある。「范志熙、授通奉大夫三品銜江南候補道加三級。」前掲注 7、鍾桐山修、柯逢時纂県志卷 15、封廡卷 11・12、577 頁。

熙の甥で<sup>19</sup>、その当時、北京に住み、その関係から、張裕釗は彼らとも文学や思想と通じて交流した。范志熙が編集した「仕隱図題詞」において張裕釗は咸豊9年（1859）の序文を記しており<sup>20</sup>、また范志熙の詩「鄂城喜晤張廉卿旋復別去」で胡林翼の著になる『読史兵略』について詠じていることから、これが咸豊9年から10年（1859～1860）にかけて書いた詩文と推測できる<sup>21</sup>。これによって、張裕釗の文人としての活動は胡林翼の幕に入ってから盛んになっていたことが窺える。

張裕釗が范志熙に宛てた書簡は、北京師範大学から出版された『清代名人書札』中に見られ、2通とも未紀年である。陳啓壯氏は内容により「自甲寅省門一別、五載於茲。（中略）張裕釗頓首。十二月二日。（甲寅（咸豊四年）に省城（武昌）から離れ、五年ぶりの今（咸豊八年）（中略）張裕釗頓首。十二月二日。）」（図4）とあることから、それが咸豊8年（1858）に書かれた書簡であると推測される。また「前月榜発、知老丈又報康了。（前月に試験の結果が発表され、あなたが挙人から落ちたことが分かった。）」（図5）とあり、親密な問柄であったことが分かる<sup>22</sup>。

全体的な書風を見ると、王羲之（図6）・米芾（図7）の字形、筆使いに酷似するものが散見される。王羲之の「蘭亭序」の例を挙げると、「為」・「能」・「觀」字の結体が一致する。米芾らしい特徴としては、「中」字の縦画の始筆・収筆と「夫」字の左払いを太く強調する筆法が見られ、「雲」

<sup>19</sup> 范鳴蘇、范鳴珂は范志熙の甥に関する文献は范志熙の友人吳大廷が述べている。吳大廷によれば「余於丙辰、始識范君鶴生於京師。（中略）丁巳其從叔父月槎北上。（中略）咸豊十年庚申沅陵吳大廷讓。」とある。范志熙撰『退思存稿（退思詩存）』（武昌范氏木犀香館刻本、清光緒14年1888年、中国国家図書館蔵）、2～3頁。

<sup>20</sup> 前掲注19、范志熙撰、1頁には「范君月槎以国子監助教、官京師、自為仕隱図、而屬裕釗題其卷。（中略）咸豊屠維協洽之歲十月朔二日、張裕釗敬題。」とあり、「咸豊屠維協洽」は咸豊9年（1859）を指している。

<sup>21</sup> 范志熙「鄂城喜晤張廉卿旋復別去」（『范月槎詩文稿』抄本、南京図書館蔵）。原文には「時胡潤芝中丞聘修讀史兵略一書。」とあり、張廉卿（張裕釗）は胡林翼（字は潤芝）の招請により、『読史兵略』を編集することになったことが分かる。

<sup>22</sup> 序章注75、陳氏著、153～156頁。



字の結体と筆法は類似し、この特徴は米芾の「蜀素帖」の書風といえる（図 8）。二人は若い頃の友人であり、互いに帖学の影響を受けていたことが推測される。謹厳な唐碑の書風を体得していたが、友人に対しては米芾のような線の肥瘦の変化に富む書風を用いている。

ちなみに、日本の弟子・宮島大八（1867～1943、名は吉美、通称は大八、字は詠士、号は詠而帰廬主人。）は「先生は若年から非常に習字を好み、あらゆる名家の書を臨して、王羲之から米芾に及んだ。（1937年5月22日記）」<sup>23</sup>と述べている。また、中国の弟子・張謇（1853～1926、字は季直、号は啬庵。）の『張裕釗千字文』序文においても（図 9：傍線筆者）、若い頃に、唐宋の諸家に陶酔したことが記され、二人の弟子の証言は張裕釗の若年の書作品の実相と一致している。

以上考察したように、張裕釗の文人としての活動は、胡林翼の幕に入ってから盛んであったことが確認できる。また范志熙に宛てた書簡は王羲之・米芾を集字した倣書のような書風で、そこに忠実な古典書法の継承と再現が認められる。

### 第三節 曾国藩への従学と胡林翼への入幕時期

張裕釗は道光 30 年（1850）、28 歳で国子監学正学録に及第した。その後内閣中書に転ぜられ、曾国藩の知遇を得ることになった。この時の出会いによって彼の門人となる<sup>24</sup>。その直後、咸豊元年（1851）に大規模

<sup>23</sup> 富永覚著「詠翁道話」『素描一人と画と一』（清泉社、1969年12月）、1937年5月22日記、13頁。

<sup>24</sup> 張裕釗と曾国藩の知遇の文献について、本章の注 1 先行研究には以下のように挙げられる。①張裕釗「送梅中丞序」には「泊庚戌、居都中、試国子監学正学録、同受知於曾文正公之門」とある。庚戌は道光 30 年（1850）である。序章注 67、張裕釗著、王氏校点、30 頁。

②張後沆、張後澹「哀啓」には「庚戌試国子監学正学録、受知於曾文正公之門。」とある。序章注 67、張裕釗著、王氏校点、附録七：張裕釗評伝資料輯存、550 頁。

な太平天国の反乱が起こった。曾国藩は勅命を奉じて咸豊2年（1852）に太平軍に圧倒される朝廷軍の救援に向った。この年、張裕釗は内閣中書に階位を進めたが、仕進の道を断念し、故郷の武昌に帰った<sup>25</sup>。

張裕釗は曾国藩の門人として従い、学問に専念することを決意した。曾国藩の日記には、咸豊元年7月19日「王雁汀、孫駕航、錢子密、張廉卿来、共陪三個半時。（王雁汀、孫駕航、錢子密、張廉卿が参り、三時間半ほど共にした。）」<sup>26</sup>とあり、初めて張裕釗の名前が曾の日記に現れる。咸豊3年（1853）に曾国藩が江忠源・左宗棠に宛てた書簡には、再度、張裕釗の名前も見え<sup>27</sup>、その後も曾国藩との交流が続いていることが分かる。曾国藩の日記に見える張裕釗の記録によると、咸豊8年（1858）7月2日・4日・5日に曾国藩は張裕釗の古文を指導し、咸豊9年（1859）3月11日にも曾国藩は張裕釗を指導し、9月8日には張裕釗のために、卷子を書いている<sup>28</sup>。曾国藩のもとで、張裕釗は着々と古文の実力をつけていった。

ところで、張裕釗が曾国藩の幕に入った時期に関しては、従来明確な定説がない。これらを整理すると、(1)咸豊2年（1852）説、(2)咸豊3年（1853）説、(3)咸豊4年（1854）説、(4)咸豊11年（1861）説、(5)同治7年（1868）説となる。

---

③清史稿には「咸豊元年举人、考授内閣中書。曾国藩閱卷賞其文、既来見。」とある。趙爾巽主纂『清史稿』卷486、列伝273、文苑3（中華書局、1977年）、13442頁。

<sup>25</sup> 張後沆、張後澹「哀啓」には「自壬子出都後、即絶意仕進。」とある。壬子とは咸豊2年（1852）を指している。序章注67、張裕釗著、王氏校点、附録七：張裕釗評伝資料輯存、551頁。

<sup>26</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第16冊、日記1、咸豊元年7月19日、239頁。

<sup>27</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第22冊、書信1、咸豊3年2月18日、曾国藩の江忠源・左宗棠宛書簡「与江忠源左宗棠」。116頁には「石翁同年及子寿兄、廉卿弟均此致候。」とある。

<sup>28</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第16冊、日記1。

咸豊8年7月2日の条に「閱張廉卿文。」（308頁）とある。咸豊8年7月4日の条に「閱張廉卿古文。」（309頁）とある。咸豊8年7月5日の条に「夜批廉卿古文畢。」（310頁）とある。咸豊9年3月11日の条に「写朱堯階、張廉卿信。」（420頁）とある。咸豊9年9月8日の条に「張廉卿来久談、飯後為張廉卿写手卷一。」（468頁）とある。

序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第23冊、書信2、咸豊9年3月11日、曾国藩の張裕釗書簡「加張裕釗片」。124頁に「足下為古文、筆力稍患其弱。（中略）足下氣體近柔、望熟誦揚、韓各文、而参以兩漢古賦、以救其短、何如？」とある。

(1)咸豊 2 年説には、魚住和晃氏の説があり<sup>29</sup>、(2)咸豊 3 年説には、王達敏氏の説がある。魚住氏の説は「哀啓」の記述に従って、張裕釗が内閣中書を辞めてそのまま曾国藩に従うようになったと解するものであり、王氏の根拠は咸豊 3 年 2 月 18 日に曾国藩が江忠源・左宗棠に宛てた書簡に張裕釗の名前が現れたことによるものである<sup>30</sup>。(3)咸豊 4 年説には、聞鈞天氏<sup>31</sup>・葉賢恩氏<sup>32</sup>・丁有国氏<sup>33</sup>・陳啓壯氏<sup>34</sup>の説があり、太平天国軍は湘軍との攻防に際し、曾国藩は張裕釗が郷里にいと聞き、張裕釗が曾国藩の幕僚として招聘されたとするものである。(5)同治 7 年説には、繆全吉氏の説がある。その根拠は『碑伝集補』第 51 巻に基づく。<sup>35</sup>

以上の各説はいずれも十分な根拠に基づくものではなく、筆者は(4)咸豊 11 年に入幕したという朱東安氏の指摘を支持している<sup>36</sup>。咸豊 11 年説の根拠は、曾国藩が胡林翼と方翊元（字は子白、1816～1864）に宛てた書簡と汪士鐸（字は梅村、晩号を悔翁とし、江蘇江寧の出身。1820～1888）の詩文によって証明できる。まず咸豊 9 年に曾国藩が胡林翼に宛てた書簡では、以下のようにある。

得見汪梅村、洵積学之士、廉卿亦精進可畏、台端如高山大沢、魚龍  
宝蔵薈萃其中、不覺令人生妒也。<sup>37</sup>

<sup>29</sup> 序章注 61、魚住氏著「第一章／張裕釗—その人間性と書法」、15 頁。原文には「咸豊二年（一八五二）、おりからの太平天国軍の拡大に対し、湘軍を結成してその制圧にのぞむ曾国藩の招請により、仕進の道を断念して郷里武昌に帰るが、その間、曾国藩の幕僚として頭角をあらわし、曾国藩の篤い信任を得るようになった。」とある。

<sup>30</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点「前言／（一）見知曾氏」、5 頁・「附録九／張裕釗年譜」、600 頁。原文には「咸豊三年（一八五三）二月、曾国藩兵起衡湘伊始、即招張裕釗入幕。」とある。

<sup>31</sup> 序章注 90、聞氏著「一：家世及年譜」、9～10 頁。

<sup>32</sup> 序章注 92、葉氏著「附録二：張裕釗年譜」、306 頁。

<sup>33</sup> 序章注 78、丁氏著「武昌張廉卿先生年譜」、85～386 頁。

<sup>34</sup> 序章注 75、陳氏著「附録：張裕釗年譜」、345 頁。

<sup>35</sup> 序章注 11、繆氏論文には「同治 7 年、至金陵入国藩幕中、治文為事。」とある。総 360 頁。

<sup>36</sup> 序章注 12、朱氏著、33 頁。

<sup>37</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 23 冊、書信 2、咸豊 9 年 8 月 26 日早、曾国藩の胡林翼宛書簡「復胡林翼」、228 頁。

汪梅村は積学の士であり、廉卿の精進も恐るべきである。あなたの幕府には、優秀な人材がたくさんいて、羨しい。

張裕釗は元々胡林翼の配下にあたる人物であるとされる。また、咸豊10年7月2日に曾国藩が方翊元に宛てた書簡によると、以下のようである。

国藩才智浅薄、近更精力極疲、忽膺艱鉅、大懼賞越、詒知好羞、惟當広引直諒之友、啓牖忠益、匡其不逮。承薦令弟及武举張君、請即束装来敝營、量才位置（中略）、閣下以為何如。<sup>38</sup>

国藩は浅学非才で、最近更に体力も衰え、困難な環境を乗り越えるため、気のおけない友を招き、私の不足するところを直し、啓発して欲しいと考えています。あなたの弟と武昌の挙人張裕釗が私の幕府に参りましたが、（中略）、あなたはどうかお考えでしょうか。

このように、曾国藩が自分の能力に不安を感じ、方翊元の弟と張裕釗が幕府の一員になる可能性があるかどうかを方翊元に伺っている。つまり、この時点では、張裕釗は正式には曾国藩の幕に入ってはいなかったことが分かる。加えて、汪士鐸が書いた『梅村贖稿』「四君子詠」によれば「張歴曾胡両公幕府、不願得一職。（張が曾国藩と胡の幕府にいた時に、一職も願わなかった。）」<sup>39</sup>とあり、張裕釗は曾国藩と胡林翼幕府の配下にあったことを述べている。

以上のように、咸豊9年から10年にかけて、張裕釗は胡林翼の幕府の

<sup>38</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第23冊、書信2、咸豊10年7月2日、曾国藩の方翊元宛書簡「覆方翊元」、634頁。

<sup>39</sup> 汪士鐸『梅村贖稿』丙11汪贖下「四君子詠」（金陵叢書、刻本、南京図書館蔵）、53頁。

一員であった。この記事に基づくと、張裕釗は咸豊 11 年に胡林翼が他界した後<sup>40</sup>、曾国藩の幕府の一員になったことが推測される。従来の張裕釗の研究では胡林翼の幕府の一員になったことは述べられていなかった。咸豊年間において張裕釗が曾国藩の幕府の一員か、胡林翼の幕府の一員であったかが混同されていたといえる。張裕釗は間接的に曾国藩の門下にあったといえても、曾国藩の幕府の一員ではなかったのである。

#### 第四節 幕府の官僚たちとその書作品

##### 一、胡林翼の小楷

胡林翼は咸豊 5 年（1855）に湖北布政使に任命され、同年にも湖北巡撫に任命された<sup>41</sup>。咸豊 10 年には既述の『読史兵略』を著している。咸豊 9 年 2 月に汪士鐸が胡林翼に張裕釗を推薦し、張裕釗は胡林翼の官書局の一員となり、『読史兵略』の編集に従事した。一方、胡林翼の官書局が開設された期間は咸豊 9 年から 10 年である。この 2 年の間に胡林翼の幕僚として官書局に従事していた者は汪士鐸・胡兆春・張裕釗・莫友芝・丁取忠・張華理などがおり、汪士鐸が頭目であった<sup>42</sup>。そこで胡林翼・

<sup>40</sup> 咸豊 11 年 9 月 3 日『莫友芝日記』には「言胡宮保以前月廿六亥刻薨矣、驚痛久之。」とあり、胡宮保（胡林翼）は咸豊 11 年 8 月 26 日に亡くなったことが分かる。序章注 113、莫友芝著、張氏整理、54 頁。

<sup>41</sup> 中央研究院歴史語言研究所／清代職官資料庫／職官名称：湖北布政使

胡林翼：咸豊 5 年（清代職官年表、第 3 冊、1921 頁）

<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?.cb6f00041C00601000000004A000000000000^10000100000020007419c>（2021 年 7 月 19 日閲覧）

中央研究院歴史語言研究所／清代職官資料庫／職官名称：湖北巡撫

胡林翼（署）：咸豊 5 年～咸豊 6 年（清代職官年表、第 2 冊、1699 頁）

胡林翼：咸豊 6 年～咸豊 8 年（清代職官年表、第 2 冊、1699～1701 頁）

胡林翼（署）：咸豊 8 年～咸豊 10 年（清代職官年表、第 2 冊、1701～1703 頁）

<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?.140000000001^0000000100000000A01000000000103C000C174000416f>（2021 年 7 月 19 日閲覧）

<sup>42</sup> 胡林翼の『読史兵略』において自序には「是書經始於九年二月朔日、藏事於十年十二月十二日。編輯者：及門江寧汪孝廉士鐸。分輯者：漢陽孝廉胡君兆春、武昌孝廉張君裕釗、獨山孝廉

汪士鐸との交流や当時の書作品をもとに、張裕釗の書作品の形成について考察していきたい。

まず、張裕釗と胡林翼に関する文献について、咸豊9年11月6日に胡林翼が曾国藩に宛てた書簡では、「滌丈大人閣下：初三夜、專差一函寿文、乞廉卿捉刀。（国藩大人：三日の夜に、一枚の寿文を送りました。それは廉卿が撰した寿文です。）」<sup>43</sup>とあり、張裕釗が胡林翼に代わり寿文を撰したことが分かる。

胡林翼の書作品（図10）は、父胡達源（1778～1841）（図11）と岳父陶澍（1779～1839）（図12）に大きな影響を受けた。胡林翼の書学背景を考えると、父と岳父二人が翰林の出身であることから<sup>44</sup>、書作品は唐楷を基調に趙孟頫や董其昌の筆意を交じえた伝統的な書学が窺える。

また、胡林翼が陶少雲、弟胡湘舫に宛てた書簡の内容によると、以下のようにある。

仁弟処皇府碑現在已經臨習否？如未臨習、乞借一觀。兩月後即奉上也。如已臨習、即不必矣。（年代不詳、8月24日）<sup>45</sup>

あなたは「皇府碑」を臨習していますか？まだ臨習していない場合

---

莫君友芝、長沙明經丁君取忠、長沙布衣張君華理也。」とある。胡林翼『詠史兵略』（中央編訳出版社、2010年7月）、1頁。

<sup>43</sup> 胡林翼の曾国藩宛書簡。咸豊9年11月16日。太平天国歴史博物館編『曾国藩等往来信稿真蹟』（河北人民出版社、1990年12月）、49頁。

<sup>44</sup> 中央研究院歴史語言研究所／人名權威人物伝記資料庫／胡達源  
履歴：翰林院編修、任期：嘉慶24年（国立故宫博物院図書文献処清国史館伝稿、701005250号）  
<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/sncaccgi/sncacFtp?ID=8&SECU=313890905&PAGE=2nd&VIEWREC=sncacFtpqf:1@@1777676471>（2021年7月19日閲覧）

中央研究院歴史語言研究所／人名權威人物伝記資料庫／陶澍  
履歴：翰林院庶吉士、任期：嘉慶7年～嘉慶10年（国立故宫博物院図書文献処清国史館伝稿、70100765号）。

履歴：翰林院編修、任期：嘉慶10年～嘉慶19年（国立故宫博物院図書文献処清国史館伝稿、70100765号）。  
<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/sncaccgi/sncacFtp?ID=8&SECU=313890905&PAGE=2nd&VIEWREC=sncacFtpqf:25@@2020767279>（2021年7月19日閲覧）

<sup>45</sup> 胡林翼の陶少雲宛書簡「致内弟陶少雲」。年代不詳、8月24日。序章掲注6、胡林翼著、家書、1111頁。

は、貸して観せてほしい、二か月後に返します。もし臨習している場合は、結構です。(年代不詳、8月24日)

前刻欧、趙、董書等石、他時自可送存箴言書院也。(咸豊11年4月24日)<sup>46</sup>

以前に刻した欧陽詢、趙孟頫、董其昌などの書の石は、他の時に箴言書院に送って、保存します。(咸豊11年4月24日)

このように、欧陽詢・趙孟頫・董其昌などの書を刻し、伝統的な帖学書法を尊重していたことが裏付けられる。

胡林翼の曾国藩宛書簡(図13~14)を通覧すると、いずれもが小楷の謹厳な書法である「館閣体」に類する。「館閣体」書法は当時の科挙官僚や文人たちにとって必須であり、謹厳で、整った楷書を善くすることが求められた。

## 二、汪士鐸の小楷

汪士鐸、字は梅村、江蘇江寧(南京)の出身。清朝の歴史学家、地理学家、胡林翼、曾国藩の幕僚である。汪士鐸については、胡林翼が王植に宛てた書簡から、汪士鐸が胡林翼の門人であったことが知られる<sup>47</sup>。汪士鐸は張裕釗と詩文の応酬をしており、張裕釗には「病起東汪梅村(士鐸)」<sup>48</sup>があり、汪士鐸の『梅村賸稿』には「贈張廉卿」、「得廉卿信」、

<sup>46</sup> 胡林翼の胡湘齡宛書簡「復胡湘齡」。咸豊11年4月24日。序章注6、胡林翼著、唐氏編、書牘、909頁。

<sup>47</sup> 道光24年(1844)胡林翼の王植書簡「致王植」。原文には「前歳肅函、並善化羅茂才書、交門下汪士鐸呈上。」とある。序章注6、胡林翼著、唐氏編、書牘、1頁。

<sup>48</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点「病起東汪梅村(士鐸)」、284頁。

「四君子詠」<sup>49</sup>、また『悔翁筆記（悔翁詩鈔）』には「贈桐城馬通伯並東廉卿」、「贈張廉卿舍人」<sup>50</sup>など、お互いの詩文が残っている。

「得廉卿信」によると、「吾従旧学伝旧法、判与古人同古邱。（私は旧学から旧法を伝え、古人と古邱をともにする。）」<sup>51</sup>とあるとおり、汪士鐸は伝統的な学問に傾倒していた。また『汪梅村先生集残帙』には、「金石萃編四十一検校。」とあり<sup>52</sup>、清の王昶『金石萃編』を校正していたことが分かる。更に『汪子語録』（図 15）が残っている。汪士鐸が某氏に宛てた書簡（図 16）は行書・草書であるが、「有」・「迎」の結体が『汪子語録』の「有」・「近」の結体に類似する。そのため、『汪子語録』は汪士鐸自身の小楷である可能性は十分に考えられよう。

以上検討したように、胡林翼の周辺人物はいずれも館閣体を勉強し、張裕釗も館閣体の影響を受けて、謹厳な小楷の書風に染まっていたことが推測される。

### 三、張裕釗の小楷

これについて、当時の張裕釗にはどのような書法が見られるだろうか。

民国において出版された『陶風楼藏名賢手札』には、咸豊年間にかけて、張裕釗が門人の立場から曾国藩に謹厳な筆致で書き記した2枚の書簡（第3、第5）（図 17、図 19）が収められている。第3の書簡は「咸豊九年八月二十九日到。渠覆」（図 17：傍線筆者）の紀年があり、内容は

<sup>49</sup> 前掲注 39、汪士鐸著、①「贈張廉卿」丙 11 汪贍上、30～31 頁。②「得廉卿信」丙 11 汪贍上、31～32 頁。③「四君子詠」丙 11 汪贍下、53～54 頁。

<sup>50</sup> 汪士鐸「贈桐城馬通伯並東廉卿（七月二十一日）」詩 3、2 頁。「贈張廉卿舍人」詩 7、10 頁。汪士鐸『悔翁筆記（悔翁詩鈔）』上元吳氏銅鼓軒重雕民国廿四年十月版帰燕京大学図書館補刊印行（刻本、南京図書館蔵）（中国書局、1985 年）。

<sup>51</sup> 前掲注 39、汪士鐸著、「得廉卿信」丙 11 汪贍上、31～32 頁。

<sup>52</sup> 汪士鐸『汪梅村先生集残帙』（抄本、南京図書館蔵）。



以下のようにある。

裕釗惟有与劉生相勉、搏力於学。以期無負属望之至意而已。汪梅村  
□□□小学之文、属裕釗作楷奉上。(図 17：傍線筆者)

裕釗は劉生と励まし合い、学問を専らにし、お望みの御意に背かないように努めます。汪梅村□□□小学の文は裕釗が楷書で書いて奉じます。

これによって、劉生（劉兆蘭）<sup>53</sup> と汪梅村（汪士鐸）が張裕釗と共に勉学に励んでいたことが知られる。劉生は張裕釗と同じ武昌鄂州の出身である。また第 5 の書簡は「咸豊十年閏三月十七日到」（図 19：傍線筆者）の紀年が残っている。

他に 2 枚の未紀年書簡（第 4、第 6）（図 18、図 20）があり、それらも咸豊年間に書いたものと推察できる。第 4 の書簡では、「並賜所為先大父墓表（あわせて亡祖父の墓表を下さった。）」（図 18：傍線筆者）と述べている。なお、張裕釗の祖父の墓表（張府君墓表）は曾国藩の日記にも以下の記録がある。「(廉卿) 求為其祖作墓志、近日當応之也。(廉卿が私に彼の祖父の墓志の撰文を願った。近日中に応じなければならない。)」

(咸豊 9 年 9 月 8 日)<sup>54</sup>、「飯後擬作張廉卿之祖墓表（食事後に張廉卿の祖父の墓志を作るつもりだ。）」(咸豊 9 年 9 月 12 日)<sup>55</sup> とあり、同一の墓表を話題としている。また、曾国藩の文集にも「武昌張府君墓表」を載せている<sup>56</sup>。第 4 の書簡の最後には「九月十六日」（図 18：傍線筆者）

<sup>53</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「贈劉生（兆蘭）」、284 頁。劉生は劉兆蘭を指している。

<sup>54</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 16 冊、日記 1、咸豊 9 年 9 月 8 日、468 頁。

<sup>55</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 16 冊、日記 1、咸豊 9 年 9 月 12 日、469 頁。

<sup>56</sup> 曾国藩著、王禮華校点『曾国藩詩文集』卷 3「武昌張府君墓表」（上海古籍出版社、2015 年 1 月）、306～308 頁。

とあり、時間と内容から推測すると、この書簡は咸豊9年（1859）のものといえる。

第6の書簡では、以下のように述べている。

敬聞夫子大人恭承簡命、節制兩江。（図20：傍線筆者）

先生が命により、兩江を治理することを拝聴いたしました。

惟江西今属轄境、必使人心固、軍儲裕、吏治清、可与南北兩省鼎峙為三。（図20：傍線筆者）

江西は目下管轄の範囲となり、人心を安定させ、軍儲を充実させ、官吏は清廉にすることで、南北の兩省と鼎立できます。

これによって、既に曾国藩は兩江総督に就き、江西のことを述べていることが分かる。これを曾国藩の書簡（咸豊10年7月13日）に対照すると、内容は以下のように述べている。

三次惠書、（中略）闕爾不報、（中略）国藩自奉江督之命。（中略）来示従江西吏治人心著手。<sup>57</sup>

三度書簡を賜りながら、（中略）返信を欠きました。（中略）国藩は兩江の総督の命を奉じました。（中略）御書簡により、江西の官吏との人心の安定から着手しましょう。

これによって、同様のことを述べている。また、第6の書簡の最後に

---

<sup>57</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第23冊、書信2、咸豊10年7月13日、曾国藩の張裕釗宛書簡「覆張裕釗」、654～655頁。

「六月卅日到。七月十三覆。(六月三十日に到り、七月十三日に返信しました。)」(図 20：傍線筆者)とあり、曾国藩の書簡とも合致している。このように、時間と内容から推測することによって、第 6 の書簡が咸豊 10 年のものであることが明らかとなる。

陳啓壯氏は張裕釗の書簡は二王や唐人写経から出たものではないかと指摘している<sup>58</sup>。筆者の見解では、胡林翼(図 13～14)と張裕釗の書簡(図 17～20)は同じ頃に曾国藩に宛てたもので、張裕釗の書風は胡林翼に通じる風格を体得していた。

まず、文字の概形を見ると、胡林翼と同様に張裕釗の書簡はほとんどのものが向勢で、縦長なものが多い。また、張裕釗の書簡は胡林翼のように行が整っており、謹厳で荘重な雰囲気漂う。更に、張裕釗の書簡を見ると、用筆は比較的細く尖り、自然で滑らかな筆使いとなっている。線の質感なども胡林翼の書簡と同様に虞世南の唐楷(図 21)と王羲之の小楷(図 22)に忠実である様子が見られる。張裕釗の書簡は王羲之の書風を継承した側面はあるが、館閣体に則ったものであり、特に胡林翼のそれを強く基調とした可能性が考えられる。

以上検討したように、張裕釗は咸豊 9 年から胡林翼の官書局の一員となり、胡林翼・汪士鐸との交流を通じ、胡林翼の影響のもとに、謹厳な館閣体小楷の書風を伝承したことが推定できる。

## 小 結

張裕釗の早年期の書作品について、陳啓壯氏はそれが唐人写経、二王と米芾の書風から出たものらしいと指摘している。本章では、張裕釗

---

<sup>58</sup> 序章注 75、陳氏著、7・153～156 頁。

の晩清における胡林翼の幕府及び活動と曾国藩の門人として確認し、張裕釗の幕僚としての交流活動について検討した上で、上記の先行研究とは異なる見解を提起した。張裕釗は胡林翼の幕府の中で、胡林翼・汪士鐸と交流したことによって、書法も彼らの影響を受け、自身の書法の形成にも大きな影響を享受していたと考えられる。胡林翼への入幕時期について、従来張裕釗の研究では胡林翼の幕府の一員になったことは述べおらず、この点が新知見といえる。

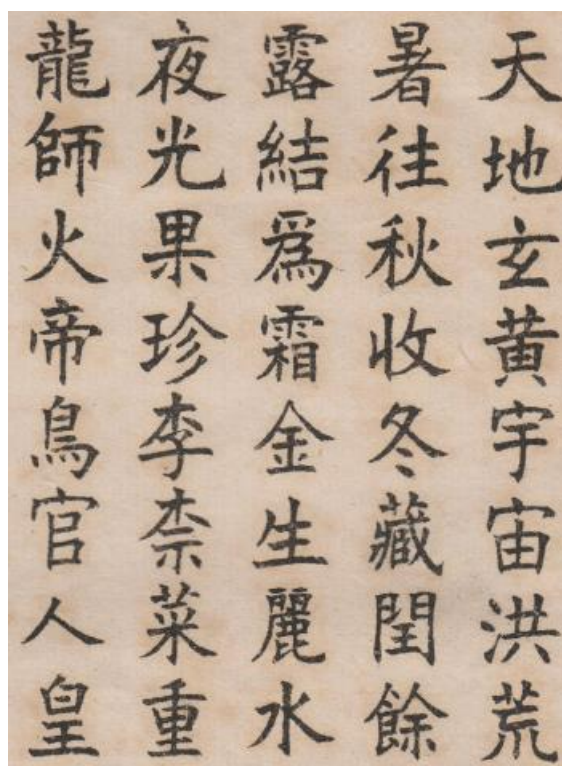
また胡林翼の幕府にあった時代の張裕釗の肉筆資料を見ると、曾国藩に宛てた書簡は唐碑・二王を主とした伝統的な学書方法を基とした風格が看取され、范志熙に宛てた書簡では王羲之・米芾の風格が看取された。ただし、これらの書風は倣書というべき、古典的書法を忠実に再現する姿勢が見られる。

このような経過を見ると、張裕釗の書法は咸豊期においては伝統的な帖学から導かれたもので、胡林翼の幕府においては館閣体のような二王と唐楷による書学観を示していた。

図 表



【図 1】張新本の題匾書作品「賓堪聚敬」



【図 2】小字作品：張裕釗「小楷千字文」



【図 3】小字作品：張裕釗「小楷千字文」(左)、同「張孝穆藏楷書千字文」(中)、同「宮島詠士藏楷書千字文」(右)



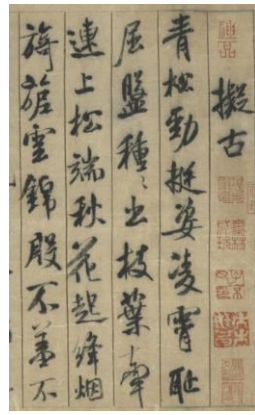
【図 4】小字作品：張裕釗の范志熙（月槎）宛書簡（第 1）（左）

【図 5】小字作品：張裕釗の范志熙（月槎）宛書簡（第 2）（右）





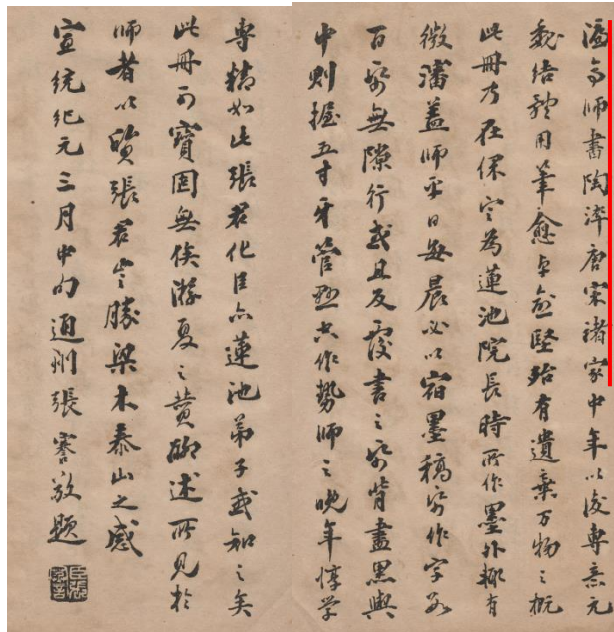
【図 6】王羲之「蘭亭序」



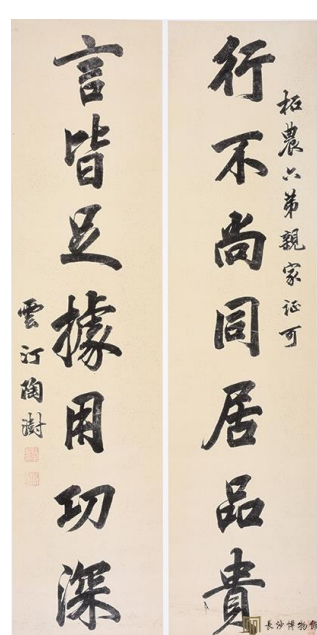
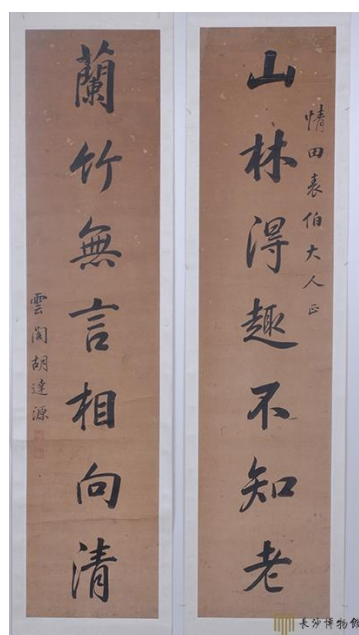
【図 7】米芾「蜀素帖」



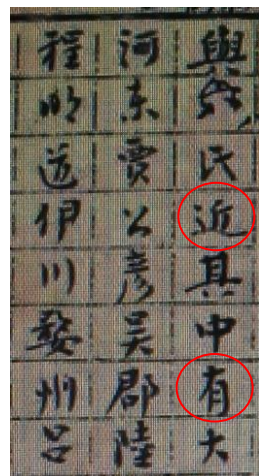
【図 8】王羲之・米芾との比較（左：張裕釗、右：王羲之・米芾）



【図 9】小字作品：張裕釗「張裕釗千字文」（張審の序文）（傍線筆者）



【图 10】胡林翼楷書楹聯 【图 11】胡達源行書楹聯 【图 12】陶澍行書楹聯



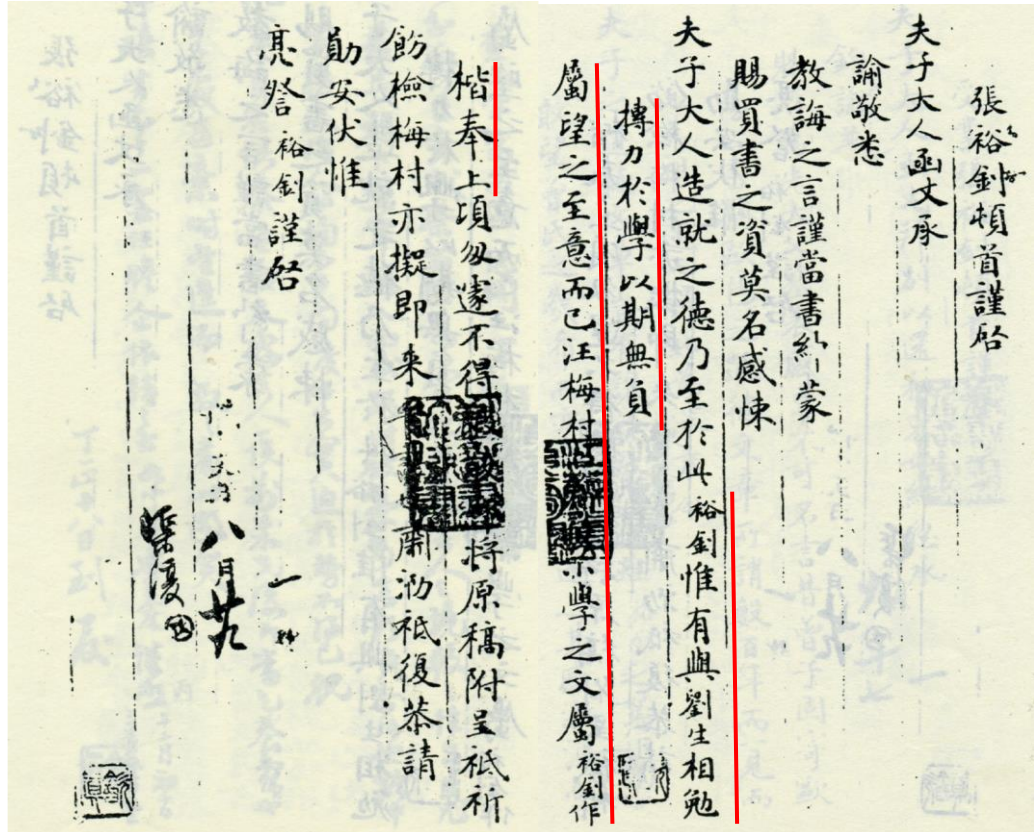
【图 13】小字作品：胡林翼の曾国藩（滌生）宛書簡（左 1）

【图 14】小字作品：胡林翼の曾国藩（滌生）宛書簡（左 2）

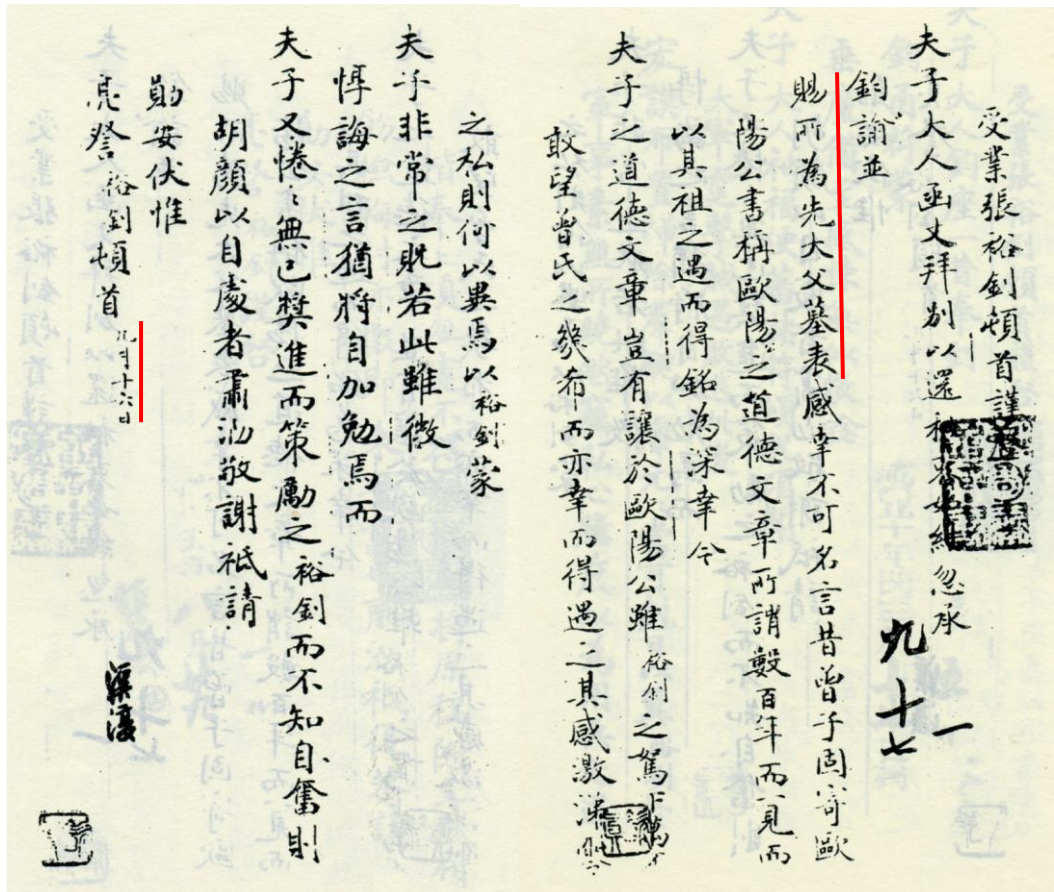
【图 15】小字作品：汪士鐸『汪子語録』（左 3）

【图 16】小字作品：汪士鐸の某氏宛書簡（左 4）





【図 17】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 3）（傍線筆者）



【図 18】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 4）（傍線筆者）

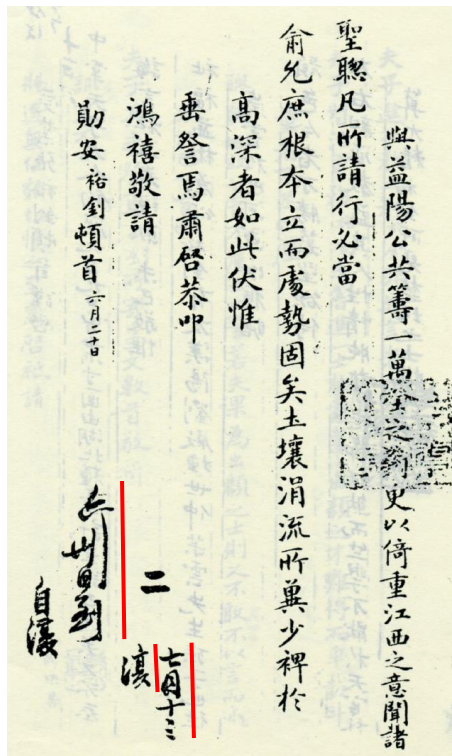
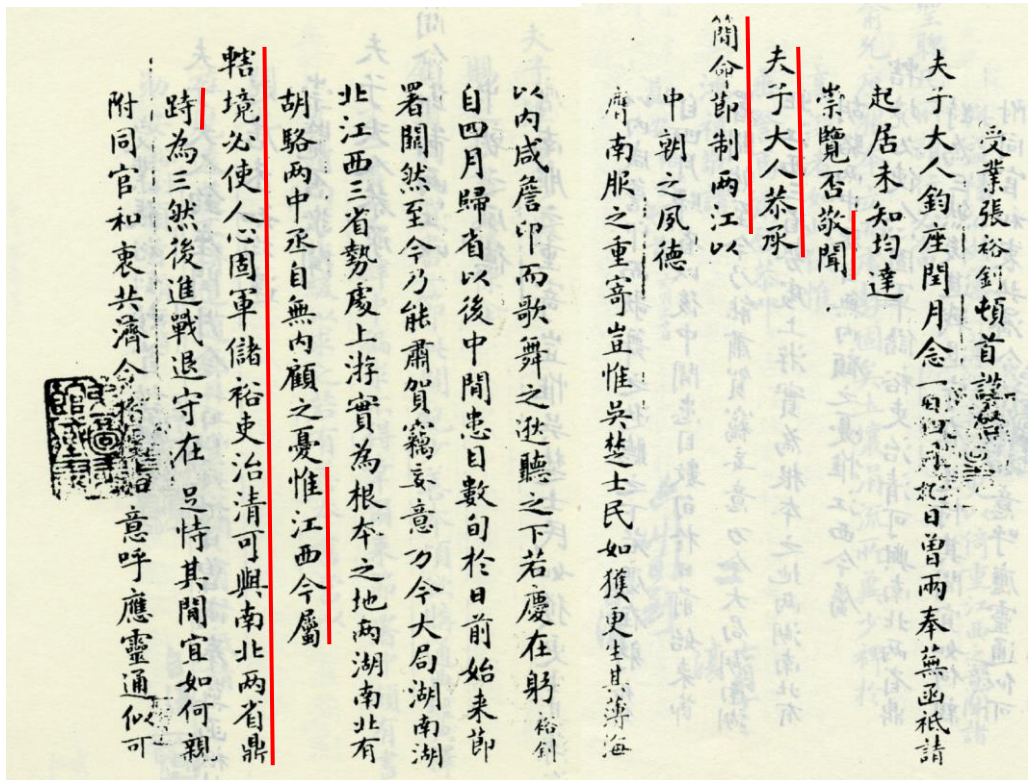


受業張裕釗頓首謹啓  
 夫子大人鈞座一昔奉到  
 鈞函荷蒙  
 垂廩備至感悚無似敬誌  
 夫子大人祉福便蕃諸符頌祝頃聞  
 大軍霆擊賊遇敗逃此後  
 宏謨布置掃除羣醜以康元當可剋日以冀裕釗於  
 軍事素無所曉然竊私心臆庶以為用兵之道  
 貴神速則慮有輕進致缺之虞務持重則又有師  
 老財匱事久變生之患必早夜積慮候釁蹈瑕先  
 事孰籌乘機迅發庶無二者之失又光武之於寇賈  
 宋高宗之於韓劉俱深得取將之術似尤為專閭者  
 之先務書生之論芻蕘之言未知萬有一當否裕釗以日  
 前來至節署仍理舊業閒居默處嘗深念學問之  
 事必根本盛大然後充實而有光輝裕釗鄉苦讀  
 書少其積之也不厚故不光是以近者

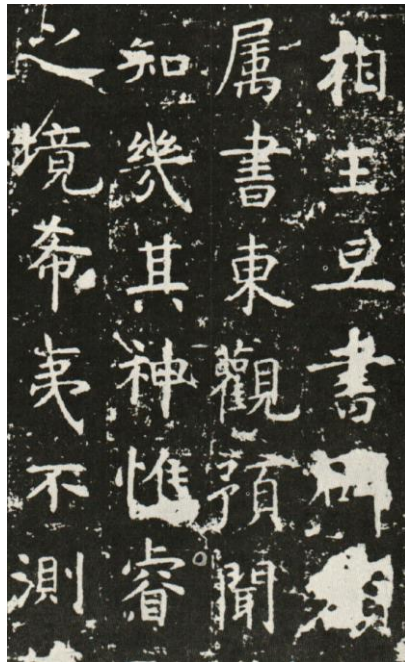
讀書作文頗少韓退  
 其膏而希其光竊  
 命寄呈近所為文四篇辭義淺薄內慙於心伏乞  
 夫子諄諭而譬曉之篇章字句逐加抉摘無少寬段庶  
 使質者有所窺尋耳援鴉堂筆記一謹附呈  
 鈞覽其中論文得失亦敬祈  
 示知此書係從 胡宮保署中借觀者它日請即  
 飭送 官保處可也又楹帖一付敬求  
 夫子軍事之暇  
 賜之法書不勝悚企  
 鈞諭詢及買書一節此間絕少善本頃欲購通典經典釋  
 文二書而市肆中徧求不得幸爾來節署中頗有書  
 可讀尚可俟緩以求之若有善本書當以  
 聞也  
 旌麾遠邁不得追隨極目江雲此悃肅啓祇請  
 勛安裕釗頓首二月三日

【図 19】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 5）（傍線筆者）





【図 20】小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 6）（傍線筆者）



【図 21】 虞世南「孔子廟堂碑」



【図 22】 王羲之「黄庭經」

## 図版典拠

### 【図 1】張新本の題匾書作品「賓堪聚敬」

張靖銘、李景燕「張裕釗曾祖題匾書法及相關文史考略」(『鄂州大学学报』第 21 卷第 4 期、2014 年 4 月)、22～24 頁。

### 【図 2】小字作品：張裕釗「小楷千字文」

張裕釗『張廉卿書千字文楷書』石印本第 9 版(文明書局、1935 年 3 月)

### 【図 3】小字作品：張裕釗「小楷千字文」、同「張孝移藏楷書千字文」、同「宮島詠士藏楷書千字文」

張裕釗「小楷千字文」：張裕釗『張廉卿書千字文楷書』石印本第 9 版(文明書局、1935 年 3 月)

張裕釗「張孝移藏楷書千字文」：張裕釗『張裕釗千字文』張以南・張審題、張孝移藏(奥付なし)

張裕釗「宮島詠士藏楷書千字文」：張裕釗『宮島詠士旧藏 張廉卿千字文』(同朋舎、1983 年 7 月)。

### 【図 4】小字作品：張裕釗の范志熙(月槎)宛書簡(第 1)

北京師範大学主編『清代名人書札』(北京師範大学出版社、2009 年 1 月)、381～384 頁。

### 【図 5】小字作品：張裕釗の范志熙(月槎)宛書簡(第 2)

北京師範大学主編『清代名人書札』(北京師範大学出版社、2009 年 1 月)、381～384 頁。

【図 6】 王羲之「蘭亭序」(馮承素行書摹蘭亭序卷)

北京故宮博物院／探索／藏品／法書

<https://www.dpm.org.cn/collection/handwriting/228279.html>

(2018年6月4日閲覧)

【図 7】 米芾「蜀素帖」

国立故宮博物院／典藏精選／宋 西元 960-1279 米芾蜀素帖：

<https://theme.npm.edu.tw/selection/Article.aspx?sNo=04001010>

(2018年6月4日閲覧)

【図 8】 王羲之・米芾との比較 (左：張裕釗、右：王羲之・米芾)

王羲之「蘭亭序」(馮承素行書摹蘭亭序卷)：

北京故宮博物院／探索／藏品／法書

<https://www.dpm.org.cn/collection/handwriting/228279.html>

(2018年6月4日閲覧)

米芾「蜀素帖」：

国立故宮博物院／典藏精選／宋 西元 960-1279 米芾蜀素帖

<https://theme.npm.edu.tw/selection/Article.aspx?sNo=04001010>

(2018年6月4日閲覧)

小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡：

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版(江蘇省立国学図書館出版、1930年、  
南京図書館蔵)

【図 9】張裕釗「張裕釗千字文」(張謇の序文)(傍線筆者)

張裕釗『張裕釗千字文』張以南・張謇題、張孝移藏(奥付なし)

【図 10】胡林翼楷書楹聯

長沙博物館：独立蒼茫—湖南近代名人書法展(2015年12月28日～2016年6月26日)

胡林翼「楷書八言聯」(湖南省博物館藏)

<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=JBFY&Guid=da52cb09-d0c4-4f2f-b0c0-723b6612bd21&rn=0.5477065787649882> (2018年6月4日閲覧)

【図 11】胡達源行書楹聯

長沙博物館：独立蒼茫—湖南近代名人書法展(2015年12月28日～2016年6月26日)

胡達源「行書七言聯」(長沙博物館藏)

<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=ZYFD&Guid=6a104cd4-f495-4363-a1ca-7f7ca7ef55e3&rn=0.8073967332384067> (2018年6月4日閲覧)

【図 12】陶澍行書楹聯

長沙博物館：独立蒼茫—湖南近代名人書法展(2015年12月28日～2016年6月26日)

陶澍「行書七言聯」(湖南省博物館藏)

<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=ZYFD&Guid=0c67592e-c070-45f1-95da-d5c853c9d>



[747&rn=0.9190047659360536](https://www.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=747&rn=0.9190047659360536) (2018年6月4日閲覧)

**【図 13】小字作品：胡林翼の曾国藩（滌生）宛書簡**

胡林翼の曾国藩宛書簡「清胡林翼致曾国藩五月十七日函」（購書 890、国立故宫博物院蔵）

[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34921](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34921) (2016年7月25日閲覧)

**【図 14】小字作品：胡林翼の曾国藩（滌生）宛書簡**

胡林翼の曾国藩宛書簡「清胡林翼致曾国藩十二月初二日夜函」（購書 897、国立故宫博物院蔵）

[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34906](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34906) (2016年7月25日閲覧)

**【図 15】小字作品：汪士鐸『汪子語録』**

汪士鐸『汪子語録』（稿本、南京図書館蔵）

**【図 16】小字作品：汪士鐸の某氏宛書簡**

陳烈主編『小莽蒼蒼齋蔵清代学者書札』（人民文学出版社、2014年9月）、706頁。

**【図 17】小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第3）**

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930年、南京図書館蔵）

【図 18】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 4）

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）

【図 19】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 5）

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）

【図 20】 小字作品：張裕釗の曾国藩宛書簡（第 6）

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）

【図 21】 虞世南「孔子廟堂碑」

中田勇次郎責任編集『書道芸術 第三卷』（中央公論社発行、昭和 46 年 7 月初版、1957 年）、24 頁。

【図 22】 王羲之「黄庭経」

上海書画出版社編『王羲之王献之小楷』（上海書画出版社出版、2002 年 8 月第 1 版第 4 刷）、10 頁。

## 第二章 同治前半期の曾国藩幕府における張裕釗書法

### 序

これまでの先行研究では、同治年間（元～13、1862～1874）に張裕釗が曾国藩の幕僚となったことが通説とされてきたが、幕僚としての活動実態については明らかではなかった。彼の書法についても、魚住和晃氏が光緒年間（元年～、1875～）以後の書風の変化について時期を区分されているが<sup>1</sup>、同治年間については言及していない。また、陳啓壯氏は、「八分考」を張裕釗が書いた前半期の「鮑照飛白書勢銘」と同年に制作された作品である可能性が高いとの意見を記している<sup>2</sup>。しかし、その書法上の由来は明らかにされていない。特に筆者が関心を寄せるのは、同治前半期（同治元～7 年前半、1862～1868）における幕府での活動を通じて、張裕釗が書法上どのような影響を受けたか、また張裕釗は新たにどのような書法を形成したのかについてである。

張裕釗の同治前半期の書作品に関しては、「鮑照飛白書勢銘」のほか、書簡において張裕釗が曾国藩・汪士鐸・蔣光燾(1825～1892)・徐宗亮(1828～1904)に宛てた書簡が注目される。加えて、小楷では浙江図書館蔵「劉府君墓誌銘」が残っている。書簡については先行研究が備わり、陳啓壯氏は、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡は唐人写経、二王から出たものと指

---

<sup>1</sup> 序章注 61、魚住氏著、第二章 張裕釗における書法形成、三 張裕釗書法の特質と形成過程、150～168 頁。

<sup>2</sup> 序章注 75、陳氏著、理論篇「思艱図易・悟道尋真—張裕釗書法幾幅代表作品書風断代之考証」三、張裕釗書《八分考》作品書写年代考証、137～141 頁。

摘されている<sup>3</sup>。

そこで本章では、張裕釗が同治前半期において、曾国藩の幕府で張裕釗と交わった文人との出会いを取り上げる。幕府での游幕活動においては何璟（字は小宋、1817～1888）と交友する機会があったことが推測され、その中で張裕釗は何璟が所蔵する莫友芝（字は子偲、1811～1871）の書作を見る機会を得、その感銘から張裕釗は一念発起し、従来の書法を改めて、新たな書法を打ち出したことが多分に考えられる。また、小楷では、曾国藩と莫友芝の影響を受けたという仮説をもとに、肉筆資料の書風比較を試み、これらの書法の形成過程をここに明らかにしていく。

## 第一節 曾国藩幕府における活動

### 一、張裕釗の游幕活動

張裕釗は同治前半期にかけて、曾国藩の幕府において游幕の立場にあつたと考えられる。劉桂生氏によれば、游幕とは総督・巡撫などの幕府の中で「客卿」（他国からきて、卿相の位にある者）という立場にあると述べている<sup>4</sup>。また、尚小明氏は道光以降、游幕学者の学術活動が古籍の整理と保護や各省に官書局を設立して書籍刊刻に従事することを述べている。<sup>5</sup>

<sup>3</sup> 序章注 75、陳氏著、7 頁。

<sup>4</sup> 序章注 5、尚氏著、劉氏序「序三」、13 頁に「游幕、基本上不是在州县地方官的幕府中當“師爺”，而是在總督、巡撫一類方面大員的幕府中、以“客卿”身分協助“主持風化”——實際上是陪同長官談經論史、盱衡時局、撰文吟詩、著書立說。」とある。

<sup>5</sup> 序章注 5、尚氏著、「第一章：清代学人游幕的發展演变（道光初迄宣統末的游幕）」、47～48 頁に「道光後游幕学人的学術活動、重点在三個方面。（中略）二是古籍的整理保護。咸同年間、江南的学校、書院、藏書樓等文化設施、遭到嚴重破壞。（中略）太平天国被鎮壓後、清政府為「重興文化」、相繼在各省設立官書局、刊刻書籍。主持各地官書局的官員如曾国藩、丁日昌、馬新貽、張之洞等紛紛聘請学者名流入局校刻古籍、從而使官書局成為晚清游幕学人的重要集中地。」とある。

同治前半期に張裕釗が湖北に滞在した理由に関しては、蔣光燾の記録が残っている。蔣光燾は浙江海寧硤石の出身で蔵書家である。蔣光燾と張裕釗の出会いについては、金暁東氏によれば、咸豊 11 年から同治 3 年（1861～1864）にかけて、蔣光燾は太平天国の乱から逃避するため、湖北武昌に行ったとされる。蔣光燾は同治 2 年（1863）に張裕釗と知り合って、交友を始めたとされる<sup>6</sup>。蔣光燾の「呈錢朝議書」に以下のようにある。

廉卿厚於光燾、多所教益、惟身弱母衰、無日不思近於鄉粉、遠於城市者而居之、以自適其康衢擊壤之天。<sup>7</sup>

廉卿は蔣光燾の厚遇のもと、多くの指導を受けた。ただ体が弱く母親も衰弱していった。日々故郷を思い、都を離れて悠々自適し、庶民とともに太平の生活を楽しむことを願った。

これによって、張廉卿（張裕釗の字）がなぜ湖北の故郷に帰ったのかが分かる。一方、曾国藩は、幕府の頭目として、幕僚に対しどのような考えのもとに対応していたのか。曾国藩の家書に以下のような考えが見える。

衛身莫大於謀食。農工商、勞力以求食者也、士勞心以求食者也。（道光 22 年 9 月 18 日）<sup>8</sup>

体を守るには、食べ物が重要である。農業・工業・商業は体力で食

<sup>6</sup> 金暁東『衍芬草堂友朋書札及蔵書研究』（復旦大学中国古代文学研究中心博士論文、2010 年）、28～29 頁。

<sup>7</sup> 蔣光燾「呈錢朝議書」『敬齋雜著』。前掲注 6、金氏著、241 頁。

<sup>8</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 20 冊、家書 1、「致澄弟温弟沅弟季弟」曾国藩の澄弟温弟沅弟季弟宛書簡、道光 22 年 9 月 18 日、31～32 頁。

物を求め、士人は頭を働かせて食物を求めよ。(道光 22 年 9 月 18 日)

また、甲申(光緒 10 年、1884)に書かれた薛福成(1838~1894)の「叙曾文正公幕府賓僚」には、以下のようにある。

而幕府賓僚、尤極一時之盛云、竊計公督師開府、前後二十年。(中略)凡以宿学客戎幕、従容諷議、往来不常、或招致書局、並不責以公事者、古文則(中略)候選内閣中書武昌張裕釗廉卿。(中略)右二十六人、吳敏樹、羅汝懷、吳嘉賓名輩最先。敏樹与張裕釗之文、所詣皆精。<sup>9</sup>

幕府の賓僚は一時的に盛んであった。曾国藩が督師として幕府を開いて二十年になる。(中略)曾国藩より信頼を受け、尊敬されている学者を幕府に留めて府内を戒め、諷諫と議論にあたらせた。また、往来を常にせず、書局で招致し、公務に従事しない者で、古文については(中略)内閣中書の武昌の張裕釗廉卿を選んだ。(中略)右の二十六人、吳敏樹、羅汝懷、吳嘉賓を筆頭として、敏樹と張裕釗の文はともに優れていた。

これによって、張裕釗が曾国藩の信任を得、高弟としての位置を得ていく経過が分かる。

それでは、張裕釗の同治元年にいるの生活の実態はどのようなものであったのであろうか。孫瑩瑩氏によれば、同治元年 6 月 17 日曾国藩の湖

---

<sup>9</sup> 薛福成「叙曾文正公幕府賓僚」、(『庸庵文編』、卷 4)、17~19 頁。(文海出版社、沈雲龍主編：近代中国史料叢刊第 95 輯、379~383 頁)。

北巡撫嚴樹森（?～1876）宛書簡において、以下のようにある。

張廉卿前客文忠署内、前有函来謀一書院館、今年已無及矣。求鼎力薦一明年較優之席、感同身受。<sup>10</sup>

張廉卿（張裕釗）は文忠（胡林翼）の幕府に滞留して、先日私に書簡を送って来ました。かねて、書院の仕事に希望がありましたが、今年はそれに及びませんでした。来年は優れた席が得られるよう、どうぞご理解いただきたいです。

これによって、張裕釗が書院の主講として独立したいという強い希望を有していたことが分かる。

以上のように、同治前半期、張裕釗は湖北に居る母親の世話もあり、曾国藩の幕府の一員としてその配下にあったが、安徽の幕府に赴かず、游幕の立場で湖北巡撫嚴樹森の幕府に留まったのである。

## 二、勺庭書院の勤務時期

同治2年（1863）に入り、張裕釗は湖北勺庭書院の山長（今大学の学長）を務めた。張裕釗が勺庭書院に務めた時期に関しては従来定説がない。これらを整理すると、(1)咸豊2年（1852）、(2)咸豊3年（1853）、(3)同治3年（1864）の説となり、その中で咸豊2年説が最も多い。

(1) 咸豊2年説には、聞鈞天氏<sup>11</sup>・葉賢恩氏<sup>12</sup>・丁有国氏<sup>13</sup>・陳啓壯氏<sup>14</sup>の

<sup>10</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第25冊、書信4「加嚴樹森片」曾国藩の嚴樹森宛書簡、同治元年6月17日、388頁。

<sup>11</sup> 聞鈞天氏の根拠不明について、魚住和晃氏も「聞鈞天は『張裕釗年譜及書文探討』（湖北省美術出版社、1988年）において、勺庭書院の就任を直ちに帰鄂の咸豊二年に結びつけているが、その根拠は不明である。」と述べている。序章注82、魚住氏著、第一章／張廉卿論—その人間

説がある。彼らの説によれば、咸豊2年の冬に張裕釗は北京を離れ、即刻に故郷の湖北鄂州に帰ったとされる。その後、湖北按察使江忠源（1812～1854）から勺庭書院の主講として招聘を受けることになったと述べている。また、張裕釗は咸豊3年の春まで、書院の主講として勤めていたと述べている。一方、太平天国の乱によって書院が破壊され、張裕釗は故郷に帰ったと述べているが、真実であるという確証はない。

因みに書院を破壊された時期については、汪士鐸『梅村賸稿』「勺庭」に以下のようにある。

聞其書院無膏火也、故清軒不能居。（丁亥）<sup>15</sup>

書院には給料がないと聞き、そのため清軒は滞在することはできないかと思う。（丁亥）

丁亥は光緒13年（1887）であり、清軒は萬斛泉（1808～1904）の字を指しており、興国州の出身（今湖北省黄石市陽新県）である。光緒13年に萬斛泉は勺庭書院の主講として滞在していたが、汪士鐸は書院の状況を理解し萬斛泉に助言していた。つまり、光緒13年のこの時点で勺庭書院はまだ経営していたことが分かる。よって、咸豊2年から咸豊3年にかけて、太平天国の乱によって、書院が破壊されたとする説は再考する必要があるだろう。

(2) 咸豊3年説には、王達敏氏<sup>16</sup>と孫瑩瑩氏<sup>17</sup>の説があり、孫瑩瑩氏

---

性と書法、69頁の注17にある。序章注90、聞氏著、一：家世及年譜、8～9頁。

<sup>12</sup> 序章注92、葉氏著、初耕書院、32～39頁。附録二：張裕釗年譜、306頁。

<sup>13</sup> 序章注78、丁氏著、丁有国『張裕釗詩文《濂亭文集》注釈』、武昌張廉卿先生年譜、385頁。

<sup>14</sup> 序章注75、陳氏著、陳啓壯『碑骨帖姿—張裕釗書道研究』、附録：張裕釗年譜、345頁。

<sup>15</sup> 第一章注39、汪士鐸著、丙二十汪賸下「勺庭」、20頁。



は三つの根拠を挙げている。一つ目の根拠は、張裕釗の「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李剛介公殉難碑記」である。そこには、以下のようにある。

咸豊元年調孝感、明年、調鍾祥。(中略)明年、賊大掠東走、省城復。  
(中略)是歳、裕釗以新寧江忠烈公聘、至鄂城。<sup>16</sup>

咸豊元年、孝感が派遣され、翌年、鍾祥が派遣された。(中略)翌年、賊が恣意的に東へ掠奪し、省城(武昌)は回復した。(中略)この年、張裕釗は新寧の江忠烈公の招請に応じ、鄂城(武昌)へ行った。

孫瑩瑩氏は再来年となる咸豊3年に江忠烈公(江忠源)の招請に応じ、鄂城(武昌)へ行ったことを言及しているが、しかし原文には勺庭書院の主講としての招聘を述べていない。

二つ目の根拠は張裕釗の息子である張後沆・張後澹の「哀啓」を引用している。内容によれば、以下のようにある。

自壬子出都後、即絶意仕進。初主武昌勺庭書院。<sup>17</sup>

壬子に都を離れ、仕進の道を断念した。武昌の勺庭書院に主講する。

このように、壬子(咸豊2年、1852)に張裕釗が都を離れたことが分かるが、文の後ろに書いている勺庭書院に務めた期間については説明し

---

<sup>16</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、前言／(一)見知曾氏、5頁にある。附録九／張裕釗年譜、600頁に「應湖北按察使江忠源之聘、主武昌勺庭書院。」とある。

<sup>17</sup> 序章注 98、孫氏撰、20頁に「清文宗咸豊3年癸丑(1853)、31歳。是年、湖北按察使江忠源承曾国藩請託、聘裕釗主講武昌勺庭書院。」とある。

<sup>18</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李剛介公殉難碑記」、101～102頁。

<sup>19</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、附録七：張裕釗評伝資料輯存、551頁。

ていない。

三つ目の根拠として、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡が挙げられる。内容には以下のようにある。

裕釗往歲承夫子函属鄂中。當路俾主講勺庭書院延及今、茲此間已勢不可留。遂於日前辞退、而明年尚無託足。(図1：傍線筆者)

裕釗は往年に夫子の書簡により鄂州に務めました。今まで勺庭書院を主講してきましたが、この間の事態によって滞在することはできず、先日、辞めましたが、来年の職務はまだ決めていません。

書簡の最後に、曾国藩は同治3年(1864)の紀年を示している。孫氏はこの書簡の制作年代を考察せずに、文中の「往歲」が咸豊3年であると結び付けているが、その根拠は不足であろうと考える。

これについては、張裕釗の「送梅中丞序」によれば、「同治十年曾文正公自直隸復督兩江、招裕釗主講習江寧。(同治10年曾文正公は直隸から兩江に復職し、張裕釗を招き江寧の主講とした。)」<sup>20</sup>とあり、同治10年(1871)、張裕釗は曾文正公(曾国藩)の招請により、江寧(南京)の鳳池書院を主講したことが分かる。また、張後沆・張後澹の「哀啓」において、武昌の勺庭書院に主講の文に続いて「金陵克復、文正聘主江寧鳳池書院十有余年。(金陵を克復し、文正の招聘より江寧の鳳池書院で十年余り。)」<sup>21</sup>とあり、それらを勘案すると、張裕釗が武昌の勺庭書院の主講を務めていた時期は咸豊2年から同治10年にかけて(1852~1871)と考えられ、孫氏の説もより深く考察する必要がある。

<sup>20</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送梅中丞序」、30頁。

<sup>21</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「哀啓」、附録七：張裕釗評伝資料輯存、551頁。

同治3年説の魚住和晃氏によれば、「同治三年（一八六四）、清朝を根底から揺るがせた太平天国の乱が十五年ぶりに平定されたあと、裕釗は再び朝廷に復歸することを望まず、武昌の勺庭書院の主講に着任した。」「それまで、彼は武昌の勺庭書院なる小さな書院の主講をつとめ、（以下略）。」<sup>22</sup>とあり、魚住氏もその根拠を説明していない。

以上の各説は十分な根拠に基づくものではなく、筆者は同治2年の春から同治3年の冬にかけて張裕釗が湖北勺庭書院に務めていたと考える。その根拠は、張裕釗の門人查燕緒（1843～1917）の文章と張裕釗の曾国藩宛書簡によって証明できる。

查燕緒の「張廉卿先生文集後跋」では、以下のように述べている。

同治癸亥之春、燕緒客鄂垣、与蔣子佐堯同受業先生之門。<sup>23</sup>

同治癸亥の春、查燕緒は客として鄂垣に参り、蔣光燾の子である蔣佐堯と張裕釗の門人になった。

よって、同治癸亥（2年、1863）の春、查燕緒と蔣佐堯（1847～1906）は張裕釗の門人になったことが分かる。また、查燕緒の「賓日蔣君家伝」（賓日は蔣佐堯の字である）によれば、以下のようにある。

及癸亥春而仍還武昌、乃令余与君至勺庭書院、同従学於武昌張廉卿裕釗之門。<sup>24</sup>

癸亥の春、また武昌に戻ってから、私と君（蔣）を勺庭書院に行か

<sup>22</sup> 序章注 82、魚住氏著、第一章／張廉卿論—その人間性と書法、12・20頁。

<sup>23</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、查燕緒「張廉卿先生文集後跋」。附録七：張裕釗評伝資料輯存、576頁。

<sup>24</sup> 查燕緒「賓日蔣君家伝」、佚名輯『蔣氏家伝合鈔』不分卷、抄本。

せた。共に武昌の張廉卿裕釗の門へ従学した。

このように、同治2年の春に査燕緒と蔣佐堯は勺庭書院に参り、張裕釗の門下生になったことが分かる。

更に、同治3年11月朔日、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡には以下のようにある。

欲懇夫子寓書杜小舫觀察、於漢口鹹鹺局位置一地。(図2:傍線筆者)  
先生にお願いして、杜小舫觀察(1815~1881、字は小舫、浙江秀水の出身、曾国藩の幕僚)に書簡を書いて漢口鹹鹺局の地位を残して  
くださるようお願いいたします。

これは、張裕釗が曾国藩に職務を紹介してもらいたいとの強い希望を有していたことを示したものである。その後の同治3年末から4年春(1864~1865)にかけて、曾国藩も漢口鹹鹺局を話題にとりあげている。同治3年12月10日曾国藩が張裕釗に宛てた書簡には「惟湖北書院既無可謀、漢口鹺局亦未便推薦。(ただ湖北書院の職務はなくなり、漢口の鹹鹺局の推薦が困難です。)」<sup>25</sup>とあり、同治3年11月の時点で、勺庭書院の主講を辞め、次の職務を考えていることが分かる。

以上により、張裕釗は曾国藩の推薦に従い、同治2年には湖北勺庭書院の主講を務めていたことが分かる。また、従来定説がない主講の任職期間については、同治2年から3年にかけてだったことを明らかにした。

---

<sup>25</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第28冊、書信7、「復張裕釗」曾国藩の張裕釗宛書簡、同治3年12月10日、271頁。

## 第二節 莫友芝・何璟との交流

### 一、莫友芝との交流

#### 1. 咸豊 11 年及び同治 7 年の交流

咸豊 11 年（1861）、同治 7 年（1868）に張裕釗は曾国藩の幕府の中で莫友芝と交友を重ねた記録が残っている。莫友芝は貴州省独山の出身であり、中国晩清の詩人、また書道家である。莫友芝の『邵亭日記』によると、莫友芝は咸豊 11 年 1 月 20 日に胡林翼の幕府に行き、2 月 29 日に胡林翼は莫友芝と面接した。これによって、莫友芝は『読史兵略』の校正（3 月 16 日から 5 月 29 日にかけて）に従事することになり、胡林翼の正式な幕僚となった。また、6 月 4 日に汪士鐸と知り合い、6 月 22 日は閻敬銘（字は丹初、1817～1892）のもとで張裕釗とも知り合った。<sup>26</sup>

曾国藩の日記によると、曾国藩と莫友芝の最初の出会いは道光 27 年（1847）、京城（北京）の書店で偶然にめぐり会ったものである。その後、15 年ぶりとなる咸豊 11 年の 7 月 3 日に、再会を果たすことになる<sup>27</sup>。また、同年 8 月 26 日に胡林翼が他界し、9 月に莫友芝は改めて曾国藩の幕僚になった。莫友芝の日記によると、11 月に張裕釗が曾国藩の幕府において、莫友芝と対面した記録が残っている<sup>28</sup>。

<sup>26</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理、咸豊 11 年 1 月 20 日の条に、「入城謁胡宮保林翼。」（6 頁）とある。同年 2 月 29 日の条に、「宮保属往鄂城、為校新纂『兵略』。」（17 頁）とある。同年 6 月 4 日の条に、「午識汪梅岑孝廉士鐸。」（36 頁）とある。同年 6 月 22 日の条に、「午晤張廉卿於丹初許。」（39 頁）とある。

<sup>27</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 17 冊、日記 2、咸豊 11 年 7 月 3 日、181 頁に「子偲名友芝、貴州独山人、道光二十七年在京城相遇於書肆。旋与劉茶雲相友善。自此一別十五年、中間通書問一、二次而已。」とある。

<sup>28</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理、62～65 頁。交友の記載は咸豊 11 年 11 月 4 日・7 日・9 日・11 日・18 日・19 日・22 日・23 日とある。

以上の考証により、張裕釗は同治前半期には曾国藩の幕府の一員でありながら、幕府がある安徽には赴かず、游幕の立場として、湖北に滞在したことが明らかであるが、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡（同治7年閏4月24日）によると、以下のように述べている。

自皖江拜別、不獲見者、於今八年矣。（中略）裕釗今歲初擬趨赴金陵祇侍鼂昔、旋以何小宋護院招入崇文書局、令司校讎、遂復中止。然懷思慕望之隱、寤寐反側、不可弭忘。決計夏、秋二時、終當買舟東下、走謁程門、匪獨希教誨之益。但獲一望見顔色、用紓數年恋恋之思、其為喜幸也多矣。（中略）閏月廿四日。（図3：傍線筆者）

安徽の別れから、既に八年が経ちました。（中略）今年の初、私は旦夕に師の傍に仕えるため金陵に行く予定です。何璟の招請により崇文書局の校讎を担当しましたが、やがて中止になりました。師の溢れんばかりの思いに、寝ても、覚めても、師のことを忘れず、夏または秋に決して、船を買い東へ向い、師の処に参り、ご指導を賜ることを希望しています。師にお目に掛かり、数年の思いを解消できれば、幸いです。（中略）閏月廿四日。

これによって、張裕釗は曾国藩と皖江（安徽省安慶市）で別れ、咸豊11年から8年ぶりとなる同治7年に再会を果たそうとしていたことの喜びを記している。張裕釗は師である曾国藩の思いに応じ、同治7年の夏に南京の幕府に行くことになったことが分かる。ところで、書簡には「閏月廿四日」とあり、清代同治年間にあつては同治7年4月であることが分かる。

また、同治7年6月18日に曾国藩が何璟に宛てた書簡の内容は、以下

のとおりである。

敝門人張裕釗廉卿、睽隔八年、現聞仮館尊処、請囑其買舟東下、来此一叙、不久可返鄂也。<sup>29</sup>

私の門人である張裕釗は、八年ほど会っていないですが、今はあなたの処に寓居していることを聞きました。張裕釗に委嘱して、船を買い東へ私の処に来るよう、お願いしたいです。間もなく鄂州（湖北）に戻させるようにします。

このように、曾国藩は張裕釗が何璟の処に居ることを知り、何璟に声を掛け、張裕釗が曾国藩の処へ訪ねるよう便宜を図っている。

莫友芝との交友については前掲の日記に、同治7年8月・9月に記載されている<sup>30</sup>。一方、同治7年11月4日に曾国藩は直隸総督に就任し、張釗氏によれば、張裕釗は曾国藩の幕僚として莫友芝に同行し、船に同乗したことが分かる<sup>31</sup>。

莫友芝は張裕釗と詩文の交流も重ねており、莫友芝の『邵亭詩鈔』には「同治戊辰冬十一月、武昌小弟張裕釗拝読。（同治戊辰冬十一月に武昌小弟張裕釗が拝読した。）」という、同治戊辰（7年）の記録も残っている（図4：傍線筆者）。加えて、貴州省図書館に所蔵されている莫友芝『邵亭遺詩』の「邵亭遺詩、武昌張裕釗題簽」（図5）の題名は張裕釗が揮毫しており、これによって、莫友芝と張裕釗が曾幕の同僚として親密な間

<sup>29</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第30冊、書信9、「復何璟」曾国藩の何璟宛書簡、同治7年6月18日、429頁。

<sup>30</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理。同治7年8月23日の条に「張廉卿裕釗相訪、乃新自武昌書局来、持何小宋中丞信。」（258頁）とある。同治7年8月24日の条に「食後新拓梁碑四種、唐碑一種呈様於湘郷公、遂答廉卿。」（258頁）とある。同治7年9月13日の条に「廉卿、存之先後至、共談半時許。」（260頁）とある。

<sup>31</sup> 序章注42、莫友芝著、張氏撰、同治7年11月4日、486頁に「莫友芝・張裕釗皆随之送行、直至宝応県始分手。」とある。

柄であったことが窺える。

以上により、咸豊 11 年前半期にかけて、莫友芝は胡林翼に誘われ『読史兵略』の校正に従事し、胡林翼の幕僚となり、その後に張裕釗と知り合ったことが分かる。同年 8 月 26 日に胡林翼が他界した後、9 月に莫友芝は曾国藩の幕僚となり、11 月には張裕釗が曾国藩の幕府において、莫友芝との交友したという記載が残っている。また、同治年間に入り、游幕として湖北に滞在していた張裕釗は、咸豊 11 年から 8 年ぶりとなる同治 7 年に莫友芝と再会しており、その間も交友が続いたのである。

## 2. 莫友芝の曾国藩幕府における位置とその書学評価

尚小明氏によると、莫友芝は道光 18 年から 21 年（1838～1841）にかけて、遵義知府である平翰・黄樂の招請を受けた。また、咸豊 10 年から 11 年（1860～1861）秋にかけて、湖北巡撫である胡林翼の幕府に入り、更に、咸豊 11 年秋から同治 6 年（1861～1867）にかけて、両江総督である曾国藩の幕僚となった。その後、同治 7 年から 8 年（1868～1869）にかけて、江蘇巡撫である丁日昌の幕府に入った<sup>32</sup>。その中で、最も長い時間を過ごしたのは曾国藩の幕府だった。

莫友芝と曾国藩との出会い、また曾国藩の幕僚になった経緯については、曾国藩の詩文・家書・日記、莫友芝の書簡・日記などの記録から窺える。曾国藩と莫友芝との出会いは曾国藩「送莫友芝」詩<sup>33</sup>に見られ、また、曾国藩の家書によれば以下のようにある。

<sup>32</sup> 尚小明『清代士人游幕表』（中華書局、2005 年）、190 頁。

<sup>33</sup> 第一章注 56、曾国藩著、王氏校点、詩集卷 3、「送莫友芝」、79 頁。



字諭紀沢児：(中略) 莫君名友芝、字子偲、号邵亭、貴州辛卯举人、  
学問淹雅。丁未年在琉璃廠与余相見、心敬其人。七月来營、復得  
談。(咸豐 11 年 9 月 24 日)<sup>34</sup>

息子の曾紀沢へ：(中略) 莫君の名前は友芝、字は子偲、号は邵亭、  
貴州の辛卯(1831) 举人、学問は淹雅である。丁未年に北京の琉璃  
廠で私と出会い、心から尊敬している。7 月に莫友芝は私の幕府に  
参り、また自在に話せるようになった。(咸豐 11 年 9 月 24 日)

曾国藩と莫友芝の出会いは、既述したように、丁未年(道光 27 年、1847)  
であり、咸豐 11 年 7 月に莫友芝が曾国藩の幕府に参ったことが分かる。  
そして 15 年ぶりとなる咸豐 11 年の 7 月 3 日に再会し、莫友芝は 9 月に  
曾国藩の幕僚になっている。曾国藩の日記によれば、以下のようになる。

子偲名友芝、(中略) 自此一別十五年、中間通書問一二次而已。(咸  
豐 11 年 7 月 3 日)<sup>35</sup>

子偲、名は友芝、(中略) その後別れて、十五年を経過しています。  
その間、お互いに書簡を書いたのは一二回のみです。(咸豐 11 年 7  
月 3 日)

更に莫友芝の日記の記載によると、咸豐 11 年から莫友芝は安徽の安慶  
や南京で曾国藩の幕府に滞在したことが分かる<sup>36</sup>。加えて、莫友芝が鄒

<sup>34</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 20 冊、家書 1、「諭紀沢」曾国藩の曾紀沢宛書簡、咸豐 11 年 9 月 24 日、705 頁。

<sup>35</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 17 冊、日記 2、咸豐 11 年 7 月 3 日、181 頁。

<sup>36</sup> 序章注 42、莫友芝著、張氏撰。曾国藩与莫友芝の交流記載は以下の例を挙げられる。同治元年正月 10 日の条に「与曾国藩論金石。」(262 頁)とある。同治 2 年 5 月 7 日の条に、「謁曾国藩、交呈『唐写本説文木部』」(310 頁)とある。同治 3 年 8 月 10 日の条に、「曾国藩写『題莫子偲仿唐写本説文木部箋異』詩贈友芝。友芝有詩答和。『曾国藩日記』：早飯後清理文件。旋写昨詩送莫子偲。)」(330 頁)とある。

漢勛（1805～1854）に宛てた書簡、『邵亭詩鈔』には、それぞれ以下のようにある。

曾滌生侍郎、友芝春中入京晤於書肆中。其温雅無京官官氣、粗粗一談、遂慢謂可揀。（道光 27 年 9 月 21 日）<sup>37</sup>

曾滌生侍郎、友芝は春に北京に上り書肆で出会いました。彼は優しく、北京の官僚のような気質がありません。粗々談論し、ゆっくりですが勉強になりました。」（道光 27 年 9 月 21 日）

春官報罷、国子監学正劉棻雲招同曾滌生学士小飲虎坊寓宅、歌以為別。<sup>38</sup>

春に試験に落ちた。国子監学正である劉棻雲（伝瑩）は曾滌生学士（国藩）を招き、虎坊の寓宅で酒宴を設け、別れに際し歌を歌った。

このように、両者がその際の出会う様子を明らかにしている。また、曾国藩の四大門徒の一人である黎庶昌（1837～1897）の「莫徵君別伝」でもこの内容を以下のように述べている。

乙未会試、公車報罷、与曾文正公国藩邂逅琉璃廠書肆。始未相知也、偶举論漢学門戸、文正大驚、叩姓名。曰：「黔中固有此宿学耶！」即過語国子監学正劉棻雲伝瑩。為置酒虎坊橋、造榻訂交而去。<sup>39</sup>

乙未の会試で落ちた際に、曾国藩と琉璃廠の書肆で出会った。まだ

<sup>37</sup> 序章注 42、莫友芝著、張氏撰、莫友芝の鄒漢勛宛書簡。南京図書館蔵『邵亭詩文稿』（手稿）、100 頁。

<sup>38</sup> 莫友芝著、張劍・陶文鵬・梁光華編輯校点『莫友芝詩文集』、卷 4、邵亭詩鈔、209 頁。

<sup>39</sup> 前掲注 38、莫友芝著、張氏・陶氏・梁氏編輯校点、黎庶昌「莫徵君別伝」（『統修四庫全書・拙尊園叢稿』卷 4）。附録一：晚清、民国時期莫友芝研究資料、1113 頁。

相互に知り合わない状況で、偶たま漢学を論じ、曾国藩は驚いて彼の名前を聞いた。曰く、「貴州にはこんな宿学がいるものだ！」話が終わった後、国子監学正である劉棻雲伝瑩は虎坊橋で酒宴を開き、席を設け、交誼を結んで別れた。

これによって、丁未年（道光 27 年、1847）に莫友芝が曾国藩と出会った際に、曾国藩の友人である劉棻雲が宴会を開いたことが分かる。

ちなみに、曾国藩幕府において長い期間を過ごしていた莫友芝は、幕府においてどのような位置を占めていたのであろうか。まず、莫友芝自身が幕府においてどのような考え方をしていたのか明らかにする。莫友芝の弟である莫祥芝の「清授文林郎先兄邵亭先生行述」には以下のように述べている。

自白曰：幕府人才鱗萃、自愧迂疏、不克效万一之用、苟得依公為閑客、免飢寒、於願足矣。<sup>40</sup>

莫友芝が述べるには、幕府の才士が多数が集まり、恥ずかしいのだが、私は力不足で、何か役に立つ事はできない。曾国藩のおかげで、閑客でありながら飢えや寒さから逃れることができ、すっかり満足している。

これによって、莫友芝は幕府において謙虚な態度であったことが窺える。また、張裕釗の「莫子偲墓誌銘」・汪士鐸の「四君子詠」には、莫友芝の職務について述べている。

---

<sup>40</sup> 序章注 42、莫友芝著、張氏撰、附録四：莫氏家族伝記資料、莫祥芝「清授文林郎先兄邵亭先生行述」、625 頁。

（莫友芝）以咸豊八年截取知県、且選官、故君意所不樂、棄去不復顧。<sup>41</sup>

（莫友芝は）咸豊八年に知県に任命され、かつ官僚に選ばれたが、もとより彼の思いではなく、辞めてしまい、また顧みることはなかった。

四君子者、監利王比部子寿（柏心）、武昌張孝廉廉卿（裕釗）、独山莫明府子偲（友芝）、石埭陳刺史虎臣（艾）也。（中略）莫陳雖膺保薦、而不樂仕進。<sup>42</sup>

四君子は、監利の王比部子寿（柏心）、武昌の張孝廉廉卿（裕釗）、独山の莫明府子偲（友芝）、石埭の陳刺史虎臣（艾）である。（中略）莫友芝・陳艾は官僚に推薦されても、仕官を喜ばなかった。

これは、同時期の文人である張裕釗・汪士鐸は莫友芝が官職に就くことには興味がなかった様子を示したものである。

それから、曾国藩幕府においてどのような位置づけであったかについては、『清稗類鈔』では、以下のようについて。

咸同間、曾文正公国藩督師剿粵寇、幕府人才一時称盛。於軍旅吏治外、別有二派：曰道学、曰名士。（中略）名士派：為莫友芝、張裕釗、李鴻裔諸人。<sup>43</sup>

咸豊・同治年間、曾国藩が督師として粵の反乱を追討していた際、

<sup>41</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「莫子偲墓誌銘」、141～144 頁。

<sup>42</sup> 第一章注 39、汪士鐸著、「四君子詠」、丙 11 汪牘下、53～54 頁。

<sup>43</sup> 徐珂『清稗類鈔』に収録され張鳴珂『寒松閣談芸瑣録』卷 5（中華書局、1986）、5 頁。

幕府の人才は一斉に集まり盛んであった。軍隊及び官吏の政治の外に二派があり、一つは道学派であり、一つは名士派である。(中略)名士派には莫友芝・張裕釗・李鴻裔などの人がいた。

よって、莫友芝と張裕釗は共に曾国藩幕府において、名士派に分類される。また、況周頤(1859~1926)の『蕙風簃二筆』には以下のようにある。

咸豊十一年八月、曾文正克復安慶、部属粗定、令莫子偲大令采訪遺書、商之九弟沅圃方伯、刻『王船山遺書』。既復江寧、開書局於冶城山、延博雅之儒校讎經史、政暇則肩輿經過、談論移時而去。<sup>44</sup>

咸豊十一年八月に、曾国藩は安慶を奪い返し、部署が大よそ平定されると、莫友芝に命令し、残存する書物を探し集めさせ、それを九弟である沅圃方伯と相談し、『王船山遺書』を刻させた。更に江寧(南京)が回復すると、冶城山に書局を開き、博雅の儒家を招致し経史を校正した。政務の余暇には輿をよぎらせ、談論に時を過ごして去った。

このように、曾国藩は南京の冶城山で書物の編纂局を開き、博雅(学問・技芸に広く通じ、道理をわきまえていること)の儒家を集めるが、莫友芝もその中の一人であった。曾国藩は莫友芝の才能を認め、莫友芝に命令し、重要な責務を課していたといえる。

更に、薛福成の「叙曾文正公幕府賓僚」に「閱覽則(中略)江蘇知県

---

<sup>44</sup>『況周頤集』に収録されている況周頤『蕙風簃二筆』巻1(広西師範大学出版社、2012年12月)。

独山莫子偲举人。(閲覧では(中略)江蘇知県であり独山の举人、莫友芝が居る。)<sup>45</sup>とあり、莫友芝は曾国藩の幕僚として閲覧(本を沢山読む人)に分類されることが分かる。

莫友芝の著書には、『宋元旧本書経眼録』・『邵亭書画経眼録』・『莫友芝詩文集』・『梁石記』・『金石影』などがある。彼は訪碑の旅にも熱心で、石碑の文字を調査取材する活動を盛んに行った。彼の碑学観については、『宋元旧本書経眼録』から窺える。その中の『金石筆識』「魏孝文帝弔比干文」に「嘉・道以来、相習尚元魏人碑版。(嘉慶・道光年間以来、元・魏の人の碑版を学んでいる。)<sup>46</sup>とあり、嘉慶・道光時期にかけての北碑の流行について述べている。また、「隋龍藏寺碑」では、「真書至初唐極盛、而初唐諸家精詣北朝、無不具者。(楷書は初唐に至って極めて盛んであり、初唐の書家は北朝を詳しく学び、それを備えない者はいなかった。)<sup>47</sup>といい、初唐の書家は皆、北朝に精通したと捉えていた。

同時代の文人では、張裕釗・黎庶昌・莫祥芝(1827～1890)・張鳴珂(1829～1908)らが莫友芝の書を評価している。張裕釗は「(莫友芝)又工真、行、篆、隸書、求者肩相摩於門。(莫友芝は)楷書、行書、篆書、隸書を得意し、人は競って書作を求めた。)<sup>48</sup>という。黎庶昌によれば、「真行篆隸、蘊藉樸茂、極書家之能事。(楷書・行書・篆書・隸書は含蓄と密度がり、書家の能事を極めている。)<sup>49</sup>と絶賛している。また、莫祥芝は「尤善書、篆隸楷行皆能。力追古人而運以己意、足跡所至、人争求之。(書を善くし、篆書・隸書・楷書・行書はすべて能手である。古人の追

<sup>45</sup> 薛福成「叙曾文正公幕府賓僚」、『庸庵文編』巻4、18～19頁。

<sup>46</sup> 莫友芝著、張釗校点『宋元旧本書経眼録・邵亭書画経眼録』(中華書局出版、2008年1月)、附録巻2:金石筆識、「魏孝文帝弔比干文」、176頁。

<sup>47</sup> 前掲注46、莫友芝著、張氏校点、附録巻2:金石筆識、「隋龍藏寺碑」、181頁。

<sup>48</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「莫子偲墓誌銘」、141頁。

<sup>49</sup> 序章注42、莫友芝著、張氏撰、附録四:莫氏家族伝記資料、統遵義府志・莫友芝伝、『蕓齋偶筆』に孫引した文献、621頁。

究に努め、これを自分の運筆に用いている。）」<sup>50</sup>と述べており、彼がどこに行っても、人が競争って書作を求めていたことが分かる。更に、張鳴珂においては、「(写漢隸)方整斬截、筆力堅卓、近人惟莫偲翁有此力量。(隸書は)方整でしっかりしており、筆力が強く、近人ではただ莫友芝だけがこの力量を備えている。）」<sup>51</sup>とあり、張鳴珂はとりわけ莫友芝の隸書を高く評価している。

以上のように、莫友芝は晩清における胡林翼・曾國藩・丁日昌の幕僚であり、その中に曾國藩の幕僚として最も長い時間を過ごした。また、莫友芝と張裕釗は共に曾國藩幕府において、名士派に分類された。曾國藩は南京の冶城山で書局を開くため、莫友芝に命じ、各地で散逸した古籍の収集についてあたらせた。名士派である莫友芝は曾國藩の幕府において古籍の収集と覆刻に貢献し、重要な役割を果たした。そのため、曾國藩の幕府において図書文化に貢献し、重要な役割を果たしている。更に、同時代の文人は、莫友芝が書法において各体に堪能であり、特に隸書に優れていると評価していたことが明らかになった。

## 二、湖北の幕府における何璟との交流

張裕釗・莫友芝が交友した官僚に何璟（1817～1888）がいる。何璟は広東香山の人で、字は伯玉、号は小宋である。同治元年に曾國藩の幕府に入った。張裕釗と何璟との詩文を通じた交流がうかがえる資料として、張裕釗の『濂亭遺詩』には「送何小宋方伯璟之任山西・己巳、時館鄂城書局（何璟が山西に赴任するのを見送る・己巳年（同治8年、1869）を指

<sup>50</sup> 序章注 42、莫友芝著、張氏撰、附録四：莫氏家族伝記資料、莫祥芝『清授文林郎先兄邵亭先生行述』、625頁。

<sup>51</sup> 張鳴珂『寒松閣談芸環録』巻5、5頁。『清代伝記叢刊』、第74冊（台北明文書局、1985年）。

す)、鄂城書局に滞留した)」<sup>52</sup> とある。

ここでは、同治5年(1866)から何璟が張裕釗と繋がりがあったことを明らかにする。

『清史稿』では、何璟の経歴を述べており、「何璟、(中略)(同治)四年、晋湖北布政使。逾歳、到官。(何璟、同治四年、湖北布政使に昇進。翌年、就任することになった。)」<sup>53</sup> とある。同治5年、何璟は湖北布政使(巡撫の下で省の行政を担当し、教育文化などを管理する。)となったことが分かる。何璟が同治5年4月中旬に鄂(湖北の鄂州を指し、張裕釗の故郷。)に赴いたことは、同治5年4月22日に曾国藩が喬松年(1815～1875)に宛てた書簡<sup>54</sup> と同年5月4日、莫友芝の日記<sup>55</sup> から窺える。それから、同年5月20日<sup>56</sup>・8月16日<sup>57</sup> に曾国藩が何璟に宛てた書簡によれば、何璟は鄂州に滞在していたことが分かる。

上述により、何璟は同治5年5月から8月にかけて、湖北布政使として、鄂州に滞在していたといえる。

さて、この時期、に張裕釗はどのような生活を過ごしたのか。張裕釗の同治前半期の書作品に、「鮑照飛白書勢銘」がある(図8)。この書作は張裕釗の作品の中で書写年が記された極めて少ない例である。落款に「丙寅九月九日書於江漢書院」と記されており、同治5年9月9日に江漢書院で制作された作品であることが分かる。江漢書院とは、湖北にあ

<sup>52</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送何小宋方伯璟之任山西・己巳、時館鄂城書局」、289頁。

<sup>53</sup> 趙爾巽主纂『清史稿』卷、列伝245(中華書局、1977年)。

<sup>54</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第29冊、書信8、「復喬松年」曾国藩の喬松年宛書簡、同治5年4月22日、172頁に「小宋當於下旬赴鄂。(何璟は鄂へ赴ころとしていているところである。)」とある。

<sup>55</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治5年5月4日、183頁に「何小宋方伯四月中已往湖北。(何小宋は四月中旬に既に湖北へ参った。)」とある。

<sup>56</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第29冊、書信8、「復何璟」曾国藩の何璟宛書簡、同治5年5月20日、246頁に「榮蒞鄂垣。(光榮に鄂垣にいらっしやいた。)」とある。

<sup>57</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第29冊、書信8、「復何璟」曾国藩の何璟宛書簡、同治5年8月16日、352頁に「鄂中局面自較皖省為優。(鄂の局面において、皖省より優れている。)」とある。



る省立の学校である。また、張裕釗の「代某学使安陸府試院増修号舎記」によると、湖北の学使（省の学務・教育を監督した文官）の代筆者を担当し、内容には「同治5年9月某日記」とある<sup>58</sup>。

これらのことから、同治5年9月に張裕釗が江漢書院に滞在し、また湖北の学使の代筆者として布政使の何璟と交わる機会は充分にあったといえる。

一方、莫友芝の同治7年8月23日の日記には、以下のようについて。

張廉卿裕釗相訪、乃新自武昌書局来、持何小宋中丞信。（局）属為買史記王本、漢書汪本、並他史漢差善者一本。<sup>59</sup>

張裕釗が新たに武昌書局から私の処に来訪し、何小宋の手紙を持参した。何小宋は書局のため、『史記』王本・『漢書』汪本及び『史記』『漢書』の善本各一冊を買いたいという。

上述により、何小宋（何璟）が莫友芝への手紙を張裕釗に委託していたことが分かる。前述の内容に従って、莫友芝が何璟に手紙を返信するため、彼が何璟に宛てた一通の未紀年（10月4日）の書簡が残っている。内容は、以下のとおりである。

叩別遂及五秋（中略）、張廉卿中翰函持到賜書。（中略）承命購王本史記、汪本漢書並史、漢別善本。（図6：傍線筆者）

別れてもう5年が経ちました。（中略）張廉卿が手紙を持参して来ました。（中略）ご依頼により、王本の『史記』・汪本の『漢書』及び

<sup>58</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「代某学使安陸府試院増修号舎記」、197～198 頁。

<sup>59</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理、同治7年8月23日、258 頁。

『史記』『漢書』の善本を購入します。

このように、同一の話題である、『史記』・『漢書』の購入情報について言及しており、張劍氏はこれを同治7年に書かれた書簡と見ている<sup>60</sup>。とすれば、何璟と莫友芝と会った5年前は同治2年（1863）となる。

とりわけ、莫友芝の日記の同治4年（1865）12月28日の記載によれば「何小宋信至、索作数紙書。（何小宋の手紙が届いた。数枚の書作品の依頼だった。）」とある。加えて、莫友芝の日記において、何璟が莫友芝への書作を依頼した書作記載はこの記載しか確認できない<sup>61</sup>。

上述により、莫友芝が何璟に贈った未紀年の書作「安世房中歌」（復原図）<sup>62</sup>（図7）は同治4年末の頃に書かれた書作であることが推測される。

「安世房中歌」の落款「小宋方伯大人察正。独山莫友芝書漢楽章。」（図7）、及び前述した莫友芝の何璟宛書簡で言及される書籍の購入情報から、莫友芝と何璟とは、格別な友好関係で結ばれていたことが分かる。

同治5年9月に張裕釗は湖北布政使の何璟と交わる機会には充分にあったといえ、その際に張裕釗は何璟の元で湖北に居り、この間に何璟から莫友芝の「安世房中歌」の大作が張裕釗に示されていたことであろう。

以上のことから、同治2年に莫友芝は何璟との交友を記載しており、同治4年12月28日には何璟が莫友芝に書作を依頼した記録がある。莫

<sup>60</sup> 序章注42、莫友芝著、張氏撰、同治7年10月4日、485頁。

<sup>61</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治4年12月28日の条に172頁とある。その以降の記載は同治5年5月4日の条に、「何小宋方伯四月中已往湖北。」（183頁）とある。同治7年8月23日、同治8年正月6日の条に、「鄂中擬覆刊此書、署撫軍何小宋方伯属為購致、未得也。」（263頁）とある。同治8年2月5日の条に、「廉卿（張裕釗）亟束装、催余作寄小宋暨張香濤書、並各致新拓梁碑。」（265頁）とある。同治8年4月3日の条に、「得何小宋方伯信、言湖北『通鑑』之刻已停工矣。」（269頁）とある。

<sup>62</sup> 王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範大学出版社、2014年12月）、40～53頁。原本には40～52頁、復原図には53頁。40頁に編者が以下のように述べている。内容は「其形制本為条屏、恐是收藏者為携帶和觀覽方便、將每屏強行橫割、分為四頁、重新裝冊、致使順序混亂、不可卒読。其中尤以第三屏割裂最甚、字句顛倒、空白錯置、実已大失意趣。現將冊頁原様刊印。並附原作復原図於後。」とあるように、原本は冊子となっている。

友芝が何璟に贈った未紀年の書作「安世房中歌」はこれに該当し、同治4年末の頃に書かれた書作であることが推測される。同治5年4月に何璟が湖北に移った際にも、この書作は湖北へ携行されていたことであろう。

### 第三節 張裕釗及び書家たちの書風検証

先行研究において、魚住氏は宮島家伝蔵資料である光緒時期の石刻作品や書作に注目し、張裕釗書法の技法の考察や書丹碑碣の異体字の分析を行った。魚住氏は張裕釗書法の技法を、「起筆」「送筆」「収筆」「転折」「はね」「左右の均整」「上下の均整」に分類し、各分期の特徴を明らかにした<sup>63</sup>。

本節では、魚住氏の書法分析の方法を応用しつつ、同治時期の書作「鮑照飛白書勢銘」（同治5年）を中心に考察する。具体的には、同治前半期にかけて曾国藩幕府内で流行した書法、莫友芝の他・曾国藩・何璟ら曾国藩の幕僚や友人、及び幕僚以外の書人との比較によって、張裕釗の書法形成を検証する。また張裕釗が曾国藩・汪士鐸・蔣光燾・徐宗亮に宛てた同治前半期の書簡を中心に、張の咸豊年間の書簡との書風を比較する。

#### 一、張裕釗の大楷

この時期の作品では、大楷で同治5年に書かれた「鮑照飛白書勢銘」

---

<sup>63</sup> 序章注61、魚住氏著、第二章 張裕釗における書法形成、三 張裕釗書法の特徴と形成過程、150～168頁。

(図 8) が残っている。有紀年の書作のうち、同治の前半期に制作されたものであるため、ここで検討する。

張裕釗の「鮑照飛白書勢銘」は四曲一双、楷書で、その内容は南朝宋の書論である鮑照（414～466）の「飛白書勢銘」である。文中には飛白書の精妙さが描かれ、張裕釗の作品の中でも書写年が記された極めて少ない例である。この時期の交際が見られるため、書風の変遷をたどることためにも、さらに調査すべきものである。

張裕釗の「鮑照飛白書勢銘」を臨書した作として、康有為の「飛白書勢銘八屏」二作と台湾人の書家である林守長（1910～1982、字は伝貴、懷薰、誠之である）の臨書作品が残っている。拙論「張裕釗書『鮑照飛白書勢銘』及其相關問題」<sup>64</sup>にて検討したので、ここでは言及しない。

## 二、張裕釗及び同時期書家の書風検証

張裕釗の同治前半期の書作品に関しては、前述の「鮑照飛白書勢銘」がある。曾国藩の幕府において、張裕釗が最も緊密な関係を持ったのは曾国藩及び莫友芝と何璟であった。彼らの書法は、まず曾国藩と何璟の楷書についてあたってみると、いずれもが唐楷を基調とした書風で、穂先が傾いており、側鋒の方筆や露鋒で書かれている。また、整った結体が窺える。張裕釗のこの咸豊時期の書作品に通ずるものだが（表 1）、同治前半期の「鮑照飛白書勢銘」では、逆筆で蔵鋒の円筆技法で書かれている。

また、このことは曾国藩の幕下において曾国藩および何璟の影響を受

---

<sup>64</sup> 拙論「張裕釗書『鮑照飛白書勢銘』及其相關問題」（『文化南宮』秋冬合巻、2014年）、21～26頁。

けたのではなく、急激に隸楷（楷書に藏鋒や逆筆で隸書由来の筆法を交えたことと指す。）の方向を目ざすようになったことを意味する。

そこに、何璟が張裕釗に示した莫友芝の「安世房中歌」（図7）が大きく意味をなしてくる。莫友芝は現行の中国書道史においては、あまり取り上げられることはないが、八分を善くし、官僚としては書法において傑出した見識と力量を有していた。

張裕釗においては、「安世房中歌」のみならず、莫友芝のほかの作品が積極的にそれら隸書の書作に見入ったことであろう（図9）。

張裕釗の楷書は隸書を学んだものとする指摘について、弟子である賀濤（1849～1912）・張以南が以下のように言っている。賀濤が、張裕釗の七十歳を祝い、「武昌張先生七十寿序」と題する寿文を送っている。張裕釗は賀濤にその書法について語っていた。内容には「先生取法北魏、而隸於漢、篆於秦。（先生は北魏から学び、また漢隸・秦篆に至った。）」<sup>65</sup>とある。

また、張以南は宣統紀元（1909）4月26日に『張廉卿先生楷書千字文』の跋文において、以下のように述べる。

武昌濂亭師楷法道源漢隸、論者設与包鄧同称千古之雄、実則別闢徑途、独樹一幟。（図10：傍線筆者）

武昌濂亭（張裕釗の号）先生は楷法において漢隸を学んだ。論者は包世臣・鄧石如と共に「千古の雄」と同称している。実際には別の道を切り開き、独自の旗幟を樹立した。

---

<sup>65</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、附録七：張裕釗評伝資料輯存、賀濤「武昌張先生七十寿序」、564頁。

上述により、張裕釗の楷書は漢代の隸書を学習したことを指摘しており、包世臣（1775～1855）・鄧石如（1743～1805）と同称されていたことが分かる。

このように、弟子である賀濤・張以南の指摘によれば、張裕釗の楷書は隸書を学習しており、その字形も参酌したであろうことが分かる。彼の「鮑照飛白書勢銘」において隸書字形を楷書作品に用いた例を見ると、「雲」・「最」・「虎」・「起」・「歸」などいくつか挙げられる（表2）。

それから、曾国藩幕府において往来頻繁に隸書を得意とした書人及び同時代の幕友以外では、莫友芝・楊峴（1819～1896）・何紹基（1799～1873）・趙之謙（1829～1884）・楊沂孫（1813～1881）が挙げられるため、彼らの書作品を張裕釗と比較し、幕府において莫友芝の隸書書作品が張裕釗に影響を与えた点を検討してみたい。

それぞれの概括的な印象をいえば、張裕釗の一作・莫友芝の二作とも概形を長方形に作って、直筆で書かれている。これに対して、何紹基と楊峴は線を震わせて表情をつけている。趙之謙と楊沂孫は鄧石如のように一画の厚みを強調していることが窺える（表3）。

これらを通覧すると、莫友芝と張裕釗の筆法は共通点が多く（表4：補助線筆者）、これに対して、何紹基・楊峴・趙之謙・楊沂孫とは相違点が顕著である（表5：補助線筆者）。

張裕釗と莫友芝の筆法は「隸楷相参」（隸楷の筆法を交えた）といえる。起筆は莫友芝・張裕釗とも蔵鋒で書かれており、丸みを帯びて強調されることが確認できる。また円筆と尖筆が窺え、隸書と楷書を交えた筆法が見られる。送筆において莫友芝の隸書は筆圧を維持しながら直線的に引かれ、張裕釗の楷書では更に直線的になっている。送筆の太さでは、張裕釗と莫友芝は均一となっている。これにより、直筆中鋒が特徴とい

える。収筆は蔵鋒で書かれていることが分かる。転折では、莫友芝・張裕釗の転折とも外には強さを表し、内に柔らかさを含む表現によって「外方内円」となっている。とりわけ莫友芝・張裕釗とも払いやハネ・乙脚の部分は非常に伸びやかで、弧の部分は隸書の波勢を誇張し、ダイナミックに書かれている。そのため、起筆は丸みをもって送筆は細くなり、筆画は簡素で引き締まった緊張感を感じさせる。また、隸書の波勢を誇張し内部に余白を作り、開放感を感じさせる（表4：補助線筆者）。

これらの特徴は、張裕釗自身が認める古法と考えられる。この古法の理解を具体的にするのが、逆入の起筆から得た筆毛の弾力によって随所に用いる中鋒であり、左右の払いを伸びやかにすることである。とりわけ転折に対しては「外方内円」の形状を徹底し、遂には張裕釗書法の代名詞になるものである。

これに対して、張裕釗・莫友芝のほか、何紹基・楊峴・趙之謙・楊沂孫の筆法はどのように表現したのか。起筆では楊峴は穂先を蔵鋒し円筆で書かれており、何紹基のは穂先を外に露出し、方筆が見られる。趙之謙の穂先が側鋒や方筆で書かれ、角度をつけており、楊沂孫の穂先は逆筆や蔵鋒と円筆が窺える。送筆では、楊峴と何紹基の隸書は曲線が見られ、趙之謙のは直線側鋒・楊沂孫のは直線側鋒が見られる。送筆の太さでは楊峴と何紹基の隸書は線の震えが多く見られ、趙之謙のでは起筆から終筆まで太さは均一となっており、楊沂孫のは線が中心に細くなり、また太くなったことが分かる。また、楊峴の収筆は送筆のように太さを工夫している。何紹基の収筆はそのまま細くなって出鋒したことが窺える。趙之謙・楊沂孫の収筆は円筆で角度を工夫している。転折では、四人とも接筆に直角が見られる。更に、四者とも左払いやハネ・乙脚では短く収めている（表5：補助線筆者）。

よって、これらの書人では、張裕釗・莫友芝とは大きく異なる。四者の隸書の波勢は張・莫より短くて、束縛感を感じさせるものである。

上述により、張裕釗の書作品は、咸豊時期は唐楷のように行が整っており、王羲之の小楷に忠実である様子が見られる。これに対して、同治時期に入り、莫友芝は張裕釗に対し「隸楷相參」及び直筆中鋒という創作方法を確立したと考えられる。点画の長短では払いやハネ・乙脚の部分は非常に伸びやかで、暢達な書風といえ、開放感を感じさせる。その特徴は莫友芝からの決定的な影響と考えられ、従来 of 代表的作家に見られないものである。

### 三、張裕釗の書簡

まず、張裕釗が曾国藩幕僚に接する以前、すなわち咸豊時期の張裕釗の書法がいかなる理念に立ち、いかなる技法によるものであったかを示しておきたい。では、咸豊時期に張裕釗がどのような書風を表現したのか。第一章では、若年における張裕釗の書作品「小楷千字文」には唐代の欧陽詢の風格が見られた。また、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡の書風からは、胡林翼・虞世南・王羲之の風格が窺え、謹厳で整った楷書であることが分かる<sup>66</sup>。つまり、この時期の書風は唐碑・二王を主とした伝統的な書学方法を基とした風格が看取される。

同治前半期の曾国藩幕府において、張裕釗は官僚である曾国藩・汪士鐸や文人の蔣光燾・徐宗亮と交際を持ち、張裕釗が彼らに宛てた書簡が多数残っている。しかし、ほぼ無紀年のため、ここではこれらの書簡

---

<sup>66</sup> 本論の第一章、または拙論「胡林翼幕府における張裕釗書法の形成—咸豊年間の書簡を中心として—」（『書学書道史研究』第27号、書学書道史学会、2017年11月）、59～72頁。



の内容を検討し、年代推定を行いたい。

## 1. 曾国藩宛書簡

『陶風楼蔵名賢手札』に収められた張裕釗が曾国藩に宛てた同治初期の未紀年書簡は2枚残っている。1枚目の書簡（11月朔日）に対応する曾国藩の記録には「同治三年十一月廿四日」と書かれており、それによれば張裕釗の書簡にみられる「11月朔日」は同治3年と推定することができる。また、内容によれば「裕釗往歲承夫子函属鄂中、当路俾主講勺庭書院。（先年、裕釗は先生の招請により、鄂州の勺庭書院に主講した。）」とあり、張裕釗が勺庭書院で主講を務めていたことが分かる（図1：補助線筆者）。加えて、既述したように勺庭書院主講期間が同治2年から3年にかけてという結果に基づけば<sup>67</sup>、時間と内容は合致しているといえる。

2枚目の未紀年書簡（10月19日）には、以下のようにある。

裕釗有友漢陽劉殿堦、世仲茶雲先生族子也。（中略）其人性情肫摯、志節炳然、而竺学不厭。於天官秭算尤精。（中略）夫子督治軍務、裕釗未嘗進一士於肅。蓋以出類之才難得、而車載斗量者、不足以塵聰聽也。（中略）夫子其垂譽焉。（図11：補助線筆者）

裕釗の友人、漢陽出身の劉殿堦は、世仲である茶雲先生の甥です。

（中略）彼の性格は誠実であって、志操が明確で、仏教の研究に余念がありません。特に中国古代の星相と暦学・算術を精通しています。（中略）先生は軍務を監督しています、裕釗は先生に良い人材

<sup>67</sup> 本章／第一節 曾国藩幕府における活動／二 勺庭書院の勤務時期を参照。

を推薦したことがありませんが、彼は珍しく傑出した人物で、世に優れた人物は非常に多いですが、参考にしてくださいと思います。

(中略) ご検討をお願いいたします。

書簡に言及される茶雲先生は劉茶雲(1818～1848)を指す。このように、張裕釗は劉茶雲の甥である劉殿堦(生卒年未詳)の性格などを述べている。

劉茶雲という人物については、曾国藩「国子監学正漢陽劉君墓志銘」では以下のように述べている。

道光二十有八年九月十八日、吾友漢陽劉君卒於家、年三十有一。(中略)君諱伝瑩、字茶雲。<sup>68</sup>

道光二十八年九月十八日に、私の友人漢陽劉君は家で三十一歳で亡くなった。(中略)君の諱は伝瑩、字は茶雲である。

このように、劉茶雲と曾国藩は友人関係にあったことが分かる。また、張裕釗の「送劉殿堦序」によれば以下のようにある。

吾友漢陽劉子殿堦、裕釗始遇之衆人之中、一見而知其異於凡為人者。(中略)夫天之所以命殿堦者、裕釗既推而得之。<sup>69</sup>

私の友人漢陽劉殿堦について、裕釗は世の中様々など出会ったが、一見して彼の非凡さが分かった。(中略)天が劉殿堦を命ずることにより、裕釗が推薦して叶えたい。

<sup>68</sup> 第一章注 56、曾国藩著、王氏校点、文集卷 2、「国子監学正漢陽劉君墓志銘」、240～241 頁。

<sup>69</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「送劉殿堦序」、28 頁。

よって、張裕釗は曾国藩に劉殿燠のことを推薦したい意向があったことを示している。張裕釗の「送劉殿燠序」によると、「癸亥」<sup>70</sup>の注が残っており、癸亥は同治2年（1863）を指す。更に、この未紀年の書簡（10月19日）の最後には曾国藩「同治□年十一月十一。已覆」の記載がある。

これらの記録から、同治2年11月28日に書かれた曾国藩が張裕釗に宛てた書簡を見るなら、同じく劉殿燠のことも言及しており、以下のように述べている。

此間人多事少、若非確有長技、位置頗難。天官疇人之学、素未涉其藩籬、此間有李善蘭壬叔者、衆推為当世無双、劉君頃已到營、当令其与壬叔討論商榷、再謀所以處之。<sup>71</sup>

この時期、人が多くて仕事が少ないですが、確かな技術がなければ、地位を占めることは困難です。中国古代の星相や暦学について、私には初歩的な段階と言えます。この際、李善蘭（1810～1882、字は壬叔、号は秋紉、清末の数学者）が随一として世の中の人々から推されています。劉殿燠君は既に私の幕府に来てくれました。李善蘭と討論させ、確認した後、また彼ができることを探しましょう。

これによって、曾国藩は劉殿燠を幕府に抱え、彼の得技によって、地位を与えようとしていたことが分かる。

---

<sup>70</sup> 張裕釗「送劉殿燠序」『張廉卿雜文』、上海図書館蔵。『張廉卿雜文』について、孫瑩瑩「上海図書館蔵『張廉卿雜文』考論」『書目季刊』46巻3期（2012年12月）、99～108頁。

<sup>71</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第27冊、書信6、「覆張裕釗」曾国藩の張裕釗宛書簡、同治2年11月28日、325頁。

以上に見る曾国藩・劉棻雲・劉殿燠三人の関係から 2 枚目の書簡が年代推定される。曾国藩の友人は劉棻雲であり、その甥は劉殿燠で、張裕釗は劉殿燠のことを曾国藩に推薦したことが明らかになった。加えて、曾国藩の同治 2 年 11 月 28 日書簡から、張裕釗が曾国藩に宛てた未紀年の書簡は同治 2 年に書かれたことが確認できた。

ちなみに、張裕釗と劉棻雲の兄である劉子佩に関する墓誌銘が残っている。同治 2 年に張裕釗が抄写した「劉府君墓誌銘」の小楷が残り、それは浙江図書館で収蔵されている 38 点の張裕釗書作品において、唯一の抄写紙である。内容によれば以下のようにある。

君諱伝燧、字子佩、一字左甫、姓劉氏、湖北漢陽人。（中略）君之弟、曰棻雲伝瑩者也。（中略）君卒以咸豐元年八月十六日。（中略）及孺人卒以今年同治二年二月望日。（図 12：傍線筆者）

君の諱は伝燧、字は子佩、または左甫である。姓は劉氏、湖北漢陽人。（中略）君の弟は棻雲伝瑩である。（中略）君は咸豐元年八月十六日に歿した。（中略）及び孺人の歿は今年同治二年二月望日。

この記載によって、劉子佩の卒年が同治 2 年であることが分かる。

以上の考察により、張裕釗が曾国藩に宛てた 2 枚の書簡は同治 3 年と同治 2 年に書かれ、抄写の内容から「劉府君墓誌銘」も同治 2 年の真筆だったことが明らかになった。

## 2. 汪士鐸宛書簡

張裕釗の行書書簡に、汪士鐸に宛てた 2 枚の未紀年書簡がある。先行

研究では、陳啓壯氏はこの 1 枚目（二月十日）の書簡は「曾相季弟亦歿於王事（曾相季弟も他界した）」（図 13：傍線筆者）と記され「曾相季弟」が曾国藩の四弟曾国葆（季弟）を指している。曾国葆（1829～1862）は同治元年 12 月に戦死し、そのためこの 2 枚の書簡は同治 2 年頃に書かれた書簡と述べている<sup>72</sup>。

先行研究に基づいて、ここでは同治 2 年頃の張裕釗と汪士鐸との交際について検討したい。咸豊時期<sup>73</sup> から同治時期に入っても、二人の交流は続いていた。その記録の一つとして、同治元年に曾国藩が汪士鐸に宛てた書簡には、以下のようにある。

廉卿借『読書雑誌』、此間別無副本、難以応命。代謀置硯、即当与敵中丞函商。<sup>74</sup>

廉卿（張裕釗）が私（曾国藩）から『読書雑誌』を借りており、この本は副本がないため、応じることはできません。張裕釗は私に敵中丞（敵樹森）に手紙で相談した方が良いと助言していました。（同治元年 5 月 11 日）

また、同治 2 年に曾国藩が倭仁（1804～1871、清末保守派儒学者の代表者、理学の頭目）に宛てた書簡によれば、以下のようにある。

汪士鐸本約今春來營、因為胡文忠公校刊遺集、尚留鄂省。（同治 2

<sup>72</sup> 序章注 75、陳氏著、理論篇「書以功深能跋扈—張裕釗書風流變之探討／一、早年時期書風變之探討（同治六年（含）以前）」、194 頁。

<sup>73</sup> 第一章 咸豊年間の胡林翼幕府における張裕釗書法の研究／第四節 幕府の官僚たちとその書法／二、汪士鐸の小楷を参照。

<sup>74</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 25 冊、書信 4、「復汪士鐸」曾国藩の汪士鐸宛書簡、同治元年 5 月 11 日、278 頁。

年 8 月 24 日)<sup>75</sup>

汪士鐸は元々今年の春に私の処に来る約束でしたが、胡文忠公校刊遺集を編集するため、まだ武昌に滞在しています。(同治 2 年 8 月 24 日)

これによって、同治元年から 2 年にかけて、汪士鐸と張裕釗は 2 人とも湖北巡撫である嚴樹森の所に滞在していたことが分かる。

同治 3 年に入り、汪士鐸は曾国藩の下に金陵（南京）に参じた。その記録は張裕釗の「唐端甫墓誌銘」から窺え、以下のように述べている。

自同治三年大軍克金陵、曾文正公及今合肥相国李公、相繼総督两江、始開書局於冶城山。(中略)江寧汪士鐸、儀徵劉毓崧、独山莫友芝(中略)四面而至。<sup>76</sup>

同治三年に曾国藩と合肥相国である李鴻章が金陵を奪回し、相次いで総督两江になってから、冶城山で書局を開いた。(中略)江寧の汪士鐸・儀徵の劉毓崧・独山の莫友芝(中略)がここに向かって来た。

これによって、曾国藩の幕府は同治 3 年に安徽安慶から金陵（南京）に移動し、各地から幕僚が集まってきたことが分かる。

続いて、2 枚目の書簡内容を検討する。1 枚目（二月十日）の書簡内容によれば以下のように述べている。

皖北聞已肅清、但未知皖南賊蹤見在何処。(図 13：傍線筆者)

<sup>75</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第 27 冊、書信 6、「復倭仁」曾国藩の倭仁宛書簡、同治 2 年 8 月 24 日、138 頁。

<sup>76</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「唐端甫墓誌銘」、138 頁。

安徽の北は既に平定されたと聞きましたが、但し安徽の南での賊の蹤跡がどこにあるかは分かりません。

このように、安徽での戦争について言及している。また、2枚目（七月廿一日）の書簡には以下のようにある。

関中形勢誠如所云、但目前恐難其人耳。（図 14：傍線筆者）

関中の形勢はあなたが述べたとおりですが、目下、外聞によるのは難しいと思います。

この書簡は同様に関中（現在の中国陝西省の西安を中心とした一帯）での戦争を述べている。

以上により、同治元年から2年にかけて、汪士鐸と張裕釗は二人とも湖北巡撫である嚴樹森の所に滞在しており、同治3年に汪士鐸は金陵（南京）に移行したことによって、同治3年以後、二人は会えなくなってしまい書簡で連絡を取っていることが分かる。これらの2枚の書簡は同様に戦争のことに言及しており、それは太平天国の乱（咸豊元年～同治3年、1851～1864）を指している。このことから、先行研究の同治2年の上限を加えて、この2枚の書簡は同治3年頃に書かれたものであると推測される。

### 3. 蔣光燾宛書簡

この期間に、張裕釗が蔣光燾（1825～1892）に宛てた書簡は38通が残

っており、浙江図書館に収蔵されている<sup>77</sup>。蔣光燾、字は寅昉、浙江海寧硤石の出身、清代の蔵書家である。また『小莽蒼蒼齋蔵清代学者書札』には、張裕釗が蔣光燾に宛てた書簡2枚も残されている。ここでは張裕釗が蔣光燾に宛てた書簡を中心として、二人の関係及びこれらの無紀年書簡の年代を推定していきたい。

まず、張裕釗と蔣光燾との交際経緯については、既述<sup>78</sup>の考察のとおり、咸豊11年から同治3年にかけて(1861~1864)、蔣光燾は太平天国の乱を逃避するため、湖北武昌に赴いた。また、金暁東氏によれば、蔣光燾が高均儒(1811~1969)に宛てた書簡には以下のようにある。

二月間、武昌文人張廉卿、監利詩人王子寿、皆將到省、必獲一見。<sup>79</sup>

二月にかけて、武昌の文人張廉卿と監利の詩人王子寿は、共に間もなく省に着きます、私ときっと会うことができるでしょう。

このように、蔣光燾は同治2年2月に張廉卿(張裕釗)と会っていたことが推測される。これ以降も、張裕釗は蔣光燾との交流を続けており<sup>80</sup>、その交際がうかがえる張裕釗の「贈蔣寅昉部曹序」が残っている。

81

更に、浙江図書館が所蔵する書簡を検討したい。相互に作品や書籍を

<sup>77</sup> 金暁東『衍芬草堂友朋書札及蔵書研究』博士論文(復旦大学、中国古代文学研究中心中国古典文献学、2010年4月)、198頁。金暁東氏は張裕釗が蔣光燾に宛てた書簡を考察し、『故交遺翰節存』の中で、23通を残されていた。内容について、『九数通考』、『梅氏叢書』などの本を借りること、書法に関するのは、『鬱岡齋法帖』を借りたことを述べられている。筆者は2017年7月4日から6日にかけて、浙江図書館にこれらの書簡を考察して来た。合計38枚の「張裕釗致蔣光燾書札」があり、1枚の「張裕釗劉府君墓誌銘」が残っている。

<sup>78</sup> 本章／第一節 曾國藩幕府における活動／一、張裕釗の游幕活動を参照。

<sup>79</sup> 前掲注76、金氏著、162頁に蔣光燾『敬齋雜著』「致高処士書」(同治刻本)を孫引したものである。

<sup>80</sup> 前掲注76、金氏著、第四章：衍芬草堂主人交游研究／第二節：同輩重要友朋交遊／二、張裕釗(廉卿)、161~164頁。

<sup>81</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「贈蔣寅昉部曹序」、52頁。



介した交流が窺え、以下のように述べている。

尊老爺承示敬悉、大作已讀一過、意義甚高。因賤軀精神、尚不甚佳。

尚未能細加尋繹、不敢草草応命。（図 15：傍線筆者）

尊敬する老爺、大作は既に一回で読ませていただき、意義が高いと思います。自分の体はまだ良くない状況であって、丁寧に推究できず、草々に命に応じる事は敢えてしません。

このように、老爺（蔣光燾）は張裕釗に頼まれた作品を読んでいたことが分かる。その他、以下のような例がある。

頃有友人借九数通考、梅氏叢書、数理精韻数種。尊処有此書否。（図 16：傍線筆者）

この頃、友人が『九数通考』『梅氏叢書』『数理精韻』など数種類の本を借りました。先生はこの本をお持ちでしょうか。

このように、張裕釗は蔣光燾と作品や書籍を通じて交流していた。加えて、『小莽蒼蒼齋蔵清代学者書札』には張裕釗が蔣光燾に宛てた未紀年の書簡が2枚ある。1枚目の内容には以下のようにある。

惟曩者与方子白、劉殿壘嘗以此相敦勉而已、此外蓋不可得也。

ただし、昔から方子白・劉殿壘とお互いに励まし合うだけで、それ以外は得ることはありません。（図 17：傍線筆者）

既述<sup>82</sup>したように、張裕釗が曾国藩に宛てた書簡にも劉殿壘のことが言及され、同治2年から3年にかけて書かれたものと推測することができ、さらにこの1枚目の書簡もこの期間に書かれたものと推測される。さて、浙江図書館が所蔵する書簡も劉殿壘のことに言及している<sup>83</sup>。

2枚目の書簡には「令郎等課題開附左方。（あなたの息子の課題などは左方に書いています。）」（図18：傍線筆者）とあり、蔣光燾の息子である蔣佐堯は張裕釗の勺庭書院の門人であり、張裕釗が課題を与えていたことについて述べている。また、蔣佐堯に関しては、浙江図書館の蔵品の別の一通の書簡でも言及している。内容によると、「閱坵去翼甫賓臣文各一篇、請簪入。（査燕緒と蔣佐堯の文章各一篇を読んでから添付して、ご確認ください。）」<sup>84</sup>とあり、張裕釗が門人の査燕緒と蔣佐堯に文章の指導をしている様子がうかがえる。さて、張裕釗が勺庭書院に勤務していた時期は同治2年の春から同治3年の冬にかけてであるので、この2枚目の書簡は同時期に書かれたものであると推測される。

以上の考察結果、同治2年から同治3年にかけて、張裕釗と蔣光燾は緊密な関係を継続しており、これらの書簡はこの時期に書かれたものと考えられる。

#### 4. 徐宗亮宛書簡

<sup>82</sup> 本章／第三節 張裕釗及び書家たちの書風検証／三、張裕釗の書簡／1. 曾国藩宛書簡を参照。

<sup>83</sup> 浙江図書館古籍部の所蔵に「承示領悉劉殿壘在三合棧、乃借寓以其友人有劉君小甫者、寓其中故也。殿壘劉君之字、其名曰世仲。」（書号：D605142、通号：XZ13683。）、「劉君距此太遠、恐一時未必能致之、容再籌度。」（書号：D605139、通号：XZ13680。）、「漢陽劉殿壘以來、此住糧道街三合棧內、但渠不日即渡江歸耳。」（書号：D605153、通号：XZ13694。）、「足下欲借印孟子要略。（中略）聞之劉殿壘云。」（書号：D605155、通号：XZ13696。）、「承疾有損為慰日間即寓書、漢陽劉君處。（中略）孟子要略一本、祈擲付小價。」（書号：D605161、通号：XZ13702。）、「它日劉殿壘來、亦必以此事諉之。」（書号：D605171、通号：XZ13712）とある。

<sup>84</sup> 浙江図書館古籍部蔵。書号：D605174、通号：XZ13715。

徐宗亮（1828～1904）、字は晦甫、晩号は菽岑、安徽桐城派の文学者である。安徽省安慶市図書館古籍部には張裕釗が徐宗亮に宛てた3枚の書簡が収蔵されている<sup>85</sup>。その中の1枚目は孫瑩瑩氏が同治4年（1865）に編年されるものである<sup>86</sup>。

孫瑩瑩氏の根拠は漢口鹹鹺局に関する張裕釗と曾国藩の往来の書簡（同治3年11月朔日、同治3年12月10日）の内容によるものである<sup>87</sup>。その内容は、以下のようになる。

伯相所許鹺局一事、目下復有變局。伯相乃欲以古今書院講席相處、自惟譴陋、非所能任、再四辭謝。（3月31日）（図19：傍線筆者）  
伯相が許可した鹹鹺局の仕事は、現在変化が起きそうです。伯相は私を古今書院の講席に就かせたがっていますが、自分は能力不足で適任ではないため、再び固辞します。（3月31日）

このように、同一の漢口鹹鹺局のことに言及され、張裕釗と曾国藩の往来書簡は同治3年末であることから、この書簡は同治4年に編年することができる。

以上の結果、書簡の内容から、安徽省安慶市図書館古籍部が所蔵している張裕釗が徐宗亮に宛てた書簡の1枚目は同治4年に書かれたものと

---

<sup>85</sup> 筆者は2017年3月15日に安徽省安慶市図書館古籍部において『蔣元卿旧蔵晚清和近代名人手札』を調査した。旧蔵者の蔣元卿氏（1944～1949）は、元安徽省立図書館館長である。調査の際は、安徽省安慶市図書館古籍部のご担当者様の協力により、曾国藩の幕府または書法に関する研究者である、当時の安慶師範大学の逸夫図書館の董根明館長、文学院古代文学専攻の熊言安先生、安慶市教育体育局基教科の何凌様、安慶師範大学人文与社会学院の江貽隆先生などの研究者とお会いすることができ、多数の助言を頂いた。『蔣元卿旧蔵晚清和近代名人手札』の翻刻は、江貽隆、鄒子榮「胡林翼、張裕釗、江有蘭等致徐椒岑書」（『安徽史学』第4期、安徽省社会科学院、2005年）、125～128頁。

<sup>86</sup> 序章注98、孫氏撰、44～45・76～77頁。

<sup>87</sup> 本章／第一節 曾国藩幕府における活動／二、勺庭書院の勤務時期、最後の段落を参照。

推察される。

#### 四、咸豊時期と同治前半期の書簡の書風比較

ここでは張裕釗の小行書と小行楷書を分類し、同治前半期の書簡書風を中心に、咸豊時期の書簡との比較を明らかにする。

まず、同治前半期の小行書について、先行研究の陳啓壯氏によれば、張裕釗が汪士鐸に宛てた書簡は米芾の書風に近似していると述べる<sup>88</sup>。筆者が考察したところ、咸豊時期の書風については張裕釗が范志熙に宛てた書簡では、忠実に王羲之・米芾のような線の肥瘦の変化に富む書風が看取されたが、同治前半期では曾国藩と近似性を持った書風を体得していたように思われる（表6）。

全体的な書風の造形を比べると、同治前半期の書風は咸豊時期より引き締まり、連綿により直線が多く見られる（表6）。点画については、咸豊時期では要所に強い点画を書いているように見えるが、同治前半期では要所に左側の部分を強調する傾向が強く、左払いを長く強調する様子が見られ、字体では咸豊時期より同治時期のほうが楷書に近い。「左」の字例を挙げると（表6の下部を参照）、咸豊時期の横画の起筆は傾きが見られたが、同治前半期の起筆は立っており、強調した跡が見られる。また、咸豊期の左払いは末筆を太く強調する筆法が見られ、これに対して同治前半期は直線的であり、末筆を止めていることが窺える。曾国藩の書風と共通するのは、要所に左側の部分を強調点と、起筆を強調することである。また直線が見られ、末筆を止めることである（表7）。

張裕釗と汪士鐸は元々胡林翼の幕府であり、その時に友人に宛てた手

---

<sup>88</sup> 序章注75、陳氏著、194頁。

紙は行書であり、その書風は米芾のように線の肥瘦の変化に富む。同治時期に入り、二人とも曾国藩の幕府の一員になり、張裕釗は曾国藩の書風の影響を受け、知人に対して、曾国藩のような結構・点画を用いた行書の書風を体得していた。

また、同治前半期の小楷書を中心に咸豊時期との書風比較を明らかにする。前章までに考察した咸豊時期の張裕釗が曾国藩に宛てた書簡の書風は、胡林翼・虞世南・王羲之の風格が窺え、謹厳で整った楷書であるが（表 8）、同治前半期では莫友芝と近似性を持った書風を体得していた（表 9～表 10）。

全体的な書風を比べると、咸豊時期は唐楷のように行が整っており、胡林翼の書簡と同様に王羲之の小楷に忠実である様子が見られる（表 8）。これに対して、同治前半期は莫友芝のような行意が多く見られるようになり、自由な文字結体を意識し、かつ方筆で書かれている。「子」の字例を挙げると（表 8～表 9 の下部参照）、横画の一面目については咸豊時期では短めであり、同治前半期はそれが長い。咸豊時期のハネは小さく直角にハネ出しており、同治前半期のハネは長く角を滑らかにして左方への傾きが見られる。この傾向は莫友芝の行意の中に多く見られ、自由な文字結体を意識し、方筆で書かれているという点で共通するものがある（表 10）。

張裕釗の同治前半期の書簡には莫友芝の書風が反映されていた。曾国藩と莫友芝は同年であるが、張裕釗は後輩として、莫友芝と交流した際に莫友芝から書の影響を受けたと考えられる。また、蔣光燾の息子は張裕釗の門人であり、お互いの立場を理解し、詩文を通じた交流や、師弟関係から莫友芝のような楷書の書風の影響を受けたものと思われる。

以上考察したように、張裕釗の咸豊時期の書風は倣書の觀念が強く、唐碑・二王・米芾を忠実に模した伝統的な書法を見せていたが、同治前半期になると、小行書では曾国藩のような行書の書風で引き締まった造形で、直線が多く見られるように変化した。また小行楷書の書風は、咸豊時期に張裕釗が曾国藩に宛てた書簡では謹厳で、整った楷書を善くすることが窺えたが、同治時期に入ると、張裕釗が曾国藩と蔣光燾に宛てた小行楷書の書簡のように、莫友芝のように自由な文字結体を意識し、方筆で書くようになっており、莫友芝から書の影響を受け、自由な文字結体に変化した様子が窺える。

## 小 結

本章では、晩清における同治前半期にかけて曾国藩の幕府で張裕釗の幕僚としての交流活動について検討し、莫友芝という曾国藩幕下の人物に注目した。張裕釗は同治前半年にかけて、先学が提起してない游幕活動で活躍し、湖北勺庭書院に務めていた期間は同治2年の春から同治3年の冬にかけてであると、従来の定説がない彼の活動について推定した。

同治5年、何璟は湖北を訪ね、張裕釗と交わった。そして、その時たまたま携行していた莫友芝の書作を張裕釗に示したことが推測される。これは楷書に隸書の筆法を加えた、隸楷にあたる書法であり、張裕釗の作風を大きく転換させる契機となったと推測される。また、張裕釗の10点の小行楷書、小行書の制作年代はこの時期にかけて書かれたと推定される。

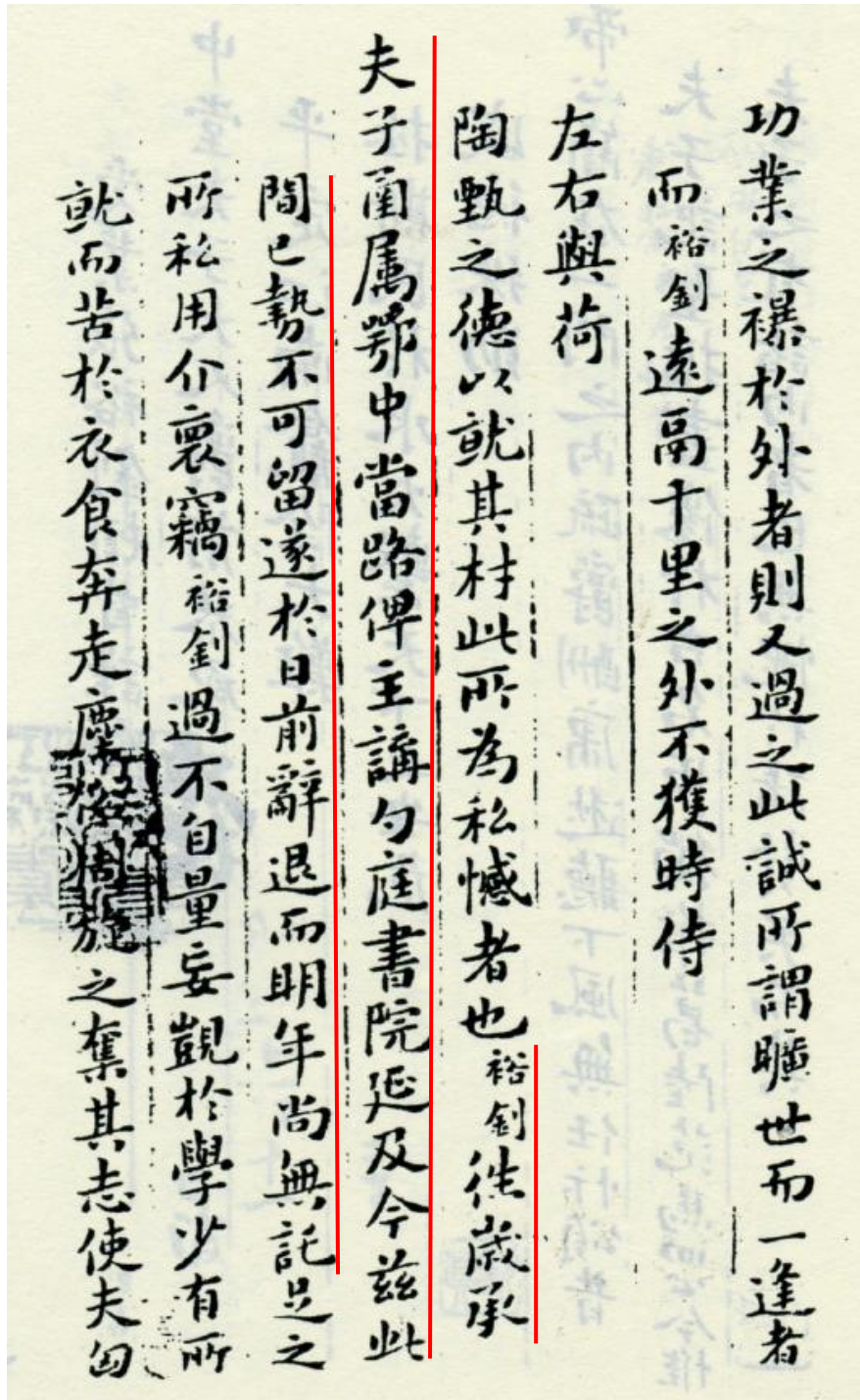
先学の見解と異なり、張裕釗の小楷においては、咸豊期に胡林翼の幕

府にあった時代の張裕釗の肉筆資料からは伝統的な帖学が看取された。これに対して、同治期に入ると、書風は曾国藩の影響を受けたものか、字形の左方に広がりを持ち、方筆の起筆と収筆を止めるという現象を示し始める。同治期に入ると、急速に倣書的姿勢は失われ、曾国藩・莫友芝からの書法の影響が看取される。

張裕釗が同治5年9月に書した「鮑照飛白書勢銘」もまた隸楷の風格を明確に打ち出したものである。ここにはいわゆる「隸楷相参」に踏み込んだ跡が明瞭に見られ、その点画の払いやハネ・乙脚は非常に伸びやかであり、暢達した開放感は、従来の書法家のいまだ至らないところであった。しかも、それは従来の張裕釗の書法を一転させるものでもった。

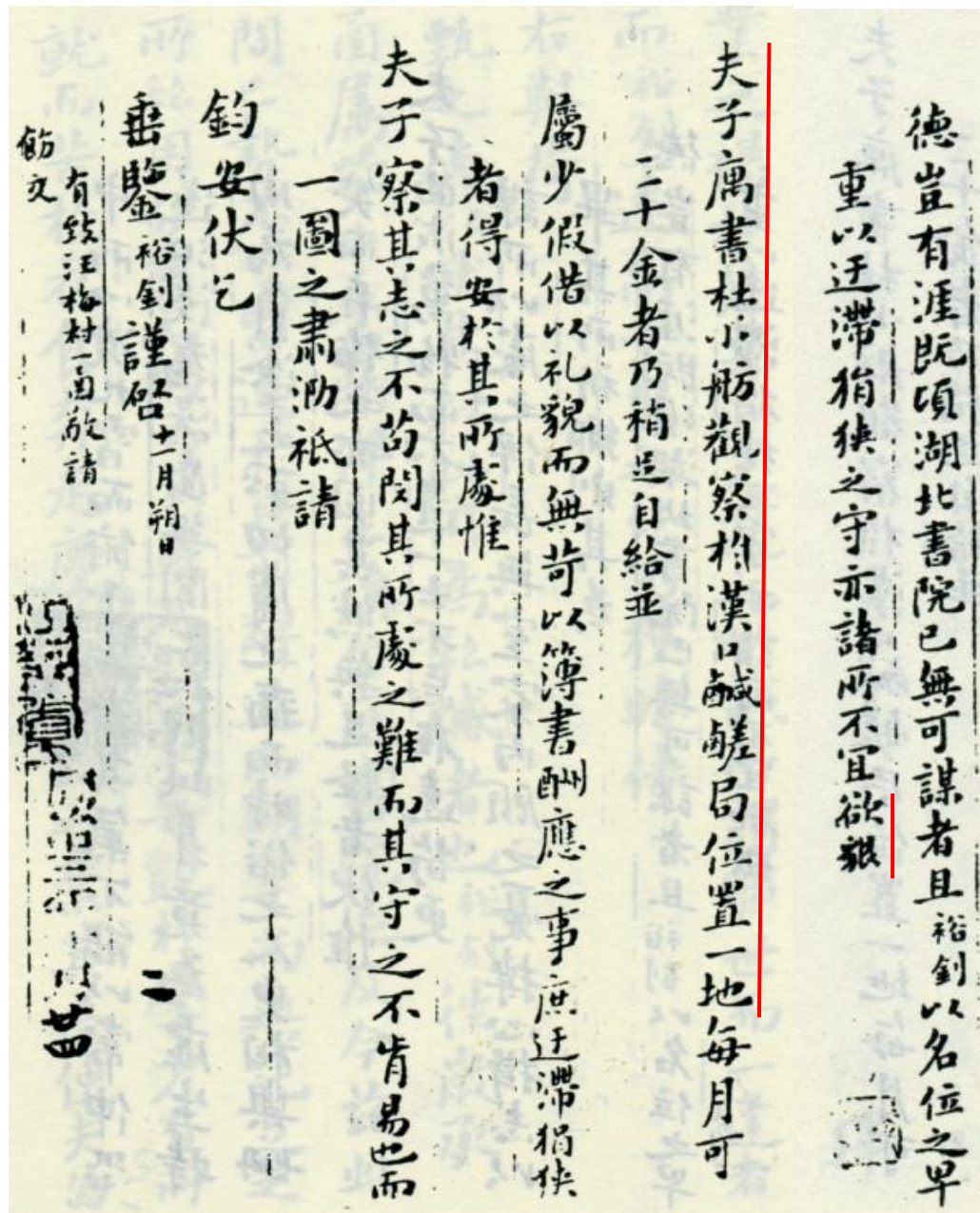
莫友芝は曾国藩の幕僚にあつて、名士派に分類される学識の人であった。曾国藩は莫友芝の才能を認め、莫友芝が散逸した古籍の収集に努めていることに手を差しのべ、あるいは書法においても、莫友芝のあり方に対するよき理解者であった。このように、曾国藩幕下における二者のつながりは、張裕釗の書法形成を知る上で、重要な鍵をなすものと考えられる。

以上のとおり、張裕釗書「鮑照飛白書勢銘」は張裕釗の書法形成において重要な岐点となるもので、張裕釗の書法形成における背景には曾国藩幕府が大きな働きをなしていた。ここに咸豊年間の帖学の土台の上に碑学を導入した張裕釗のあり方が裏付けられることになる。

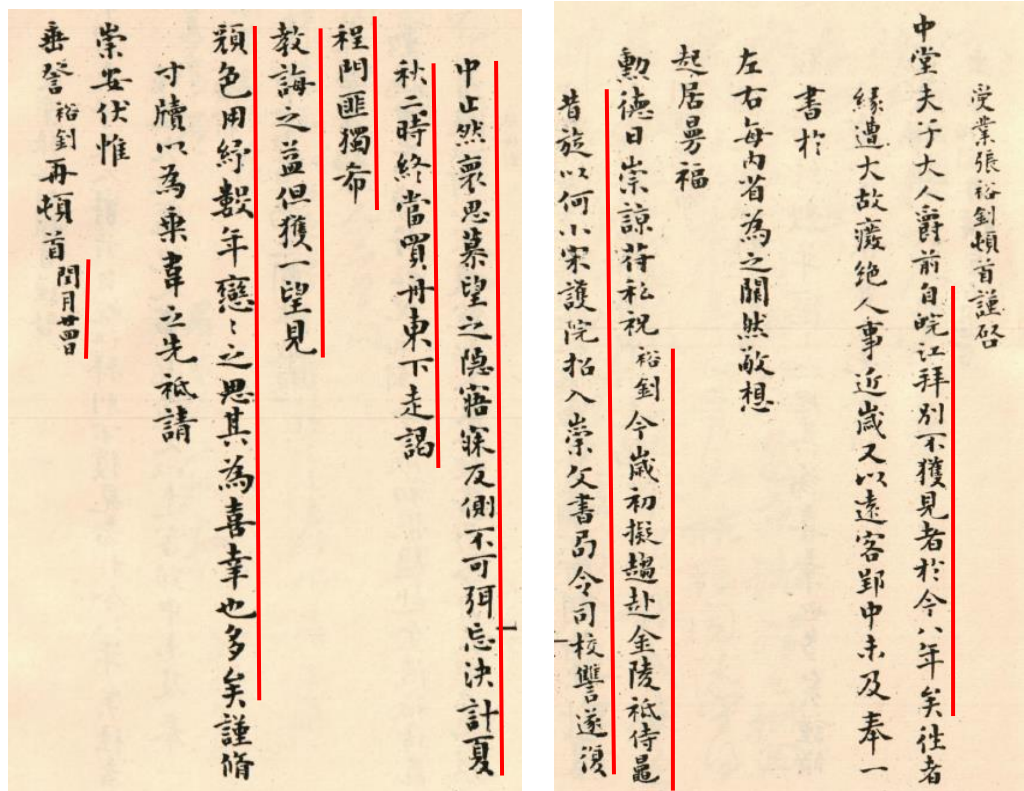


【図1】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治3年推定）（傍線筆者）





【図 2】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 3 年推定）（傍線筆者）

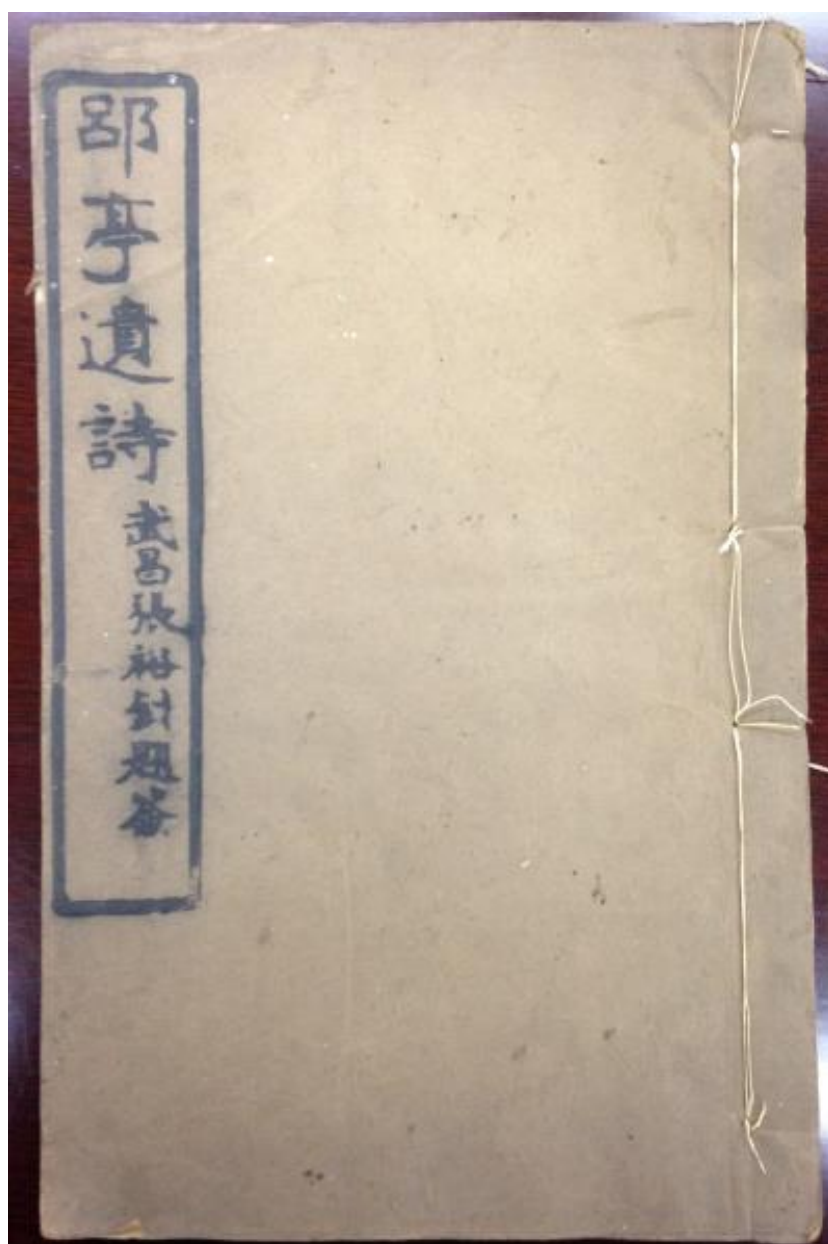


【図 3】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 7 年推定）（傍線筆者）

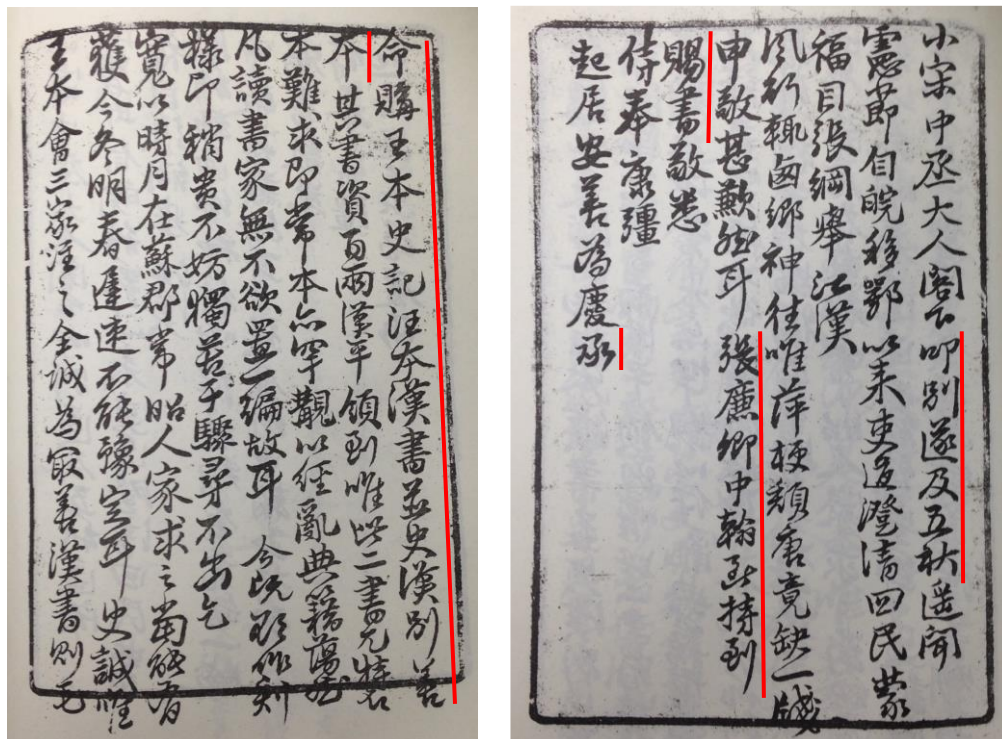


【図4】莫友芝『邵亭詩鈔』（同治7年）（傍線筆者）

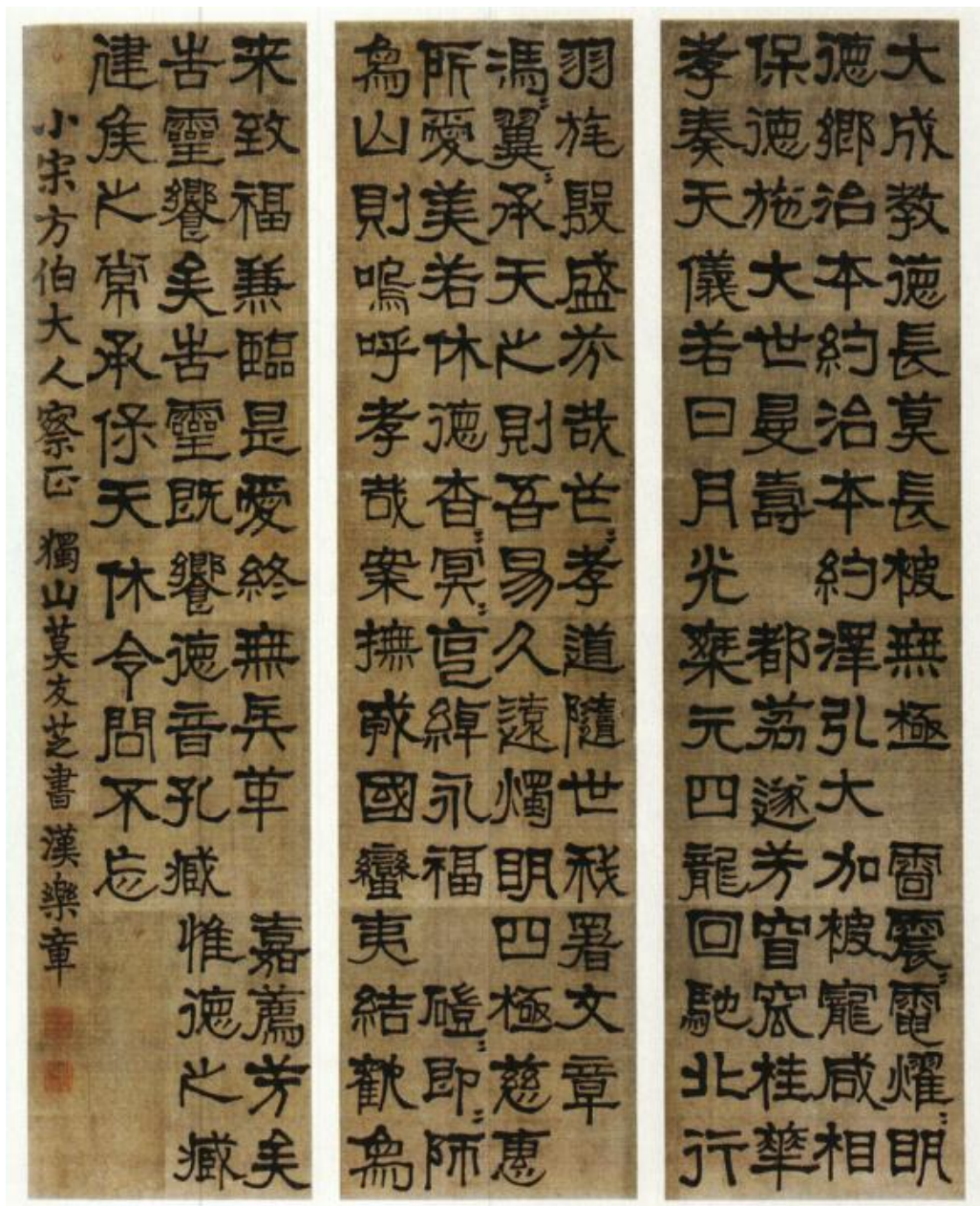




【図 5】莫友芝『邵亭遺詩』（張裕釗題簽）



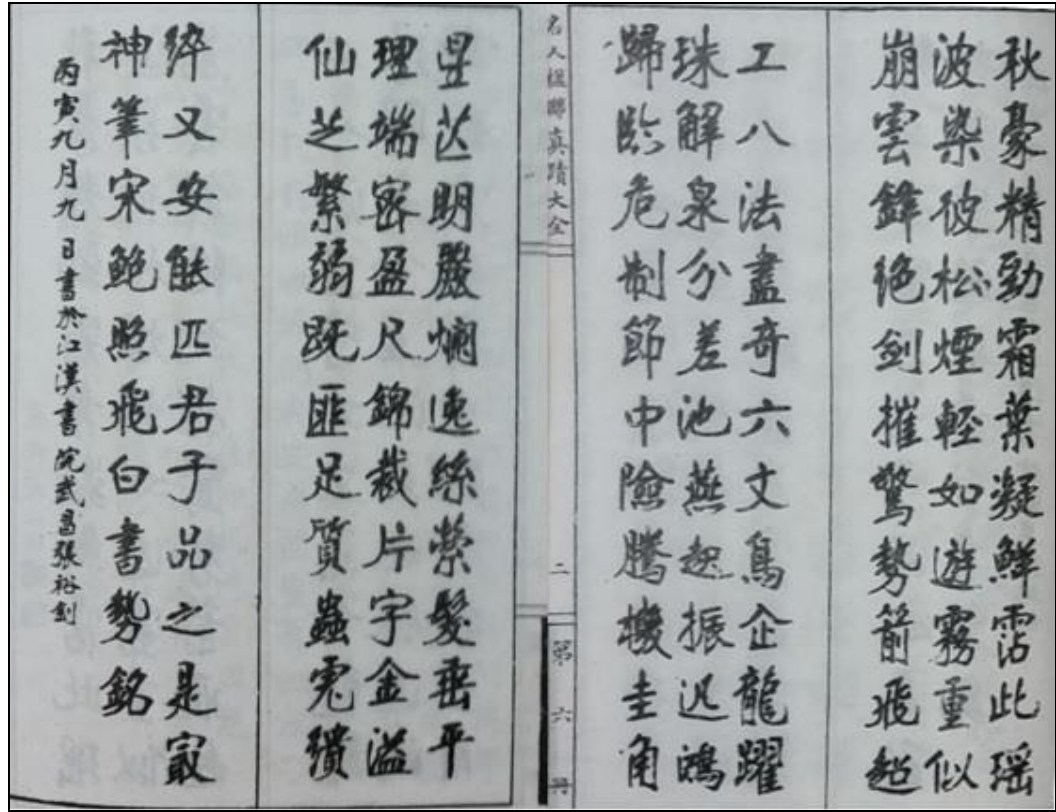
【図6】莫友芝の何璟宛書簡（10月4日）（傍線筆者）



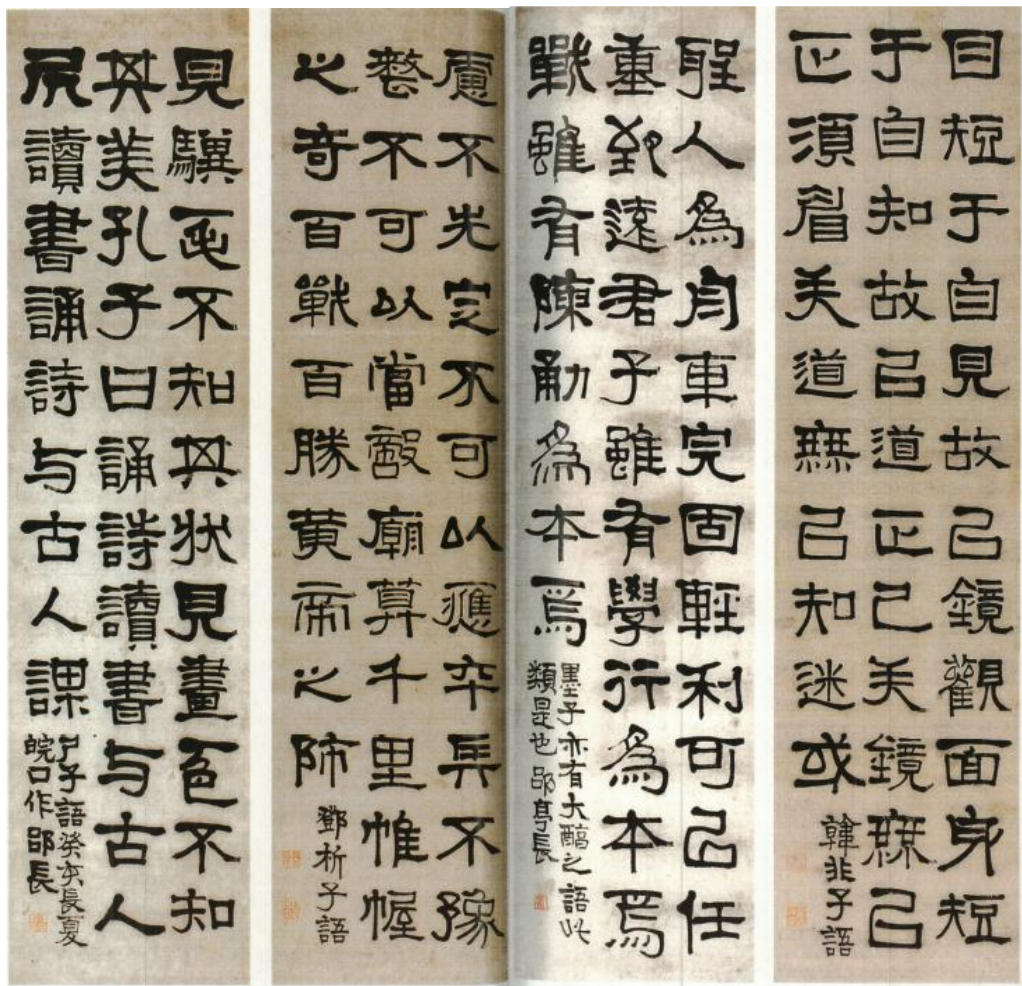
【図 7】 莫友芝の何璟贈書作

「隸書節録漢樂府『安世房中歌』（復原図）」（同治 4 年末推定）



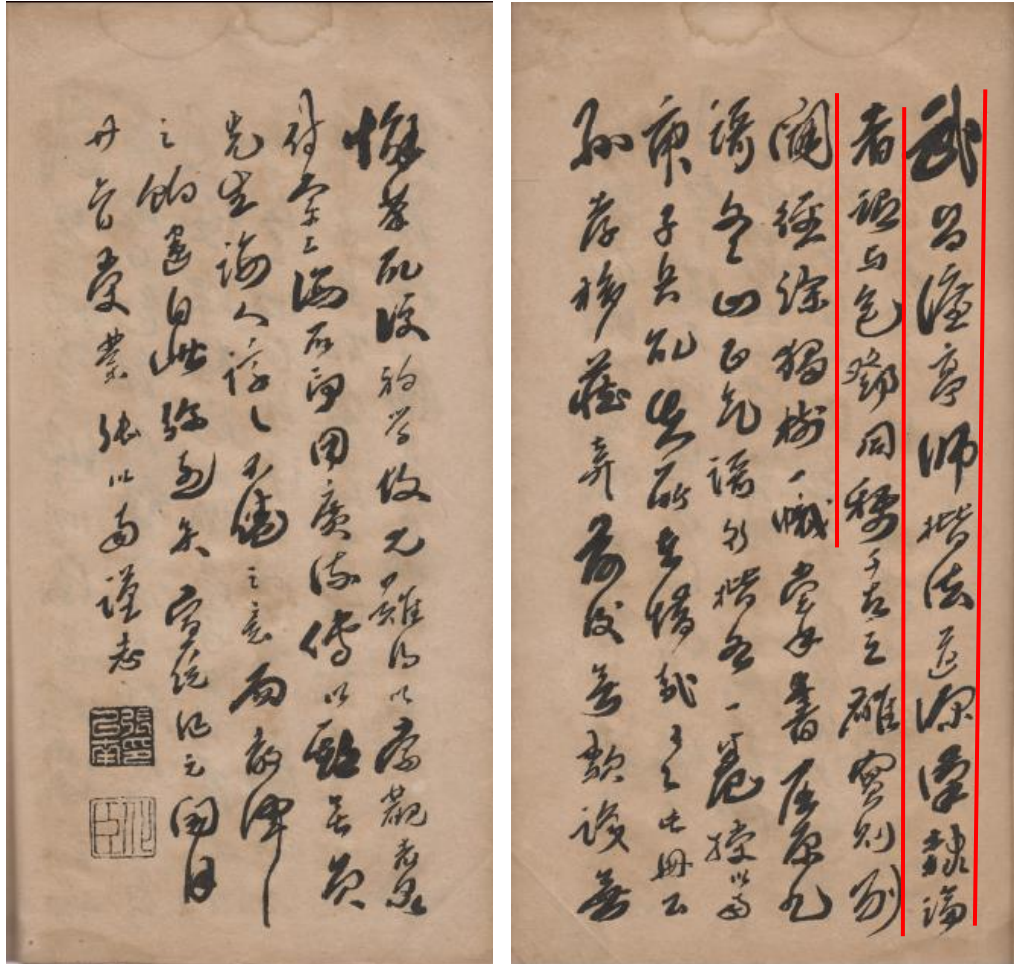


【图 8】張裕釗「鮑照飛白書勢銘」（同治 5 年）

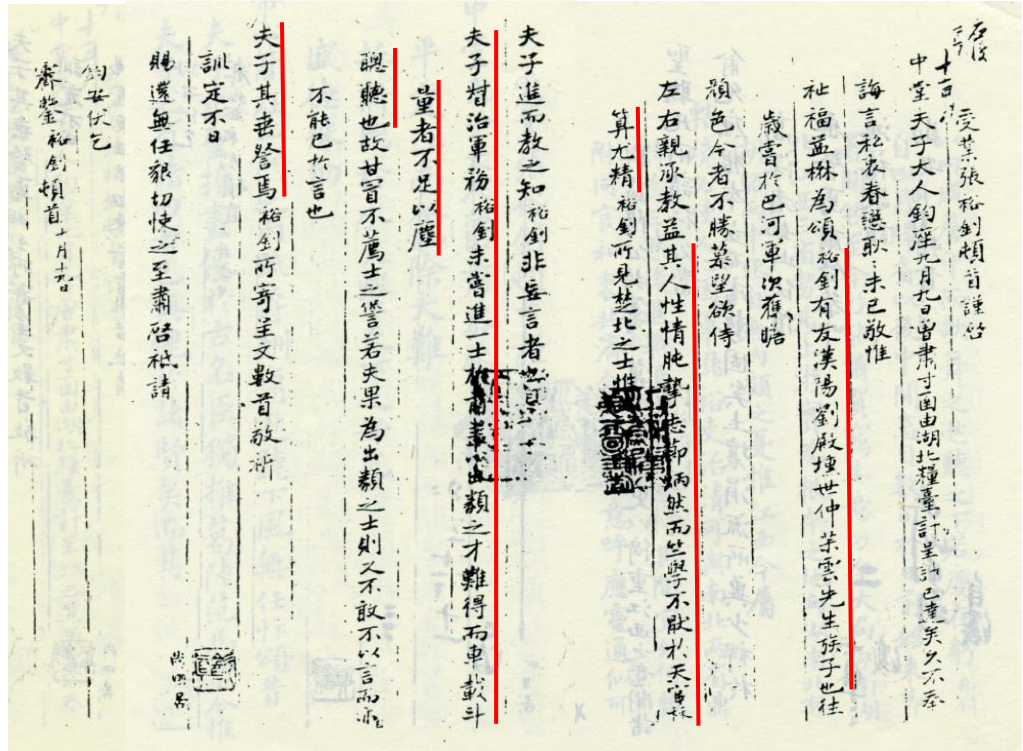


【図 9】莫友芝「諸子語錄」（同治 2 年）





【图 10】張裕釗「千字文」、張以南跋文（張孝移藏）（傍線筆者）



【図 11】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 2 年推定）（傍線筆者）

劉府君墓誌銘  
 君諱傳燾字子佩一字右南湖北漢陽人劉氏故漢陽舊族裕釗時則尚漢陽  
 國子監學正劉君向望學正數行名望隆學正劉君者君之弟曰景雲傳誌  
 者也裕釗乃長官也嘗與學正交往遂不相見及君死君弟向望與裕釗  
 之長子世澤又其後世澤傳世澤者君之子也裕釗與君者及今年  
 冬而世澤屬世澤持所述君事乃徵為銘也之辭於裕釗蓋君之卒也十有三年  
 矣始學正居治經學至精力倦乃歸意有宗諸子之書而君亦三者之以役於其身  
 教於其家與弟間相為師友及君死君弟則作悲痛具家人或以食指  
 解議吳居君曰父母在且痛者弟亦在君死而弟亦死家人乃不敢言展嘗慨學者  
 獨於祿利而尚里師重堂務俗學道先州國某郡人積於官達崇正書院郡城中  
 初受學正者必先讀朱子小學近思錄諸書以臨其始創後規制條教明具與子者祐  
 變於舊矣而君四十四歲卒及亂起書院亦旋廢焉守君者裕釗也其弟君者  
 刻言儒者之學而既早死君嗣以與學正其御之人既致而又始於學之廢與則  
 亦有天焉者而曾祖諱良神諱方行考諱正神祖考皆贈如君弟官君贈君有子三  
 人君於次為長長孫人孺人考恭勤約而教諸子有禮法就養蕪湖也蕪湖久闕於兵  
 燭人見則官不能下而謂世澤曰汝雖有祿於此以養我日睹此乃不義我前時家中官  
 外此世澤深也世澤次五世也世澤初學正君名瑞乃世澤以世澤初君字以咸也元年八月  
 十月明明年十月十五日葬於柏泉居世澤當其葬也未及誌及孺人卒以今年同葬  
 二年二月望日而時以某月日附葬於君之北次於是始來撤銘裕釗既以未得見學正君  
 憾而幸識其諸子而乃銘君而世澤也官官其甚也世澤亦穎也  
 且敏於讀書者一居其能嗣先人之志以昌劉氏乃誠樂焉銘以誌其諸子銘  
 世澤藏於此者是惟君其神為涉降於而家以迪而後之人

【圖 12】張裕釗「劉府君墓誌銘」（同治 2 年推定）（傍線筆者）



悔翁先生左右入書惟  
 眠官万福為頌皖北聞已爾清但未知皖南  
 賊雖見在何安方子日究竟若何私心甚以  
 為念又傳說相季弟六致于王事果尔為  
 以書言之又聞蜀中賊敵少燭而秦中亦勢  
 張鄉間人言如此信不祈  
 丁示知為或黃太守清書而幸見到想貴人多  
 忘事即丹之望家高格也幸 旨俞之否為僥倖  
 得此不惟我楚人之慶即 流寓高賢相之為  
 深冀耳 手此敬請 道安不宣 有十日裕釗叩首

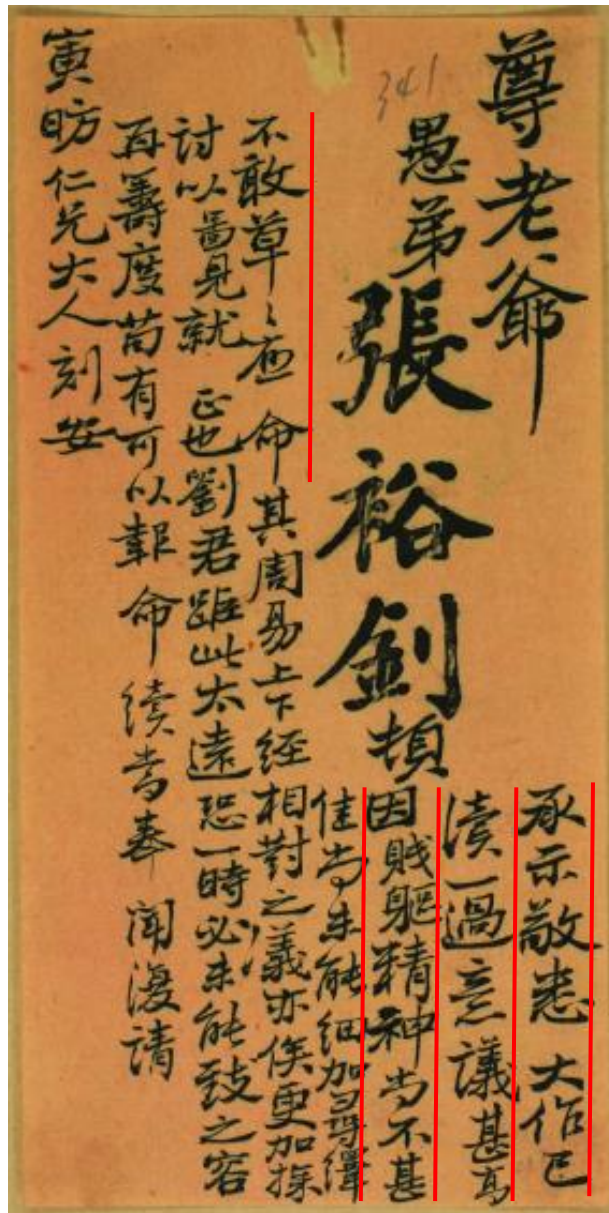
【図 13】張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡

（同治 3 年頃推定）（傍線筆者）

梅邨先生左右以奉  
 手教敬悉是藉檢  
 著福康愉為頌為慰舊僕承  
 受厚及鳥之書收之仁憐之下感佩亦何可之此人所  
 短在獨拙在所長在頗有天良  
 君取節亦可也至  
 尊論所屬口具為言之可也  
 過慮澳中形勢誠也  
 所云但目前恐難其人耳 而人所固極荷  
 雅意此事固早知其不諧然  
 勸之中心藏之矣素復即頌  
 道安惟  
 夷厚不宣張裕釗打首 七月廿一日

【図 14】張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡

（同治 3 年頃推定）（傍線筆者）



【図 15】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2 年推定）（傍線筆者）



寅昉仁先大人左右日前奉  
 手示未及裁復為歉所云種弟竊以為不足介意蓋君子盡  
 其在我者而已且夏說畏讓之已甚恐非所以廣其心而充其氣  
 也韓昌黎云賢不肯存乎己貴與賤禍與福存乎天名聲善惡  
 存乎人存乎己者吾將勉之存乎天存乎人者吾將任彼而不用吾  
 力予其所守者豈不約而易行哉此取昌黎見道真實語觀  
 之則一切於畏之念可以釋然矣大作論東坡不可為人師蓋意於  
 未上焉欲溢而和之則有乘朋友直諫之謨欲有所聞說則未敢言  
 以遠進是以稽留至今乃承 虛衷下問至於再四弟敢不竭其愚  
 且下謂東坡之才忽縱忽逸而不知所本是也然誠若是者不獨不可為師即  
 以家君子兄弟夫婦亦未見盡道而無歉也此蒙之所未安也又前謂才有餘而  
 氣不足夫東坡所慮者道不足也氣不足又其次也 篇末又謂其傲游赤巖  
 正襟危坐之時未嘗不敬竊以為正襟危坐之語文人之辭然耳東坡生平放  
 戲放浪事甚多獨指此一語以證其非不敬亦皆所未安者辱  
 相知深故敢道其狂直必不深罪也漢宋之說它日欲與鍾子勤一書藉  
 題發揮俟作就再就正耳 復清  
 著安惟 諒言不宣 愚弟 裕釗 頓首  
 頃有友人借九教通考梅氏叢書 數理精蘊對種  
 尊受者此書否若無有社為低 賜鴻鈔字弟日持與觀之庶以塞謬言耳

【図 16】張裕釗の蔣光焄（寅昉）宛書簡（同治2年推定）（傍線筆者）

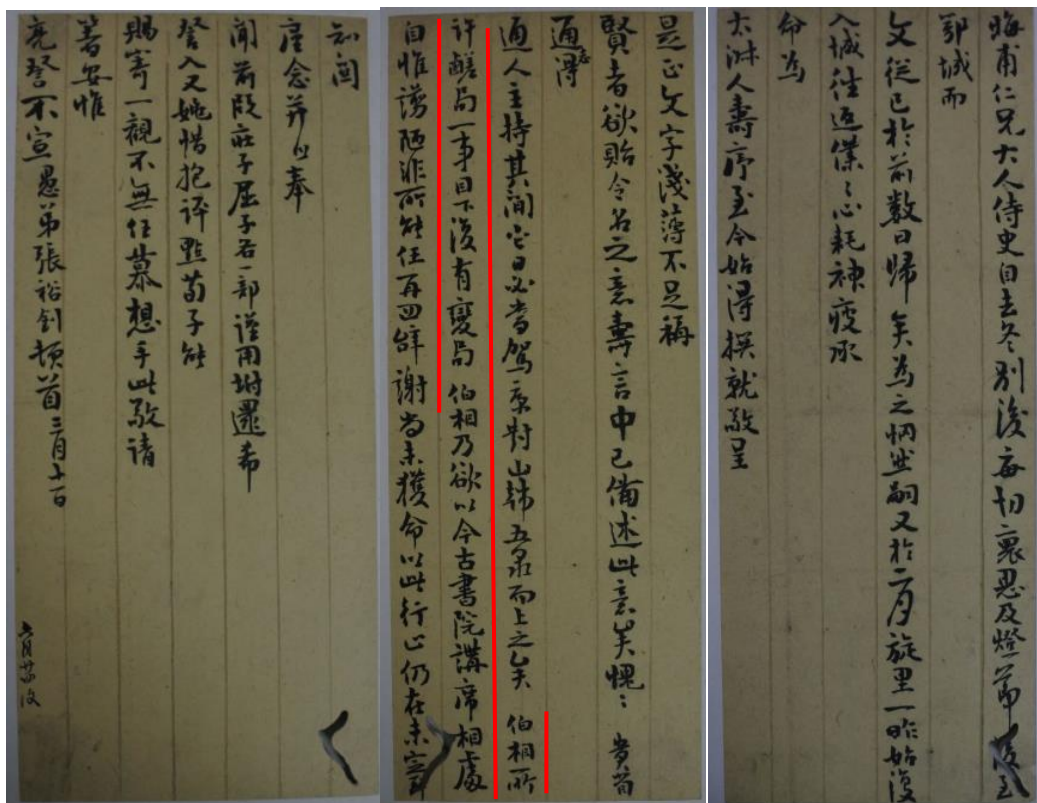
寅昉仁兄大人左右奉讀  
 來示論劉生文及為學為文之道並極精當至  
 謂誦學之弊患在一唱百和者譽無淨尤與高衷相  
 友比輔仁而返日乃無後規勸之義則朋友之道或息  
 矣裕釗每期此於用濟而不可欲以此效諸人則又不敢弱  
 為所不為惟曩者與方子白劉殿壇等以此相敦勉  
 而已此分蓋不可得也後請  
 大安不宣 愚弟張裕釗頓首  
示所云可問彭太常是返白  
言一稿往也

【図 17】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治2～3年推定）（傍線筆者）

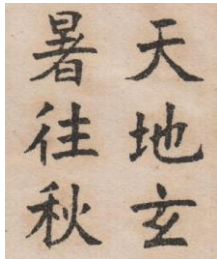
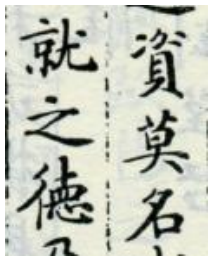
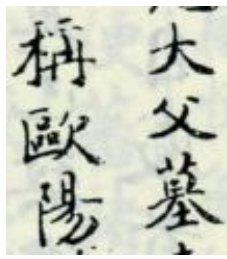



寅翁仁兄大人侍史昨承  
 謔借諸書至以為感晡間當着人祇領也孟子要略不  
 獨父字從古作父其它字亦間有之自軋嘉以來講小學  
 家刻書往如此非別有所取直不過好奇者古耳今即  
 尋課題開封左方此復即請  
 早安不具 愚弟張裕釗書  
 初三日課題 固將朝也  
 尊大老爺


【図 18】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2～3 年推定）（傍線筆者）



【図 19】張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡（同治 4 年推定）（傍線筆者）

張裕釗「小楷千字文」 (若年期、年代不明)	張裕釗の曾国藩宛 書簡① (咸豊8年)	張裕釗の曾国藩宛 書簡② (咸豊8年)
		
曾国藩「行書七言聯」 (未紀年)	何璟「行書七言聯」 (未紀年)	
		

【表1】張裕釗の咸豊時期及び曾国藩・何璟の書作品

張裕釗「雲」	張裕釗「最」	張裕釗「虎」	張裕釗「起」	張裕釗「歸」
				
清 伊秉綬	清 伊秉綬	清 胡澍	六朝 碑文	漢 曹全碑
				

【表2】張裕釗の隸書字形を楷書に応用字例

張裕釗 (同治 5 年)	莫友芝 (同治 2 年)	莫友芝 (同治 4 年末推定)	楊峴 (同治 3 年)
			
何紹基 (同治 3 年)	鄧石如 (嘉慶 7 年)	趙之謙 (同治 4 年)	楊沂孫 (未紀年)
			

【表 3】曾国藩幕府の幕僚及び書人たちの書作品

概括的な印象

張裕釗「鮑照飛白書勢銘」(同治 5 年)

莫友芝「隸書節録諸子語録四條屏」(同治 2 年)

莫友芝「隸書節録漢樂府『安世房中歌』」(同治 4 年末推定)

楊峴「臨張遷碑」(同治 3 年)

何紹基「臨魯相韓勅造孔廟禮器碑」冊 (同治 3 年)

楊峴「臨張遷碑」(同治 3 年)

鄧石如「隸書崔子玉座右銘」(嘉慶 7 年)

楊沂孫「隸書五言詩四屏」(未紀年)



筆法	莫友芝 「安世房中歌」 (同治4年末推定)	莫友芝 「諸子語録」 (同治2年)	張裕釗 「鮑照飛白書勢銘」 (同治5年)
起筆 送筆			
収筆			
転折			
左払い			
ハネ			
乙脚			

【表4】莫友芝・張裕釗の筆法（補助線筆者）

筆法	何紹基	楊峴	趙之謙	楊沂孫
起筆 送筆				
収筆				
転折				
左払い				
ハネ				
乙脚				

【表 5】何紹基・楊峴・趙之謙・楊沂孫の筆法（補助線筆者）

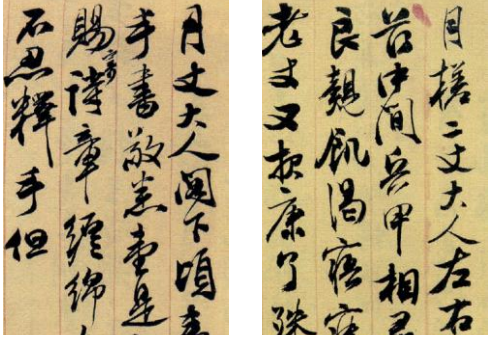
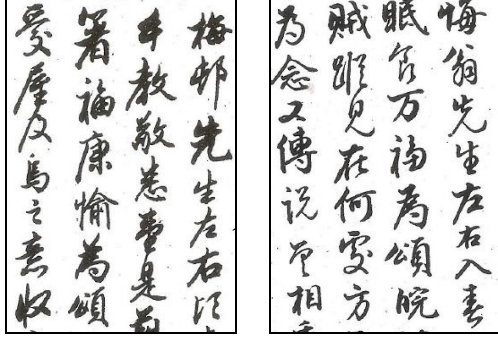
何紹基「臨魯相韓勅造孔廟禮器碑」冊（同治 3 年）

楊峴「臨張遷碑」（同治 3 年）

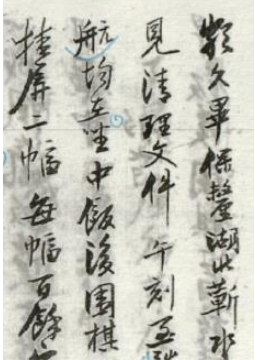
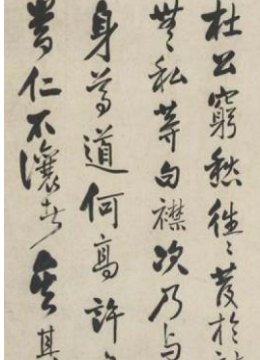
趙之謙「為鶴泉隸書八言聯」（同治 4 年）

「為仲山楷行隸三体書冊」（同治 4 年）

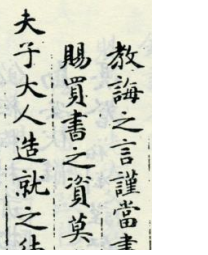
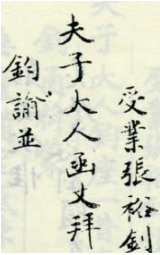
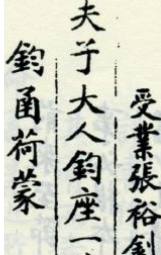
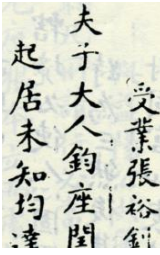
楊沂孫「隸書五言詩四屏」（未紀年）

<p>張裕釗の范志熙（月槎）宛書簡 （咸豐8年）</p>	<p>張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡 （同治3年頃推定）</p>
	
<p style="text-align: center;"><b>左</b></p>	<p style="text-align: center;"><b>左</b></p>

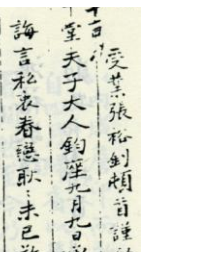
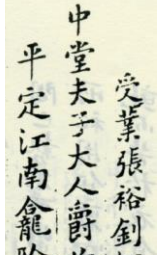
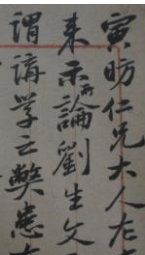
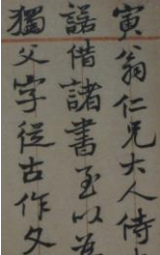
【表6】咸豐時期・同治前半期における張裕釗の小行書の書風比較

<p>曾国藩「手写日記」</p>	<p>曾国藩「四家詩評四屏」</p>
	

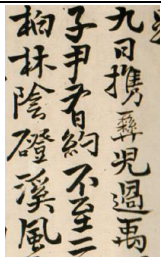
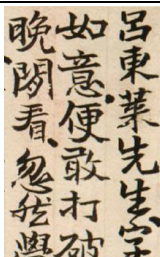
【表7】曾国藩の行書

張裕釗の曾国藩宛書簡（第三～第六、咸豐9～10年）			
			
子		子	

【表8】張裕釗の咸豐期の小楷書

張裕釗の曾国藩・蔣光焄宛書簡（同治2年以降推定）			
			
子		子	

【表9】張裕釗の同治前半期の小楷書

莫友芝「楷書詩和陶詩卷」（咸豐9年）	莫友芝「行書詩箋合裱橫卷」（咸豐11年）
	

【表10】莫友芝の小楷書



## 図版典拠

### 【図 1】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 3 年推定）（傍線筆者）

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

### 【図 2】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 3 年推定）（傍線筆者）

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

### 【図 3】張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 7 年推定）（傍線筆者）

張裕釗「致曾国藩」、陶湘『昭代名人尺牘小伝続集』卷 18、26 頁（文海出版社、1980 年）、総 1327～1328 頁。

### 【図 4】莫友芝『邵亭詩鈔』（同治 7 年）（傍線筆者）

王紅光主編『貴州省博物館館蔵精選—莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範大学出版社、2014 年 12 月）、145 頁。

### 【図 5】莫友芝『邵亭遺詩』（張裕釗題簽）

莫友芝「莫氏遺書不分卷」、三冊の一冊である『邵亭遺詩』、登録号：索 15024、貴州省図書館蔵。

### 【図 6】莫友芝の何璟宛書簡（10 月 4 日）（傍線筆者）

王迪誨、嚴宝善編『清代名人信稿 附小伝』「莫友芝致小宋書信」（浙江古籍出版社、1987 年 12 月）、285～286 頁。

【図 7】 莫友芝の何璟贈書作

「隸書節録漢樂府『安世房中歌』（復原図）」（同治 4 年末推定）  
王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範  
大学出版社、2014 年 12 月）、53 頁。

【図 8】 張裕釗「鮑照飛白書勢銘」（同治 5 年）

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第 6 冊（世界書局、1925 年再  
版）。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998 年 3 月）、  
344～345 頁。

【図 9】 莫友芝「諸子語録」（同治 2 年）

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範  
大学出版社、2014 年 12 月）、54～55 頁。

【図 10】 張裕釗「千字文」、張以南跋文（張孝穆藏）（傍線筆者）

張裕釗『張廉卿先生楷書千字文』（奥付なし）。

【図 11】 張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 2 年推定）（傍線筆者）

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、  
南京図書館蔵）。

【図 12】 張裕釗「劉府君墓誌銘」（同治 2 年推定）（傍線筆者）

張裕釗「劉府君墓誌銘」、浙江図書館古籍部蔵。書号：D605176、通号：  
XZ13717。

【図 13】張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡（同治 3 年頃推定）（傍線筆者）  
文物編輯委員会編『書法叢刊』第 28 輯（文物出版社、1991 年 12 月）、  
88 頁。

【図 14】張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡（同治 3 年頃推定）（傍線筆者）  
文物編輯委員会編『書法叢刊』第 28 輯（文物出版社、1991 年 12 月）、  
89 頁。

【図 15】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2 年推定）（傍線筆者）  
浙江図書館古籍部蔵。書号：D605139、通号：XZ13680。

【図 16】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2 年推定）（傍線筆者）  
浙江図書館古籍部蔵。書号：D605168、通号：XZ13709。

【図 17】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2～3 年推定）（傍線筆者）  
惟曩者与方子白、劉殿壘嘗以此相敦勉而已、此外蓋不可得也。  
陳烈主編『小莽蒼蒼齋蔵清代学者書札』下（人民文学出版社、2013 年 7  
月）、789 頁。

【図 18】張裕釗の蔣光燾（寅昉）宛書簡（同治 2～3 年推定）（傍線筆者）  
陳烈主編『小莽蒼蒼齋蔵清代学者書札』下（人民文学出版社、2013 年 7  
月）、790 頁。

【図 19】張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡（同治 4 年推定）（傍線筆者）  
『蔣元卿旧蔵晚清和近代名人手札』（安徽省安慶市図書館古籍部蔵）

## 表図版の典拠

### 【表 1】張裕釗の咸豊時期及び曾国藩・何璟の書作品

○張裕釗「小楷千字文」（若年期、年代不明）

張裕釗『張廉卿書千字文楷書』第 9 版（文明書局、1935 年 3 月）

○張裕釗の曾国藩宛書簡①（咸豊 8 年）

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

○張裕釗の曾国藩宛書簡②（咸豊 8 年）

『陶風楼藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

○曾国藩「行書七言聯」（未紀年）

陳烈編『小莽蒼蒼齋藏清代学者法書選集（続）』（文物出版社、1999 年）、139 頁。

○何璟「行書七言聯」（未紀年）

Find Art 搜芸搜（2016 年 5 月 4 日閲覧）

<http://artistsh.artxun.com/shouye.html>

### 【表 2】張裕釗の隸書字形を楷書に応用字例

○張裕釗「雲」「最」「虎」「起」「歸」

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第 6 冊（世界書局、1925 年再

版)。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』(湖北美術出版社、1998年3月)、344～345頁。

○清伊秉綬、清胡澍、六朝碑文、漢曹全碑

書法字典 <http://www.shufazidian.com/> (2018年9月6日閲覧)

**【表3】 曾国藩幕府の幕僚及び書人たちの書作品**

○張裕釗「鮑照飛白書勢銘」(同治5年)

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第6冊(世界書局、1925年再版)。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』(湖北美術出版社、1998年3月)、344～345頁。

○莫友芝「隸書節録諸子語録四條屏」(同治2年)

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』(広西師範大学出版社、2014年12月)、54～55頁。

○莫友芝「隸書節録漢樂府『安世房中歌』」(同治4年末推定)

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』(広西師範大学出版社、2014年12月)、53頁。

○楊峴「臨張遷碑」(同治3年)

高木聖雨編集『楊峴の書法』(二玄社、1992年)、4頁。

○何紹基「臨魯相韓勅造孔廟禮器碑」冊(同治3年)

産経国際書会『中国湖南省博物館蔵何紹基展』(産経新聞社、2004年)、

21 頁。

○趙之謙「為鶴泉隸書八言聯」(同治 4 年)、「為仲山楷行隸三体書冊」(同治 4 年)

劉正成主編『中国書法全集 趙之謙卷』(榮宝齋、2004 年)、82 頁・85～86 頁。

○鄧石如「隸書崔子玉座右銘」(嘉慶 7 年)

『中国法書選 5-6 鄧石如集』「隸書崔子玉座右銘」(二玄社、1990 年 5 月)、30～31 頁。

○楊沂孫「隸書五言詩四屏」(未紀年)

静妙軒主人編『静妙軒蔵清代民国書法選』(遠東出版社、2012 年)、85 頁。

#### 【表 4】莫友芝・張裕釗の筆法（補助線筆者）

○莫友芝「隸書節録漢樂府『安世房中歌』」(同治 4 年末推定)

王紅光主編『貴州省博物館館蔵精選—莫友芝書法篆刻作品集』(広西師範大学出版社、2014 年 12 月)、53 頁。

○莫友芝「隸書節録諸子語録四條屏」(同治 2 年)

王紅光主編『貴州省博物館館蔵精選—莫友芝書法篆刻作品集』(広西師範大学出版社、2014 年 12 月)、54～55 頁。

○張裕釗「鮑照飛白書勢銘」(同治 5 年)

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第6冊（世界書局、1925年再版）。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998年3月）、344～345頁。

【表5】何紹基・楊峴・趙之謙・楊沂孫の筆法（補助線筆者）

○何紹基「臨魯相韓勅造孔廟禮器碑」冊（同治3年）  
産経国際書会『中国湖南省博物館蔵何紹基展』（産経新聞社、2004年）、21頁。

○楊峴「臨張遷碑」（同治3年）  
高木聖雨編集『楊峴の書法』（二玄社、1992年）、4頁。

○趙之謙「為鶴泉隸書八言聯」（同治4年）「為仲山楷行隸三体書冊」（同治4年）  
劉正成主編『中国書法全集 趙之謙卷』（栄宝齋、2004年）、82頁・85～86頁。

○楊沂孫「隸書五言詩四屏」（未紀年）  
静妙軒主人編『静妙軒蔵清代民国書法選』（遠東出版社、2012年）、85頁。

【表6】咸豊時期・同治前半期における張裕釗の小行書の書風比較

○張裕釗の范志熙（月槎）宛書簡（咸豊8年）  
北京師範大学主編『清代名人書札』（北京師範大学出版社、2009年1月）、381～384頁。

○張裕釗の汪士鐸（梅村）宛書簡（同治2年以降推定）  
文物編輯委員會編『書法叢刊』第28輯（文物出版社、1991年12月）、  
88～89頁。

**【表7】曾國藩の行書**

○曾國藩「手寫日記」  
『中國史學叢書第12種 曾文正公手寫日記』（學生書局、1965年）

○曾國藩「四家詩評四屏」  
國立故宮博物院書畫典藏資料檢索系統／贈書413(2018年9月6日閱覽)  
[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=33967](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=33967)

**【表8】張裕釗の咸豐期の小楷書**

○張裕釗の曾國藩宛書簡（第三～第六、咸豐9～10年）  
『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立國學圖書館出版、1930年、  
南京圖書館藏）。

**【表9】張裕釗の同治前半期の小楷書**

○張裕釗の曾國藩宛書簡（同治2年以降推定）  
『陶風樓藏名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立國學圖書館出版、1930年、  
南京圖書館藏）。

○張裕釗の蔣光燾宛書簡（同治2年以降推定）



陳烈主編『小莽蒼蒼齋藏清代學者書札』下（人民文學出版社、2013年7月）、789～790頁。

**【表 10】莫友芝の小楷書**

○莫友芝「楷書詩和陶詩卷」（咸豐9年）

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（廣西師範大學出版社、2014年12月）、72頁。

○莫友芝「行書詩箋合裱橫卷」（咸豐11年）

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選—莫友芝書法篆刻作品集』（廣西師範大學出版社、2014年12月）、70～71頁。



### 第三章 同治後半期・光緒前半期における張裕釗書法

#### 序

同治後半期（8～13年、1869～1874）・光緒前半期（元～7年、1875～1881）において、張裕釗は鄂城書局・塩局・金陵（現在の南京）鳳池書院に務めていた。

同治後半期、張裕釗が鳳池書院の山長（同治10年～光緒7年。山長とは現在の大学の学長を指す）となった時期の活動については先行研究の蓄積があり<sup>1</sup>、曾国藩の幕僚としての交流実態が窺える資料も豊富であり、書学についても見るべきものがある。

本章では、曾国藩・莫友芝の日記や書簡を基本資料とし、この時期の張裕釗が幕府生活において、当時の官僚たちとどのように交わり、また、それによって張の書法はどう展開したか、という問題について考察したい。

魚住和晃氏は、張裕釗の中字碑碣書作品を第一期から第四期に時代区分し、光緒初年の作を第一期として分類する。その区分の根拠は、張裕釗の伝記資料「哀啓」に「光緒初年、興化劉融齋宮允、称先嚴文章為当代之冠、書法則本朝一人耳。」とあり、劉熙載（1813～1881、号は融齋、清末の学者・批評家。）が張裕釗を書法において本朝（清

---

<sup>1</sup> 張裕釗が鳳池書院の山長となった文献について、先行研究には以下のように挙げられる。  
①序章注82、魚住氏著「二 張廉卿の流転について／二 張裕釗の書院主講転任のあと」、77～79頁。  
②序章注61、魚住氏著「第三章 張裕釗の流転について／二 鳳池書院主講」、227～231頁。

朝)の第一人者と評していることによる。また、第一期から第三期に至る過程で、第二期を過渡期とする一方、蓮池書院時代(光緒9年～14年、1883～1888)を第三期とし、張の書作はこの時代に大作が集中することから、これを「張裕釗書法の大成期とすることができよう」と述べている。更に江漢書院以降の最晩年を第四期(光緒15年～20年、1889～1894)として分類し、第四期は第三期の書法に基づきつつ、張裕釗自身が「張裕釗書法の変容の意味を考えていた」とも述べている<sup>2</sup>。

陳啓壯氏は同治6年(1867年)に書かれた中楷「李剛介公殉難碑記」を基準として、その前後を早期・中期に分類する。中期は同治8年から光緒8年(1869～1882)にかけてであるが、張裕釗が曾國藩の幕府や金陵鳳池書院に滞在していたこの時期は、碑学が流行していた時期にあり、陳氏は帖学から碑学に転向する歴史的契機にあって、書風も多く変化したという結論を導いている。晩期の区分(光緒9年～20年、1883～1894)は、蓮池書院(光緒9～14年の在任)への就任から亡くなるまでとする<sup>3</sup>。

また、この時期の代表作について魚住氏は「吳母馬太淑人祔葬誌」・「張樹珊墓誌銘」(光緒4年)・「金陵曾文正公祠堂修葺記」・「屈子祠堂後碑」を挙げる。陳氏は「吳徵君墓誌銘」・「吳母馬太淑人祔葬誌」・「黃孺人墓誌銘」(光緒元年～5年)・「吳蘭軒墓表」・「張公蔭穀墓碑」(光緒6年)・「張樹珊墓誌銘」(光緒6年)・「金陵曾文正公祠堂修葺記」・「屈子祠堂後碑」に言及している。なお、「張樹珊墓誌銘」・「黃孺人墓誌銘」・「張公蔭穀墓碑」三つの碑碣作品の制作年代には論争があるが、ここでは仔細を割愛する。

---

<sup>2</sup> 序章注 61、魚住氏著、159頁。

<sup>3</sup> 序章注 75、陳氏著、188～228頁。

更に、その作品の位置付けや評価について、魚住氏は「吳母馬太淑人祔葬誌」に見る 29 個の異体字による古典字例を根拠に、唐碑でも歐陽詢書法を基調としたと結論付ける。また、「金陵曾文正公祠堂修葺記」・「屈子祠堂後碑」の起筆では欧法に対する固執も払拭されたとし、すべて藏鋒に改められ第三期に比べていずれも線が細くなったことが特質に挙げられると指摘している<sup>4</sup>。陳氏はこの時期の 8 件の碑碣作品に共通する点として、帖学をやめ碑学に転換することで、唐楷による長方形の外形からそれ以前の碑を学んで扁平な外形に変わり、用筆は唐楷から篆隸に基づいたものとなり、外方内円が特徴となったとする。また、風格にも変化があり、新しい変化を追求する意識が高まっていたため、この時期の作品の作風は多様であったと指摘している<sup>5</sup>。

これらの先行研究の時期区分は張の行跡と書風の照合をしておらず、また、その書風の変化の契機についても考察していないため、再考の余地が残っている。

本章では、張裕釗が同治後半期において莫友芝を中心とした曾國藩の幕僚たちと碑帖による交流を行い、多数の碑帖を目にした影響を重視する。特に莫友芝が所蔵していた梁碑を目にしたことが、彼の書法の基盤となったと想定し、その経緯から論じていくことにしたい。

莫友芝から書学観念を継承し、新たに梁碑に興味を持つに至った張裕釗は、中字書作では梁碑より示唆を得て、それらの碑の書法上の特徴を吸収・融合しながら、それを乗り越えて独自の書風を展開したのではないかという仮説のもとに、書風の分析を試みたい。

<sup>4</sup> 序章注 61、魚住氏著、167 頁。

<sup>5</sup> 「筆法處於唐楷轉篆隸筆法的過渡期、結體總體趨扁方。」とある。序章注 75、陳氏著、195～211 頁。

## 第一節 同治後半期における莫友芝との交流

同治後半期にかけて曾国藩の幕府を往来した官僚たちは、碑帖の収蔵・鑑賞について語り合っており、莫友芝はその代表的人物として活躍していた。前章では、同治前半期にかけて張裕釗が曾国藩の幕下におり、莫友芝との繋がりがあったことを明らかにした。本節も引き続き、同治後半期 7 年（1868）8 月以降における、張裕釗・莫友芝を中心とした碑帖交流の概況について確認する（第一項）。その上で、梁碑 10 点（「梁太祖文皇帝（蕭順之） 梁建陵東西闕碑」、「梁安成康王 蕭秀東西碑 碑額」、「梁安成康王 蕭秀東西碑 碑陰」、「梁始興忠武王 蕭憺碑 碑額 碑陽」、「梁吳平忠侯 蕭景神道石柱題額」、「梁臨川惠王 蕭宏神道二石柱題額」、「梁南康簡王 蕭績神道二石柱題額」、「梁建安敏侯 蕭正立石柱二」、「梁新渝寛侯 蕭暎西闕碑」、「梁瘞鶴碑」）に対する書学が継承されたことを明らかにしてゆく（第二項）。

### 一、 莫友芝と張裕釗の交友関係

同治後半期（8～13 年）にかけて、張裕釗は莫友芝との交流を活発化させた。その活動は具体的にどのようなものであったのだろうか。

まず、同治 8 年（1869）1 月 19 日から 2 月 6 日に至るまで、両者が鄧尉（蘇州）まで同行し、遊覧したことが莫友芝の日記に記載されている<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理『莫友芝日記』に見られる莫と張の交友は、以下の通りである。

同治 8 年 1 月 19 日の条に「張廉卿自杭州還、即訂以廿一日偕游鄧尉。」（263 頁）。同年 1 月 22 日の条に「吳広庵招偕廉卿、清卿晚飲。」（263 頁）。同年 1 月 23 日の条に「偕廉卿登舟、及闔門水閣。」（264 頁）。同年 1 月 25 日の条に「一時許、廉卿乃下、誇其所得、謂東可望海、西可見天目諸山、大湖如村落汚池耳。」（264 頁）。同年 1 月 27 日の条に「廉卿欲登虎丘、泛出山塘觀花市。入山至千人石上、觀顯徳陀羅尼石幢。」（265 頁）。同年 1 月 29 日の条に「廉卿趨為作濂亭榜、且索書去冬贈詩於冊。」（265 頁）。同年 2 月 2 日「偕廉卿過眉生。」（265 頁）。同年 2 月

またこの間に書作や書物を介して、書の交流を盛んにし、書において積極的に自身の進むべき方向を向いていたことが窺える。こうした活動を裏付ける資料として莫友芝の『邵亭遺詩』を挙げることができる。その詩の一つに「贈張廉卿裕釗中書四首、時自白門聯舟出、高宝間累旬、偕渡江及吳会、廉卿復為浙遊。((同治8年、1869)、張廉卿裕釗中書に四首詩を贈った。その際に白門(南京)より船で発ち、高(高淳)、宝(宝応)間で長く過ごした。共に、江を渡り吳会(紹興)に至り、廉卿(張裕釗)はまた浙(浙江)に戻って遊覧した。)」<sup>7</sup>と題するものがある。また、張裕釗の「莫子偲墓誌銘」にもその経緯を言及しているものがあり<sup>8</sup>、この旅が両者にとって意義深いものであったことが分かる。

それから、同治9年3月に莫友芝は鄂城まで移動していた。莫友芝は同治9年3月1日の日記に「自皖開行、初六日凌晨始至鄂、泊於鮎魚套口。(皖(安徽)から渡航し、6日の払暁に鄂(湖北・武昌)に着いた。鮎魚套口に停泊している。)」<sup>9</sup>と述べている。さて、莫友芝の日記には、湖北幕府での官僚たちが張裕釗に仕事を紹介した話題に触れている。例えば、同治9年3月7日には以下の記述がある。

謁李相国、呈舟中所擬征黔之事宜書、並賀李中丞署鄂督、又謁郭遠堂中丞。三公皆以此間新建文昌書院為言、謂可當留主講席、並力辞之、而举張廉卿自代。<sup>10</sup>

李相国(李鴻章)を訪ね、船中で計画した黔を征討する文書を呈上

---

5日の条に「又檢付廉卿新購王延喆刊史記兩殘本。」(265頁)。同年2月6日の条に「送廉卿登舟往上海。」(265頁)。

<sup>7</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理「贈張廉卿裕釗中書四首、時自白門聯舟出高、宝間累旬、偕渡江及吳会、廉卿復為浙遊」、同治8年の詩文、445頁。

<sup>8</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「莫子偲墓誌銘」、142頁に「明年、復來吳、与子偲益買舟、遍覽靈巖石樓石壁之勝、觀梅於鄧尉。」とある。

<sup>9</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治9年3月1日、274頁。

<sup>10</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治9年3月7日、274頁。

し、また李中丞（李瀚章）の湖広総督就任のお祝いをして、更に郭遠堂中丞（郭柏蔭）を訪問した。三公の皆がこの間に新たに建てられた文昌書院のことを話題とし、主講の席に留まるよう求めたが、これを固辞して代わりに張廉卿のことを推薦した。

文中の李相国は李鴻章（1823～1901）であり、同治7年から8年（1868～1869）は湖広総督在任中であつた。また、李中丞は李鴻章の兄・李瀚章（1821～1899）であり、湖広総督の就任期間は李鴻章の後、同治9年から光緒元年にかけて（1870～1875）であつた<sup>11</sup>。莫友芝は張裕釗に仕事を紹介し、張裕釗を尊敬していた様子が窺われる。

一週間後となる同治9年3月15日、莫友芝は張裕釗と再会し、張裕釗は文昌書院の主講を遠慮したいと莫友芝に伝えた。さらに張と莫の共通の知人を介して、お互いに書物の売買の依頼を行っている。そして、同年3月24日に莫友芝は漢陽城に移動することになった<sup>12</sup>。その折の莫友芝の書作も残されており、題跋によれば、「廉卿老兄己巳春在吳門偕游鄧尉。即泛舟還鄂留。此扇吾篋中匝一年、我舟及武昌乃為書。莫友芝。（廉卿老兄（張裕釗）とは己巳（同治8年）春に吳門（蘇州）におり、一緒に鄧尉に遊んだ。その後、彼は船に乗り鄂（湖北）に戻った。この扇子は私の箱に蔵して一年になるが、船が武昌に至った際に廉卿のため書いた。莫友芝。）（図1）」と記しており、両者の交遊を裏付けるものとなっている。この作は同治9年3月に書かれたものと推定される。

<sup>11</sup> 李鴻章、李瀚章が湖広総督の在任期間帯について、「中央研究院歴史語言研究所／人名權威人物伝記資料庫」を参照。（2020年3月31日閲覧）

李鴻章、李瀚章：[http://archive.ihp.sinica.edu.tw/ttsweb/html\\_name/search.php](http://archive.ihp.sinica.edu.tw/ttsweb/html_name/search.php)

<sup>12</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治9年3月15日の条に「張廉卿、洪魯軒招午飲。（中略）廉卿亦欲辞此書院。力勸其就、尚遲疑。」（274頁）とある。同年3月23日の条に「洪魯軒為買『說文字原』一冊、留錢九千文、並付廉卿、待轉寄。」（275頁）とある。同年3月24日の条に「開舟泊漢陽城下、李相渡江泊漢口。」（275頁）とある。



このように莫友芝の日記や書作から、両者が鄂城で会った話題が確認でき、この時期は両者にとって、思想や書学の交流においても重要な時点であったと考えられる。

なお、翌月になって張裕釗は塩局に勤めることになった。同治9年4月26日に曾国藩が李瀚章に宛てた書簡には「張廉卿近聞改入塩局、薪水尚足自給否？（最近、張廉卿は改めて塩局に入ったと聞きました。給料は足りているでしょうか。）」<sup>13</sup>とあり、曾国藩は張裕釗の生活費について気遣っていることが窺われる。

ところで、張裕釗と莫友芝の緊密な関係について、共通の幕僚である黎庶昌の「莫徵君別伝」には以下のように述べられている。

客文正者逾十年。江南底定、寓妻子金陵。遍遊江淮吳越間、盡交其魁碩豪彦、與南匯張嘯山文虎、江寧汪梅村士鐸、儀徵劉伯山毓崧、海寧唐端甫仁寿、武昌張廉卿裕釗、江山劉彦清履芬数輩尤篤。其名益高、所至求書者、屐履逢迎。<sup>14</sup>

（莫友芝は）曾国藩のもとで10年余り滞在した。江南（南京）は平定され、妻や子どもを金陵に住まわせ、自身は長江・淮河・吳越の間にかけて遍遊しながら、才智に優れる学者と交友し、南匯の張嘯山文虎、江寧の汪梅村士鐸、儀徵の劉伯山毓崧、海寧の唐端甫仁寿、武昌の張廉卿裕釗、江山の劉彦清履芬などとの関係は甚だ深かった。彼等の名声は益々高まり、書を求める者は多くなった。

<sup>13</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、第31冊、書信10、「復李瀚章」曾国藩の李瀚章宛書簡、同治9年4月26日、198～199頁。

<sup>14</sup> 黎庶昌『拙尊園叢稿・外編』卷4「莫徵君別伝」。『続修四庫全書』集部、第1561冊（上海古籍出版社、1997年）、346頁。

曾国藩の幕僚たちにおいて莫友芝と張裕釗は関係を深め、互いに強い繋がりを持ったことは、この黎庶昌の言のとおりと考えられる。

以上によれば、同治後半期にかけて生活が不安定であった張裕釗は、莫友芝や曾国藩から種々の支援を受けていたと推測される。同治8年1月19日から2月6日の間は蘇州で、また同治9年3月6日から同月24日の間は鄂州で、張と莫が緊密な関係を築くことができたことは、こうした支援を予測させるのに十分である。こうした支援とともに、張裕釗は以下のように、広い書学の門を叩くことになったと推測する。

## 二、 曾国藩の幕府における梁碑の過眼

ここでは同治7年8月以降、張裕釗が曾国藩の幕府で梁碑を過眼した経過について検討する。

莫友芝の日記において梁碑に初めて言及したのは同治7年7月26日である。26日の内容によれば、「定明日游栖霞、藉訪梁碑。(明日栖霞に遊覧するついでに梁碑を訪れよう。)」<sup>15</sup>とあり、翌日の27日には、莫友芝は栖霞を実際に訪れ、最初に現地調査が行われたことが分かる。この時期に盛んに調査が行われていたことは曾国藩・莫友芝・張文虎(1808～1885年、字孟彪、曾国藩の幕僚)の日記などによっても窺える。例えば、莫友芝の日記における同治7年7月27日から8月14日に至るまでの記事には連続して梁碑を訪れた記録もいくつか残っている<sup>16</sup>。その内

<sup>15</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治7年7月26日、254頁にある。同治7年7月27日の条、254頁とある。同年7月28日の条、256頁とある。同年7月29日の条、256頁とある。同年8月4日の条、256頁とある。同年8月11日の条、257頁とある。同年8月12日の条、257頁とある。同年8月14日の条、257頁とある。

<sup>16</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治7年7月27日の条、254頁とある。同年7月28日の

容は以下のようである。

同治 7 年 7 月 27 日

得梁吳平忠侯蕭景石柱、卓立村道左田中（中略）、得蕭儋墓碑、高丈三四尺許（中略）、『六朝事迹』云蕭秀墓石柱一題云「梁故散騎常侍司空安成康王之神道」。

梁の吳平忠侯である蕭景の石柱は、村の道の左の稻田の真ん中にある、（中略）、蕭儋の墓碑は、高さは三、四尺余り（中略）、『六朝事迹』に、蕭秀の墓にある石柱の題には「梁故散騎常侍司空安成康王之神道」とある。

同年 7 月 28 日

重尋蕭氏三人五石。

蕭氏三人の五石を再探する。

同年 7 月 29 日

為述三日遊踪及尋諸梁碑始末、許資拓若干紙。

三日間の行跡及び諸梁碑の探索の経緯を報告するため、若干の紙で採拓することが許された。

同年 8 月 4 日

謁相公、命告舍弟輩料理拓梁碑

相公（曾国藩）と面会し、舍弟に梁碑を採拓するよう命じた。

---

条、256 頁とある。同年 7 月 29 日の条、256 頁とある。同年 8 月 4 日の条、256 頁とある。同年 8 月 11 日の条、257 頁とある。同年 8 月 12 日の条、257 頁とある。同年 8 月 14 日の条、257 頁とある。

同年 8 月 11 日

携拓工往花林東北、酌拓諸梁刻。

採拓の工匠を連れ、花林の東北に向かい、諸梁刻を採拓した。

同年 8 月 12 日

食後試拓蕭秀二碑一石柱。

食後、蕭秀二碑一石柱を試みに採拓した。

同年 8 月 14 日

尋梁靖恵王蕭宏石柱。

梁靖恵王蕭宏の石柱を探索した。

このように、同治 7 年 7 月末から 8 月中旬にかけて、莫友芝は梁碑の調査を行い、栖霞の辺りに梁王朝の蕭景・蕭愔・蕭秀・蕭宏などの墓碑や石柱があることを実見した。

この調査の直後の同治 7 年 8 月 24 日、莫友芝は張裕釗や曾国藩と直接会い、これら梁碑を話題としてとりあげている。莫友芝の日記によれば、8 月 24 日に「食後以新拓梁碑四種、唐碑一種呈様於相郷公。遂答廉卿。<sup>17</sup>（食後、新しく採拓した梁碑四種、唐碑一種を相郷公（曾国藩）に呈上した。廉卿（張裕釗）と相談する。）」と記され、曾国藩の同日の日記にも「莫子偲拓金陵城外梁碑三道、唐碑一通。与之共批閱、評論。<sup>18</sup>（莫子偲（莫友芝）が金陵の城外で梁碑三道、唐碑一通を拓した。彼と共に

<sup>17</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理、同治 7 年 8 月 24 日、258 頁。

<sup>18</sup> 序章注 8、曾国藩著、唐氏責任編輯、日記 4、第 19 冊、同治 7 年 8 月 24 日、89 頁。

批閱し、これについて話し合った。）」と記録している。この時、莫友芝が曾国藩の処を訪ねた際に、張裕釗も同行しており、この際に三者が「梁碑」、「唐碑」の拓本をともに鑑賞したことが分かる。

また、翌年となる同治8年から同治9年に至るまで(1869~1870)、張裕釗は莫友芝と再会し、「梁碑」を再び話題にとり上げている。莫友芝日記には同治8年2月5日、「兩漢書始至、廉卿亟束装、催余作寄小宋暨張香濤書、並各致新拓梁碑。(兩漢書が届いた。廉卿はまさに出発しようとしており、小宋と張香濤への書簡を送ることと、新しい採拓した梁碑を寄せることを私に促した。)」<sup>19</sup>とあり、続いて同治9年12月7日には「又偕廉卿謁曾公、就呈建陵闕新拓本、廉卿已允就此鳳池書院館。(廉卿を連れて曾公を訪ねた。『建陵闕』の新しい拓本を呈上した。廉卿は既に鳳池書院館に務めてくれることを引き受けた。)」<sup>20</sup>とある。上述から、同治8年から同治9年にかけて張裕釗は莫友芝に新たに採拓した梁碑を求めており、莫が曾国藩へ『建陵闕』の拓本を呈上した際に、張裕釗はこれらを過眼したといえよう。

では、莫友芝の著作である『金石筆識』では、梁碑に関してどのような記述が確認できるのか。『金石筆識』には梁碑に関する記載を10点確認することができ<sup>21</sup>、その記載は以下の通りである。「梁太祖文皇帝(蕭順之) 梁建陵東西闕碑」(図2)、「梁安成康王 蕭秀東西碑 碑額」(図3)、「梁安成康王 蕭秀東西碑 碑陰」(図4)、「梁始興忠武王 蕭憺碑 碑額 碑陽」(図5-6)、「梁吳平忠侯 蕭景神道石柱題額」(図7)、「梁臨川惠王 蕭宏神道二石柱題額」(図8)、「梁南康簡王 蕭績神道二石柱題額」(図9)、「梁建安敏侯 蕭正立石柱二」、「梁新渝寛侯 蕭暎西闕

<sup>19</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治8年2月5日、265頁。

<sup>20</sup> 序章注113、莫友芝著、張氏整理、同治9年12月7日、284頁。

<sup>21</sup> 第二章注46、莫友芝著、張氏校点、附録卷二『金石筆識』、163~176頁。

碑]、「梁瘞鶴碑」(図 10)。その中で、日記にも言及されたのは「梁太祖文皇帝(蕭順之) 梁建陵東西闕碑」と「梁始興忠武王 蕭憺碑」であり、内容は以下のようにある。

「梁太祖文皇帝(蕭順之) 梁建陵東西闕碑」(図 2)

同治八年春、友芝始並訪獲、猶逸正刻「太祖皇」三字、婁陽葆光蒐出合之。九年秋九月辛卯、題記。<sup>22</sup>

同治八年の春、友芝は初めて(梁建陵東西闕碑を)訪ねた。正書で刻された三文字「太祖皇」が失われている。婁陽葆光とこの拓を出し合った。同治九年秋の九月辛卯に題記する。

「梁始興忠武王 蕭憺碑」(図 5-6)

其清朗処、校北魏諸刻格韻相等、而差朗潤、蓋南北大同小異処。上承鍾、王、下開歐、薛、皆在此碑。<sup>23</sup>

その清朗なところは、北魏の諸もろの碑刻の格調と深みのある味わいが相等しく、少し潤いがあり、思うに南北の書法は大体同じで、細かい点が異なるだけである。上は鍾繇・王羲之に溯り、下は欧陽詢・薛稷を開くのは、この碑であろう。

これによって、莫友芝は梁碑が北魏の作風と大よそ共通し、帖学の代表である鍾繇・王羲之・欧陽詢・薛稷までの結節点であると捉えていることが分かる。張裕釗と交流した際に、この点が議論されたであろうと推測される。

<sup>22</sup> 第二章注 46、莫友芝著、張氏校点、附録卷二『金石筆識』、163 頁。

<sup>23</sup> 第二章注 46、莫友芝著、張氏校点、附録卷二『金石筆識』、165 頁。

これらのことから、同治7年から9年まで、張裕釗は曾国藩のもとで、莫友芝と密接な関係を築き、その訪碑文化の影響を受けたと考えられる。特に莫友芝は、採拓した最も見事な梁碑の拓本を張裕釗に見せた。それを張裕釗は、いかに自身の書法表現の糧としたのであろうか。

## 第二節 同治前半期からの書作品の変遷

本節では、張裕釗の書作について、大字書作及び小字書作の形式別に分け、それらを筆法や結構などの観点別に分析する。そして、形式別に同治前半期と後半期で何が変化したのか、また、その変化は、どの形式にも共通して認められるかを明らかにする。

### 一、張裕釗の書作

同治後半期・光緒前半期における張裕釗書法には、大字書作、中字碑碣、中字題字及び小字書作が残っている。以下、それぞれの作品について、その梗概を記すことにする。

#### 1. 大字書作

同治の後半期に制作された張裕釗の大字書作には、二作がある。

第一作目は、同治11年（1872）に書かれたと推定される対聯である。跋文には「合肥相国夫子五旬荣寿、門下士張裕釗頓首拝祝。」（図11）とあり、張裕釗が李鴻章（1823～1901）の五旬（五十歳）の誕生（同治11年）を祝うために揮毫した対聯である。張裕釗と李鴻章は、二人とも曾

国藩の幕僚で同い年である。

第二作目は張裕釗の「事文類聚」（図 12）書作であり、八曲一双の楷書の書作である。本文には「右録祝穆事文類聚、時同治癸酉孟夏月朔日也。」とあり、同治 12 年 4 月 1 日に書かれたことが窺える。「事文類聚」は、宋の祝穆（生年不詳～1255 年）によって編集された、中国の類書である。張裕釗はこの「事文類聚」の一部を選び、書作品とした。

## 2. 中字書作

ここでは、同治後半期・光緒前半期における張裕釗の中字書作である碑碣・題字を扱い、その先行研究や制作経緯を分析する。

### (1) 碑碣書作

張裕釗が書法家として最も充実した書作品を示すのは、鳳池書院主講時代（同治 10 年～光緒 7 年、1871～1881）である。当該期の碑碣書丹の数量がそれを示しているが、年齢的にも精神的にも、また立場的にも、その条件がなっていたのだろう。例えば魚住氏によれば、『濂亭遺詩』に 270 首余の詩が収められており、そのうち鳳池書院在籍時の詩が、186 首数と多くを占めていることを指摘している<sup>24</sup>。これに対して蓮池書院主講時代、さらにその後の作品数は著しく少なくなる。

当該期の張裕釗の碑碣書法作品に共通することは、官僚や知友が依頼したという点であり、制作年代順に列挙してみると、次のようになる。

① 「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」（依頼者：曾国藩、同治 10 年）

---

<sup>24</sup> 序章注 61、魚住氏著、32 頁。



- ②「吳徵君墓表」（依頼者：吳汝綸、同治 12 年推定）
- ③「吳母馬太淑人祔葬誌」（依頼者：吳汝綸、光緒元年推定）
- ④「吳廷香墓表」（依頼者：吳長慶、光緒 4 年）
- ⑤「金陵曾文正公祠堂修葺記」（依頼者：譚碧理、光緒 7 年）
- ⑥「屈子祠堂後碑」（依頼者：汪士鐸、光緒 7 年推定）

また、以下の碑誌については、制作年代に疑義があるが、その検討は、いまは省く。

- ⑦「亡妻黃孺人墓誌銘」（魚住氏：光緒 12 年、陳氏：光緒元年～5 年の間）<sup>25</sup>
- ⑧「通州張生母金孺人墓誌銘」（陳氏：光緒 5 年推定）<sup>26</sup>
- ⑨「張樹珊墓誌銘」（魚住氏：光緒 4 年推定、陳氏：光緒 6 年推定）<sup>27</sup>
- ⑩「張蔭毅墓碑」（陳氏：光緒 6 年推定）<sup>28</sup>

まず、①「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」（同治 10 年 12 月朔有 3 日記）は、近年発見された拓本である。題名により、張裕釗が曾国藩の代筆を担ったものと分かる。「誥授光祿大夫文華殿大学士・兵部尚書兼都察院右都御史・総督両江等処、提督軍務淮塩総棧事務、薛書常督修、誥授資政大夫・管理両淮塩院事務・世襲一等毅勇侯・曾国藩」（図 13）と曾国藩の職名を詳細に記している。また、張裕釗の詩文集「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」には「相国李公属国藩為記其事（相国李鴻章公が曾国藩にその事の記載を依頼する。）」<sup>29</sup> とあり、官僚の間で、

<sup>25</sup> 序章注 61、魚住氏著、151 頁。序章掲注 75、陳氏著、200 頁。

<sup>26</sup> 序章注 75、陳氏著、203 頁。

<sup>27</sup> 序章注 61、魚住氏著、151 頁。序章掲注 75、陳氏著、72～91 頁。

<sup>28</sup> 序章注 75、陳氏著、72～91 頁。

<sup>29</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」、192～193 頁。

文章を依頼し合う現象が頻繁にあったことが窺える。更に、魚住氏は、『張廉卿先生詩文稿』の内容によって、①が同治11年（1872）の執筆であったと類推している。<sup>30</sup>

次に、②「吳徵君墓誌銘」、③「吳母馬太淑人祔葬誌」は吳汝綸の委嘱によって書き記したものである。②「吳徵君墓誌銘」（図14）については拓本が残っている<sup>31</sup>。②の制作年代について、陳啓壯氏は同治12年（1873）、張裕釗51歳時に親密な友人である吳汝綸の父親が亡くなったため「吳徵君墓表」を書いたと述べている<sup>32</sup>。

光緒元年（1875）に吳汝綸の母親も逝去し、張裕釗は③「吳母馬太淑人祔葬誌」（図15）を書き記した。魚住和晃氏は宮島家伝来資料により、「吳母馬太淑人祔葬誌」が光緒元年の制作であるとしており<sup>33</sup>、陳啓壯氏は光緒元年に吳汝綸の依頼により、張裕釗が書丹したと述べている<sup>34</sup>。

光緒4年（1878）に、張裕釗は吳長慶の依頼を受け、吳の父親のため④「吳蘭軒墓表」を書き記した。この文章は「廬江吳徵君墓表」に収録されている。<sup>35</sup> 吳徵君（1806～1854）、諱は廷香、字は奉璋、または蘭軒で、廬江の人である。本文には、以下のようにある。

徵君配張夫人、生子長慶。（中略）咸豐六年九月<sup>36</sup>、長慶改葬徵君於  
鼇戴山之陽。又二十有三年、乃求為表墓之文於裕釗。（中略）光緒四

<sup>30</sup> 序章注61、魚住氏著、158頁。

<sup>31</sup> 趙金敏氏は王蔚百の題跋により、この真筆は1930年に南宮県民教育館が主催した展覧会で得たものと述べており、1949年に新中国が成立した後、北京歴史博物館へ寄贈したと述べている。趙金敏「張裕釗書『吳徵君墓誌銘』」『收藏家』第4期（北京市文物局、1994年）、27～29頁。王達敏氏は拓本が残っていると、「吳徵君墓誌銘、武昌張裕釗撰、中江李鴻裔書。」とあったことを述べている。筆者が考察したところ、「中江李鴻裔書」に誤りを見つけた。拓本には「歛陳鑑摹」とあり、北京大学図書館の収蔵であるとする。序章注67、張裕釗著、王氏校点、「吳徵君墓誌銘」、147頁。

<sup>32</sup> 序章注75、陳氏著、198頁。

<sup>33</sup> 序章注61、魚住氏著、151頁。

<sup>34</sup> 序章注75、陳氏著、199～200頁。

<sup>35</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「廬江吳徵君墓表」、116～119頁。

<sup>36</sup> 詩文集は「某月日」と記している。

年十月、武昌張裕釗表。歙陳鑑小峯勒。(図 16)

吳徵君の夫人張氏が息子の吳長慶を産んだ。(中略) 咸豐六年九月、吳長慶が鼇戴山の南面で徵君の墓を改葬した。また二十三年後、裕釗に墓表の文を依頼された。(中略) 光緒四年十月、武昌張裕釗が表し、歙陳鑑小峯が勒した。

以上から、吳蘭軒と吳長慶の父子関係が明らかになる。因みに、「吳蘭軒墓表」は「吳徵君墓誌銘」「吳母馬太淑人祔葬誌」と同様に陳鑑が石碑を勒している。

曾国藩が他界した9年後となる光緒7年(1881)に、張裕釗の紀年碑文書作として、⑤「金陵曾文正公祠修葺記」(光緒7年)(図17)がある。曾国藩の祠堂の修繕に際し、張裕釗は「金陵曾文正公祠堂修葺記」を撰し揮毫した。碑文には、「光緒七年春三月、武昌張裕釗記並書。黃岡陶籀勒石(光緒七年の春三月に、武昌張裕釗が撰文し揮毫した。黃岡陶籀が勒石した。)」とある<sup>37</sup>。撰文した文章は、張裕釗の『濂亭文集』に収録されている。修繕の経緯については、碑文に以下のように述べられている。

同治十一年春、曾文正公薨、詔天下凡公嘗所立功行省、皆建祠祀之。

(中略) 記名提督督標中軍副將譚君碧理、繼經紀其事、於是、属裕釗為之記、且告將刊之貞石、以垂無窮。<sup>38</sup>

<sup>37</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「金陵曾文正公祠修葺記」、195～196 頁。

<sup>38</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「金陵曾文正公祠修葺記」、195～196 頁。

同治十一年の春、曾文正公が逝去し、勅命により各省での功績に対し、祠堂を建立することになった。(中略) 記名提督・督標中軍副将である譚碧理(1833~1898、字は青岳または青巖。湖南湘潭の人)がこの事業を継続し、そこで、私に尋ね文章を記し、且つ貞石に刻し、永く残すこととした。

胡林翼幕府時期から交際を持っていた汪士鐸と張裕釗は、光緒期に至っても、交流を続けていた。⑥「屈子祠堂後碑」(光緒7年推定)(図18)は、張裕釗が書を揮毫し、汪士鐸が撰文している<sup>39</sup>。制作年代について、先行研究では魚住和晃氏<sup>40</sup>と陳啓壯氏<sup>41</sup>は光緒7年と推定している。本文には「江甯汪士鐸撰、武昌張裕釗書。黃岡陶籀勒。」と書き記され、先述の光緒7年に書かれた「金陵曾文正公祠修葺記」と同時期に揮毫し刻された可能性が高いと考えられる。

## (2) 題字書作

この時期には、碑碣書作の以外、珍しい題字書作が存在する。①『舒芸室隨筆六卷』(同治13年)、②『史記』(光緒2年)、③『汪梅村先生集』(光緒7年)が列挙できる。ここから、その交流を分析してゆく。

まず『舒芸室隨筆六卷』である。図19に見られる舒芸室とは、曾國藩の幕僚である張文虎の齋号である。幕府での知遇によって、張文虎が張裕釗に依頼し、同治13年(1874)、張文虎の著作『舒芸室隨筆』の表

<sup>39</sup> 汪士鐸「屈子祠堂後碑」、『汪梅村先生集』巻6(近代中国史料叢刊第13輯、文海出版社)、278~279頁。

<sup>40</sup> 序章注61、魚住氏著、151頁。

<sup>41</sup> 序章注75、陳氏著、208頁。

紙を張裕釗が題した<sup>42</sup>。張裕釗と張文虎との交際は、同治10年（1871）8月に溯り、曾國藩が頭目として宴会を開き、張文虎もその参加者の一員であった。張文虎の日記からその際の交歓がうかがえ、曾國藩・莫友芝・張裕釗を含め、総勢十七人と数えられる<sup>43</sup>。また、張文虎の『舒芸室詩存』<sup>44</sup>にも同一の話題が記載されている。それによると、曾國藩の幕府を通じて、幕僚たちが交流の場を頻繁に設けていたことが分かる。

次に、『史記』の題字である。光緒2年正月から同4年7月にかけて（1876～1878）、張裕釗は吳長慶（1834～1884）<sup>45</sup>の資金援助により、『史記』の校正を行った。張裕釗の「送吳筱軒軍門序」<sup>46</sup>より、二人の交流が窺える。また、『史記』を校正した経由については、張裕釗の「帰震川平点史記後序」に以下のようにある。

往者余嘗欲專取『史記』本書、附益以婦氏平点、梓而公諸同好。苦乏刊皆、不果。以語友人吳摯甫、摯甫則力贊其事、且為謀諸廬江吳小軒軍門、慨以千二百金相俵。於是鳩集梓人、經始光緒二年正月、訖四年七月刊成。<sup>47</sup>

昔、私は『史記』を取り上げ、婦氏の標点を加え、上梓して同好と共有したいと思った。刊行に苦勞し、結局は果たせなかった。それを友人の吳摯甫に話すと、彼は賛成してくれた。更に廬江の吳小軒軍門に

<sup>42</sup> 「舒芸室隨筆六卷」「同治十三年冬十月金陵冶城賓館刊、張裕釗署首。」張文虎『舒芸室隨筆』（金陵冶城賓館刊、1874年）、哈仏燕京図書館蔵。

<sup>43</sup> 同治10年8月8日『張文虎日記』（上海書店出版社、2009年7月）、258頁に「同治10年8月8日、湘鄉公招集莫愁湖之妙巖庵、李小湖・薛慰農・張謙卿裕釗三山長、曹鏡初・馬鍾山・唐端甫・戴子高・劉叔俛・劉恭甫・汪梅岑・莫子偲・桂皓庭・吳蓮舫、又萬・陳・何三客官、共十七人。」とある。

<sup>44</sup> 序章注42、莫友芝著、張氏撰、531頁に張文虎『舒芸室詩存』卷6を引用している。原文には「相鄉公招李小湖、薛慰農、張謙卿裕釗三山長、戴皓庭孝廉文燦、馬鍾山大令徵麟、曹鏡初郎中耀湘、汪梅岑、莫子偲、唐端甫、戴子高、劉叔俛恭甫宴莫愁湖勝棋樓、皓庭作記索詩、走筆応之（勝棋樓在妙巖庵、新落成）」とある。

<sup>45</sup> 吳長慶、字は筱軒、安徽廬江の人。

<sup>46</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送吳筱軒軍門序」、42～45頁。

<sup>47</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「帰震川平点史記後序」、11頁。

協力を仰ぎ、快く千二百金を出資してくれた。そこで、刻版の職人を集め、光緒二年正月から始め、四年七月に完成し、刊行した。

『史記』の刊行は呉摯甫（汝綸）、呉長慶などの友人の協力によって、完成したといえよう。その表紙の内容では「光緒二年正月、武昌張氏校刊、『史記』、帰震川評点本、方望溪評点附後」（図 20）<sup>48</sup>と書いており、この『史記』は、帰震川（帰有光、1507～1571、字は熙甫、号は震川。明朝の著名な文学者。）と方望溪（方苞、字は靈皋、号は望溪。清の文学者）が評点を付けたことが分かる。

張裕釗は光緒 7 年（1881）に刊行された汪士鐸の詩文集である『汪梅村先生集』<sup>49</sup>（図 21）の題字を揮毫した。『舒芸室随筆六卷』（同治 13 年）、『史記』（光緒 2 年）、『汪梅村先生集』（光緒 7 年）などの題字に年代を記すのは珍しく、当該期の書風の基準作として重要であろう。

### 3. 小字書作

小字書作品は 5 点が残っており、有紀年 2 点、無紀年 3 点が確認できる。

まず、有紀年の小字書作品では、第一通目は鉄巖に宛てた書簡であり、「光緒元年十月初五日自金陵鳳池書院緘寄」（図 22）<sup>50</sup>の奥付を明記する。第二通目は跋清徐沛齋「臨趙孟頫『道德経』」であり、奥付に「光緒辛巳二月武昌張裕釗跋。」（光緒 7 年）<sup>51</sup>（図 23）とある。

<sup>48</sup> 張裕釗校刊、帰有光及び方苞評点『史記』（南京図書館蔵）、表紙。

<sup>49</sup> 『汪梅村先生集』（光緒 7 年）、中国国家図書館蔵。

<sup>50</sup> 魚住氏の著作に掲載された張裕釗の鉄巖宛書簡、序章注 61、魚住氏著、163～164 頁。

<sup>51</sup> 瞿忠謀「從《評跋萃刊》看晚清書家對趙體書法的反思性評価」（『書法』2012 年第 11 期、2012 年 11 月）、96 頁。

次に、無紀年の書簡3点である。一点は張裕釗が徐宗亮宛2枚書簡（図24）で、もう一点は富升に宛てた書簡（図25）である。それらの内容を検討し、書写年代を推定したい。

まず、張裕釗が徐宗亮に宛てた3通の書簡<sup>52</sup>について、1通目は前章で考察し、同治4年（1865年）と推定した<sup>53</sup>。他の2通は孫瑩瑩氏が同治11年（1872年）に編年している<sup>54</sup>。しかし、2通とも年代推定の根拠を示しておらず、ここで再検討してみたい。

まず、2通目には「今春作得曾文正祭文、莫子偲墓誌各一首、過皖時当以就正也。（8月12日）（図24：傍線筆者）。（今年の春に「曾文正祭文」、「莫子偲墓誌」各一首を作りました。皖（安徽）を經由する際に、ご批評くださいますようお願い申し上げます。）」<sup>55</sup>とあり、張裕釗がこの年に「曾文正祭文」、「莫子偲墓誌」を撰文したことが分かる。曾文正祭文の制作時期については、張裕釗の詩文集における「祭曾文正公文」から推測できる。その内容によれば、「我属別公、昔冬之季。孰云幾日、遂隔万世。（私は曾公と別れたのは去年の冬である。幾日と言えるが、万世を隔てたように思う。）」<sup>56</sup>とある。加えて、曾国藩日記によれば、「梅小岩、張廉卿、李季泉、応敏齋四人皆久談、燈後許久始退。（梅小岩、張廉卿、李季泉、應敏齋四人と久しく談話し、燈をつける時間になり解散した。）」（同治10年12月13日）<sup>57</sup>とあり、曾国藩が亡くなる同治11年3月の直前に、張裕釗が面会した時期は前年の同治10年12月と分かる。従って、「祭曾文正公文」は同治11年の春に書かれたことが明らかであ

<sup>52</sup> 安徽省安慶市図書館古籍部の『蒋元卿旧藏晚清和近代名人手札』に収録されている。

<sup>53</sup> 第二章 同治前半期の曾国藩幕府における張裕釗書法の研究／第三節、張裕釗及び書家たちの書風検証／三、張裕釗の書簡／4. 徐宗亮宛書簡を参照。

<sup>54</sup> 序章注98、孫氏撰、76～77頁。

<sup>55</sup> 『蒋元卿旧藏晚清和近代名人手札』、安徽省安慶市図書館古籍部蔵。

<sup>56</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「祭曾文正公文」、15頁。

<sup>57</sup> 序章注8、曾国藩著、唐氏責任編輯、日記4、第19冊、同治10年12月13日、507頁。

る。更に、張裕釗「莫子偲墓誌銘」によると、「子偲之卒、以同治十年九月辛丑、春秋六十一。(子偲が歿したのは、同治十年九月辛丑、年六十一歳の時である。)」<sup>58</sup>とあり、「莫子偲墓誌銘」は同治10年9月以後に書かれたことが分かる。2通の内容を合わせて考えてみれば、「莫子偲墓誌銘」は「祭曾文正公文」と同様に同治11年の春に書かれたことが推定される。

また、3通目には「聞吳至甫在深州甚有治績。(吳至甫が深州で功績を上げたことを聞きました。)(中秋前2日)」<sup>59</sup>(図24:傍線筆者)と記している。この時点に吳至甫(吳汝綸)は深州で職務していることが分かる。吳汝綸の年譜によれば、吳汝綸は同治9年に曾國藩の推薦により直隸州に採用され、翌年(同治10年)に直隸州である深州知州に赴任することになった。また、同治12年2月に父親が歿したため、深州知州を辞めた<sup>60</sup>。張裕釗は吳汝綸が深州に滞在していることに言及しており、この書簡が同治10年以降同治12年2月にかけて書かれたものと判じられる。

更に、台湾の国立故宮博物院に収蔵されている張裕釗が富升に宛てた1枚の無紀年書簡が残っている。富升(生年不詳~光緒16年、字は桂卿)は、光緒6年に山海関副都統となっており、同年には盛京副都統となった<sup>61</sup>。書簡には以下のようにある。

桂卿仁兄大人閣下。前日枉駕。備聞高論。至為快慰。承入覲有日。

<sup>58</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「莫子偲墓誌銘」、141~143頁。

<sup>59</sup> 前掲注54。

<sup>60</sup> 吳汝綸著、朱秀梅校点『吳汝綸文集』「前言」(上海古籍出版社、2017年6月)、2頁。郭立志撰『桐城吳先生(汝綸)年譜』雍睦堂叢書本(近代中国史料叢刊第73輯、文海出版社、1972年)

<sup>61</sup> 中央研究院歴史語言研究所/清代職官資料庫/富陞(2021年3月29日閲覧)

<http://archive.ihp.sinica.edu.tw/ttscgi/ttsquery?0:0:mctauac:TM%3D%E5%AF%8C%E9%99%9E%20or%20%28%E5%AF%8C%E9%99%9E%29%40SF>



自慙寒素。無可以為祖贈。謹撰序一首奉送。<sup>62</sup>

桂卿仁兄大人閣下。先日前お越しいただいて、ご高論を拝聴し嬉しくと存じます。近々に京に入って皇帝に謁見すると伺いましたが、寒素により、何も差し上げることができず、慙愧に堪えません。序一首を書いて、進呈申し上げます。

よって、張裕釗が富升のため序一首を書いたことが分かる。その入観の記事について、張裕釗の詩文集に「送富桂卿都護入覲序」があり、以下のように述べている。

国家発祥勿吉、肇基遼瀋、遂以有天下。(中略) 於是江寧副都統吉林富君、疏陳東三省利病及施設所宜、謀画周悉甚至。而兩江總督劉公復密疏薦君。<sup>63</sup>

国家は勿吉を發端とし、はじめは瀋陽を基盤にし、ついに天下を平定した。(中略) ここにおいて、江寧副都統、吉林の富升は東三省の益や害、そして設備などの状況を上疏し、周到に計画をめぐらしている。それ故に両江總督の劉坤一が密やかに上奏し、君が推薦された。

富升は東三省（遼寧省・吉林省・黒竜江省）の計画に対する貢献が多めで、劉坤一に推挙されたことを述べている。

その背景には、光緒7年2月24日にロシア帝国と清朝の間で結ばれた

---

<sup>62</sup> 国立故宮博物院／書画典藏資料検索系統／(2021年3月29日閲覧)  
国立故宮博物館蔵、購書934、張裕釗の富升宛書簡。「清張裕釗致桂卿函 冊頁」。  
<https://painting.npm.gov.tw/>

<sup>63</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送富桂卿都護入覲序」、53～54頁。

イリ条約がある。張裕釗もこのことを関心を持ち、彼の文章「送吳筱軒軍門序」には以下のように述べられている。

光緒六年、国家以索取伊犁地、再遣使至俄羅斯、議未決。(中略)有詔命山東巡撫周公、督辦山東軍務、而以浙江提督吳公副焉。<sup>64</sup>

光緒六年に、国家はイリ地方を求め、再度ロシアまで使者を派遣したが、まだ決まらない。(中略)詔命により、山東巡撫である周公に山東の軍務を任せ、浙江提督である吳長慶が補佐した。

これらの記事に従えば、光緒6年に両江総督である劉坤一(1830～1902)が清朝の政府に富升のことを推挙した。加えて、光緒6年に富升は山海関副都統になったことから、この書簡は光緒6年頃に書かれたと推測される。

## 二、 同治前半期からの書作品の変遷

同治前半期には管見では中字碑碣、中字題字がないため、ここでは、同治前半期から光緒前半期までの、張裕釗の大字書作・小字書作がどのような書風を展開してきたかを検証する。

### 1. 大字書作

管見では、張裕釗の同治後半期の楷書作品には「贈李鴻章書作」(同治11年)、「事文類聚」(同治12年)がある。

---

<sup>64</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送吳筱軒軍門序」、42～45頁。

「贈李鴻章書作」は張裕釗の同治前半期の「鮑照飛白書勢銘」（同治5年）大楷書作品に比べ、異なる点が窺える。この作品は李鴻章に贈る書作のため、対聯で丁寧な態度で、整齊に書いており、行意を控えめにし、結体は正方形に近く、方筆で整った楷書を書いている。これらの特徴は、この時期の中字の楷書「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」（同治10年）と通ずるところがあると思われる（表1）。なお、「贈李鴻章書作」は大楷書作品として、初めて第二種類の風格に至ったものと位置付けられる。

「事文類聚」は張裕釗の同治前半期の「鮑照飛白書勢銘」の大楷書作品に通じるものである。二作に見る点画（横画、縦画）の特徴は、いずれも蔵鋒の円筆で隸楷の用筆が盛んに見られ、左払いやハネや乙脚の部分は非常に伸びやかで、転折では「外方内円」となっている。また、「瑤」「仙」「垂」などの右縦画の収筆は左へハネている様子が窺えたが、注目すべきは、同治12年「事文類聚」のハネを長く延長している点である。更に、結構については「龍」・「鳥」・「飛」・「虎」・「白」の結体が一致する（表2）。

## 2. 小字書作

前章では、同治前半期の書簡を注目し、咸豊期との書風比較を検証した。ここではまず、同治期と光緒期を合わせて、同治年間に書かれた10点の書簡を取り上げて比較したい。前章で同治前半期の小字行楷書を挙げたのは①張裕釗「劉府君墓誌銘」（同治2年推定）、②張裕釗の曾国藩宛書簡（同治2年推定）、③張裕釗の曾国藩宛書簡（同治3年推定）、④張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡第1枚目（同治4年推定）、⑤張裕釗の曾国藩宛書簡（同治7年推定）である。同治後半期において、既掲の5点（⑥

～㊾) が挙げられる。<sup>65</sup>

張裕釗の小字書作に関する先行研究は、張裕釗の張裕錯（鉄巖）宛封筒（光緒元年）を中心として、欧陽詢の書風の影響を受けたという結論であった<sup>66</sup>。筆者は前章で考察したように、莫友芝の小楷書風の影響がまだ色濃く残っていると考えている。

まず、表 3 では、莫友芝の咸豊時期（8～9 年）の小楷書作品と張裕釗の同治前半期・同治後半期及び光緒期における小楷書作品の点画とを掲げ、それぞれの点画・結構に注目する。

点画において、莫友芝の咸豊時期の小楷書作品や張裕釗の小楷書作品の筆法や結構はいずれも同様の特徴が認められる。左払いは末筆を太く強調する筆法が見られ、ハネは長く角を滑らかにしており、左方への傾きが見られる。転折の内側は円く、緩やかに筆を抜いている。結構は、右上がりの傾向が見られ、乙脚の空間は狭い様子が窺える。ただし、「為」字に注目すると、左払いにおいて、同治前半期のものは直線的に書かれており、同治後半期・光緒前半期のものは湾曲している様子が窺える（表 3）。

以上により、同治期から光緒期にかけても、張裕釗の小楷は莫友芝のような点画や自由な結構の影響が見られる。

### 第三節 梁碑の影響

先行研究の魚住和晃氏によれば、「吳母馬太淑人祔葬誌」は唐碑でも欧

---

<sup>65</sup> ㊿張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡第 2 枚目（同治 11 年推定）、㊾張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡第 3 枚目（同治 11 年頃推定）、㊽張裕釗の張裕錯（鉄巖）宛封筒（光緒元年）、㊼張裕釗の富升宛書簡（光緒 6 年推定）、㊻跋清徐沛斎「臨趙孟頫『道德經』」（光緒 7 年）5 点が挙げられる。

<sup>66</sup> 序章注 61、魚住氏著、165 頁。

陽詢・褚遂良の書作品を基調としたと述べたが<sup>67</sup>、筆者は梁碑の結構法と近似性を持った書風を体得していたと考えている。

本項では、張裕釗の中字書作を中心に、梁碑からの影響を受けた概形・筆法の検討を行いたいと思う。ここでの検証は、第一節で考察した梁碑10点と、張裕釗中字書作品（碑碣・題字）との比較を中心とする。

### 一、 中字書作における梁碑からの影響

ここでは、この時期に同治前半期と比べて、概形がどのように変遷したか、という問題を明らかにする。分析の方法として、同治前半期とこの時期の概形、そして唐碑の欧陽詢・褚遂良・梁碑の同じ文字、同じ部分を持つ文字を比較する。

まず、「書」・「事」・「同」・「治」・「有」で概形を比較する。ここでの「概形」とは、文字の上端、下端に水平線を引き、左端、右端には垂線を引いて四角形に囲んだ形のことをいう。赤い補助線の縦横比は正方形の1対1の比率としている。青い点線は実際の各文字の概形に応じて付している。（表4）。

それぞれの概形をみれば、この時期の「書」・「事」の字例は縦長であるが、同治前半期に比べ、寸胴（上から下まで同じように太いこと）に近く、即ち正方形に近い。その他「同」・「治」・「有」の字例はいずれも梁碑の「建陵東西闕碑」・「梁蕭憺碑」の概形のような正方形になっている。これに対して、同治前半期・唐碑の欧陽詢「九成宮醴泉銘」・褚遂良「雁塔聖教序」は縦長の形に近い様子が窺える。

以上のとおり、この時期における張裕釗の中字書作品の概形は正方形

---

<sup>67</sup> 序章注 61、魚住氏著、159頁。

に収まる傾向にあり、さらに「同」・「治」・「有」の文字は横幅が広がっており、これらの傾向が梁碑の特徴に近いことが明らかとなった。

## 二、 中字書作における梁碑からの結構法の影響

次に、梁碑の結構法に着目し、梁碑固有の表現や技法を分析する。以下、梁碑が張の書作品への影響を検討し唐碑も含めて対照してみる。

### 1. 払いとその他の部分の幅

ここでは、右払いを持つ字に着目し、その右払いと右払いを除く部分の幅に着目する（表5）。水色の補助線は、右払いの上部の横画の右端を基準に垂線を書き入れたものであり、赤い補助線の右側は右払いの右端を基準に垂線を引いている。また、払いの一旦止める部分を赤い点で示した。張の書や梁碑は、水色垂線の左側に赤い点があるが、唐碑では水色垂線の右側にある。これにより、張の書や梁碑の方が、右払いとその上部の横画の右端に、それほど差がないことが分かる。

### 2. 乙脚のある横画の斜度

まず、「九」字に注目する。梁碑と張のものは一画目が平行に近く、その始筆と終筆の部分に、それぞれ水色の水平線・垂線を書き入れると、双方の線が交叉する部分は、右上に示されている。これに対して、唐碑の欧陽詢・褚遂良「九」字の右上がりには急であり、水色の水平線・垂線で交叉した部分は、真ん中に示されている。「元」・「光」・「先」・「乞」字

の例も同様で、水色の水平線・垂線で交叉した箇所は右下辺りに見られ、梁碑と張の場合は第一画と水色の水平線・垂線が狭い空間を作っているのに対し、唐碑の歐陽詢・褚遂良の場合は広がっている。

一方、それぞれ横画の斜度にどれだけ差が生じているかという点から横画の方向に合わせ黄色の斜線を引いてみると、水色の水平線と交叉した角度は唐碑の歐陽詢・褚遂良は梁碑に比べ、より峻急に示されているが、張のは梁碑に比べ、よりなだらかとなっており、張の場合、ほぼ平行となっている。これにより、横画の斜度は張の方が梁碑に近いことが示された（表6）。

### 3. 他の横画の斜度

乙脚と組み合わせる横画が浅い斜度となる結果に基づき、ここではその他の斜画も比べてみる。以下、「車」にある横画の斜度・戈部のある横画の斜度の文字を分析対象とした。上述の分析と同様に、水色の水平線と垂線で交叉した部分は、文字の右辺りに示されている。そして、梁碑や張の当該期の横画の斜度は黄色の斜線を引いており、いずれも水平に近くなっている。これに対して、唐碑を対象とした字例は横画の斜度が梁碑や張に比べ、いずれもより鋭角となっている。これにより、他の横画の斜度についても張のほうが梁碑に近いことが示されている（表7）。

### 三、 同治前半期との共通点及び梁碑からの影響

ここでは、同治前半期の楷「鮑照飛白書勢銘」や同治後半期中楷①～⑥の共通点を分析していく。ハネでは、「奇」・「子」・「事」・「等」・「乎」・

「擊」・「兮」が挙げられ、乙脚では、「危」・「鮑」・「院」・「光」などがいずれも伸びやかで、この点と同治前半期の書風を継承している（表8）。

同治前半期と比べ、梁碑の影響を受けたこの時代の張裕釗の書は正方形に近く、横画の斜度が浅いという特徴より、安定感が感じられ、一方で、ハネを中心に同時前半期から継承された開放感を融合し、それによって独創性も備わっている。古典の碑帖を学んだこの時代の張裕釗の書作品は、古典と当時の書の特徴を融合した時期であり、張にとって初めての挑戦ではないかと推測される。

#### 四、 独自の点画特徴

以下、張裕釗の独自の点画特徴を検討し、唐碑・梁碑や前の時代（同治前半期「鮑照飛白書勢銘」）とは異なる張の書だけの特徴を示してみよう。

##### 1. 払い

楷書といえば、唐楷が思い浮かばれ、それは「一字一波」（右払いは一つだけにする）を原則とする。それは、一字の中に複数の右払いがあると、その効果が相殺されるからと推測される。ところが、張の中字書作品には一字に右払いが二つ備わるものが散見する。

例を挙げると（表9）、張の碑碣書作品の①「資」・②「食」・④「遂」・⑥「遂」字はそれぞれも二つの右払いを備えていることが確認できる。そのほか、張裕釗の碑碣書作品の①「資」、②「流」・「源」・「縣」・「其」・「榮」・「孤」・「源」・「眎」、③「糸」、④「乘」・「縣」・「遂」・「業」、⑤「謀」、



⑥「潔」・「其」や張の題字書作品の①「賓」文字において左払い・右払いを対に組み合わせる部分も確認でき、左右それぞれの方向へ開放性のある表現をしている。その左払いでは、起筆が細い線で書かれ、送筆が太くなって払われており、対称性を強く印象づける効果を発揮している。

一方、これに対して、唐碑の欧陽詢・褚遂良や梁碑では、点として止めて書いている。また、この時期と従前の同治前半期の文字を比べると、この時期の末筆ではそのまま出鋒しているが、同治期の末筆では一度止まっている様子が窺える。

よって、この独自の払いは、この時期あたりから張裕釗が創出した特徴ある表現だったと考えられる。

## 1. 縦画の強調

既述した左側や右側に延長することで、張裕釗の碑碣書作品の「修」・「候」・「諭」・「前」などの文字に注目したい。空白部分に上線・下線を引くには、縦画を長く延長するようになっている。これに対して、唐碑の欧陽詢・褚遂良や梁碑の「踰」・「前」・「則」や同治前期の張の「箭」は短い縦画で書かれている（表 10）。

また、「在」・「巡」・「逆」の左払いにおいて、張裕釗の場合は直線の縦画で書いており、左払いや縦画の点画において一般の唐楷や梁碑とは異なる様子が窺える（表 11）。これらの縦画の強調という独自の点画特徴は視野を上下へ延長することに効果をあげている。

## 2. 点から横画への変化

「金」・「幸」の偏旁に注目すると、活字では点で書く部分を一つの横画として書いていることが分かるが、当該期における例は点から横画へ変化している様子が窺える。例を挙げると、当該期の碑碣における②の「銘」、③の「饑」・「銭」・「銘」・「財」、④の「報」・「勢」・「達」・「幸」・「鑑」、⑤の「召」・「将」、⑥の「昭」がある。これらを唐楷・梁碑や従前の張の書と比較すると、当該期における張の独自の点画特徴といえよう（表12）。

このように、同治後半期・光緒前半期における張裕釗の中楷は、梁碑を書表現に取り入れていたと思われ、特に梁碑の碑額の楷書様式を取り入れて急速に展開させていったものと考えられる。また、張裕釗の独自の点画の書き方を加えており、彼の書観が反映されているといえよう。

## 小 結

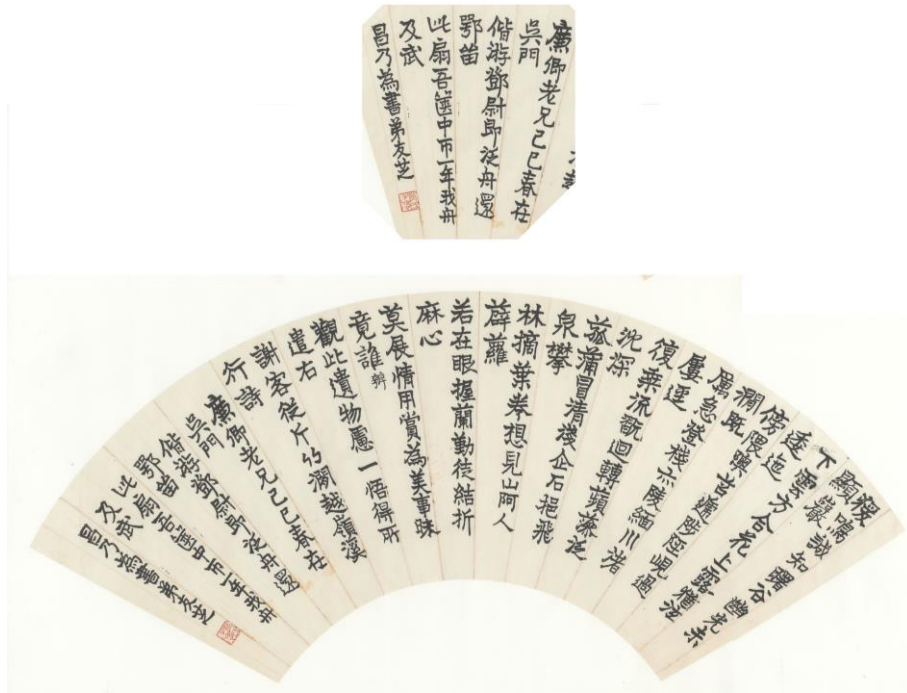
本章では、晩清における同治後半期・光緒前半期にかけて曾国藩の幕府の官僚らの交流経緯について検討し、前章から引き続き曾国藩幕下の人物である莫友芝に注目した。莫友芝との碑帖交流によって、梁碑を目にした影響が色濃い点が重視された。梁碑は殘闕で判然としない文字が多いが、大方はとどめており、円みのある温和な書法を看取することができる。

先学が提起されてない点として、張裕釗が同治後半期にかけて、莫友芝や曾国藩から種々の支援があったことが指摘できる。この莫友芝との緊密な交友関係によって、その訪碑文化の影響を受けたことは、広い書学の門を叩くことになったと推測される。

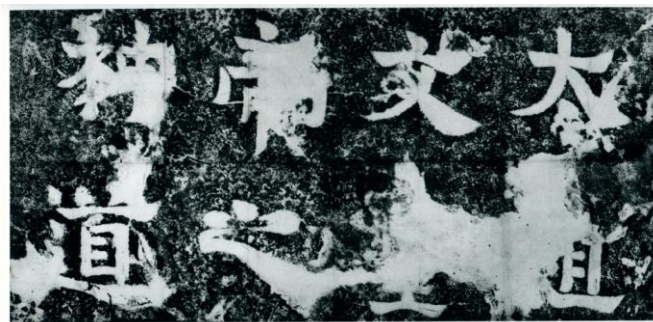
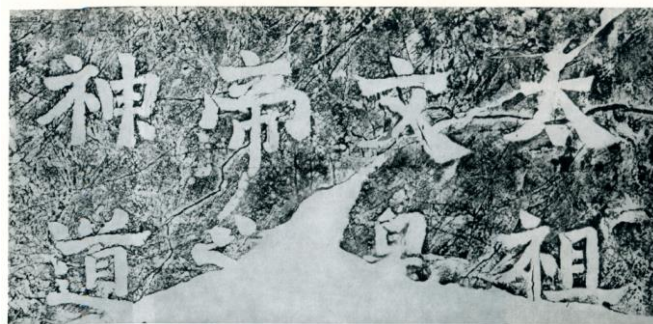
張裕釗の同治後半期の楷書作品は同治前半期の楷書作品に通じるもので、小楷も莫友芝のような点画や自由な結構の影響を引き続き、確認できた。中楷は梁碑碑額の楷書様式である正方形の概形に近く、払いとその他の部分の幅に差がない。また、乙脚のある横画の斜度、他の横画の斜度は梁碑に近く、これらは梁碑の影響が想像される。また、ハネ・乙脚がいずれも伸びやかで、この点が従前の書作品と変わらない。一方、斜度が浅い点からは安定感が感じられ、従前の張裕釗の書と共通した開放感を含むことから、双方を融合し、独創的な書風に至ったと見られる。古典の碑帖を学んだこの時代の張裕釗の書作品は、古典と当時の書の特徴を融合した時期であり、張にとって初めての挑戦ではないかと推測される。更に、前の時代（同治前半期「鮑照飛白書勢銘」）と比べると、払いや縦画の強調・点から横画への変化はこの時代における独自の点画の特徴だったと考えられる。

以上のとおり、張裕釗の中楷書作は張裕釗の書法発展において重要な過程となるもので、張裕釗の書法発展における背景には、依然として曾國藩幕府、特に莫友芝からの影響が大きく、特にこの時期は、莫の訪碑活動が張裕釗の書の観念を転換させる大きな要因になったと考えられる

図 表



【図1】莫友芝の張裕釗贈書作（同治9年推定）

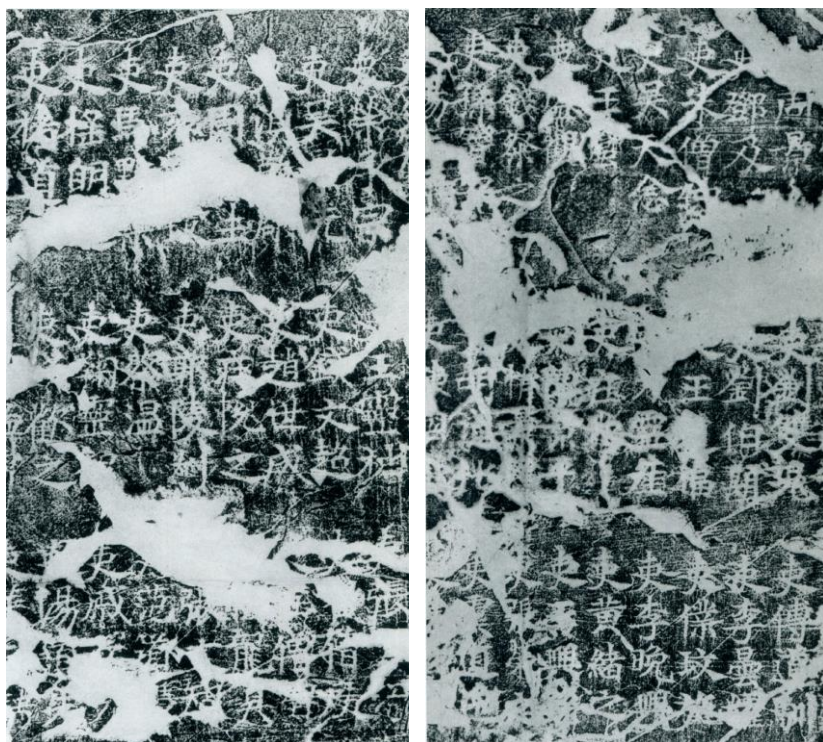


【図2】「梁太祖文皇帝（蕭順之） 梁建陵東西闕」



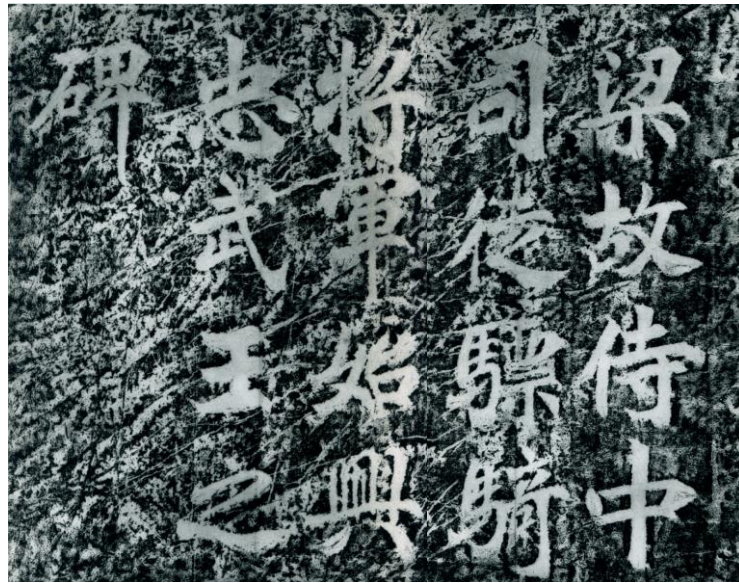


【図3】梁貝義淵「梁安成康王 蕭秀東西碑」碑額

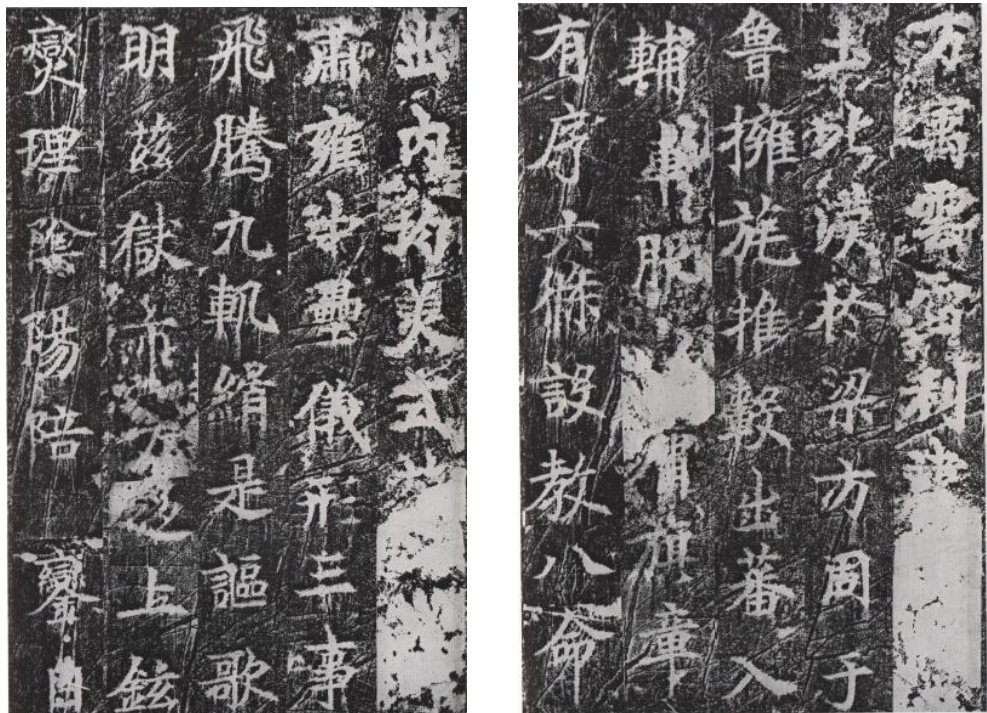


【図4】梁貝義淵「梁安成康王 蕭秀東西碑」碑陰





【図5】梁貝義淵「梁始興忠武王蕭愔碑」碑額



【図6】梁貝義淵「梁始興忠武王蕭愔碑」碑陽





【図 7】「梁吳平忠侯 蕭景神道石柱題額」



【図 8】「梁臨川惠王 蕭宏神道二石柱題額」



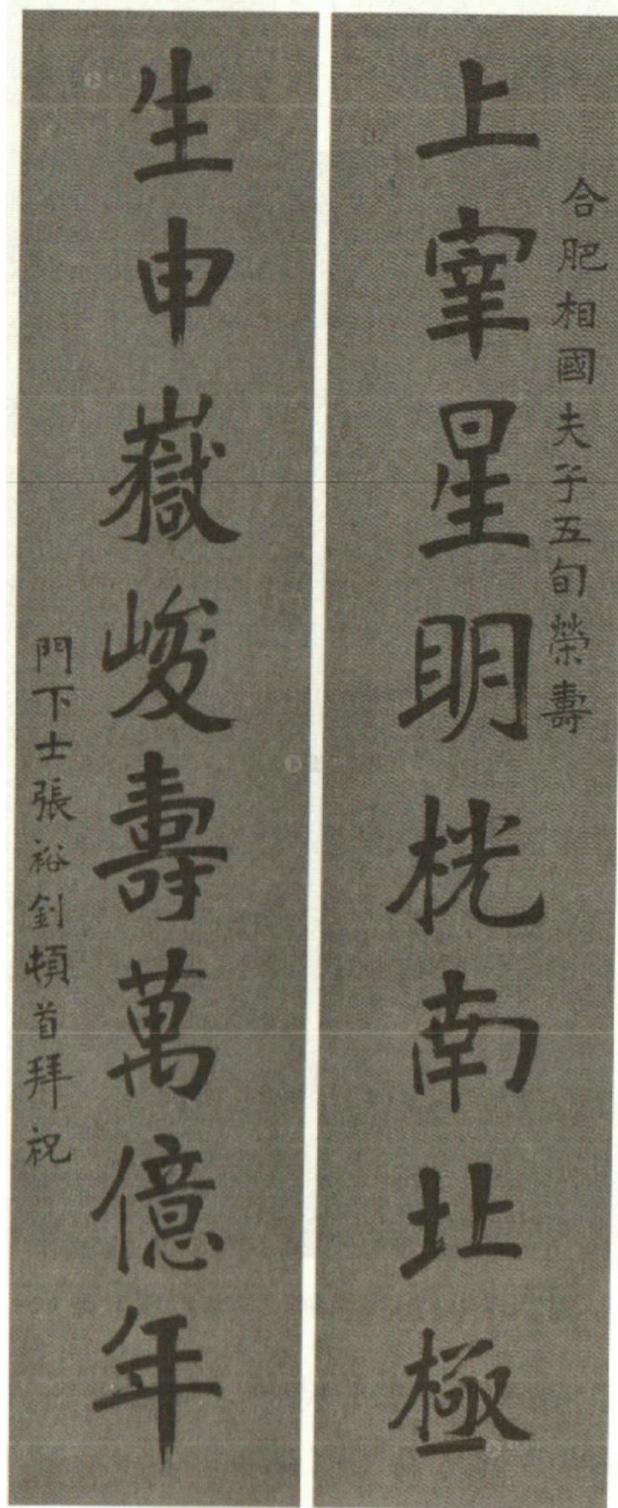


【図 9】「梁南康簡王 蕭績神道二石柱題額」

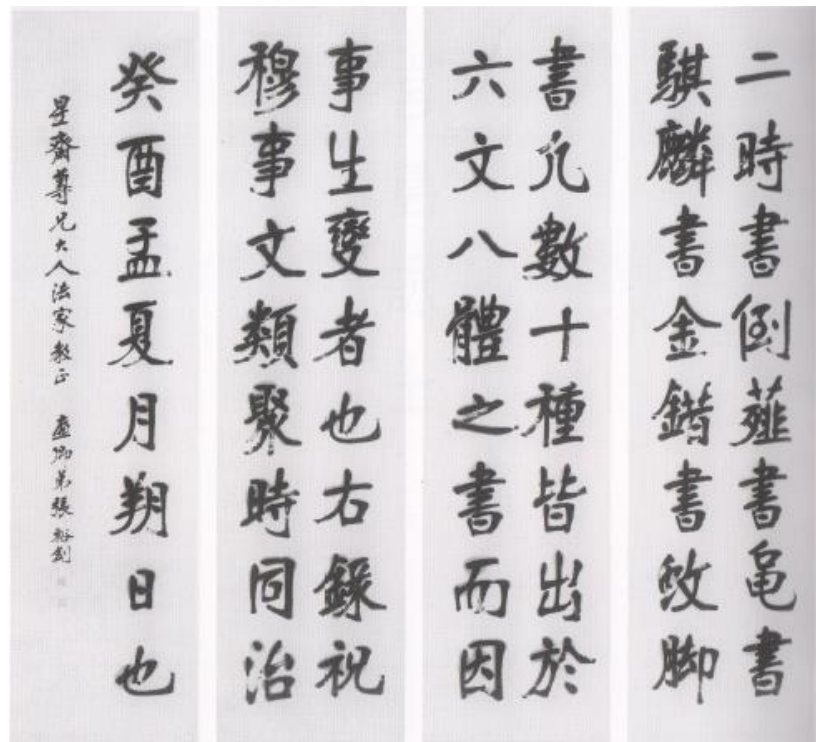
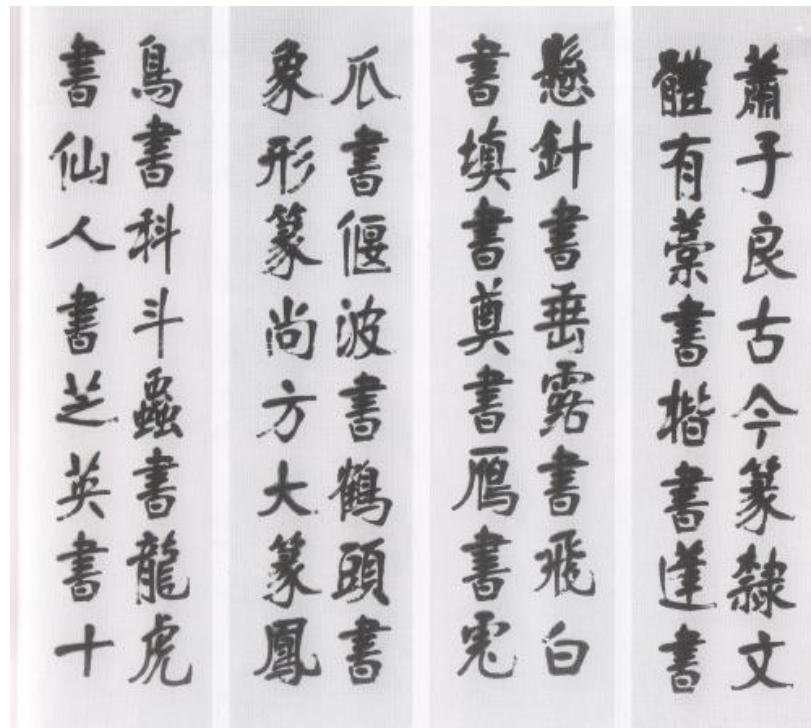


【図 10】「梁瘞鶴碑」





【図 11】 大字作品：張裕釗の李鴻章贈書作（同治 11 年推定）



【図 12】大字作品：張裕釗「事文類聚」（同治 12 年）

兼都察院右都  
御史總督兩江  
等處提督軍務

誥授光祿  
大夫文華殿大  
學士兵部尚書

管理兩淮鹽院  
事務世襲一等  
毅勇侯曾國藩

淮鹽總棧事務  
薛書常督修  
誥授資政大夫

【图 13】中字作品：張裕釗「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」

(同治 10 年)



吳徵君墓誌銘  
 武昌張裕釗撰文  
 徵君諱元甲字育泉先世自夔  
 源遷桐城為桐城人六世祖諱  
 爾昌直明季流寇之難用諸生  
 唱義危身以扞鄉里七姓祀之  
 高祖諱大陞歲貢生曾祖諱泌  
 國子監生祖諱太和侯選府經

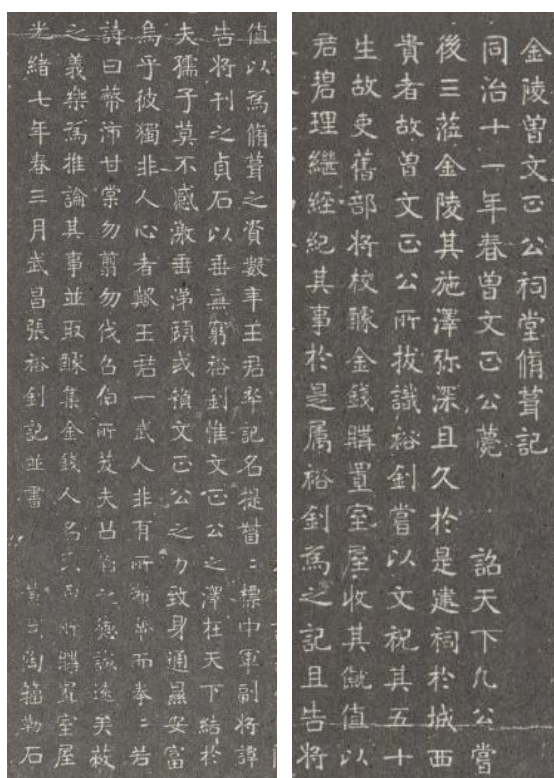
【圖 14】中字作品：張裕釗「吳徵君墓誌銘」（同治 12 年頃推定）

吳母馬太淑人祔葬誌  
 武昌張裕釗撰并書  
 往者桐城吳育泉徵君之卒裕釗既  
 為之銘以饒諸貞石越光緒元年而  
 徵君之配馬太淑人繼以七月十四  
 日年六十六卒其次子汝綸復以書  
 來曰先子銘幽之辭既幸得子文而  
 吾母今又歿吾兄弟荐罹閔凶慘怛  
 哀慕不知所出惟吾母之摯行宜不  
 得沒者庶其有聞於後而且諏日祔  
 於先子之墓次敢復請志其歲以卒  
 吾父母終始之賜其感且不朽裕釗  
 則敬諾汝綸又曰吾母之來歸也資

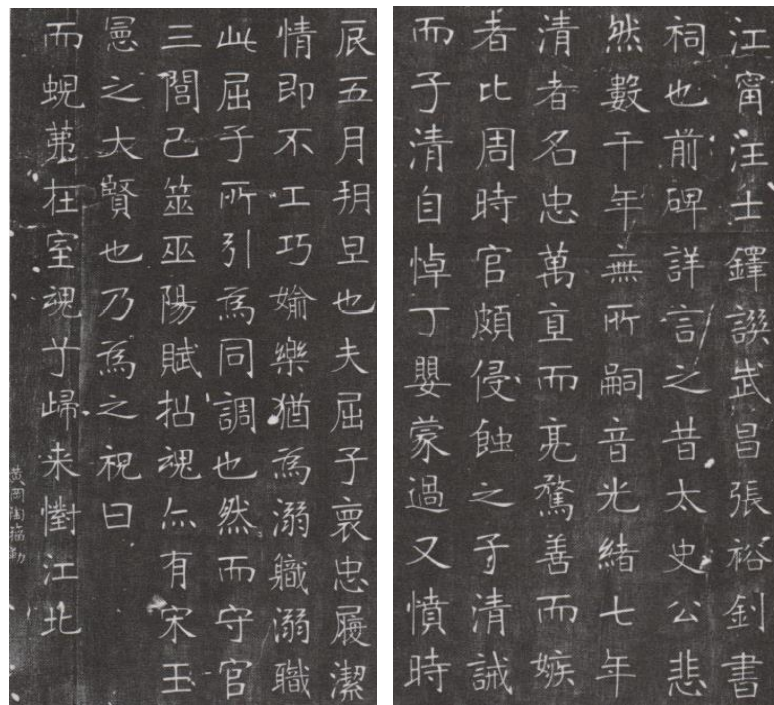
【圖 15】中字作品：張裕釗「吳母馬太淑人祔葬誌」（光緒元年推定）



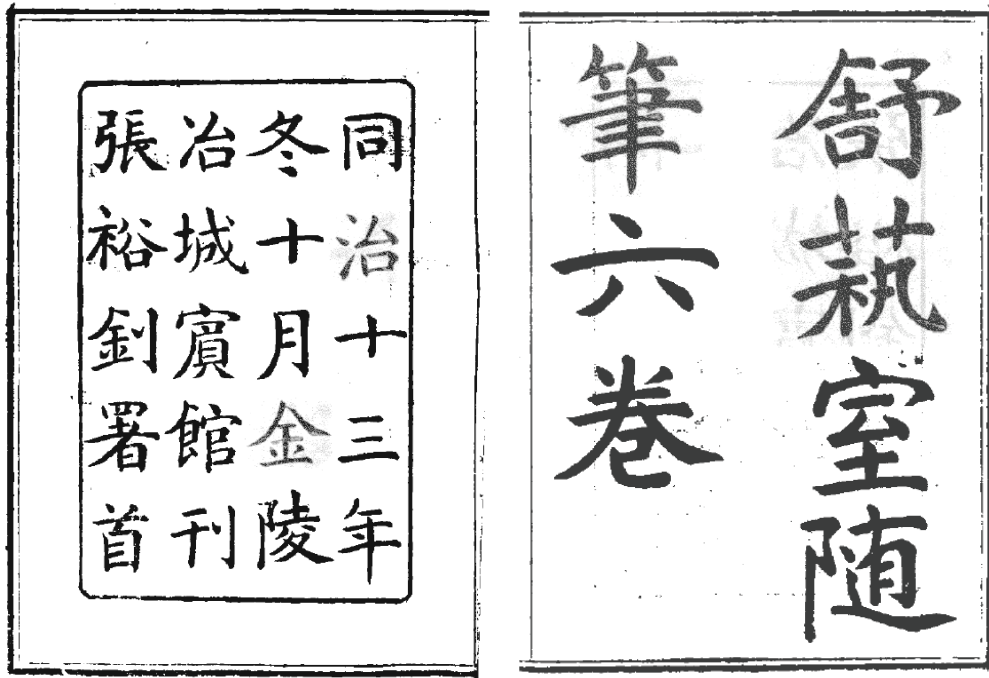
【圖 16】中字作品：張裕釗「吳蘭軒墓表」（光緒 4 年）



【圖 17】中字作品：張裕釗「金陵曾文正公祠修葺記」（光緒 7 年）

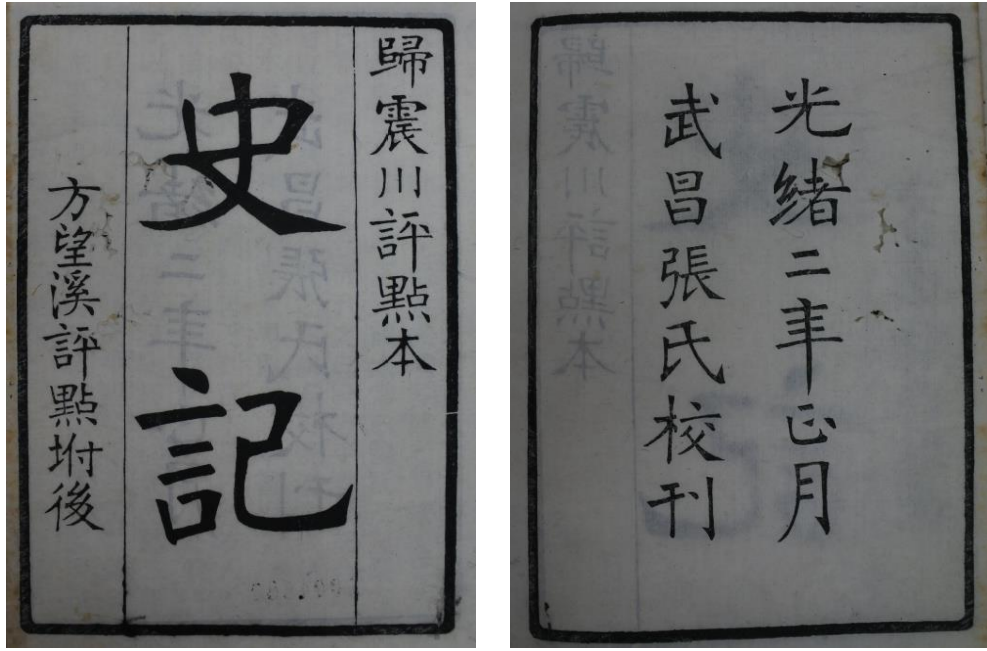


【図 18】 中字作品：張裕釗「屈子祠堂後碑」（光緒 7 年推定）



【図 19】 中字作品：張裕釗『舒芸室隨筆六卷』の題字（同治 13 年）

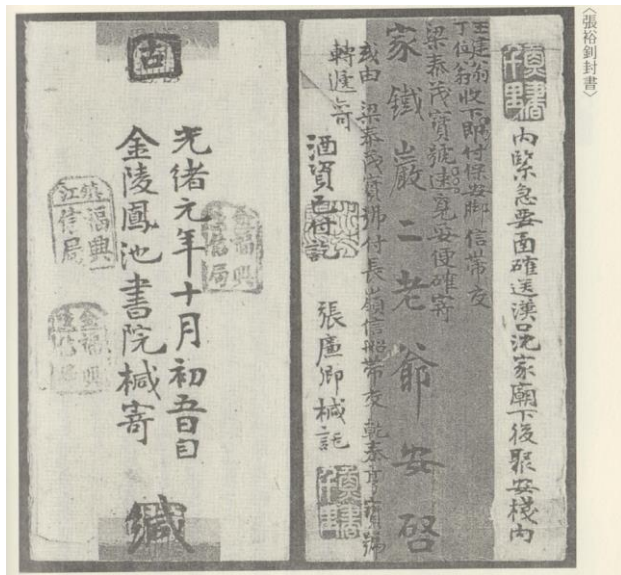




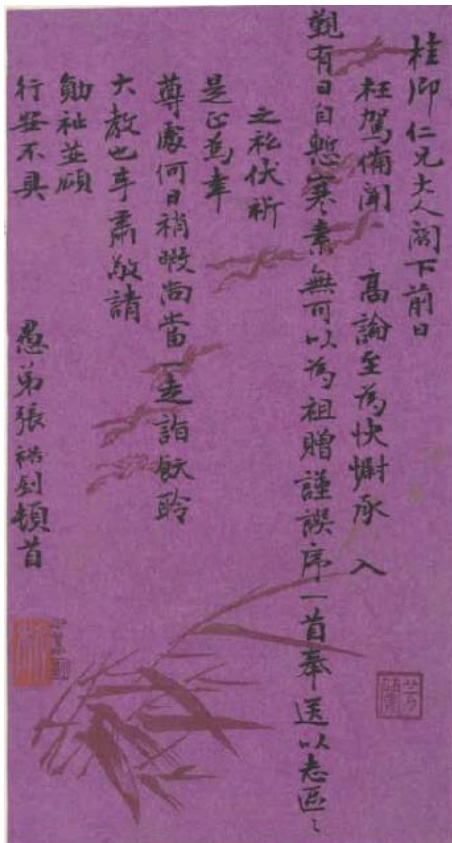
【図 20】中字作品：張裕釗『史記』の題字（光緒 2 年）



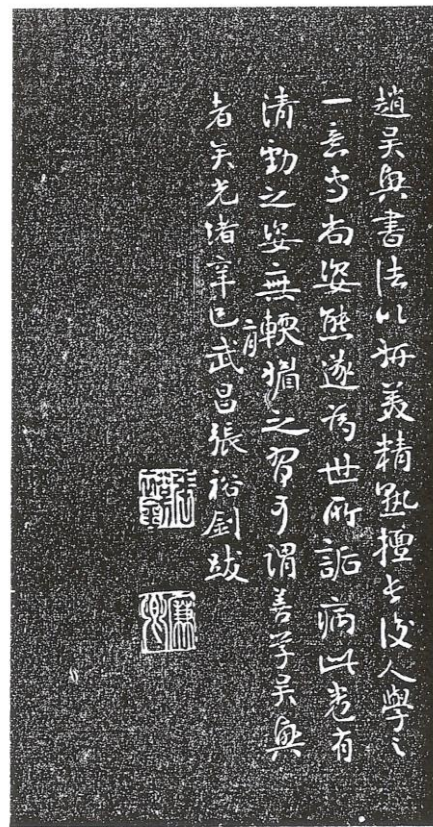
【図 21】中字作品：張裕釗『汪梅村先生集』の題字（光緒 7 年）



【図 22】小字作品：張裕釗の鉄巖宛書簡（光緒元年）



【図 25】小字作品：張裕釗の富升宛書簡（光緒 6 年推定）左



【図 23】小字作品：張裕釗の跋清徐沛齋「臨趙孟頫『道德經』」（光緒 7 年）右



樹岑仁兄大人侍史日前奉到七月白  
 惠函以夜未及裁第一昨又接奉六月十七  
 日可言指弊歸過甚非不肖所敢任就  
 畏偉哉宜速作日富良符私項裕列自爭之度  
 占得坤之六四乃一意學為元答元譽之高夫去雅  
 去駝雅之美任或以是月免雅今之世字然偏此類  
 得相在陸之雅括之道也惟是百年養稿千里振  
 勸少日衰神智日敝而大道茫々未知在何處  
 言下讀書表  
 就家信自述心定神閒他日千秋之業固書房  
 子矣近日必有得之之作餘以一  
 賜示不取  
 詢玉函字聖杜集某已藏可也間後書之士類不以為  
 憂之今字中為之紙夢遊  
 補掛深饒軍教紙希  
 聲入前段  
 也書所屬種  
 良友、此必不敢忘不日當以子歸里保道過皖城時一  
 切再為  
 回整復次  
 三弟不安不意弟張裕釗頓首月十二日  
 公在保得學文官原文莫子他著法亦曾過皖時書以就 遂又白  
 洪晉軒屬筆於後

樹岑仁兄大人侍史日前  
 賜我保尉渴望惟是匆々揖別未盡所衷夏五堂一假  
 歸公自未金陵時道過竟城即詣局中奉訪而  
 台後已前歸去矣為之惘然敬惟  
 襄述修富賢術咸宜諸存私項  
 只下文章已超出時輩萬々但望  
 一養之使益若動砥柱於以追古作者而與之並不難也  
 聞吳至甫在涇州甚有治績殊快人意然亦哀終祝其  
 解少有餘賦得解組歸未聞戶讀書使柳字有  
 成且為吾堂增重乃更佳耳  
 只下者之以為然邪 福到馬齒加長而字不進思終無所  
 就此事者以為局  
 諸之矣 翁親黃留榜鶴之聞新得貴易在委才短官法  
 且之事多所未諳裕到已屬書局其親近  
 有道誠求  
 教益伏惟  
 時加訓迪勵之以植身勸職俾得免於險越即不肖不翅  
 身交予  
 賜色羅少村近有訊不聞奉檄辦以市粉釐局此因  
 大河錢潤其甚躬而欲特之情彼然殊非所樂就也手項  
 若者安惟  
 亮既言不意弟張裕釗頓首中林前白

【図 24】 小字作品：張裕釗の徐宗亮宛 2 枚書簡  
 (同治 10 年～同治 12 年 2 月推定) (傍線筆者)

【表 1】同治前半期「鮑照飛白書勢銘」・後半期「贈李鴻章書作」

における張裕釗大楷の相違点、

同治後半期大楷「贈李鴻章書作」・中楷「代湘鄉曾相国重脩金山江天寺記」

における張裕釗の書作の共通点の比較

同治前半期 大楷「鮑照飛白書勢 銘」(同治 5 年)		同治後半期 大楷「贈李鴻章書作」 (同治 11 年)		同治後半期 中楷「代湘鄉曾相国重脩 金山江天寺記」(同治 10 年)	
行 意		整 齊		整 齊	
円 筆		方 筆		方 筆	
長 方		正 方		正 方	

【表 2】同治前半期「鮑照飛白書勢銘」・後半期「事文類聚」における張裕釗大楷の同特徴の比較

点画	同治前半期	同治後半期
	「鮑照飛白書勢銘」 (同治 5 年)	「事文類聚」 (同治 12 年)
横画		
縦画		
左払い		
ハネ		
乙脚		
転折		
右縦画 の収筆		
「龍鳥 飛白 虎」形		

【表 3】 莫友芝の咸豐年間小楷及び同治前半期・同治後半期及び光緒期  
 における張裕釗小楷の点画・結構の同特徴の比較

点画	左払い	ハネ	転折	結構	方向	乙脚
莫友芝 咸豐 8 年				莫友芝 咸豐 8 年		
莫友芝 咸豐 9 年				莫友芝 咸豐 9 年		
張① 同治 2 年				張① 同治 2 年		
張② 同治 2 年				張② 同治 2 年		
張③ 同治 3 年				張③ 同治 3 年		
張④ 同治 4 年				張④ 同治 4 年		
張⑤ 同治 7 年				張⑤ 同治 7 年		
張⑥ 同治 11 年				張⑥ 同治 11 年		
張⑦ 同治 11 年				張⑦ 同治 11 年		
張⑧ 光緒元年				張⑧ 光緒元年		






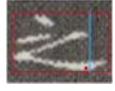



張⑨ 光緒6年				張⑨ 光緒6年		
張⑩ 光緒7年				張⑩ 光緒7年		

【表4】中字書作における梁碑から概形の影響

張の同治前半期の概形	 「鮑照飛白書勢銘」	 「事文類聚」	 「事文類聚」	 「事文類聚」	 「事文類聚」
唐碑-歐陽詢				なし	
唐碑-褚遂良		なし			
張の同治後半期・光緒前半期の概形	 碑碣①	 碑碣①	 碑碣②	 碑碣②	 碑碣②
梁碑 建陵東西闕 碑/蕭愔碑					

【表 5】 梁碑結構法の影響 (1) 払いとその他の部分の幅

唐碑 歐陽詢/ 褚遂良								
梁太祖文 皇帝神道 石柱題字					なし	なし	なし	なし
梁安成康 王蕭秀碑 碑額		なし						
梁安成康 王蕭秀碑 碑陰	なし						なし	
梁碑 蕭儼碑碑 額	なし	なし						
梁碑 蕭儼碑	なし	なし						
梁吳平忠 侯蕭景神 道石柱題 字鏡射	なし	なし						
梁臨川靖 惠王蕭宏 神道石柱 題字	なし	なし						
梁南康簡 王蕭績神 道石柱題 字	なし	なし						
碑碣 ①								
碑碣 ②								

碑碣 ③				
碑碣 ④				
碑碣 ⑤				
碑碣 ⑥				
題字 ②			なし	なし

【表 6】 梁碑結構法の影響（2） 乙脚のある横画の斜度

黄色線、水色の水平線と交叉した角度

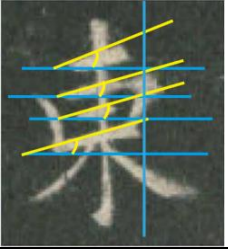
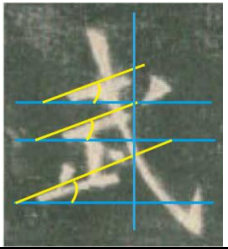

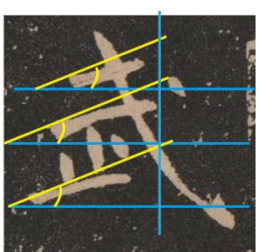
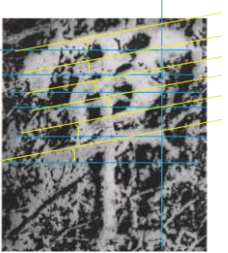
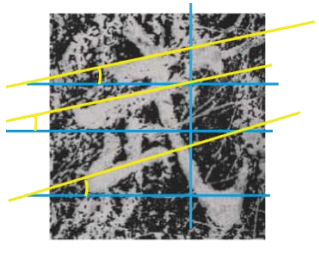
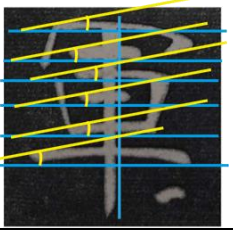
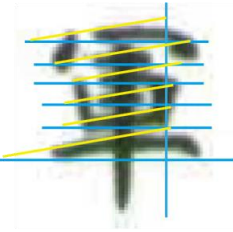

唐碑／梁碑／張裕釗の碑碣			
唐 碑	 <p>唐碑-歐陽詢</p>	 <p>唐碑-歐陽詢</p>	
	 <p>唐碑-褚遂良</p>	 <p>唐碑-褚遂良</p>	
梁 碑	 <p>梁碑-蕭愔碑</p>	 <p>梁碑-蕭愔碑</p>	
	張 裕 釗 碑 碣	 <p>碑碣①</p>	 <p>碑碣②</p>

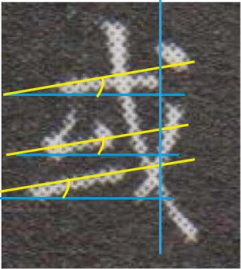
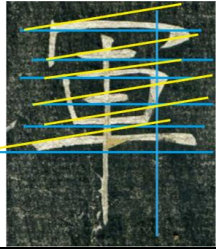
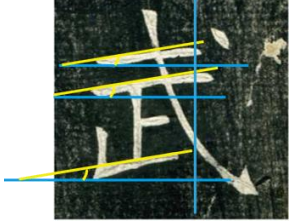
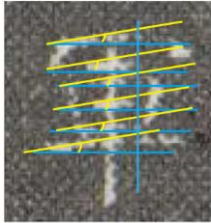
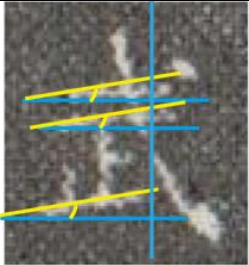



 <p>碑碣③</p>	 <p>碑碣③</p>	 <p>碑碣④</p>
 <p>碑碣④</p>	 <p>碑碣⑤</p>	 <p>碑碣⑤</p>
 <p>碑碣⑥</p>	 <p>碑碣⑥</p>	 <p>題字②</p>
 <p>題字③</p>	 <p>題字③</p>	

【表 7】 梁碑結構法の影響（3） 他の横画の斜度

黄色線、水色の水平線と交叉した角度

唐碑/梁碑 張裕釗の碑碣	車のある横画の斜度	戈のある横画の斜度
唐碑 歐陽詢		
唐碑 褚遂良		
梁碑 蕭愔碑		
張裕釗 碑碣①		なし
張裕釗 碑碣②		

<p>張裕釗 碑碣③</p>	<p>なし</p>	
<p>張裕釗 碑碣④</p>		
<p>張裕釗 碑碣⑤</p>		
<p>張裕釗 碑碣⑥</p>	<p>なし</p>	

【表 8】同治前半期の大楷・後半期の中楷における張裕釗の同特徴の比較

張裕釗の碑碣	ハネ	乙脚
同治前半期の大楷 「鮑照飛白書勢銘」		
この時期の 中楷－碑碣①		
この時期の 中楷－碑碣②		
この時期の 中楷－碑碣③		
この時期の 中楷－碑碣④		
この時期の 中楷－碑碣⑤		
この時期の 中楷－碑碣⑥		

【表 9】独自の特徴（1）払い

唐碑-歐/褚					
梁碑					
同治前半期 「鮑照飛白 書勢銘」					
この時期の 碑碣①					
この時期の 碑碣②					
					
この時期の 碑碣③					
この時期の 碑碣④					
					



この時期の 碑碣⑤					
この時期の 碑碣⑥					
この時期の 題字①					

【表 10】独自の特徴（2）点画に囲まれた中での長い縦画

唐碑- 歐/褚				
梁碑				
同治前半期 「鮑照飛白 書勢銘」				
この時期の 碑碣①				
この時期の 碑碣②				
この時期の 碑碣③				

この時期の 碑碣④				
この時期の 碑碣⑤				
この時期の 碑碣⑥				

【表 11】独自の特徴 (2) 縦画の強調

唐碑- 歐/褚			梁碑	
同治前半 期「鮑照飛 白書勢銘」	なし			
この時期 の碑碣②			碑碣⑤	
この時期 の碑碣④			碑碣⑥	

【表 12】独自の特徴 (3) 点から横画への変化

唐碑- 歐/褚			梁碑- 蕭愔碑		
同治前半期 「鮑照飛白 書勢銘」					
この時期の 碑碣②					
この時期の 碑碣③					
この時期の 碑碣④					
この時期の 碑碣⑤					
この時期の 碑碣⑥					



## 図版典拠

### 【図 1】莫友芝の張裕釗贈書作（同治 9 年推定）

莫友芝「楷書七言詩」（2017 年 7 月 15 日閲覧）

<http://book.kongfz.com/75119/566652570/>

### 【図 2】「梁太祖文皇帝（蕭順之） 梁建陵東西闕」

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、36～37 頁。

### 【図 3】梁貝義淵「梁安成康王 蕭秀東西碑」碑額

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、38～39 頁。

### 【図 4】梁貝義淵「梁安成康王 蕭秀東西碑」碑陰

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、40～41 頁。

### 【図 5】梁貝義淵「梁始興忠武王蕭憺碑」碑額

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、42～43 頁。

### 【図 6】梁貝義淵「梁始興忠武王蕭憺碑」碑陽

『書跡名品叢刊 梁貝義淵 蕭憺碑』田近憲三蔵本（二玄社、1988 年 11 月）

【図 7】「梁吳平忠侯 蕭景神道石柱題額」

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、50～51 頁。

【図 8】「梁臨川恵王 蕭宏神道二石柱題額」

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、52～53 頁。

【図 9】「梁南康簡王 蕭績神道二石柱題額」

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、54～55 頁。

【図 10】「梁瘞鶴碑」

神田喜一郎、田中親美監修『書道全集』、第五冊、中国 5、南北朝 I（平凡社、1980 年）、22～23 頁。

【図 11】張裕釗の李鴻章贈書作（同治 11 年推定）

序章掲注 75、陳氏著、197 頁。

【図 12】張裕釗「事文類聚」（同治 12 年）

書象会発行『第四十回書象展記念—張廉卿・宮島詠士・上條信山作品集』（2001 年 7 月 6 日）、26～27 頁。

【図 13】張裕釗「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」（同治 10 年）

張裕釗「代湘鄉曾相国重脩金山江天寺記」拓本、中国個人蔵。

【図 14】張裕釗「吳徵君墓誌銘」(同治 12 年頃推定)

趙金敏「張裕釗書『吳徵君墓誌銘』」(『收藏家』第 4 期、北京市文物局、1994 年)、27～29 頁。

【図 15】張裕釗「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年推定)

序章掲注 119、張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会編、48 頁。

【図 16】張裕釗「吳蘭軒墓表」(光緒 4 年)

張裕釗「吳蘭軒墓表」拓本。管見には、中国・日本個人蔵二冊が残っている。

【図 17】張裕釗「金陵曾文正公祠修葺記」(光緒 7 年)

序章掲注 61、魚住氏著、30 頁。

【図 18】張裕釗「屈子祠堂後碑」(光緒 7 年推定)

張裕釗「屈子祠堂後碑」拓本。中国個人蔵。

【図 19】張裕釗『舒芸室隨筆六卷』の題字(同治 13 年)

同治十三年冬十月金陵冶城賓館刊 張裕釗署首『舒芸室隨筆六卷』。哈佛燕京図書館蔵。

【図 20】張裕釗『史記』の題字(光緒 2 年)

歸震川評点本 方望溪評点附後 光緒二年正月武昌張氏校刊『史記』。南京

図書館蔵。

【図 21】張裕釗『汪梅村先生集』の題字（光緒 7 年）

光緒七年刊『汪梅村先生集』。中国国家図書館蔵。

【図 22】張裕釗の鉄巖宛書簡（光緒元年）

序章掲注 61、魚住氏著、164、30 頁。

【図 23】張裕釗の跋清徐沛斎「臨趙孟頫『道德経』」（光緒 7 年）右

瞿忠謀「從《評跋萃刊》看晚清書家對趙體書法的反思性評價」（『書法』2012 年第 11 期、2012 年 11 月）、96 頁。

【図 24】張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛 2 枚書簡（同治 11 年頃推定）

『蔣元卿旧蔵晚清和近代名人手札』（安徽省安慶市図書館古籍部蔵）

【図 25】張裕釗の富升宛書簡（光緒 6 年推定）左

国立故宮博物院 書画典蔵資料検索系統／購書 934（2017 年 7 月 15 日閲覧）

[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34926](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34926)

## 表図版の典拠

【表 1】同治前半期「鮑照飛白書勢銘」・後半期「贈李鴻章書作」

における張裕釗大楷の相違点、同治後半期大楷「贈李鴻章書作」・中楷「代

湘郷曾相国重脩金山江天寺記」における張裕釗の書作の共通点の比較

○張裕釗「鮑照飛白書勢銘」（同治 5 年）

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第 6 冊（世界書局、1925 年再版）。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998 年 3 月）、344～345 頁。

○張裕釗「贈李鴻章書作」（同治 11 年）

前掲図 11。

○張裕釗「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」（同治 10 年）

前掲図 13。

【表 2】同治前半期「鮑照飛白書勢銘」・後半期「事文類聚」における張裕釗大楷の同特徴の比較

○張裕釗「鮑照飛白書勢銘」

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第 6 冊（世界書局、1925 年再版）。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998 年 3 月）、344～345 頁。

○張裕釗「事文類聚」

前掲図 12。

【表 3】同治前半期・同治後半期及び光緒期における莫友芝・張裕釗小楷の点画・結構の同特徴の比較

○莫友芝「送九蘅弟之湖南鼎丞四首」（咸豐 8 年）

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選-莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範大学出版社、2014 年 12 月）、82～83 頁。

○莫友芝「和陶詩」卷（咸豐 9 年）

王紅光主編『貴州省博物館館藏精選-莫友芝書法篆刻作品集』（広西師範大学出版社、2014 年 12 月）、72～75 頁。

○張裕釗「劉府君墓誌銘」（同治 2 年推定）

張裕釗「劉府君墓誌銘」、浙江図書館古籍部蔵。書号：D605176、通号：XZ13717。

○張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 2 年推定）

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

○張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 2 年推定）

『陶風楼蔵名賢手札』宣紙影印初版（江蘇省立国学図書館出版、1930 年、南京図書館蔵）。

○張裕釗の徐宗亮（椒岑）宛書簡（同治 4 年推定）

『蒋元卿旧蔵晚清和近代名人手札』（安徽省安慶市図書館古籍部蔵）

○張裕釗の曾国藩宛書簡（同治 7 年推定）

張裕釗「致曾国藩」、陶湘『昭代名人尺牘小伝続集』卷 18、26 頁（文海

出版社、1980年)、総1327～1328頁。

○張裕釗の徐宗亮(椒岑)宛書簡(同治11年推定)

前掲図24。

○張裕釗の徐宗亮(椒岑)宛書簡(同治11年推定)

前掲図24。

○張裕釗の鉄巖宛書簡(光緒元年)

前掲図22。

○張裕釗の富升宛書簡(光緒6年推定)

前掲図25。

○張裕釗の跋清徐沛齋「臨趙孟頫『道德經』」(光緒7年)

瞿忠謀「從《評跋萃刊》看晚清書家對趙體書法的反思性評價」『書法』2012年第11期(2012年11月)、96頁。

【表4】中字書作における梁碑から概形の影響

【表5】梁碑結構法の影響(1) 払いとその他の部分の幅に差がない

【表6】梁碑結構法の影響(2) 乙脚のある横画の斜度

【表7】梁碑結構法の影響(3) 他の横画の斜度

【表8】同治前半期の大楷・後半期の中楷における張裕釗の同特徴の比較

【表9】独自の特徴(1) 払い

【表 10】 独自の特徴 (2) 点画に囲まれた中での長い縦画

【表 11】 独自の特徴 (3) 縦画の強調

【表 12】 独自の特徴 (4) 臬から横画への変化

○唐碑-歐陽詢

歐陽詢『原色法帖選 40：九成宮醴泉銘』（李鴻裔本、三井聴冰閣蔵）（二玄社、1991年3月）

○唐碑-褚遂良

褚遂良『宋拓雁塔聖教序』（東京国立博物館蔵）（三省堂出版株式会社、1946年2月）

○梁太祖文皇帝神道石柱題字

○梁安成康王蕭秀碑碑額

○梁安成康王蕭秀碑碑陰

○梁碑蕭憺碑碑額

○梁碑蕭憺碑

○梁吳平忠侯蕭景神道石柱題字鏡射

○梁臨川靖惠王蕭宏神道石柱題字

○梁南康簡王蕭績神道石柱題字

前掲図 2～図 10

○同治前半期の楷「鮑照飛白書勢銘」

劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第6冊（世界書局、1925年再版）。または劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998年3月）、344～345頁。



○この時期の中楷－碑碣①②③④⑤⑥

前掲図 13～図 18

○この時期の中楷－題字①②③

前掲図 19～図 21



## 第四章 光緒中期以降における張裕釗書法

### 序

張裕釗は光緒中期（光緒 9 年～20 年、1882～1894 年）に入ってから、自己の書法を更に発展させたといえる。この間、張裕釗は保定蓮池書院（光緒 9 年～14 年、1883～1888 年）・武昌江漢書院（光緒 15 年～17 年、1889～1891 年）・襄陽鹿門書院（光緒 17 年～18 年、1891～1892 年）の山長（今の大学の学長に当たる）となり、その時期の文人と交流したことが注目されてきたが、その書法はどのように展開されてきたかについては、議論が多く、先行研究の再検討が必要である。

これまでの先行研究では、魚住和晃氏が一貫して光緒中期を最も重要な時期として注目している<sup>1</sup>。近年、陳啓壯氏は、張裕釗の若年期の新資料を発見しながらも、光緒中期以降の作を集中して研究されている<sup>2</sup>。

本章では、光緒中期における張裕釗の書作品が非常に多く残っていることから、特に検討の対象としたい先行研究で検討されている書作品に対し、先行研究の成果も踏まえ再検討を加えるとともに、有紀年作品、及び年代推定できる書作に注目することとする。

先行研究では、光緒中期にかけての作品の位置付けや評価について、以下のように指摘している。まず、大字書作「箴言（崔瑗座右銘）」

---

<sup>1</sup> 序章注 81、魚住氏著。序章注 82、魚住氏著。序章注 61、魚住氏著。

<sup>2</sup> 序章注 75、陳氏著。

について、魚住和晃氏は「晩年となった裕釗が一字一字の結体に微妙な変化をもたせ、彼の書芸が、いよいよ佳境に入ったかを思わせる。謹厳な楷書からやや逸脱して、書を楽しむ。書体からいえば行書に入るわけであるが、筆法が篆隸の法、つまり彼のいう古法によっており、すべての画が等圧に引かれているため楷書のように見える。」<sup>3</sup>と述べており、魚住氏は「箴言（崔瑗座右銘）」を張裕釗の晩年作品における佳品としている。

次に、中字書作の代表作とされる「重脩南宮県学記」について述べたい。魚住氏は二つの版本を比較して、中華民国 7 年（1918）に刊行された一般的な版本に対し、線が細く、どこか繊弱なものが感じられ、裕釗としては、佳品とはあまりいえないものではないかと述べている。しかし、その後、魚住氏は昭和 53 年（1978）の秋に良拓を得たことで、考えを一新し、線が初見の版本に比べてはるかに太く豊かで、一字一字に素晴らしいスケールを感じさせる、と指摘している<sup>4</sup>。陳啓壯氏も、「重脩南宮県学記」は彼の代名詞となる作品として、最高のものと見なしている。書風については細くて力があるとし、恐らく杜甫の詩「書貴瘦硬方通神（書は瘦硬を貴び、方に神に通ず）」の啓発を得て、また一方で同時代の袁昶（1846～1900、字は爽秋、清朝官僚）の記録にあるように「礼器碑」の臨書の影響を受けたものであろうと指摘している<sup>5</sup>。

「重脩南宮県学記」のほか、「李剛介公殉難碑記」も年代推定において最も異議の提起された碑碣書作である。魚住氏・陳氏両者ともこの碑の石印本に注目し、魚住氏は以下のように述べている。

---

<sup>3</sup> 序章注 81、魚住氏著、169 頁。

<sup>4</sup> 序章注 81、魚住氏著、168 頁。

<sup>5</sup> 序章注 75、陳氏著、216～217 頁。

北碑に根幹をおいて唐碑の整齊さを加え、碑文としてふさわしい書風を造形し、さらに各点画の書法には、篆隸から学びとったところの直と曲が、きわめて自然な形で複合されている。碑学の大成者としての裕釗独歩の楷書の世界を思わせる。わずか四十四歳にして、彼の書法が既に完成期に至っていたことを、ものがたるものである。

6

張裕釗の44歳とは、同治6年を指している。この「李剛介公殉難碑記」において、彼の書法が既に完成期に至っていたとする。

一方、陳啓壯氏も本作の揮毫を同治6年に推定しており、方筆が多く北碑の様子が窺えるとする。しかし、その「外方内円」という筆法の特徴はすでに形成されており、碑の感覚が濃厚で帖の意が少なくなっていたが、自分なりの風格が形成されたと述べている<sup>7</sup>。魚住、陳の両氏は、同治6年の揮毫という見解に立つが、この点の再検討は本章の第二節で行いたい。<sup>8</sup>

この他、宮島蔵「千字文」（蓮池書院期推定）について、上條信山氏はその書風に対し、「北碑が巧みに調和され、楷書ながら筆意に微妙な行意があることに気づく。まさしく、張裕釗書法の極致を示す作といっても過言ではなく、書道史上を飾る神品である」と述べている。<sup>9</sup> また、魚住氏は書風が唐風を基調とした、整齊を尽したものであること

<sup>6</sup> 序章注81、魚住氏著、167～168頁。

<sup>7</sup> 序章注75、陳氏著、145頁・190～191頁。

<sup>8</sup> 第二節 同治後半期・光緒前半期からの書法変遷／一、張裕釗の書作／2. 碑碣書作／(2) 「李剛介公殉難碑記」(石印・湖北本)(光緒9～14年推定)を参照。

<sup>9</sup> 上條信山著『宮島詠士旧蔵 張廉卿千字文解説』(同朋社、昭和58年7月、1983年)、25頁。

を述べている<sup>10</sup>。

これらの先行研究によれば、その大字書作において、謹厳な楷書からやや逸脱して、行書に入るといふ指摘がある一方、筆法に篆隸の法があるとも述べている。また、中字書作には北碑に根幹をおいて唐碑の整齊さを加えたといふ説もある。しかし、これらの見解は、張裕釗書作品の実例をそれぞれ綿密に検証することがなかつたため、再考の余地があろう。

また、この時期に、張裕釗が「張猛龍碑」・「弔比干文」に影響を受けたと述べている先行研究がいくつか残っている。まず、楊祖武氏は張の書風を9種（書跡名+説）に分けている。その9種を三つの大きなグループに分類し、その一つに「張猛龍説、弔比干説、齊碑説」があるとする。李健氏（清道人の侄）、丁文雋氏、李紫屏氏は、張の書風が「弔比干文」に影響を受けたと述べている<sup>11</sup>。また、陳啓壯氏は「這以後許多年間、張公研究、臨写大量的魏碑石刻、尤其用功於『張猛龍』、『弔比干』、『高貞碑』等碑、收穫頗豐。（以降、長年にわたり、張公は大量の魏碑石刻を研究、臨写し、特に『張猛龍』、『弔比干』、『高貞碑』等の碑に専念して、多くの成果を得た。）」<sup>12</sup>と述べている。更に、張天弓氏は「關於張裕釗取法魏碑、研究者有『張猛龍碑』或『弔比干文』的爭議、筆者以為都有取法、從裝飾性看、恐怕取法後者多一点。（張裕釗が魏碑を手本にしたことについて、研究者の間では『張猛龍碑』か『弔比干文』かといふ議論がある。筆者は両者とも手本にしていたと思う。裝飾性については、恐らく後者から

<sup>10</sup> 序章注 81、魚住氏著、166～167 頁。

<sup>11</sup> 序章掲注 91、楊氏著「張裕釗書芸成就及分期」、21 頁。

<sup>12</sup> 序章掲注 75、陳氏著「碑骨帖姿 自成一脈—淺析張裕釗書法与魏碑的關係」、144 頁。

やや多く学んだのであろう。)」<sup>13</sup> と言っている。しかし、三者とも「張猛龍説」、「弔比干説」に言及するが、詳細な書風検証が行われていない状況となっている。

そこで本章では、光緒中期以降の張裕釗はどのような文人と交流し、どのように書法を発展したかについて、上記の先学で見解が分かれる主要な臨学対象の問題も含め考察してゆく。張裕釗は莫繩孫（1844～1919、莫友芝の二子、字は仲武）と交際を持ち、莫を通して「弔比干文」を過眼したと推測されるため、その可能性を検証する。鄭孝胥（1860～1938、号は海蔵、清末の官僚・満州国の政治家・書家）・沈曾植（1850～1922、字は子培、晩号は寐叟、書法家・史学家）・袁昶など張裕釗と交わった文人たちの記録からも、張裕釗の書作は「弔比干文」に基づいたことが有力視される。更に、そこから張裕釗が独自の書風に発展させたことを、肉筆資料の書風比較から明らかにしたい。

## 第一節 張裕釗による「弔比干文」の学習及び翻刻情報の交流

本節ではまず、光緒中期における沈曾植・袁昶・鄭孝胥の交流記録から張裕釗が「弔比干文」（図 1）を学習したことの記録を検証し、また張裕釗の咸豊年間における莫友芝との交友の経過を再検討する。更に、莫繩孫との交わりにも注目し、「弔比干文」の翻刻情報に関する張裕釗の交流の経緯を分析する。

### 一、 袁昶・沈曾植・鄭孝胥との交流による「弔比干文」の学習記録

---

<sup>13</sup> 張天弓「簡論張裕釗の文士魏碑楷書」『張裕釗卷』（張裕釗書法文化博物館、書法報社出版、2020年1月）、77頁。

## 1. 光緒中期における袁昶・沈曾植との交流

光緒中期（11～21年）にかけて袁昶の日記・沈曾植の年譜には、両者が直接、張裕釗と交流した状況や、張の学書に対する心得が記されている。

まず、袁昶が直接張裕釗と面会した記録が、光緒11年（1885）7月・光緒14年（1888）7月にある。

袁昶日記、光緒11年7月5日

武昌張廉卿先生裕釗自樊輿來、送其二子鄉試。枉過瀨齋、談久之去。<sup>14</sup>

武昌張廉卿先生裕釗は樊輿（蓮池書院のあった保定）より来られ、彼の二子が郷試を受けるため、彼らを見送った。回り道をして瀨齋に立ち寄り、久しく談話してから別れた。

袁昶日記、光緒11年7月29日

招張廉卿山長、洪右臣給諫、蒞卿、定勇、子培、季直小集。<sup>15</sup>

張廉卿山長、洪右臣給諫、蒞卿、定勇、子培、季直を招き集まった。

袁昶日記、光緒11年8月

張廉卿先生名裕釗、武昌人。道光末考国子監学、録考官為曾文正公。文正得其卷、出語人曰：「曾子固復出矣。」後廉翁治古文甚

<sup>14</sup> 許全勝撰『沈曾植年譜長編』（中華書局、2007年8月）、63頁。

<sup>15</sup> 前掲注11、許氏撰沈曾植年譜、64頁。



勤、依文正於江南節署、雅為公所器厚。

廉翁口不臧否人物、不談時事、有先輩風度。今日枉過村舍、忽慨然言之、所言極中時病、非書生迂闊語也。<sup>16</sup>

張廉卿先生は名を裕釗といい、武昌の人である。道光末に国子監学の試験を受け、監督官は曾文正公（曾國藩）であった。文正は彼の答案を得て、ほかの人に「曾子固（曾鞏）の再来だ」と言われた。その後、廉翁は古文を修めることに甚だ努め、文正が江南官署にいたために、文正に大変重んぜられた。

廉翁は人物を褒貶せず、時事についても語らず、先輩の態度というものがあった。今日、村舎に寄道した際、急に感慨深くこれを言った。時局の弊を突くのは、書生の不注意の言葉ではないというとおりのりである。

袁昶日記、光緒14年7月

晤張廉卿山長、云明年將移主鄂中江漢書院、動南歸之興矣。<sup>17</sup>

張廉卿山長と面会するに、彼は来年に鄂中の江漢書院へ移動し勤めるつもりであるという。南に帰省したい気持ちからであろう。

以上から、袁昶は張裕釗の性格を評価し、彼の行跡までも把握していることが分かる。

また、袁昶は張裕釗の書について、以下のように記載している。

---

<sup>16</sup> 序章注115、袁昶著、孫之梅整理日記（中）、638～639頁。

<sup>17</sup> 序章注115、袁昶著、孫之梅整理日記（中）、750頁。

袁昶日記、光緒 11 年 11 月

聞張廉翁每晨早起、臨「礼器碑」一通、率反覆有字而後易紙。不輕為人作八分、然大楷由是日進、瘦勁有力、何猿叟後不易得也。

能深入篆籀法、然後工作隸、能精通隸勢、然後工作大楷。能下筆深於楷、則然後可縱筆為行草。古人学芸事、厘然有次敍、絕不相乱。

此取法上乘乃得中乘之訣也。<sup>18</sup>

張廉翁は毎朝早く起きて、「礼器碑」を一回通して臨書し、字を重ねて書いてから紙を変えたことを聞いた。軽々しく人のために八分を作らず、そのために大楷が日に日に進展し、瘦勁で力があり、何猿叟（何紹基）の後の代えがたい人物となった。

篆籀の法に深く精通し、その後、隸書を作るのに巧みになった。隸書の態勢に精通し、その後、大楷を作るのに巧みになった。揮毫する際に楷書を深く理解していれば、ほしいままに行草を書くことができる。古人が技芸を学んだときには、学習の順番があり、軽率にはしなかった。最高のものを手本にしても、やっと中ぐらいの要訣しか得られないのである。

袁昶日記、光緒 12 年 8 月

張廉卿先生書来、論古人作隸以拙勝、今人以巧敗。即推之万事万物皆然。<sup>19</sup>

---

<sup>18</sup> 序章注 115、袁昶著、孫之梅整理日記（中）、645 頁。

<sup>19</sup> 序章注 115、袁昶著、孫之梅整理日記（中）、662 頁。

張廉卿先生の書簡が届いた。古人は隸書を作るうえで拙によって勝れるが、今の人は巧みであるために劣っていると論じていた。これを推し量るに、万事万物が全て同様である。

袁昶日記、光緒 14 年（1888）8 月

詣廉翁、叩筆法。廉翁論包安吳言執筆名指力与大指相敵、乃有佳書。（中略）頃為子培述此語、子培復積之云「（中略）廉翁本意殆欲以至樸寓其至巧也。芸非天機精者、不能入神、故如是夫。」（中略）良以專精真行、或可運篆勢分韻草情融裁變化其中、以自成一家之氣格。（中略）送張廉老行、九十月之交、將歸鄂中矣。<sup>20</sup>

廉翁を訪ね、筆法について問うた。廉翁は包安吳（包世臣）が言う執筆を論じており、薬指の力と親指か拮抗すると、良い書を作れる。

（中略）この頃、子培（沈曾植）のためにこれを述べた。子培がまたこれを解釈して言った、「（中略）廉翁の本意は素朴さの中に巧妙さを備わせることにある。芸術は天機の精なる者でなければ、神に入ることはできない、だからこのようであるのだ。」と。（中略）それ故、楷書、行書の二書体に専念すれば、またも篆書の勢や隸書の韻や草書の感情が融合して変化することができ、自分なりのスタイルができる。（中略）張廉老を見送った。九月から十月の間に、また鄂（湖北鄂州）に戻るそうである。

袁昶日記、光緒 14 年（1888）9 月

---

<sup>20</sup> 序章注 115、袁昶著、孫之梅整理日記（中）、754～756 頁。

細玩廉翁行楷間架結構、有因方為圭、遇円成璧之妙。<sup>21</sup>

廉翁の行書楷書の結体を仔細に観察すれば、方により圭を成し、円は璧の良さを成していることが見てとれる。

これらの記録から、光緒 11 年 7 月から 8 月にかけて、また光緒 14 年 8 月において、袁昶が張裕釗とよく面会し、書に関する考え方を語り合ったことが分かる。

その後、袁昶のほか、沈曾植も張裕釗と交流している。その記載は以下の通りである。

沈曾植年譜、光緒 11 年 8 月 20 日

送廉卿先生出都、赴保定蓮池書院。(中略) 子培前日与廉翁論執筆須練名指之力、与食指、中指相抵、功候殊不易到。<sup>22</sup>

廉卿先生が都を出るのを見送って保定の蓮池書院に赴く。(中略) 子培(沈曾植)が前日に廉翁と執筆について論じており、薬指の力を鍛え、人差し指と中指に拮抗しなければならないという、なかなか効果は現われにくい。

沈曾植年譜、『恪守盧日録』、光緒 14 年 8 月 10 日

濂老往過。<sup>23</sup>

濂老が立寄っていった。

沈曾植年譜、『恪守盧日録』、光緒 14 年 8 月 11 日

---

<sup>21</sup> 序章注 115、袁昶著、孫之梅整理日記(中)、760 頁。

<sup>22</sup> 前掲注 11、許氏撰沈曾植年譜、64 頁。

<sup>23</sup> 前掲注 11、許氏撰沈曾植年譜、96 頁。

飯後訪濂老、久談。<sup>24</sup>

食事後濂老を訪ね、長く談話した。

以上の記載により、光緒 11 年 8 月に沈曾植と執筆の要点について談話し、光緒 14 年 8 月にも面会した記録が残っている。また、張裕釗が沈曾植に贈った書作も残っており、その落款には「子培仁兄警書。廉卿弟張裕釗」（図 2）と書かれている。

袁昶の日記では、張裕釗が「弔比干文」を臨書した記録も、以下のように残されている。

袁昶日記、光緒 21 年（1895）正月

山長張廉卿（裕釗）、武昌人。臨「弔比干文」、「礼器碑」五十年、得其骨格。（乙未正月、光緒 11 年）<sup>25</sup>

山長張廉卿（裕釗）、武昌人。「弔比干文」、「礼器碑」を 50 年間かけて臨書し、その骨格を得た。（光緒 11 年正月）

これらの記述によれば、張裕釗が長い時間をかけて魏「弔比干文」、漢「礼器碑」の骨格を会得したという。このことから「弔比干文」が北碑の楷書として、ひととき重視されたと考えられる。

## 2. 光緒中期における鄭孝胥との交流

---

<sup>24</sup> 前掲注 11、許氏撰沈曾植年譜、96 頁。

<sup>25</sup> 序章注 115、袁昶著、孫之梅整理日記（下）、「記生平師友行誼」、1119 頁。

鄭孝胥の日記には、沈曾植や袁昶、張謇（字は季直、1853～1926、張裕釗の弟子）を仲介として、鄭孝胥が張裕釗と間接的に交流した状況が以下の記述から窺える。

鄭孝胥日記、光緒 11 年 12 月 6 日

午後、季直来。邀赴広和居、袁爽秋、沈子培之約。<sup>26</sup>

午後、季直（張謇）が来てくれた。広和居に行き、約束した袁爽秋（袁昶）、沈子培（沈曾植）を迎える。

鄭孝胥日記、光緒 12 年正月 24 日

午後、季直同沈子培来、傍晚去。<sup>27</sup>

午後、季直（張謇）と沈子培（沈曾植）が来てくれた。夕方に別れた。

鄭孝胥日記、光緒 12 年 4 月 26 日

三逢文芸閣、云季直已往保定張廉卿処。<sup>28</sup>

三たび文芸閣を訪ねるに、季直（張謇）は既に保定の張廉卿の処に行つたと話した。

鄭孝胥日記、光緒 15 年 3 月 1 日

歩琉璃廠、同詣季直、遇武昌張道銘、廉卿之子。<sup>29</sup>

琉璃廠を歩いてから、共に季直（張謇）を訪ねた。武昌の張道銘に

---

<sup>26</sup> 序章注 114、勞氏整理鄭孝胥日記、84 頁。

<sup>27</sup> 序章注 114、勞氏整理鄭孝胥日記、第 1 冊、106 頁。

<sup>28</sup> 序章注 114、勞氏整理鄭孝胥日記、第 1 冊、106 頁。

<sup>29</sup> 序章注 114、勞氏整理鄭孝胥日記、第 1 冊、138 頁。

出会った。廉卿の子である。

以上によると、鄭孝胥日記で張裕釗に言及した記載には、季直（張謇）の名前も見える。鄭孝胥は、張裕釗に関する情報を張謇の仲介により知ったと考えられる。また、既述のように、光緒 11 年 8 月・光緒 14 年 8 月にかけて張裕釗は沈曾植と面会しており、そのほか張・沈・鄭三者の書に関する交流が以下の記述から見られる。

鄭孝胥日記、光緒 16 年閏 2 月 21 日

共子培談久之、觀張廉卿楷字。余近始悟作字貴鋪毫、於爛漫用意、而後能自成面目。張有大名、所書甚工、而絕不用此法、心不信之、究不能難也。<sup>30</sup>

（鄭孝胥は）沈曾植と共に長しく談話し、張廉卿の楷書を観察した。私は最近初めて、書作では鋪毫を尊ぶことを理解した。気どらずに意を用いて書いても、その後、自身のスタイルを表すことができる。張裕釗は有名で書に大変巧みであるが、この方法は絶対に使わない。心の中ではこれを信じないが、結局非難することができない。

以上示したように、沈曾植と鄭孝胥は張裕釗の楷書技法について互いに意見を交換した様子が窺える。また、光緒 17 年（1891）6 月 27 日の鄭孝胥の日記によれば、「劉子貞示張廉卿字（劉子貞が張裕釗の書法を鄭孝胥に示した）」<sup>31</sup>とあり、鄭孝胥は光緒 17 年にも張裕釗の書法を過眼したことが分かる。

<sup>30</sup> 前注 11、許氏撰沈曾植年譜、120 頁。前掲注 16、勞氏整理鄭孝胥日記、第 1 冊、171 頁。

<sup>31</sup> 序章注 114、勞氏整理鄭孝胥日記、第 1 冊、214 頁。

一方、張裕釗の書に付された宣統 2 年（1910 年）の鄭孝胥の題跋には、張が「弔比干文」を臨書した記載が確認できる。鄭孝胥は張裕釗と話題にした「弔比干文」の版本について言及している。

書各有態、要以味饒於勢為佳。廉卿先生筆筆取勢、微有張脈俛与之憾、然其高出流俗遠矣。宣統二年七月寿彤属、孝胥題。

廉卿先生盛称「弔比干文」。世無原拓、張謂即翻刻者、亦佳又喜。日本製筆以為得古法、日筆龕獮近於各省狼毫水筆。庚戌七夕孝胥。

（図 3）

書にはそれぞれ態勢があり、その態勢を味わい豊かにすることをよしとする。廉卿先生は一筆ごとに勢いがあり、やや奔放な憾みは残るが、しかし世間一般の習俗をはるかに超えたといえる。宣統 2 年 7 月、寿彤の求めにより孝胥が題す。

廉卿先生は「弔比干文」を称賛されている。世に原拓がなく、張がいうには翻刻であるとするが、素晴らしく好ましいものである。日本の製筆は、古法を得ていると思われるが、日本の筆は粗野で各省の狼毫の水筆に似ている。庚戌七夕、孝胥。

宣統二年庚戌とは 1910 年を指しており、張裕釗が光緒 20 年（1894）に他界してから 6 年後のことである。以上に記したように、二人が「弔比干文」に言及しており、張裕釗は「弔比干文」を翻刻の拓本としながらも評価していたことが分かる。

では、張裕釗は「弔比干文」の翻刻に関する情報をどのように知ったのだろうか。下項で考察してゆく。



## 二、 莫友芝・莫繩孫による「弔比干文」の翻刻情報の交流

上項では、張裕釗が「弔比干文」を目にしていたことを明らかにした。本項では、まず、咸豊年間にかけて張裕釗が莫友芝との交流によって「弔比干文」が翻刻であるという情報を知ったことを検討する。また、光緒中期にかけて莫友芝の子、莫繩孫との交流について考察する。

### 1. 咸豊年間における莫友芝との交流

以下、莫友芝の収蔵品「弔比干文」について検討する。まず、莫友芝『金石筆識』の「魏孝文帝弔比干文」において以下のように述べられている。

嘉、道以来、相習尚元魏人碑版。此石朝廷著作、書手尤極一時能事、□精誼当冠一代、老輩以元祐重刻、不甚重之、非鑑之真者。每經比干廟、此石独精采動人、徘徊不忍舍去。咸豊庚申初秋、手拓此紙、辛酉初夏、乃翦貼於湖北撫署多桂園、書示繩兒。(咸豊 11 年初夏)<sup>32</sup>

嘉慶・道光以来、書を学ぶのに北魏人の碑版が尊ばれている。この石は朝廷の著作であり、書き手は、当時最もこのことに優れた者であった。□は素晴らしく当代第一である。先輩が元祐間の再刻を重視していないのは、正しい鑑定とは言えない。比干廟を過ぎるたびに、この石だけが素晴らしく、その周りを巡り立ち去ることが難しかった。咸豊庚申の初秋にこの紙に採拓し、辛酉初夏に湖北撫署の

<sup>32</sup> 第二章注 46、莫友芝著、張氏校点、附録二『金石筆識』「魏孝文帝弔比干文」、176 頁。

多桂園で剪装し、子の繩孫に示す。(咸豊 11 年初夏)

撫署とは、巡撫の衙門（役所）であり、元祐年（1086～1094）とは宋哲宗の年号である。莫友芝の記録によると宋代に重建した碑が存しているが、重視されていなかったということが分かる。また、彼は「弔比干文」を収蔵し、咸豊 11 年初夏（6 月）に湖北巡撫の衙門で息子の莫繩孫に示したことがあったということである。

同じ頃、莫友芝が張裕釗と初めて対面したのも咸豊 11 年（1861）の 6 月だった。莫友芝の日記の咸豊 11 年 6 月 22 日に「午晤張廉卿於丹初許」（正午頃に丹初（閻敬銘、1817～1892 年、清末の官僚、字は丹初。）のところで張廉卿と面会した）とあり、閻敬銘はその際には湖北按察使<sup>33</sup>（清朝では管轄する省の司法・治安・監察を司った）だった。三人とも湖北の衙門で出会ったことが分かる。

翌日となる同年 6 月 23 日の日記には「廉卿相訪」（廉卿が私のところまで訪ねた。）とあり、書作品や碑帖など関心を寄せる張裕釗は莫友芝の処まで訪ね、莫友芝の収蔵品も過眼したと推測される。次に、同年 6 月 24 日には「晨謁宮保別。（中略）梅岑・廉卿・桐雲諸君子并來相送。（中略）与廉卿並属口候滌老、未及作書。<sup>34</sup>（朝、胡宮保（林翼）に会って別れた（中略）。梅岑・廉卿・桐雲など諸君子が来たので見送った。

<sup>33</sup> 湖北按察使

閻敬銘：咸豊 11 年～同治 1 年（清代職官年表、第 3 冊、2165～2166 頁）

清代職官資料庫（2021 年 5 月 3 日に検索）

<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?.d3fd00779AC000010000000000A0000000100000010^00000A0011004287>

<sup>34</sup> 序章注 113、莫友芝著、張氏整理。咸豊 11 年 6 月 22 日、同年 6 月 23 日、同年 6 月 24 日（39 頁）。

加えて、咸豊 11 月にも両者が面対面の記録もあった。

同年 11 月 4 日の条に「張廉卿裕釗至。（中略）晚訪廉卿。」（62 頁）、同年 11 月 7 日の条に「訪張廉卿。」（63 頁）、同年 11 月 9 日の条に「廉卿、子白晚相過。」（63 頁）、同年 11 月 11 日の条に「過少荃、尚齋、子白、廉卿談。」（63 頁）、同年 11 月 18 日の条に「訪廉卿。」（63 頁）、同年 11 月 19 日の条に「過廉卿談。」（63 頁）、同年 11 月 21 日の条に「走幕府賀至、與廉、白縦談。」（64 頁）、同年 11 月 22 日の条に「廉卿言明日当歸省。」（65 頁）

(中略) 廉卿と共に滌老(曾国藩)に挨拶したが、書の揮毫に及んでいない。)とある。咸豊 11 年 6 月下旬にかけて莫友芝が張裕釗と何回も面会したことが分かる。従って、咸豊 11 年 6 月に莫友芝の『金石筆識』の内容と莫友芝の日記を勘案すれば、張裕釗が莫友芝から「弔比干文」の情報を知り得たであろうと推測される。

さて、伏見冲敬氏は、「弔比干文」の著録について、宋の欧陽棐編『集古録目』には載せるが、やや詳しい記録を見るのは宋の趙明誠『金石録』(巻 2)が始めであることを述べている。また、『宝刻叢編』(巻 6) 衛州の条にこの碑も載せるが、晩清において「弔比干文」について言及しているのは莫友芝の『金石筆識』のみであるという<sup>35</sup>。

加えて、貴州省図書館では莫友芝が同治 10 年(1871)に臨書した 3 枚「弔比干文」<sup>36</sup>を所蔵しており、これによれば莫友芝の書学に対して「弔比干文」が重要な役割を果たしたと考えられる。

以上のことから、張裕釗は咸豊 11 年 6 月頃に莫友芝から「弔比干文」の翻刻情報を得たことが推測される。

## 2. 光緒中期における莫繩孫との交流

同治 10 年(1871)9 月、莫友芝は他界したが、張裕釗は莫友芝の子である莫繩孫との交流を保持しており、張裕釗が莫繩孫へ贈った書作も残されている(図 4)。

光緒 7 年(1881)末、張が江寧鳳池書院を辞め、保定蓮池書院に向う時期の状況について、張は莫繩孫に書簡を宛て、以下のように述べ

<sup>35</sup> 伏見冲敬「北魏・孝文帝弔比干文」(『書品』186号、東洋書道協会、1967年)、2~4頁。

<sup>36</sup> 莫友芝墨蹟一卷、清同治 10 年、索書號：08230、題名「莫友芝先生墨蹟」、内頁題名「徵君公摹魏孝文弔比干文三紙一開」。貴州省図書館蔵。

ている。

弟両載以来、吳楚往還、至於三反、馳驅奔走、殆無虛日、即尊處亦未及一通問訊、深用歉然。頃承合肥相国暨張振帥招主直隸蓮池講席、不日便擬取道海上埤輪船北征。(3月7日)(図5)

私はこの2年間、吳と楚を往復すること3回となり、奔走してほとんど暇がなく、貴兄に一通の挨拶もできず、深くお詫び申し上げます。最近、合肥相国と張振帥の招請により、直隸蓮池の講席に就くため、間もなく上海を經由し輪船で北へ参るつもりです。

(3月7日)

これにより、張裕釗は合肥相国(李鴻章)と張振帥(張樹聲)の招請により、直隸の蓮池書院の講席となったことが分かる。実際に蓮池書院の講席となった年代は光緒9年(1883)であり、そのことから、この書簡は光緒8年や9年頃に書かれたと推測される。

一方、張裕釗は莫友芝・莫繩孫・黎庶昌(1837~1898、曾國藩の四大門徒の一人、字は蕓齋)と光緒中期に親密な間柄になったと考えられる。彼らが互いに親族関係にあったことは、黎庶昌が莫繩孫に宛てた書簡から窺える。内容は以下のようにある。

仲武賢侄足下：尊處与張導岷聯姻事業經定議、前将来函寄与廉翁閱看、並属其於金陵等處就近託一熟人為媒、以後一切下聘及兩家有應商之話均可由此人轉達。<sup>37</sup>

<sup>37</sup> 序章注26、黎庶昌著、黎鐸・龍先緒校正全集、第8冊「黎庶昌遺札：致莫繩孫八」、695頁。

仲武賢侄足下：貴殿と張導岷による婚姻事業については既に評議し決定されたとのこと、先に送られてきた手紙を廉翁（張裕釗）と拝見しました。彼にお願いして、金陵（南京）などの処で知人に仲人を依頼するようにします。その後、一切の結納金及び両家が相談したい話があれば、その人に伝えれば良いと思います。

張導岷は張裕釗の長子張沆を指す。この内容によれば、黎庶昌が莫繩孫を「賢侄」と呼び、また莫繩孫の二女莫德弟と張沆の長子張孝沐の婚約について、黎庶昌・莫繩孫と張裕釗三者が仲人の媒酌のことを相談していたことが分かる。また、『莫繩孫年譜簡編』によれば、この婚約は光緒 17 年（1891）に決定したことが分かる<sup>38</sup>。

なお、もう一通の書簡、張裕釗が莫繩孫に宛てた書簡には以下のよう  
に述べられている。

仲武姻世兄足下、送上『毛太史記』式部、一以奉詒足下、一以贈高君、即請轉至。（中略）。裕釗頓首。（図 6）

仲武姻世兄足下、『毛太史記』2 部を送りました。一部はあなたに差し上げて、一部は高君に差し上げたいと思います。よろしくご転送ください。（中略）裕釗頓首。

聯姻の関係によって、莫繩孫を「姻世兄」という呼んでいる。親族の関係に基づいており、親密な間柄であることが分かった。

一方、莫繩孫は、張裕釗が晩年に西安にいたときの情報、または張裕

---

<sup>38</sup> 序章注 42、莫友芝著、張氏撰、「譜後・莫繩孫年譜簡編」、「二女德弟已許張導岷之長子」、557 頁。

釗作品の収蔵について、光緒 18～20 年（1892～1894 年）の日記にも記載している。「張導岷住西安省草廠巷口路北（張導岷は西安省の草廠巷口路北に住んでいる。）」「張廉翁主襄陽鹿門書院（張廉翁は襄陽の鹿門書院の主であった。）」「張廉卿行書硃格大屏四幅」「張廉卿行書四幅」「張廉卿行書高麗紙屏四幅」「張廉卿単款紅堂聯」「張廉卿酌理富才八字聯」「張廉卿七字高麗紙双行聯」などで見られることから、晩年まで張裕釗との交流が続いていた様子が窺える（図 7）。

以上、引用してきた記述により、蓮池書院に向かう前に張裕釗は莫友芝の子である莫繩孫と、互いに親族となり、また莫繩孫との交誼は張裕釗が晩年に鹿門書院に務めた頃まで続いたことが分かる。

これまでの記述を総合すると、張裕釗が「弔比干文」の翻刻に関する情報を得たのは咸豊年間における莫友芝からの可能性が高く、莫繩孫との交流がその後も続くことから、光緒中期以降に張が改めて「弔比干文」を重視した可能性が高いと考えられる。この前提に立てば、袁昶、沈曾植、鄭孝胥等の後進を啓発した張裕釗の書法は、莫友芝に由来する「弔比干文」に根差すものだったと言えよう。

## 第二節 同治後半期・光緒前半期からの書作品変遷

本節では、有紀年や年代推定できる光緒中期における張裕釗の書作を紹介し、大字書作・碑碣書作・その他の三種類に分けて、また同治後半期・光緒前半期からの書作品の変遷について推定したい。

### 一、張裕釗の書作

## 1. 大字書作

大字書作では、紀年がある書作として斉令辰蔵「斉公祠楹聯」（光緒 12 年）、「箴言」（光緒 17 年）、「節東都賦・西京賦」（江漢書院時期、光緒 15～17 年）の三作が残っている。

斉令辰蔵「斉公祠楹聯」は、張裕釗が斉令辰（生卒年不詳、字は稷亭、清朝官僚、蓮池書院の弟子）の宗族のため、「中書奏事。秘監政声。譜牒未淪。宗族至今被光寵。李相高門。孫公甲弟。祠堂有頌。鼎鍾長与儷珊瑚鐫。（光緒丙戌（1886）五月裕釗敬書）」との句を撰し、祠堂の聯とした。もとは辰砂で揮毫した祠堂聯（図 8）で、その後、斉令辰が張裕釗の四点の書作を出版（図 9）するに際し、この書作を第二冊に配している（図 10）。<sup>39</sup> この年、張裕釗は保定蓮池書院の主講に就いている。

「箴言」は、張裕釗が蓮池書院の門人劉若曾（生卒年不詳、字は仲魯）のため、「崔瑗座右銘」の一節を揮毫した書作である。「座右銘」は崔瑗（77～142、字は子玉、中国後漢の官僚）が撰した文章で、古来、書家にしばしば揮毫されている文章である。落款によると、「中魯仁弟以屏幅索書、且属書箴言、為録崔瑗座右銘・士孫瑞漢鏡銘、既用勗之、又以嘉其志也。光緒辛卯中冬、張裕釗并識。」（中魯仁弟が屏幅の書を依頼し、箴言を書くよう求めたので、崔瑗座右銘・士孫瑞漢鏡銘を録した。既にそれにより励んでおり、彼の志を称える。光緒辛卯中冬、張裕釗并識。）（図 11）とある。光緒辛卯は光緒 17 年（1891）であり、この年、張裕釗は襄陽の鹿門書院の主講に就いている。

「節東都賦・西京賦」は、班固（32～92、字は孟堅。中国後漢初期

<sup>39</sup> 詳細は拙論『張裕釗書法研究』（国立台湾芸術大学書画芸術学系碩士班、2016 年 6 月）「第三節 張裕釗書法對中国的影響／一、蓮池弟子／（一）、斉令辰」、210～212 頁。

の歴史家・文学者)の「東都賦」、及び張衡(78~139、字は平子。中国後漢の政治家)の「西京賦」の一節を選んでいる。落款によれば、「廉卿又書於江漢」(図12)とあることから、江漢書院の主講に就いている際に揮毫した書作であることが分かる。

## 2. 中字書作(碑碣書作)

碑碣の書作では、「重脩南宮県学記」(光緒12年)(図13)の他、「蒯徳模神道碑」、「李剛介公殉難碑記」(石印本・湖北博物館本)、「賀蘇生夫婦双寿序」の三碑が確認できるが、ともに制作年代に異議があり、ここでは、その制作年代を中心に検討してゆきたい。

### (1)「蒯徳模神道碑」(光緒13年推定)

張裕釗は李鴻章の代筆者として「蒯徳模神道碑」(図14)を書き記した。張裕釗が李鴻章と交わる経緯について、曾国藩の幕府で知り合ったことが張裕釗『濂亭文集』の「送合肥李相国督師秦中序」から知られる。「同治七年、合肥相国李公既定河北、承命以湖広総督還鎮武昌。明年冬、復詔公督師滇、黔。<sup>40</sup>(同治七年、合肥相国である李公は既に河北を平定し、命を受け、湖広総督として武昌を鎮めた。翌年の冬、また命を受けて李公は滇(雲南)、黔(貴州)を監督した。)」とあり、同治7~8年(1868~1869)、張裕釗は曾の幕にあった湖広総督李鴻章と知り合っており、相互に尊重し合う仲であった。同治期から二人が交わりを続け

<sup>40</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「送合肥李相国督師秦中序」、『濂亭文集』巻2、47~48頁。



ていたことが分かる。

「蒯徳模神道碑」については、魚住氏が『濂亭遺文』中に同碑の収録が確認できることから、蓮池書院時代の作と解することが妥当であろうと述べている<sup>41</sup>。また、陳啓壯氏は光緒 13 年（1887）の書とし、蒯徳模が他界した 10 年後である 1887 年に張裕釗が李鴻章の委嘱を受け書き記したと述べている。しかし、その根拠は述べていない<sup>42</sup>。そのため、以下に「蒯徳模神道碑」の制作経緯を考察してみたい。

蒯徳模（1816～1877）、字は子範、晩号は蔗園老人であり、安徽合肥の出身である。同治 13 年（1874）に張裕釗は蒯徳模の寿のため、「寿蒯子範觀察（徳模）」<sup>43</sup>を贈っており、かねてからの知己であったことが分かる。「蒯徳模神道碑」によれば、「賜進士出身、誥授光祿大夫欽差大臣太子太傅、文華殿大學士直隸總督一等肅毅伯加騎都尉世職、李鴻章撰并書。」とあり、直隸總督である李鴻章の任職期間は同治 9 年から光緒 27 年にかけてである<sup>44</sup>。一方、張裕釗が他界したのは清光緒 20 年（1894 年）であり、「蒯徳模神道碑」の制作年代は同治 9 年から光緒 20 年にかけてであると考えられる。

次に、張裕釗『濂亭遺文』に収録されている「誥授中議大夫三品銜補

<sup>41</sup> 序章注 61、魚住氏著、153 頁。

<sup>42</sup> 序章注 75、陳氏著「書以功深能跋扈—張裕釗書風流變之探討／三、晩年時期書風流變之探討（光緒九年（1883）～光緒二十年（1894）」、219 頁。

<sup>43</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「寿蒯子範觀察（徳模）」、294 頁。甲戌年（同治 13 年、1874）に書かれた記録は 290 頁を参照。

<sup>44</sup> ●清代職官資料庫-職官名稱：文華殿大學士（2021 年 4 月閲覽）

同治 13 年-光緒 27 年、『清代職官年表』、第 1 冊、9～11、16～132 頁。

<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?.c5820D00010000A0010000^0100000000000001000000010100782004178>

●清代職官資料庫-職官名稱：直隸總督（2021 年 4 月閲覽）

同治 9 年～光緒 8 年、『清代職官年表』、第 2 冊、1481～1487 頁。

光緒 9 年～光緒 10 年、『清代職官年表』、第 2 冊、1487～1488 頁。

光緒 10 年～光緒 21 年、『清代職官年表』、第 2 冊、1488～1494 頁。

光緒 26 年～光緒 27 年、『清代職官年表』、第 2 冊、1497～1498 頁。

<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?.bafd002870D01011000000008000000000100000010^0000A0000000420c>

用夔州府知府蒯公神道碑（代合肥李相国）」の内容を考察したい。内容によれば以下のようにある。

公諱徳模、字子範。其卒以光緒三年九月二十一日、春秋六十有二。以□年□月□日葬於某所之原<sup>45</sup>、淑人李氏祔。其季翰林院檢討光典、具述遺烈、属馮編修煦志其墓、又請為神道碑於鴻章。（中略）公棄我去、奄忽十霜。<sup>46</sup>

公の諱は徳模、字は子範。彼は光緒3年9月21日に逝去した、62歳である。□年□月□日某所の原に埋葬される。淑人（妻）李氏と合葬された。彼の末子である翰林院檢討の光典は彼の父親の遺烈を述べ、馮煦に墓誌の撰文を依頼し、また私（鴻章）に神道碑の撰文を依頼した。（中略）公が私をこの世に捨てて離れてから、たちまち十年を経ている。

以上の内容から、この文章は光緒3年（1877）から10年後となる光緒13年（1887）に書かれたことを示している。

一方、その代筆のいきさつについては、張裕釗と李鴻章がお互いに宛てた書簡から窺える。まず、李鴻章が張裕釗に宛てた書簡には、以下のようにある。

同邑蒯礼卿檢討奉其先徳子範太守事状来云、将為神道之碑、乞撰文並書。○○筆墨荒落、無以応其意、援蘇子瞻代張樂全撰趙叔平碑故事、借重大筆以信将来。（図15）

<sup>45</sup> 拓本では「某所之原」が「□」になっている。

<sup>46</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「誥授中議大夫三品銜補用夔州府知府蒯公神道碑（代合肥李相国）」、『濂亭遺文』卷4、261～264頁。

同郷蒯礼卿檢討が彼の父親である子範太守の行状を携えてきて言うには、神道碑を立てるため、その撰文と書丹をしてほしいとの依頼でした。〇〇の文章や書法は拙劣で、彼の意に応じることはできません。蘇子瞻が張楽全の代わりに趙叔平碑を撰文した故事に倣い、進まない筆でお手紙を差し上げました。

このように、蒯徳模の子である蒯光典（1857～1910、字は礼卿、号は季述であり、安徽合肥の出身）の撰文・書丹の依頼について、李鴻章は自身の能力不足を感じて、張裕釗に依頼した。また、張裕釗が李鴻章に宛てた返信書簡には、以下のようにある。

承命代撰「蒯公范太守墓碑」、自惟譴劣、何以任此。惟念子範太守政績炳著、卓然可伝、而裕釗与蒯氏、復辱有再世之好、況又重以夫子之命、義不敢辞、謹竭駑頑、勉為纂就、繕呈鈞覽。<sup>47</sup>

ご依頼を受けて「蒯公范太守墓碑」を代理として撰することになりました。但し、私の能力は劣り、この役目は私には務め難いと思えます。子範太守の治績は輝かしく、卓越しており伝播されるべきものです。また、裕釗と蒯氏は二世にわたり良い交誼に恵まれ、加えて先生のご依頼ということもあるので、断らないようにいたしたいと思えます。精一杯尽力し、揮毫しますので、ご高覧の上、ご批正くださいますようお願い申し上げます。

---

<sup>47</sup> 張裕釗の李鴻章宛書簡。「復李中堂」第2期、11～12頁。李松榮「張裕釗書牘輯補一『中国学報』上の『張廉卿先生論文書牘摘鈔』、『古典文献研究』2009年00期、538頁。

張裕釗は李鴻章に命じられ「蒯徳模神道碑」を書き記した。更に、張裕釗が蒯光典（1857～1910、字は礼卿、蒯徳模の子）に宛てた書簡もあり、「頃奉手翰、猥以代撰尊公碑銘、遠勞致謝。<sup>48</sup>（お手紙を頂きました。あなたの父親のため碑銘を代筆して撰しました。遠いところお出でくださいましたこと、御礼申し上げます。）」とある。

以上のことから、晩清の政府の中で張裕釗の文学や書法に対する造詣の深さは李鴻章の認めるところとなり、李鴻章は張裕釗に代筆者として「蒯徳模神道碑」碑文や書丹の機会を与え、それが光緒 13 年（1887）に書かれたことが明らかになった。

## （2）「李剛介公殉難碑記」（石印本・湖北博物館本）（光緒 9～14 年推定）

「李剛介公殉難碑記」には、上海文明書局で出版した石印本（以下、「石印本」と略称）（図 16）と、湖北省博物館（以下、「湖北本」と略称）（図 17）の収蔵品という異なる原本が認められる。この点を最初に指摘したのは魚住和晃氏であった。魚住氏は「「李公碑記」は現在その真筆原本が、湖北省博物館に蔵されていることが近年明らかとなった。」<sup>49</sup> と述べている。また、劉正成氏も以下のように述べられている。

其伝本今見有二：一為宣統三年文明書局石印本、冊首署「張裕釗撰並書丹」、民国間屢有重版、一為湖北省博物館蔵墨蹟本、装池成冊、凡十九頁、冊首署「張裕釗撰並書」<sup>50</sup>

<sup>48</sup> 張裕釗の蒯禮卿宛書簡。「復蒯禮卿」第 3 期、3～4 頁。前掲注 47、李氏著、538 頁。

<sup>49</sup> 序章注 61、魚住氏著、「第二章 張裕釗における書法形成、三 張裕釗書法の特質と形成過程」、159 頁。

<sup>50</sup> 劉正成主編『中国書法全集 73 楊岷・張裕釗・徐三庚・楊守敬卷』（榮宝齋、2012 年 12 月）、246 頁。

その伝本は 2 種類を確認できる：一つは宣統 3 年の文明書局の石印本であり、冊子の冒頭には「張裕釗が撰し、並び書丹した」と揮毫され、民国年間に頻繁に重版された。もう一冊は湖北省博物館蔵の墨蹟本であり、冊子本に表装され、19 ページあり、冊子の冒頭に「張裕釗が撰し、並び書した」とある。

このように、なぜ 2 冊を書き上げたのだろうか。それは不明だが、内容には異なる箇所がいくつが挙げられる。湖北本と石印本の内容を比べると、張裕釗の官名について湖北本で「徵仕郎」と書いているが、石印本で空白とし、「□□郎」と表記している。また、湖北本は「書」と書いているが、石印本では「書丹」と書いている（表 1）。石印本に「書丹」と書かれていることから、この版本は石碑に刻されるつもりであったことが推測されよう。

湖北本の制作年代について、劉正成氏は同治 6 年（1867）とする<sup>51</sup>。これに対し、石印本の制作年代に関する先行研究を整理すると同治 5 年（1866）・6 年（1867）の説にわかれる。同治 5 年（張 44 歳）の説を唱える楊祖武氏は、「自同治五年、張裕釗四十四歳時所書的第一塊碑刻『李剛介公殉難碑記』面世後、他的書法風格已經形成。<sup>52</sup>（同治 5 年、張裕釗が 44 歳に書いた碑刻である『李剛介公殉難碑記』が世の中に出た後、彼の書法風格は既に形成されたといえる。）」と述べるが、その根拠は示していない。

一方、同治 6 年（張 45 歳）の説を述べるのは、魚住和晃氏（1980 年発表）・劉正成氏（2012 年発表）・陳啓壯氏（2016 年発表）であ

<sup>51</sup> 前掲注 50、劉氏主編、246 頁。

<sup>52</sup> 序章注 91、楊氏著、17 頁。

る。魚住氏は「私は裕釗の書法が確立されたのは、つまり彼が古法の真理を悟ったのは、彼の代表的な楷書作「李剛介公殉難碑記」が、彼四十四歳のときに書かれていることから推して、彼が内閣中書を勤めていた時代、つまり四十歳前後ではないかと思う。」<sup>53</sup>と述べており、張裕釗「李剛介公殉難碑記」の書丹は同治6年、彼44歳（実際には張45歳であり、日本と中国の年齢の数え方による差異。）の揮毫になるものと言っている。劉正成氏によれば、「碑記の書写時間は同治6年と見た方がよい」<sup>54</sup>とある。また、陳啓壯氏は「張裕釗書法最早成名之作『李剛介公殉難碑記』於同治六年（1867）所写、張裕釗時年45歳。（張裕釗の書法で最初に有名になった作品『李剛介公殉難碑記』は同治6年、張裕釗45歳に書かれた）」といい、続いて「直至張公第一塊書法碑刻《李公碑》在其44歳時面世、其書法風格已為之大變、令人耳目一新、震動了當時書壇。<sup>55</sup>（張公の最初の書法碑刻『李公碑』が、張44歳の時に世に出ると、その書法風格は既に大きく変わっていた。人々の耳目を一新させ、時の書壇に衝撃を与えた。）」とあり、陳啓壯氏はこの書作は同治6年、張裕釗45歳に書かれたものと指摘する。

石印本については、魚住和晃氏は同治6年（1980年発表）<sup>56</sup>、光緒4、5年頃（1993年発表）<sup>57</sup>、蓮池書院時代（光緒9年～13年）（2002

<sup>53</sup> 序章注81、魚住氏著「二 張裕釗の書、(2) 張裕釗の書道理念」、164頁。

<sup>54</sup> 前掲注50、劉氏主編、246頁に「碑記の書写時間、定於同治六年較妥。」とある。

<sup>55</sup> 序章注75、陳氏著「書以功深能跋扈—張裕釗書風流變之探討／一、早年時期書風流變之探討（同治六年（含）以前）」、189頁。「碑骨帖姿 自成一脈—淺析張裕釗書法與魏碑的關係」、144～145頁。

<sup>56</sup> 序章注81、魚住氏著。「私は裕釗の書法が確立されたのは、つまり彼が古法の真理を悟ったのは、彼の代表的な楷書作「李剛介公殉難碑」が、彼四十四歳のときに書かれていることから推して、彼が内閣中書を勤めていた時代、つまり四十歳前後ではないかと思う。」（164頁）、「李剛介公殉難碑」は同治六年（一八六七）、裕釗四十四歳の揮毫になる。」（167～168頁）とある。

<sup>57</sup> 序章注82、魚住氏著「三 張廉卿「李剛介公殉難碑記」の制作年代について／五 結び」、126～127頁には「石印本「李剛介公殉難碑記」制作は張裕釗が鳳池書院に在任した光緒四、五年頃に為されたであり、保定には彼がそれを携行し、そして光緒十四年に保定を去るが、その間、いつかそれが彼の手から離れたとするのが私の推論である。」とある。

年発表)<sup>58</sup> というように、制作年代の候補を幾つか挙げている。これらを整理すると、先行研究において同治 5 年 (1866) ・同治 6 年 (1867) ・光緒 4、5 年 (1878、1879) 頃・光緒 9 年～13 年 (1883～1887) の説が残り、定説はないといえる。よって、「李剛介公殉難碑記」の制作年代を再検討することが必要である。

まず、「李剛介公殉難碑記」の制作経緯について検討する。発端は道銜湖北升用知府・荊門直隸州知州であった李楝が殉難し、彼の息子が張裕釗に父の殉難碑を依頼したことにある。張裕釗『濂亭文集』の「贈道銜湖北升用知府荊門直隸知州李剛介公殉難碑記」には「五年、其孤塩提挙銜、湖北候補通判、襄雲騎蔚雯、走書裕釗、請為公殉難之碑、將之於富池口。<sup>59</sup> (同治 5 年、彼の息子塩提挙銜・湖北候補通判・襄雲騎蔚である李雯が張裕釗に書簡を宛てた。父親の殉難碑を作ることを依頼し、富池口に立てるという。)」とある。このことから、李楝の息子李雯が張裕釗に宛てた書簡において、同治 5 年 (1866) に張裕釗は李雯から父・李楝の殉難碑を依頼され、石に勒し、武昌府の富池に立てる計画であったことが分かる。

また、『鍾祥県志』巻 1「大事記」には、「同治六年、知県孫福海聘武昌舉人張裕釗会同邑人続修県志。<sup>60</sup> (同治 6 年に知県であった孫福海は武昌の舉人・張裕釗を招いて同郷の人と会わせ、続修県志を編集させた。)」とある。張裕釗は鍾祥の知県であった孫福海の招聘に応じ、同治 6 年に『鍾祥県志』を編集することになったことが分かる。

また張裕釗『濂亭文集』の「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李

---

<sup>58</sup> 序章注 61、魚住氏著、157 頁。

<sup>59</sup> 序章注 67、張裕釗著、王氏校点、「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李剛介公殉難碑記」、『濂亭文集』巻 5、101～102 頁。

<sup>60</sup> 『鍾祥県志』巻 1「大事記」。

剛介公殉難碑記」では「裕釗往歳至鍾祥、距公死難之歳、十有四年矣。<sup>61</sup>（裕釗は昔、鍾祥へ赴いたことがある。李剛介公の死の日から、14年の年月を経ている。）」と記している。更に、李剛介の歿年について、碑文には「与所部八百人皆鬥死、咸豊三年九月十日也。<sup>62</sup>（所属の部である800人と共に戦死したが、それは咸豊3年9月10日のことである。）」と記されることから、咸豊3年（1853）に歿しており、14年後となる同治6年（1867）に鍾祥に行ったことになる。ここで注目したいのは、「往歳」とは過ぎ去った年という意味であり、「李剛介公殉難碑記」碑文の撰文、書丹依頼を受けたのは、同治7年（1868）以降の立場から書かれているという点である。

加えて、「李剛介公殉難碑記」碑文には「安徽鳳陽府知府常熟楊沂孫篆額」と記される。楊沂孫の年譜によれば、「咏春府君行述」に同治4年（1865）8月「抵鳳陽府任。<sup>63</sup>（鳳陽府の任に当たる。）」とあり、同治10年（1871）8月「楊沂孫至合肥、受安徽巡撫英翰聘修纂省志。<sup>64</sup>（楊沂孫が合肥に至る。安徽巡撫である英翰の誘いを受け、省志を纂修する。）」と記す。楊沂孫が安徽省の鳳陽府の知府として務めていた期間は、同治4年（1865）8月から10年（1871）8月にかけてである。張裕釗は同治7年（1868）以降の立場から記しており、これにより「李剛介公殉難碑記」の楊沂孫の篆額は同治7年（1868）から10年（1871）8月にかけて書かれたことが推測される。

しかし、2件とも「楊沂孫篆額」と書いているが、管見では楊沂孫

<sup>61</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李剛介公殉難碑記」、『濂亭文集』巻5、101～102頁。

<sup>62</sup> 序章注67、張裕釗著、王氏校点、「贈道銜湖北升用知府荊門直隸州知州李剛介公殉難碑記」、『濂亭文集』巻5、101～102頁。

<sup>63</sup> 張釗著、梅新林・陳玉蘭主編『清代楊沂孫家族研究』（中国社会科学出版社、2010年9月）、199～200頁。

<sup>64</sup> 前掲注63、張釗著、梅氏・陳氏主編、205頁。



の真筆が残っているかどうか不明である。そこで、石印本の題跋から  
検証したい。戊申（1908）9月に金匱（今の江蘇）の廉泉（1868～  
1931）が題跋し、桐城の呉芝瑛（1868～1934）が書いた内容には、以  
下のようにある。

昨得劉仲魯大理都門寄示石印。張濂亭先生所書「李剛介公殉難碑  
記」。展閱数反、欣賞無已。来函称此為張先生主講蓮池書院時所  
書。係当日書丹底本、曩在保定時得之、収蔵逾廿年。庚子、京師  
之劫、廬中百物蕩尽、而此巋然殆有神靈呵護。又謂先生書石刻存  
於世者、在南有「江天閣記」、「曾文正公祠修葺記」、在北有  
「南宮県学碑記」。而南宮碑乃晚年書、刻工亦肥瘦得中、独此碑  
記未見搨本。（図18）

昨日、劉仲魯（大理都門）から石印本が届いた。張濂亭先生が揮  
毫した「李剛介公殉難碑記」である。何回も開いて鑑賞し、なか  
なかやめられなかった。書簡の内容によれば、張先生が蓮池書院  
で主講を務めていた時に書かれたものである。当日の書丹を底本  
としている。昔、保定にいたときにこれを得て、収蔵して20年が  
経っている。庚子年、北京の乱により、家中の物がなくなったが、  
この石印本が確かにあるのは神様に守っていただいたようなもの  
であると。また言うには、先生の書法で石刻として世の中に残る  
のは、南には「江天閣記」、「曾文正公祠修葺記」があり、北に  
は「南宮県学碑記」がある。南宮碑は晩年の書法で、刻工による  
点画の肥瘦もちょうど良い。しかしこの碑記だけは拓本を見てい  
ない。

廉泉によれば、石印本の書作品は張裕釗が蓮池書院で主講した際に書かれており、蓮池の弟子である劉仲魯の旧蔵だったことが分かる。

以上の考察により、湖北本と石印本は別の真筆だったことを明らかにした。石印本は石碑に刻されるつもりだったことが推測される。また、「楊沂孫篆額」の内容により同治7年から10年（1868～1871）8月にかけて書かれたと推察したが、楊沂孫の篆額が現存するかは不明である。ただし、石印本における廉泉の跋文により、その書作品は張裕釗が蓮池書院時代の書であり、蓮池弟子劉仲魯の旧蔵だったことが分かる。

湖北本は石印本より先に書かれており、石印本については、筆者は魚住氏が2002年発表した蓮池書院時期（光緒9～13年、1883～1887年）に書かれたという説を支持したい。

### （3）「賀蘇生夫婦双寿序」（光緒19～20年推定）

晩年の張裕釗は賀濤の両親のため、「賀蘇生夫婦双寿序」を書き記した。この作品は、楊祖武氏が主編した『張裕釗書法芸術』において初めて掲載され<sup>65</sup>、光緒20年（1894年、張裕釗72歳）の書作と記している。拓本は近年、中国で発見された（図19）。

賀培新「書濂亭先生書撰曾大父母寿序石刻拓本後」、賀濤「唁張導岷」（甲午）により、「賀蘇生夫婦双寿序」は張裕釗の絶筆だったことが証明できる。賀培新「書濂亭先生書撰曾大父母寿序石刻拓本後」には、以下のように述べている。

---

<sup>65</sup> 序章注91、楊氏著、「附録一：自二十年代以来出版印刷之張氏碑帖、連屏及拓片」（1997年発表）、161頁。

濂亭先生以一代文宗兼擅書法、鎔鑄漢魏周秦、以自成體勢。論者謂集北碑之大成、殆猶不足以賅之。昔先大父嘗及門矣、考文之餘、閑亦相與論書、故能深識先生為書之秘。(中略)此書為先生絕筆、觀先大父唁張導岷一書可見。今以石刻拓本流傳於世、並附先大父所為壽序書札各一篇於後、以資考覽。(中略) 民國三十年一月。<sup>66</sup>

濂亭先生は一代の文宗であり、兼ねて書法を得意とし、漢魏周秦を融合し、自己の風格を形成している。論ずる者が言うには、北碑を集めてまとめあげたもので、ほとんどこれに補うものはないと。昔、亡父が先生を訪ねたことがあり、文章を討議したほか、暇に書法を討論し、先生の書の秘密を深く認識できた。(中略) この書は先生の絶筆である。亡父が張導岷に弔いを述べた書を観れば分かる。今は石刻の拓本が世に伝わり、亡父が作成した寿の序文と、書簡各一篇を、後ろに附載し、考察に資すことにする。(中略) 民国 30 年 1 月。

賀培新(1903~1952)は賀濤の息子で、字は孔才、号は天游。張裕釗の弟子として知られている。文章で言及された書は「賀蘇生夫婦双寿序」を指しており、亡父(賀濤)が張導岷を弔う書とは以下の「唁張導岷」を指している。

賀濤「唁張導岷」(甲午)

年逾七旬從數千里外、自撰文辭、親書之屏以壽吾父母、恩施尤厚、

---

<sup>66</sup> 賀培新著、王達敏・王九一・王一村整理「書濂亭先生書撰曾大父母壽序石刻拓本後」『賀培新集(上)・天游室文』(鳳凰出版社、2016年9月)、114頁。

計書屏時去易簣不遠、文与書皆絶筆。固由先生愛我之深、不自惜心力、亦天鑑我向道之誠、使于先生絶筆時獲此巨制、以榮其親、以誇族姻僚友、以示子孫而為伝世之宝也。<sup>67</sup>

70 歳を超えた（張裕釗先生が）数千里のかなたから、文辞を自撰して書いた屏を以て、私の両親の寿をお祝いしてくれた。その恩は大変厚く、書してから間もなく亡くなってしまった。この文章と書は絶筆となった。先生が私を深く愛され、心力を惜しまず、また、天は私が道に向かう忠誠に鑑みて、先生の絶筆の時にこの大作をもたらしたのであろう。よってその昵懇を誉とし、親族・姻戚や官僚・知友に誇り、子孫に示し、世に伝える宝となす。

上記したように、絶筆の書とは「賀蘇生夫婦双寿序」に間違いなく、張裕釗が 71 歳（光緒 19 年、1983 年）から 72 歳（光緒 20 年、1984 年）頃に書かれたと推定できる。

### 3. その他

この時期の書作として、その他に、斉令辰蔵「杜甫詩帖」（図 20）、宮島蔵「千字文」（図 21）、張孝移蔵「千字文」（図 22）が挙げられる。3 冊とも張裕釗の弟子が収蔵しており、張裕釗が蓮池書院時代（光緒 9 年～14 年）に揮毫した書作と言われている。

まず、斉令辰蔵「杜甫詩帖」の跋（図 20）には「張廉卿先生書。書院僮焚字紙、肄業生見之則尋師筆蹟。令辰撿得此帖、時在甲申、今歲戊申以編于石印末冊之首。（張廉卿先生の書。書院の童僕が字紙を焼いて

---

<sup>67</sup> 賀濤「唁張導岷」（甲午）。

いる際に、修業生がそれを見て先生の筆跡を探し、令辰がこの帖を拾った。時に甲申の年であった。今は戊申の年となり、この石印の最後の冊において冒頭に配する。）」とある。甲申とは光緒 10 年（1884 年）、戊申とは光緒 34 年（1908 年）である。この冊は光緒 10 年に拾ったため、蓮池書院時代（光緒 9～10 年間）の書作と推定できる。

また、張裕釗の「千字文」は、管見では 5 種（「小楷千字文」、「石刻本千字文」、「景嘉題簽本千字文」、「宮島本千字文」、「張孝移本千字文」）を数えることができる。それらの比較検討は、上條氏の『宮島詠士旧蔵 張廉卿千字文解説』<sup>68</sup> において「小楷千字文」、「石刻本千字文」、「景嘉題簽本千字文」、「宮島本千字文」を中心に行われており、また拙論<sup>69</sup> では、「小楷千字文」、「宮島本千字文」、「張孝移本千字文」を検討した。

ここでは、宮島蔵「千字文」及び張孝移蔵「千字文」の制作年代を考察したいと思う。この 2 作品に限定して制作年を考察する理由については、2 作品とも張裕釗の弟子である宮島や孫子である張孝移が蔵しているため、作品を制作した際の態度が丁寧であると思われるためである。また、張裕釗は若年においても「千字文」（第一章で検討）を制作しており、張裕釗にとっても主要な題材であったと思われる。

宮島蔵「千字文」については、上條氏によると、恐らくは、現存唯一の真筆であろうことが分かる<sup>70</sup>。張孝移蔵「千字文」は石印本であり、弟子の張謇（1853～1926）の題跋（図 23）において、「此冊乃在保定為蓮池院長時所作。（中略）宣統紀元三月中旬、通州張謇敬題。（この冊

<sup>68</sup> 前掲注 9、上條氏著、「四 宮島本張廉卿千字文／(2) 宮島本千字文と三つの千字文異本」、23～25 頁。

<sup>69</sup> 前掲注 39、「第四章 張裕釗書法之研究／第二節 張裕釗書写内容与〈千字文〉／二、〈千字文〉三本比較兼談其異体字使用」、112～121 頁。

<sup>70</sup> 前掲注 9、上條氏著、24 頁。

は（張裕釗が）保定で蓮池院長に就いていた時に作られたものである。）

（中略）宣統紀元三月中旬、通州張謇敬題。」とあり、蓮池書院期間に書かれた作品だったことが分かる。宮島蔵「千字文」も制作年代は不詳ながら、晩年の特徴である滲みがみられること、また張孝移蔵「千字文」と書風、形式が似る箇所が多く見られることから、蓮池書院期間に書かれたものとも推定できよう。

## 二、 同治後半期・光緒前半期からの書作品の変遷

本項では同治後半期・光緒前半期（以下、「同治後・光緒前」と略す）から光緒中期への書風変化を明らかにする。前章までに考察した同治後半期の楷書作品は「贈李鴻章書作」（同治 11 年）、「事文類聚」（同治 12 年）がある。「贈李鴻章書作」は中字の楷書「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」（同治 10 年）と通ずるところがある。「事文類聚」は張裕釗の同治前半期の「鮑照飛白書勢銘」大楷書作品に通じるものであったのに対し、中楷は梁碑碑額の楷書様式である正方形の概形に近く、横画の斜度についても梁碑の表現に近づいている。また、斜度が浅いために安定感をもたらす書法となっている。

光緒中期に入り、張裕釗が保定蓮池書院・武昌江漢書院・襄陽鹿門書院の院長となった時期には、大楷書作・中楷書作（碑碣書作・その他）の特徴においてハネが同じ形状を示す傾向となる。また、中楷書作は「縦画・横画において線の太さ」・「間隔の広さ」にも北魏「弔比干文」の楷書様式の影響が顕著となる。

### 1. 大字書作

まず、大字書作の検討では、5つの用筆の観点（①ハネ、②「戈」形、③「水」傍、④「丨」形、⑤「衣」「木」傍）から取り上げる。①ハネについては、同治後半期の書風を注目すると、「明」「朔」では長さが短くなったが、これに対して、光緒中期の「事」「材」「勿」「乎」では長い。また、ほかの例を挙げると、同治後半期の「壽」「倒」のハネは長く伸びやかであるが、これに対して、光緒中期の「有」「劍」「虎」「門」のハネは内側が弧形となっており、外側が尖った三角形となっている（表2の①）。

次に、②「戈」形については、同治後・光緒前の例がないため、同治前半期の例を挙げる。同治前半期の「武」字を注目すると、ハネの止める部分や収筆のところで丸みを帯びた様子が窺えたが、光緒中期の「武」「箴」「盛」では、止や収筆が鋭く突き出ている様子が見られる（表2の②）。

③「水」傍の3画目に注目する。同治後半期の「治」は起筆と送筆の間、送筆と末筆の間において距離が短く、丸みがある。これに対して、光緒中期の「淪」「後」「滌」には、「水」傍の3画目の起筆から送筆に向いた際に意図的に鋭角を作り、送筆も長く、尖った三角形となっている（表3の③）。

④「丨」形については、同治後半期の「良」に注目したい。縦画は細くなってから丸みを作って、右に鋭角的に向かっており、収筆が止まっている様子が窺えたが、光緒中期の「長」「既」字を観れば、縦画からハネに向かって角度がさらに鋭角的になり、接点の先端が細く、鋭くなっている様子が窺える（表3の④）。

⑤「衣」「木」傍を3・4画目を注目すると、同治後半期の「栲」

「裕」ではそれぞれ点画を独立させて書いているが、光緒中期のものは連続で書いており、3画目から4画目の接点で強く押して止まってから右上に向いている（表3の⑤）。

## 2. 中字書作（碑碣書作・その他）

ここでは、ハネの六つのバリエーション（①ハネ、②「戈」形、③「水」傍、④「丿」形、⑤「心」形、⑥「冫」形）を観点とすることにより、同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作（碑碣書作（1）～（7）、一般書作（1）～（3））の変遷を見てゆきたい。

①ハネについては、同治後・光緒前の「有」字を注目したい。ハネの内側と縦画は垂直になっているが、光緒中期のハネの内側は弧形となっている（表4）。

②「戈」形も同様に2画目は小さくハネしており、末筆は上に向いているが、光緒中期のは力強く押して三角形の形状を作っており、末筆は右上に向いている（表5）。

③「水」傍の3画目に注目すると、同治後・光緒前は起筆から末筆まで穏やかに小さく書いているが、光緒中期では止める部分が鋭角を作って収筆まで意図的に三角形のように書いている（表6）。

④「丿」形については、同治後・光緒前は止からはね上げる部分が比較的細くなっており、内側が鋭角を作っているが、これに対して光緒中期では、止めからはね上げに向かう際、外側は鋭角を作って、内側が弧形を作っている（表7）。

⑤「心」形については、同治後・光緒前ものは2画目のハネが内側が直角に近くなっているが、光緒中期にはハネが山のように両側が



弧形となっている（表 8）。

⑥「冫」形については、同治後・光緒前の 2 画目において、収筆のハネの太さが送筆部とさほど変わらないが、光緒中期では、末筆のハネが力強く押され、内側が円く弧形となっている（表 9）。

### （1） 縦画・横画における線の太さ

次に、縦画・横画において線の太さという観点に注目する。以下、縦画・横画が備わる文字、または同治後・光緒前及び光緒中期の時期に重複して見られる文字「書」・「事」・「道」・「月」・「張」などの文字を考察する。これらの文字を選んだ理由は横画と縦画との太さの対比に、この時期の特徴が際立って現れていると考えられるためである。

まず、「書」の字例において、下部の「日」部分に注目する。同治後半・光緒前半期においては、1 画目の縦画や 3 画目の横画がほぼ同じ太さで見られる。これに対して、光緒中期においては、1 画目の縦画が細い線で書かれ、3 画目の横画は太い線で書かれている。

「事」の字例を見ると、同治後半・光緒前半期においては、縦画や横画の線はほぼ同じ太さで書かれている。これに対して、光緒中期においては左側の縦画（2 画目）が細く書かれており、横画は上から 1 画目・5 画目が太く書かれているが、横画の 2・3・4・6 画目が細い線で見られる。

「道」「頓」の字例も同様で、同治後半・光緒前半期においては右側の縦画が太い線で書かれているが、その他はほぼ同じ細さで書かれている。一方、光緒中期において外接四角形で囲まれた左端、上端、下端が細い線で書かれ、右端や四角形の内部の横画は太い線で書かれている。

「作」・「候」・「張」の字例では、同治後半・光緒前半期において、線の太さは一致しており、光緒中期なるとにおいて縦画より横画のほうが太い傾向となっている。「月」の字例では、同治後半・光緒前半期において、各画の太さが一致しているのに対し、光緒中期においては、左払いは細く、その他の線が太く書かれている（表 10）。

以上により、光緒中期線の太さにおいては内部に囲まれる短い横画のほうを太くするという法則性があり、それを細く長く引いた筆画と対比させることで、視覚的に立体観を感じさせる書作品となっている。これに対して、同治後半期・光緒前半期における張裕釗の書法では線の太さが均一であり、視覚的に平面的で変化が少ないように感じられる。

## （2） 間隔の広さ

左側の「言」部分に注目する。同治後半・光緒前半期においては、各横画の間隔の広さは揃っているが、光緒中期においては、「言」の 2 画目・3 画目の間隔の広さとその他の広さが異なっている。3 画目の横画が短く書かれており、2 画目・3 画目の間隔は広い空間を作っている。また、「口」部分は広い空間を作っている。（表 11）

また、「貝」部が備わる文字についても、同治後半・光緒前半期において、縦画・横画の線の太さはほぼ同じく、各横画の広さも平均となっている。これに対し、光緒中期においては縦画が細い線で書かれ、横画が太い線で書かれている。また、横画の上から 1 画目・2 画目の間には広い空間を作っているが、2 画目・3 画目・4 画目の間では狭い空間を作っている（表 12）。

### (3) 外方内円

同治後半・光緒前半期においては、転折の外方や内円は明確に作られていない。これに対して、光緒中期になると、外方の部分がさらに鋭い圭角になり、内円の部分が滑らかで丸い円になっている。このように、光緒中期に入ってから「外方内円」が鮮明に書かれており、この特徴が定着している（表 13）。

以上のことから、大字書作、中字書作（碑碣書作・一般書作）において、用筆の観点からはハネの変化が顕著となったと言える。大字、中字作品の共通点として、ハネの部分が強い力で押して作っている点が挙げられる。また、「縦画・横画における線の太さ」・「間隔の広さ」では変化が見られ、同治後半・光緒前半期の平面的な書風と異なって、立体感が感じられる。これらのハネや線の太さ・間隔の広さの変化は、北魏「弔比干文」の楷書様式から援用したものといえよう。以下、この点について検討してみたい。

### 第三節 弔比干文の書風の影響

先行研究によれば、張裕釗の大楷書作において、謹厳な楷書からやや逸脱して、行書に入るわけであるが、筆法については篆隸の法と言及されている。中楷書作については、張裕釗の書作品が北碑に根幹をおいて唐碑の整齊さを加えたとされているが、筆者は北魏「弔比干文」の楷書様式を強く体得していたと考えている。

本節では、前節で分析した張裕釗の大楷書作・中楷書作が、同治後

半期・光緒前半期から光緒中期にかけて変化した部分に、具体的な北魏「弔比干文」の影響を検証する。また、先行研究で言及されている北魏「張猛龍碑」とも比較し、筆法・字体において北魏「弔比干文」からの影響を受けた可能性が高いことを確かめたい。

以下、有効な補助線を書き入れた張裕釗の作品図版を示す。図版は、大楷書作（1）～（3）、碑碣書作（1）～（5）、一般書作（1）～（3）の順で掲げる。いずれも、ハネの六つのバリエーション（①ハネ、②「戈」形、③「水」傍、④「丿」形、⑤「心」形、⑥「冫」形）を抽出し、その形状や筆法に注目する。

まず、①ハネについては、北魏「張猛龍碑」において、縦画の内側とハネはほぼ直角に作っているが、北魏「弔比干文」や張裕釗はいずれも縦画の止めるの部分を力強くを押しつつ、内側を円く、ハネを作っている。但し、張裕釗の大楷書作には長いハネも窺える（表 14①）。

②「戈」形については、北魏「張猛龍碑」において、2画目は、控えめにハネを作っている。これに対して、北魏「弔比干文」や張裕釗は2画目はハネを山のような形に作っており、角度を尖らせ両側を弧形にして強調している（表 14②）。

③「水」傍については、北魏「張猛龍碑」において、起筆を鈍角に作っており、小さくハネを作っているが、北魏「弔比干文」や張裕釗は3画目の起筆を三角形のような形状に作って、強調している様子が窺える（表 14③）。

④「丿」形については、北魏「張猛龍碑」において、ハネの止める部分は控えめに作るが、北魏「弔比干文」や張裕釗では内側を円く作っており、右上の方向に向いている。また、外側の角度が鋭くなっており、この部分も強調されている（表 15④）。

⑤「心」形については、北魏「張猛龍碑」では 2 画目のハネを小さく作っているが、北魏「弔比干文」や張裕釗の 2 画目のハネは上の方向に向いており、両側が円く、山形に作っている。(表 15⑤)

⑥「冫」形については、北魏「張猛龍碑」において、2 画目のハネは左の方向に向いており、ハネの外側を円くする。北魏「弔比干文」や張裕釗の 2 画目のハネは左の方向に向いており、ハネの内側を円く作っており、左の方向に向いており、外側が尖っている(表 15⑥)。

#### 第四節 同治後半・光緒前半期との共通点

この節では、従前の同治後半・光緒前半期の中楷①～⑥や、本章の主題である光緒後半期以降の書の共通点を考察していく。

以前の書風のままである点画は、「払い」・「縦画の強調」が挙げられる。「払い」では例を挙げると、前の時代の「資」・「以」・「流」・「源」・「系」・「乗」・「縣」・「下」・「謀」と同様に、この時代の「縣」・「傑」・「乘」・「幡」の払いも、左払い・右払いを対称的に組み合わせていることが窺える。

「縦画の強調」の例では、前の時代の「修」・「候」・「癒」・「喻」・「舟」・「船」・「前」やこの時代の「脩」・「候」・「俞」・「候」・「諭」・「條」・「攸」などが挙げられ、上下に延長することが見て取れる。また、前の時代と同様に「在」・「巡」・「逆」の左払いや湾曲の部分も、この時代でも直線の縦画で書いている。さらに、この時代の「患」・「舟」・「舸」・「畫」・「畝」では、もとは二つの点画で書かれる部分を、張裕釗の場合は直線の縦画で書いている様子が窺える。

これらの点画の特徴は、従前の特徴をそのまま引き継いだものと思わ

れ、「払い」を左右に延長し、「縦画の強調」によって上下に延長することで、開放的な結構となっている。前の時代と比べ、「弔比干文」の影響を受けたであろう光緒中期以降の書に、立体感やその上・下・左・右へ延長する開放感が含まれることは、張裕釗の創意と見てよからう（表18）。

## 第五節 宿墨の運用

張裕釗の晩年の書作品には滲みのような効果が散見される。宿墨の運用については、張裕釗の弟子である張謇と宮島詠士（1867～1943）が述べており、張孝移蔵「千字文」における張謇の題跋では、以下のよう

に記す。

此冊乃在保定為蓮池院長時所作、墨外輒有微瀋。蓋師平日每晨、必以宿墨稿紙、作字数百紙、無隙行、或且及覆書之。紙背尽黒。（宣統紀元（1909）3月中旬）（図24）<sup>71</sup>

この冊は保定で張裕釗が蓮池院長であった際に書かれたものである。墨の外側に少し滲みが出ている。思うに、先生が毎朝、必ず宿墨・稿紙で数百枚紙、習字したからである。行間を空けず、字を重ねて書いていた。紙の裏も全て黒かった。（宣統紀元（1909）3月中旬）

以上記したように、張謇は墨の滲みが残っている事に言及し、宿墨で書を揮毫したことにも触れている。

---

<sup>71</sup> 張裕釗『千字文』（張以南・張謇題、張孝移蔵、奥付なし）

一方、魚住氏によれば、宮島詠士の清国留学は、明治 20 年（1887）4 月の渡清から同 27 年（1894）8 月の帰国（日本到着は 10 月）まで、途中の明治 24 年 11 月から同 25 年 10 月までの帰省をはさんで、7 年余の長期に涉ったことが分かる<sup>72</sup>。その期間は、張裕釗が蓮池書院に勤めていた時期から最期までに当たる。宮島の証言を集めた『詠翁道話』において、「蔡之卒夫、投甲呼舞、蔡之婦女、迎門咲語、招時蔡人と楷書、方二寸大の文字。……その時の墨池は先生数十年間愛用のもので、墨汁と真綿とが全く融和して飴のようになっていた。墨池で筆毫にふっくらと墨を含ませて後、軽く筆端を清水に浸して書かれるのであったが、その姿勢、執筆、運筆の自然さにただただ感に打たれた。前記の二十文字を書かれるのに約二十分間を要した。（昭和 18 年（1943）4 月 10 日～19 日記）」（図 25）とあり、張裕釗の書作品の特徴の一つとして、墨と清水の融和した効果が挙げられる。

以上、弟子の張謇と宮島詠士の記述より、蓮池書院期から張裕釗書作品の特徴は、宿墨の使用と清水に浸す技法により、黒い実面の部分と淡い滲みの部分が組み合わさることで、立体感を感じさせる表現となっていることにあるといえる。

## 小結

本章では、光緒中期の張裕釗がどのような文人と交流し、どのように書法を発展したかについて考察してきた。

張裕釗は莫友芝との交際によって、北魏「弔比干文」を過眼したことがあると推測される。袁昶・沈曾植は張裕釗の後輩にあたり、張裕

---

<sup>72</sup> 序章注 102、大沢氏著、34 頁。

釗書法の概念が袁昶・沈曾植にも影響を与えていた。袁昶の日記では張裕釗が「弔比干文」を臨書したと述べている。実際、張裕釗は保定の蓮池書院に勤めていた期間にかけて、鄭孝胥と交わり、莫友芝の收藏品である「弔比干文」について語り合っている、このことから、特に中楷作品では「弔比干文」の特徴が窺え、それが定着するようになる。

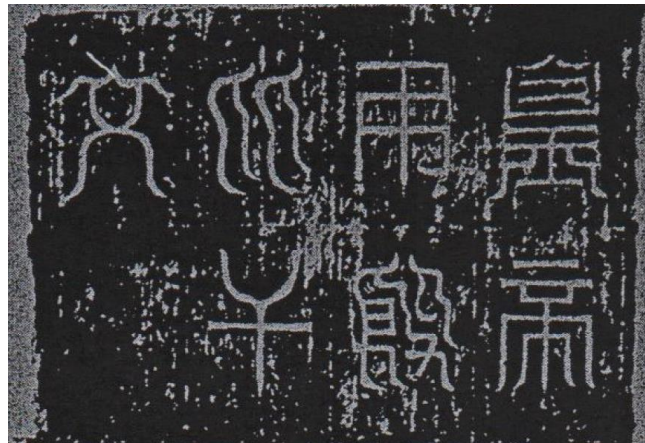
光緒中期の張裕釗書作品は「弔比干文」の特徴が残り、ハネでは三角形に形づくり、その受容は顕著であった。また、線の太さについては縦画より横画のほうを太くし、線の太さの差が異なったため、視覚的に立体観を感じさせる書法となっている。これに対して、同治後半期・光緒前半期における張裕釗の書作品では「線の太さ」と「間隔の広さ」が均一であり、平面的で変化の少なさを感じさせる。

更に、転折の外側の角度は直角に近く、内側を円くする表現が見られるようになり、張裕釗の特徴である、いわゆる「外方内円」が鮮明になっている。この時期においてこの特徴は洗練され、完成したと考えられる。加えて、この時期は宿墨の使用と清水に浸す技法により、より立体感を感じさせる表現を開発している。

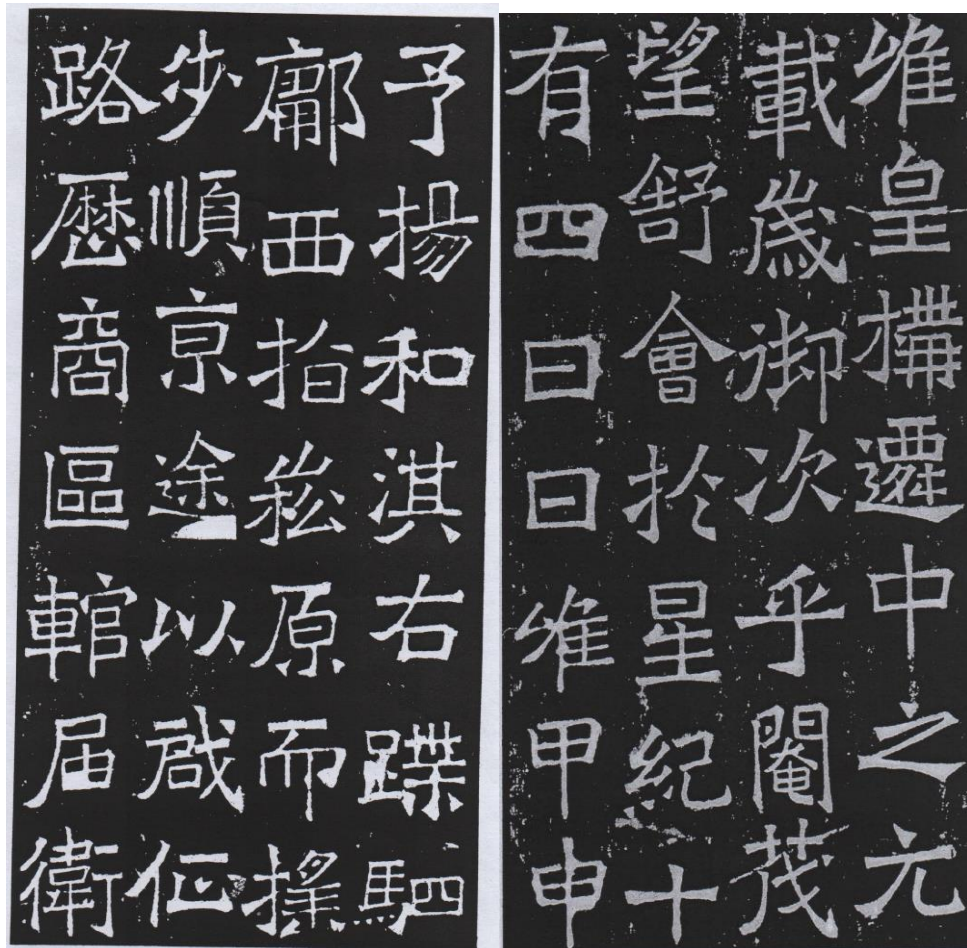
張裕釗の書は当時にない作風を創造しているが、これは「弔比干文」の書法を承けつつ、自らも上・下・左・右へ点画を延長し開放感を創出したもので、古の書法と自身の創意が融合した書風であったと考えられる。



図 表



碑額



碑文

【図 1】北魏「弔比干文」

故鳥有鳳而魚有鯨  
 鳳皇上擊九千  
 故絕雲霓負蒼天  
 夫蕃籬之鷄豈能  
 與之料天地之高  
 翱翔乎杳冥之上  
 哉鯨魚朝發於崑  
 崙之墟暴躡於碣  
 石暮宿於孟諸夫  
 尺澤之鯢豈能與  
 之量江海之大哉

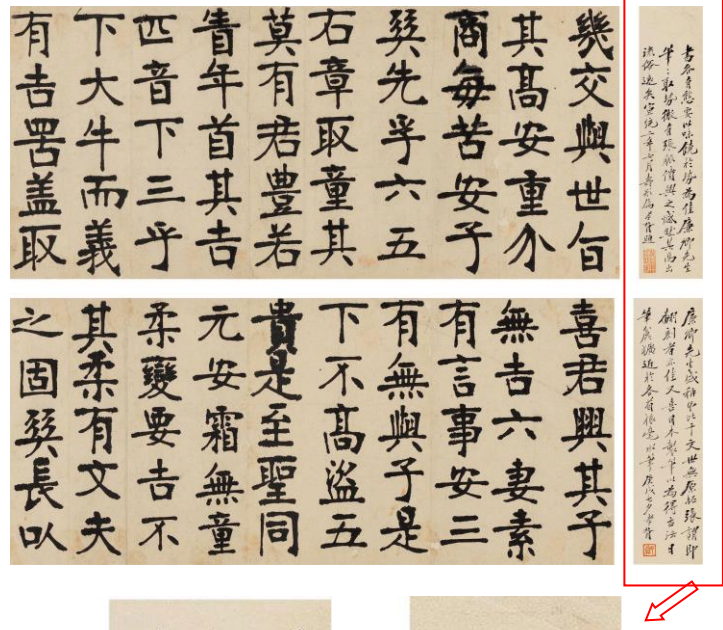
于培仁兄啓書

廉卿弟張裕釗

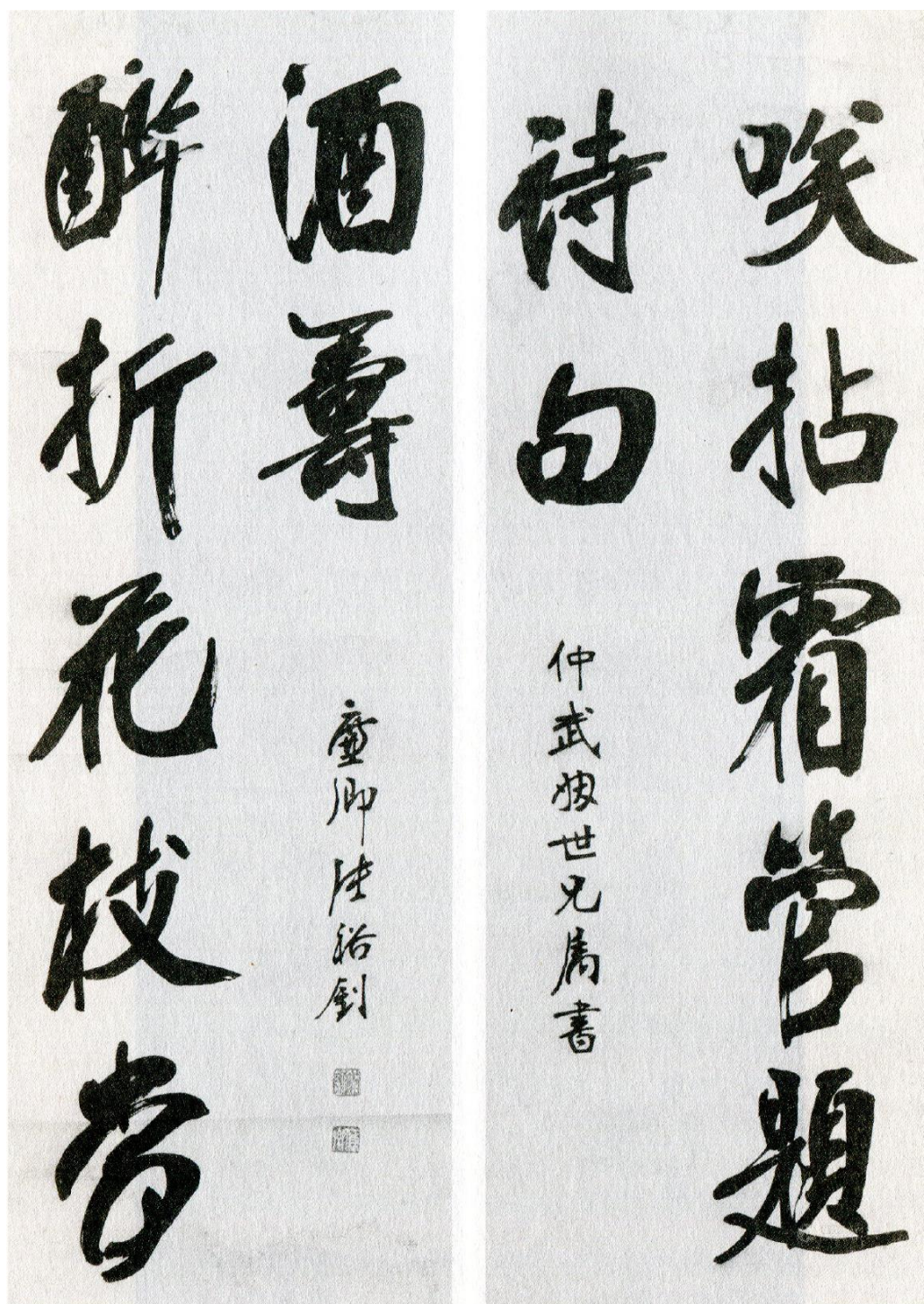
弟次慎弟式  
行里謹啟

【図 2】張裕釗「贈沈曾植書」





【図 3】張裕釗の書作、鄭孝胥の跋文（傍線筆者）



【図4】張裕釗の莫繩孫贈書作



仲武抱世化五不續耐擘隔飢渴為勞逸相  
 動心每經諸符此頃弟兩載以來吳楚注焉  
 至於三反馳驅者走殆無虛日即  
 尊憲亦未及一通問訊德用新然頃承 旨肥相  
 國監 於振帥 拍主直隸蓮池講席不日便  
 拂取道海上附輪艘壯征從此南壯相望乃益  
 惻惻可承  
 代善之書也及善出書值請

【図5】張裕釗の莫繩孫宛書簡





【图6】張裕釗の莫繩孫宛書簡

應常 京  
 翎眼 紹馬 祥  
 公 靴  
 已五做 統騎 騎  
 壬辰九月廿五  
 上海 德永 陸  
 朱姓 宜 做 大  
 綠呢 騎 烟  
 裡 弄 兩 五 套  
 各色 全  
 共計 九 元

張廉翁 主 襄陽 密門 書院  
 滙 貴州 鎮遠 縣 查 門 銀 票  
 南京 全 祥 豐 號 十 五 兩  
 清 江 劉 十 一 月 分 大 船 百 四 十 二 十 元  
 今 准 仰 六 百 元  
 鎮 源 火 橋 口 餘 元 錢  
 白 海 上 兩 兩  
 蘇 州 夏 吉 宜 百 元  
 高 新 五 百 十 元  
 高 級 三 正 月 廿 五 十 兩 兩  
 蘇 州 學 堂 上 海 大 東 門 外 王 家 嘴 南 東 門 前 大 街

沈 瑞 珊 考 序 傳 仲 帥 長 黎 已 思 科 中 二 名  
 張 鴻 賦 住 西 門 市 第 一 廠 若 已 記 此  
 縹 緲 城 住 京 都 如 海 寺 街  
 陳 雲 裳 住 買 家 胡 同 南 頭 路 西  
 存 北 尚 放 江 蘇 候 補 道 立 教 題 九 年 六 月 來 甯  
 江 蘇 候 補 道 李 光 久 九 年 六 月 來 甯  
 又 特 用 道 周 濠 一 十 九 年 記 名 江 蘇 試 用 道 東 壽 康 初 六 到 甯  
 又 試 用 道 祥 集 九 年 七 月 來 甯 楊 壽 康 初 六 到 甯  
 癸 巳 十 月 初 四 日 河 北 經 籍 文 量 寬 文 澤 志 文 道 遠 後 進 舉 元 官 均 均  
 楊 壽 同 界 石 長 恩 寬 字 運 列 字 聖 三 十 五 塊 碑 石 完 之 字 聖 四 均 均  
 閩 浦 仁 泰 來 舊 石 每 方 四 元 又 斷 磚 約 三 元

彭 剛 直 十 一 字 大 紅 聯  
 何 鍾 生 大 聯 二 副  
 張 廉 卿 單 款 紅 空 聯  
 張 廉 卿 酌 理 富 才 一 字 聯  
 張 廉 卿 七 字 高 麗 紙 傅 文 行 聯  
 楊 兄 山 集 陶 九 字 隸 聯 又 秀 年 三 言 隸 六 條  
 羅 質 庵 集 山 谷 七 言 隸 聯  
 陶 心 筠 集 應 諱 聯 一 條  
 丁 桐 生 集 庚 七 言 隸 聯  
 袁 錫 臣 集 句 聯 未 樣  
 高 未 樞 大 八 言 隸 聯

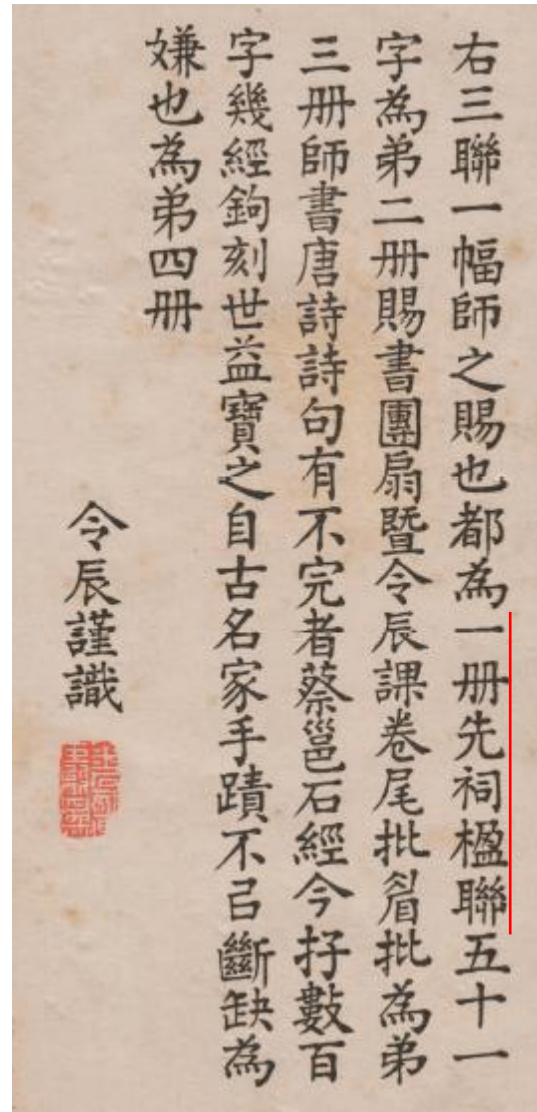
彭 剛 直 書 陶 詩 硃 格 大 屏 四 幅  
 張 廉 卿 行 書 硃 格 大 屏 四 幅  
 高 叔 樞 行 書 硃 格 大 屏 四 幅  
 張 廉 卿 行 書 四 幅  
 張 廉 卿 行 書 高 麗 紙 屏 四 幅  
 黎 尊 齋 書 高 麗 紙 屏 六 幅  
 朱 照 齋 西 園 雅 集 圖 一 副  
 高 叔 樞 篆 四 幅  
 凌 子 餘 篆 四 幅

【圖 7】 莫繩孫日記（壬辰十月至甲午九月）（傍線筆者）



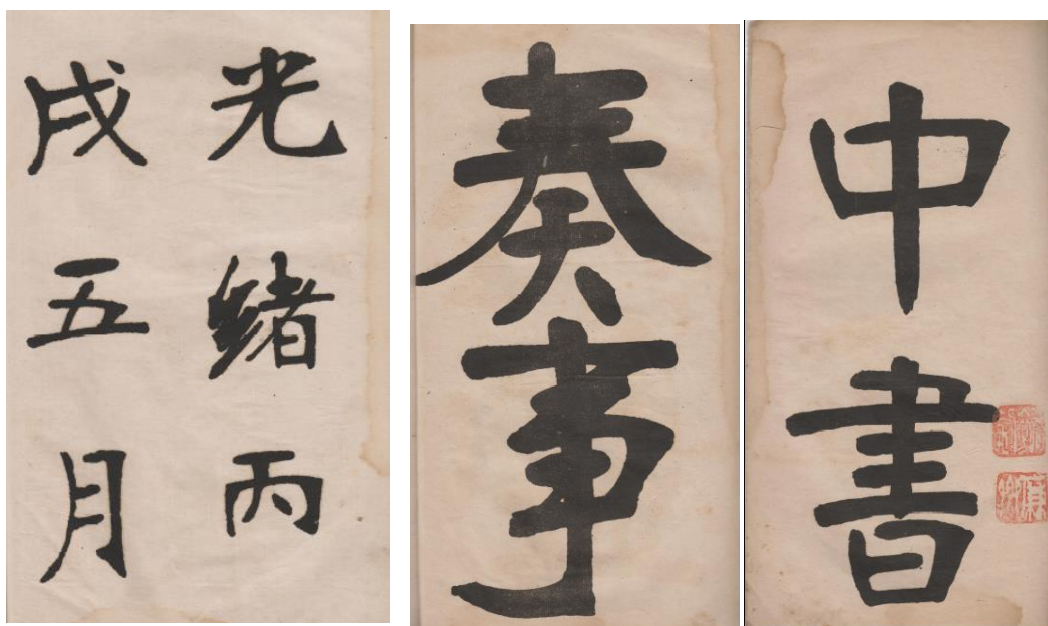


【図 8】 齊令辰藏、張裕釗「齊公祠楹聯」（光緒 12 年）（左）



【図 9】 齊令辰出版、張氏帖第一冊の跋文（右）（傍線筆者）



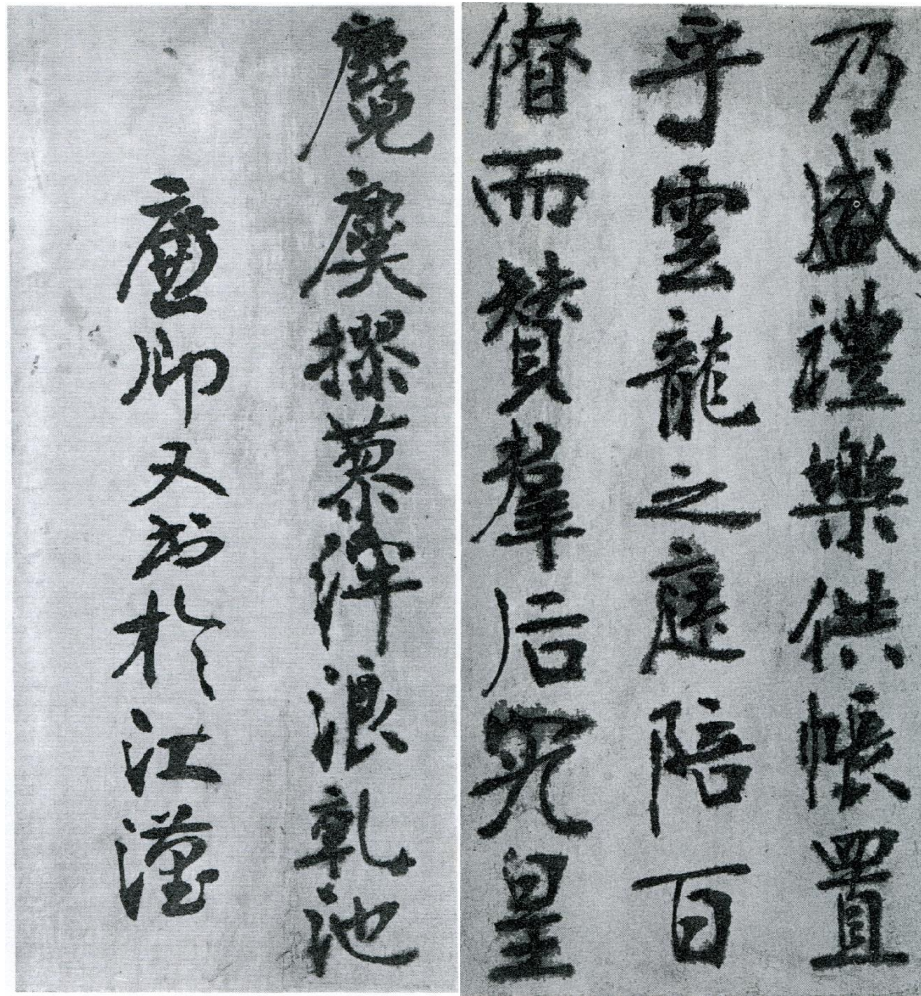


【图 10】 齐令辰出版、張氏帖第一冊「先祠楹聯」

無道人之短無說己之長施人慎勿  
 念受施慎勿忘世譽不足慕惟仁為  
 紀經隱心而後動謗議庸何傷無  
 使名過實守愚聖所藏在涅貴不緇  
 賤內若光柔弱生之徒老氏誠剛強  
 行鄙夫志愆故難量慎言節飲食知  
 足勝不祥行之苟有恆久自芬芳  
 許氏作竟自有紀青龍白帝居左右聖  
 人周公魯孔子作史為遷半生耳郡  
 舉孝廬州博士少不努力老乃悔吉  
 中魯仁者以屏幅索書且屬書箴言為錄崔  
 璩座右銘士孫瑞澆鏡銘既用勗之又以  
 嘉其志也光緒辛卯中冬張裕釗并識

【圖 11】張裕釗「箴言（座右銘）」（光緒 17 年）





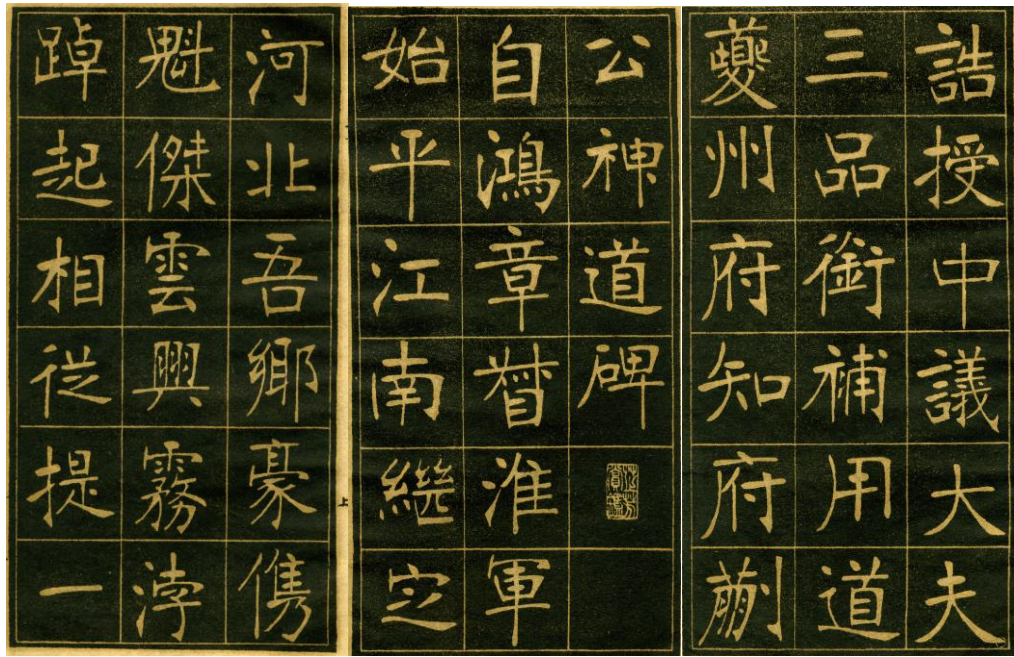
【図 12】張裕釗「節東都賦・西京賦」

(江漢書院時期の光緒 15～17 年)

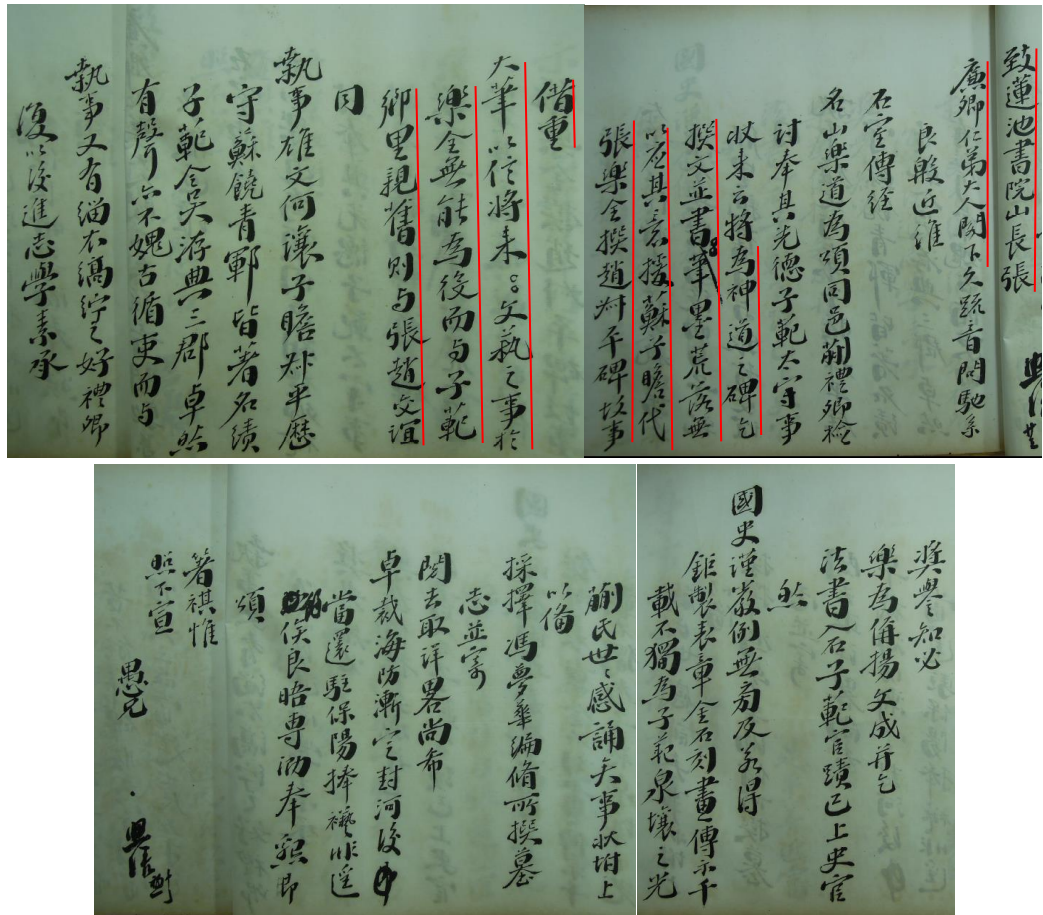
重脩南宮縣  
 學記 武  
 昌張裕釗撰  
 南宮縣學自  
 明成化十七  
 年移建今邑  
 治其後厯宏  
 治迄 國朝  
 嘉慶中重脩  
 役誠不為無  
 禪也己光緒  
 十二年五月  
 記  
 同知銜署南  
 宮縣知縣  
 李傳棟習脩  
 五品銜南宮  
 縣學教諭

【圖 13】張裕釗「南宮縣學記」（光緒 12 年）



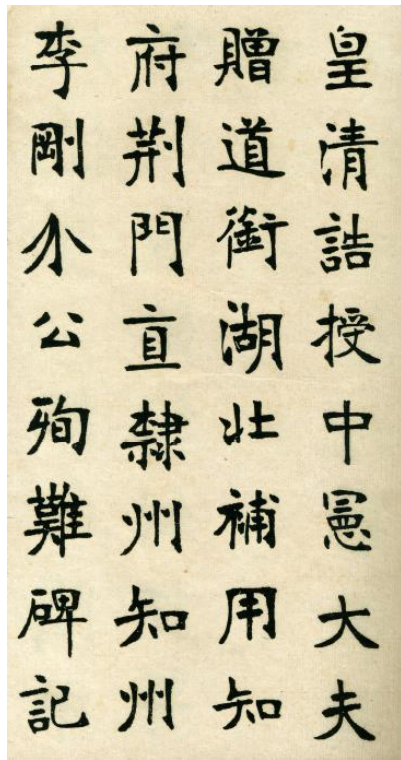


【圖 14】張裕釗「蒯公神道碑」（光緒 13 年推定）

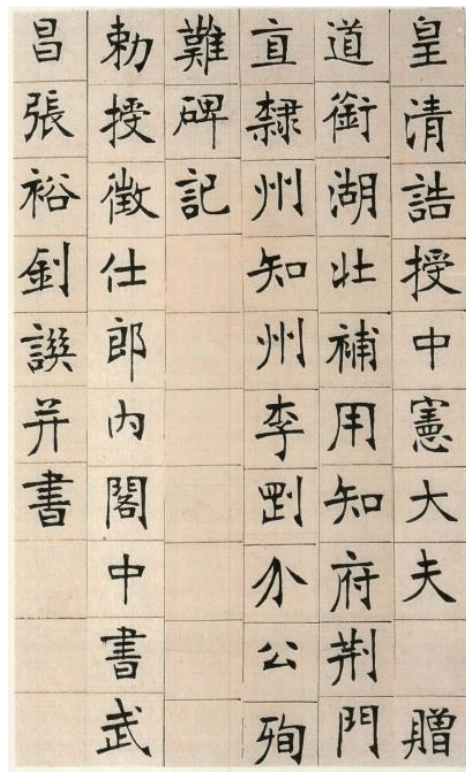


【図 15】李鴻章の張裕釗宛書簡（傍線筆者）





【図 16】張裕釗「李剛介公殉難碑記」（石印本）（左）



【図 17】張裕釗「李剛介公殉難碑記」（湖北本）（右）

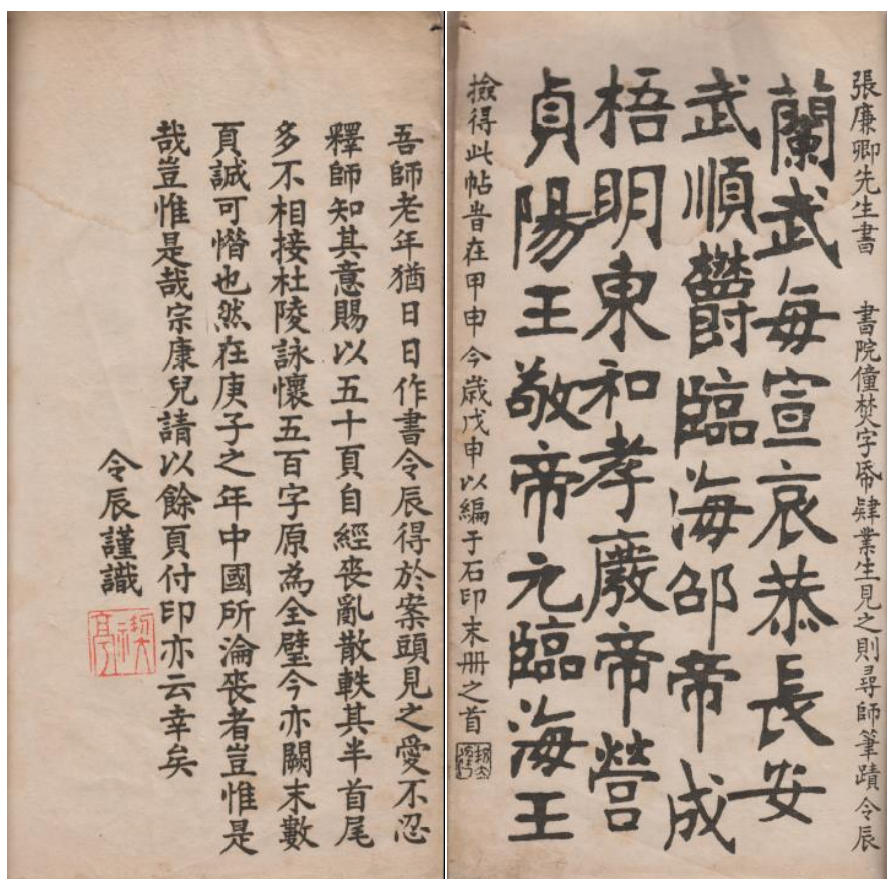
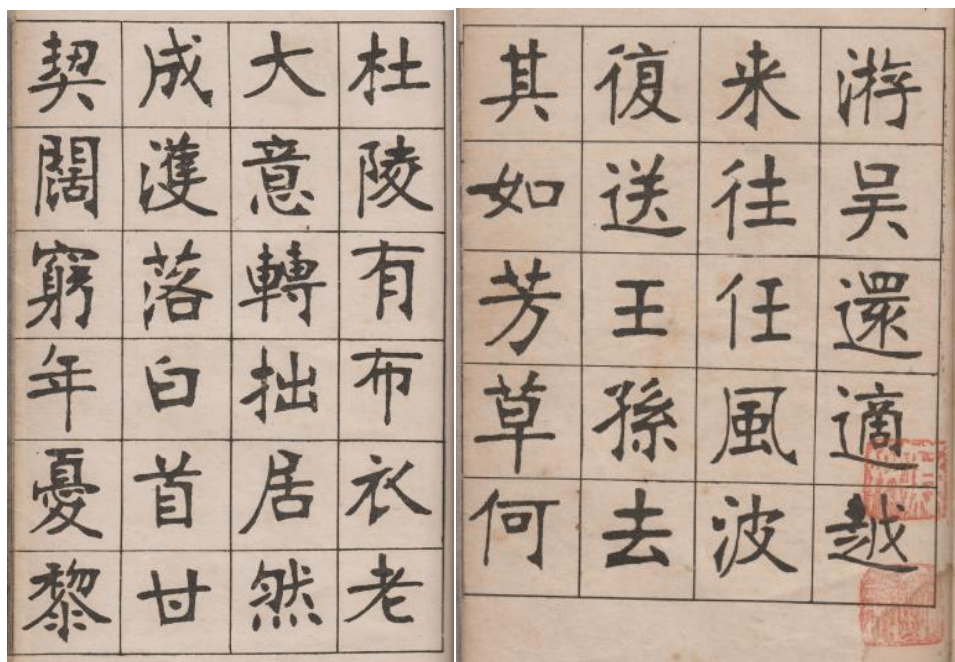


【図 18】張裕釗「李剛介公殉難碑記」（石印本）の題跋

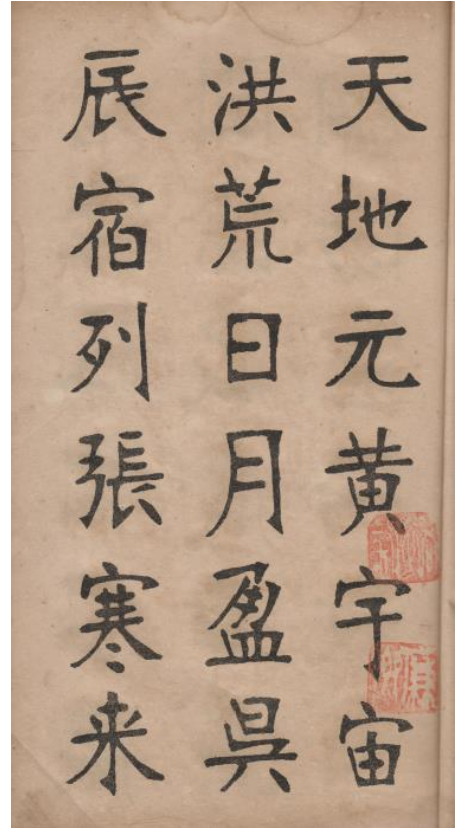
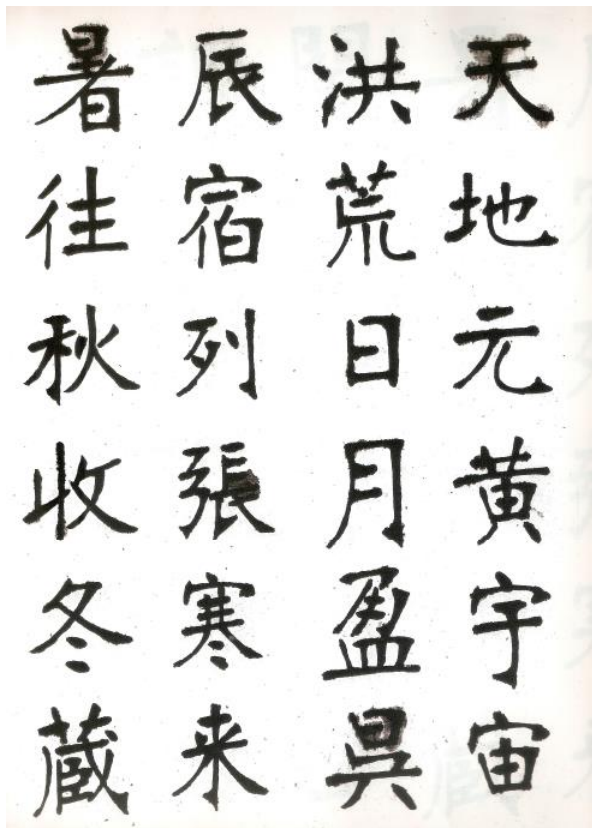


【図 19】張裕釗「賀蘇生夫婦雙壽序」（光緒 19 年～20 年推定）





【圖 20】 齊令辰藏、張裕釗「杜甫詩帖」（光緒 9 年～10 年推定）

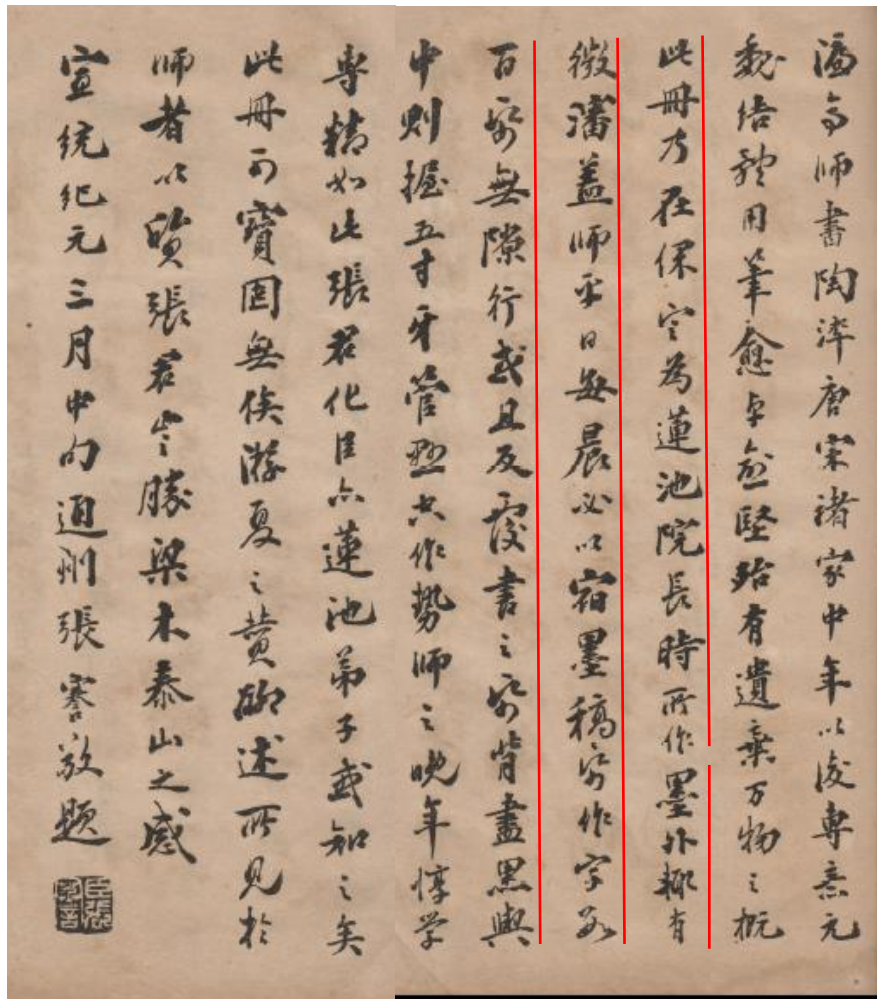


【図 21】宮島蔵、張裕釗「千字文」

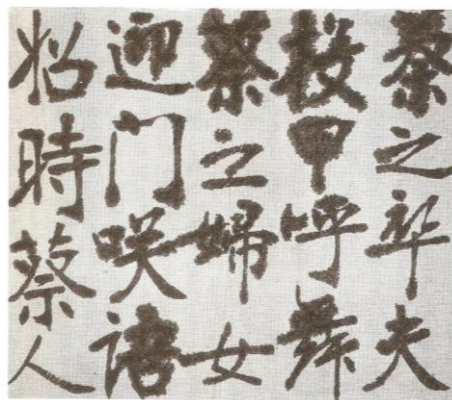
(蓮池書院期間の光緒 9～15 年推定) (左)

【図 22】張孝移蔵、張裕釗「千字文」

(蓮池書院期間の光緒 9～15 年推定) (右)



【図 23】張孝移藏、張裕釗「千字文」張謇の題跋（傍線筆者）



【図 24】張裕釗執筆示範帖



湖北	石印	湖北	石印	湖北	石印	湖北	石印
李剛介公殉難碑記	李剛介公殉難碑記	府荆門直隸州知州	府荆門直隸州知州	贈道銜湖北補用知	贈道銜湖北補用知	皇清誥授中憲大夫	皇清誥授中憲大夫

湖北	石印	湖北	石印	湖北	石印	湖北	石印	湖北	石印
常熟楊沂孫篆額	常熟楊沂孫篆額	道安徽鳳陽府知府	道安徽鳳陽府知府	書	書丹	書武昌張裕釗謨并	書武昌張裕釗謨并	勅授徵仕郎內閣中	勅授郎內閣中

【表 1】張裕釗「李剛介公殉難碑記」：湖北本、石印本の比較

①ハネ				
同治後半・光緒前半期		光緒中期		
(1) 贈李鴻章書作 (同治 11 年)	(2) 「事文類聚」 (同治 12 年)	(1) 齊令辰藏「齊公祠楹聯」 (光緒 12 年)	(2) 「箴言」 (光緒 17 年)	(3) 「節東都賦・西京賦」 (江漢書院時期、光緒 15 ~ 17 年)
				
				
②「戈」形				
同治前半期		光緒中期		
(1) 張裕釗「飛白書勢銘」 (同治 5 年)		(1) 齊令辰藏「齊公祠楹聯」 (光緒 12 年)	(2) 「箴言」 (光緒 17 年)	(3) 「節東都賦・西京賦」 (江漢書院時期、光緒 15 ~ 17 年)
				

【表 2】同治後半・光緒前半期から光緒中期における大楷書作の変遷

③ 「水」 傍				
同治後半期		光緒中期		
(2) 「事文類聚」 (同治 12 年)		(1) 齊令辰藏「齊公祠楹聯」 (光緒 12 年)	(2) 「箴言」 (光緒 17 年)	(3) 「節東都賦・西京賦」 (江漢書院時期、光緒 15 ~ 17 年)
④ 「丨」 形				
同治後半期		光緒中期		
(2) 「事文類聚」 (同治 12 年)		(1) 齊令辰藏「齊公祠楹聯」 (光緒 12 年)	(2) 「箴言」 (光緒 17 年)	(3) 「節東都賦・西京賦」 (江漢書院時期、光緒 15 ~ 17 年)
⑤ 「衣」 「木」 傍				
同治後半期		光緒中期		
(1) 贈李鴻章書作 (同治 11 年)	(2) 「事文類聚」 (同治 12 年)		(2) 「箴言」 (光緒 17 年)	(3) 「節東都賦・西京賦」 (江漢書院時期、光緒 15 ~ 17 年)

【表 3】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における大楷書作の変遷

①ハネ				
同治後半・光緒前半期			光緒中期	
(1) 「代湘郷會相国重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)			(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年)	
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)			(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定)	
(3) 「吳母馬太淑人 祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介 公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定)	
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)			(4) 湖北博物館本 「李剛介記」(光緒 9 ～14 年推定)	
(5) 「金陵曾文正公 祠堂修葺記」(光緒 7 年)			(5) 「賀蘇生夫婦双 寿序」(光緒 19 年推 定)	
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)				
(1) 『舒芸室隨筆六 卷』(同治 13 年)	なし		(1) 齊令辰藏「杜甫 詩帖」(蓮池書院期推 定、光緒 9 年～14 年)	
(2) 『史記』(光緒 2 年)			(2) 宮島藏「千字 文」(蓮池書院期推 定、光緒 9 年～14 年)	
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし		(3) 張孝移藏「千字 文」(蓮池書院期推 定、光緒 9 年～14 年)	

【表 4】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷










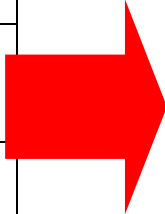







② 「戈」形			
同治後半・光緒前半期			光緒中期
(1) 「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)	なし		(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年) 
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)			(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定) 
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定) 
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)			(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定) 
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)			(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定) 
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)			
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)			(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(2) 『史記』(光緒 2 年)			(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし		(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 

【表 5】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷



③ 「水」 傍				
同治後半・光緒前半期			光緒中期	
(1) 「代湘鄉會相國重脩金山江天寺記」(同治10年)			(1) 「重脩南宮縣學記」(光緒12年)	
(2) 「吳徵君墓誌銘」(同治12年)			(2) 「蒯德模神道碑」(光緒13年推定)	
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年~14年推定)	
(4) 「吳廷香墓表」(光緒4年付)			(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年~14年推定)	
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒7年付)			(5) 「賀蘇生夫婦雙壽序」(光緒19年推定)	
(6) 「屈子祠堂後碑」(光緒7年推定)				
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治13年)			(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(光緒10年、蓮池書院期推定、光緒9年~14年)	
(2) 『史記』(光緒2年)			(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)	
(3) 『汪梅村先生集』(光緒7年)			(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)	

【表6】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

④ 「丿」形			
同治後半・光緒前半期			光緒中期
(1) 「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)			(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年) 
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)			(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定) 
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定) 
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)			(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定) 
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)			(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定) 
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)			
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)			(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(2) 『史記』(光緒 2 年)			(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし		(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 

【表 7】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

⑤ 「心」形				
同治後半・光緒前半期			光緒中期	
(1) 「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)			(1) 「重脩南宮県學記」(光緒 12 年)	
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)			(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定)	
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定)	
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)			(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定)	
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)			(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定)	
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)				
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)	なし		(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(2) 『史記』(光緒 2 年)	なし		(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし		(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	

【表 8】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

⑥ 「卩」形			
同治後半・光緒前半期			光緒中期
(1) 「代湘鄉曾相国重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)			(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年) 
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)			(2) 「蒯徳模神道碑」 (光緒 13 年推定) 
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定) 
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)			(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定) 
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)			(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定) なし
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)			
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)	なし		(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(2) 『史記』(光緒 2 年)	なし		(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし		(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年) 

【表 9】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

線の太さ-		縦画より横画のほうが太い 「縦画」「横画」線の太さの差が異なった	
同治後半・光緒前半期		光緒中期	
(1) 「代湘郷會相国重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)		(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年)	
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)		(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定)	
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)		(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定)	
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)		(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定)	
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)		(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定)	
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)			
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)		(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(2) 『史記』(光緒 2 年)		(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし	(3) 張孝樸藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	

【表 10】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

間隔の広さ：「言」部				
同治後半・光緒前半期			光緒中期	
(1)「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」(同治10年)			(1)「重脩南宮県学記」(光緒12年)	
(2)「吳徵君墓誌銘」(同治12年)			(2)「蒯德模神道碑」(光緒13年推定)	
(3)「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3)石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年～14年推定)	
(4)「吳廷香墓表」(光緒4年)			(4)湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年～14年推定)	
(5)「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒7年)			(5)「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒19年推定)	
(6)「屈子祠堂後碑」(光緒7年推定)				
(1)『舒芸室隨筆六卷』(同治13年)	なし		(1)齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	
(2)『史記』(光緒2年)			(2)宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	
(3)『汪梅村先生集』(光緒7年)	なし		(3)張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	

【表 11】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷



間隔の広さ：「貝」部				
同治後半・光緒前半期			光緒中期	
(1)「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」(同治10年)			(1)「重脩南宮県学記」(光緒12年)	
(2)「吳徵君墓誌銘」(同治12年)			(2)「蒯德模神道碑」(光緒13年推定)	
(3)「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)			(3)石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年～14年推定)	
(4)「吳廷香墓表」(光緒4年)			(4)湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」(光緒9年～14年推定)	
(5)「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒7年)			(5)「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒19年推定)	
(6)「屈子祠堂後碑」(光緒7年推定)				
(1)『舒芸室隨筆六卷』(同治13年)			(1)齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	
(2)『史記』(光緒2年)	なし		(2)宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	
(3)『汪梅村先生集』(光緒7年)	なし		(3)張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年～14年)	

【表 12】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

外方内円			
同治後半・光緒前半期		光緒中期	
(1) 「代湘郷曾相国重脩金山江天寺記」 (同治 10 年)		(1) 「重脩南宮県学記」(光緒 12 年)	
(2) 「吳徵君墓誌銘」 (同治 12 年)		(2) 「蒯德模神道碑」 (光緒 13 年推定)	
(3) 「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)		(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(光緒 9 年～14 年推定)	
(4) 「吳廷香墓表」 (光緒 4 年)		(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」 (光緒 9 年～14 年推定)	
(5) 「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒 7 年)		(5) 「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年推定)	
(6) 「屈子祠堂後碑」 (光緒 7 年推定)			
(1) 『舒芸室隨筆六卷』(同治 13 年)		(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(2) 『史記』(光緒 2 年)		(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	
(3) 『汪梅村先生集』 (光緒 7 年)	なし	(3) 張孝穆藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒 9 年～14 年)	

【表 13】同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷



大楷書作 中楷書作	①ハネ	②「戈」形	③「水」傍
北魏「張猛龍碑」			
北魏「弔比干文」			
(1) 齊令辰藏 「齊公祠楹聯」 (光緒12年)			
(2) 「箴言」(光緒17年)			
(3) 「節東都賦・西京賦」(江漢書院時期、光緒15~17年)			
(1) 「重脩南宮鼎學記」(光緒12年)			
(2) 「蒯德模神道碑」(光緒13年推定)			
(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(蓮池書院時期推定、光緒9年~14年)			
(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」(蓮池書院時期推定、光緒9年~14年)			
(5) 「賀蘇生夫婦双壽序」(光緒19~20年推定)			
(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)			
(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)			

(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)			
---------------------------------	---	--	---

【表 14】 「弔比干文」 特徴の影響：ハネ

大楷書作 中楷書作	④「㇀」形	⑤「心」形	⑥「㇀」形
北魏「張猛龍碑」			
北魏「弔比干文」			
(1) 齊令辰藏「齊公祠楹聯」(光緒12年)			なし
(2) 「箴言」(光緒17年)			
(3) 「節東都賦・西京賦」(江漢書院時期、光緒15~17年)			なし
(1) 「重脩南宮鼎學記」(光緒12年)			
(2) 「崩德模神道碑」(光緒13年推定)			
(3) 石印本「李剛介公殉難碑記」(蓮池書院時期推定、光緒9年~14年)			
(4) 湖北博物館本「李剛介公殉難碑記」(蓮池書院時期推定、光緒9年~14年)			
(5) 「賀蘇生夫婦双壽序」(光緒19~20年推定)			
(1) 齊令辰藏「杜甫詩帖」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)			

(2) 宮島藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)	張良	念悲	都廊
(3) 張孝移藏「千字文」(蓮池書院期推定、光緒9年~14年)	辰張	必悲	都廊

【表 15】「弔比干文」特徴の影響：ハネ

張裕釗の碑碣	払い	長い縦画	縦画の強調
同治後半期の中楷一碑碣①「代湘鄉曾相國重脩金山江天寺記」(同治10年)	資以	修	
同治後半期の中楷一碑碣②「吳徵君墓誌銘」(同治12年)	流源	候齋	在
同治後半期の中楷一碑碣③「吳母馬太淑人祔葬誌」(光緒元年)	系	齋喻	
同治後半期の中楷一碑碣④「吳廷香墓表」(光緒4年)	乘縣	舟船	迎逆
同治後半期の中楷一碑碣⑤「金陵曾文正公祠堂修葺記」(光緒7年)	下謀	脩	狂
同治後半期の中楷一碑碣⑥「屈子祠堂後碑」(光緒7年推定)	潔某	論前	在
光緒中期以降の中楷一(1)「重脩南宮學記」(光緒12年)	縣傑	脩候	患

<p>光緒中期以降の中楷 — (2) 「蒯德模神道 碑」 (光緒 13 年推 定)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (3) 石印本「李剛 介公殉難碑記」 (蓮 池書院時期推定、光 緒 9 年～14 年)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (4) 湖北博物館本 「李剛介公殉難碑 記」 (蓮池書院時期 推定、光緒 9 年～14 年)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (5) 「賀蘇生夫婦 双寿序」 (光緒 19～ 20 年推定)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (1) 齊令辰藏「杜甫 詩帖」 (蓮池書院期 推定、光緒 9 年～14 年)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (2) 宮島藏「千字文」 (蓮池書院期推定、 光緒 9 年～14 年)</p>			
<p>光緒中期以降の中楷 — (3) 張孝移藏「千字 文」 (蓮池書院期推 定、光緒 9 年～14 年)</p>			

【表 16】同治後半期・光緒中期以降の中楷における張裕釗の同特徴の比較



## 図版典拠

### 【図 1】北魏「弔比干文」

伏見冲敬「北魏・孝文帝弔比干文」(『書品』186号、東洋書道協会、1967年)。

### 【図 2】張裕釗「贈沈曾植書」

明清名家書法大成編纂委員会『明清名家書法大成 第六卷 清代書法四』(上海書畫出版社、1994年)、編号:16。または『中国美術全集 書法篆刻編 6 清代書法』(上海書畫出版社、1993年)、176頁。

### 【図 3】張裕釗の書作、鄭孝胥の跋文(傍線筆者)

2015年12月8日北京保利十周年秋季オークション。

### 【図 4】張裕釗の莫繩孫贈書作

序章掲注75、陳氏著、55頁。

### 【図 5】張裕釗の莫繩孫宛書簡

張裕釗專題「張裕釗作品選」『中国書法』第6期(2001年)、18~19頁。名家手稿欣賞「張裕釗致仲武函(局部)」(『書友』第250期、2009年10月)、封底頁。『張裕釗集』、「致仲武姻世兄」、湖北省博物館蔵、25~26頁。

### 【図 6】張裕釗の莫繩孫宛書簡

張裕釗書法文化博物館 書法報社組編『荆楚墨象・張裕釗卷』、「致仲武

姻世兄」、湖北省博物館蔵、27 頁。

【図 7】莫繩孫日記（壬辰十月至甲午九月）（傍線筆者）

『独山莫氏遺稿不分卷十三冊／清莫繩孫撰『日記四冊』』「手記 壬辰十月至甲午九月」台湾、国家図書館蔵、古籍与特蔵文献資源、書号：15360-005。

【図 8】齊令辰蔵、張裕釗「齊公祠楹聯」（光緒 12 年）

翰海拍卖会：『翰海 2010 春季拍卖会—法書楹聯』（翰海拍賣有限公司、2010 年 6 月）、編号：1103。

【図 9】齊令辰出版、張氏帖第一冊の跋文（右）（傍線筆者）

齊令辰出版、張裕釗帖第一冊（出版情報なし）、跋文、日本個人蔵。

【図 10】齊令辰出版、張氏帖第一冊「先祠楹聯」

前掲注 26、齊令辰出版、張裕釗帖第一冊、「先祠楹聯」。

【図 11】張裕釗「箴言（座右銘）」（光緒 17 年）

張裕釗書『張廉卿書箴言』（文明書局、宣統 3 年（1911）7 月）。

【図 12】張裕釗「節東都賦・西京賦」（江漢書院時期の光緒 15～17 年）

張廉卿「節東都賦・西京賦」一～二十三、雑誌『雪心』連載、日本個人蔵。5～14 頁、11～14 頁、5～8 頁、5～8 頁。

【図 13】張裕釗「南宮県学記」(光緒 12 年)

田人編出版『重脩南宮県学記』(吳橋金鼎古籍印刷廠、2018 年 1 月)

【図 14】張裕釗「蒯公神道碑」(光緒 13 年推定)

清李鴻章楷書『蒯公神道碑帖』(上海文明書局、中華民國 5 年(1916) 11 月初版、13 年(1924) 4 月再版)

【図 15】李鴻章の張裕釗宛書簡(傍線筆者)

李鴻章『李文忠公尺牘』合肥李氏印成、第 32 冊(商務印書館、1916 年 10 月)。

【図 16】張裕釗「李剛介公殉難碑記」(石印本)

張裕釗『張廉卿書李剛介公殉難碑』(文明書局、1911 年 3 月初版)

【図 17】張裕釗「李剛介公殉難碑記」(湖北本)

劉正成主編『中国書道全集 楊峴張裕釗徐三庚楊守敬卷』(榮宝齋出版社、2012 年 12 月)、113~131 頁。

【図 18】張裕釗「李剛介公殉難碑記」(石印本)の題跋

張裕釗『張廉卿書李剛介公殉難碑』、(文明書局、1941 年 3 月第 17 版) 石印本の題跋。

【図 19】張裕釗「賀蘇生夫婦双寿序」(光緒 19 年~20 年推定)

「賀蘇生夫婦双寿序」拓本、中国個人蔵。

【図 20】 齊令辰藏、張裕釗「杜甫詩帖」(光緒 9 年～10 年推定)

齊令辰出版、張裕釗帖第四冊(出版情報なし)、跋文、日本個人藏。

【図 21】 宮島藏、張裕釗「千字文」(蓮池書院期間の光緒 9～15 年推定)

張裕釗書『宮島詠士旧藏 張廉卿千字文』(同朋社、昭和 58 年 7 月、1983 年)。

【図 22】 張孝移藏、張裕釗「千字文」(蓮池書院期間の光緒 9～15 年推定)

張孝移旧藏『千字文』(出版情報なし)、日本個人藏。

【図 23】 張孝移藏、張裕釗「千字文」張謇の題跋(傍線筆者)

張孝移旧藏『千字文』(出版情報なし)、日本個人藏。

【図 24】 張裕釗執筆示範帖

張裕釗執筆示範帖『書論第 23 號(特集：宮島詠士)』(書論研究会、1984 年 11 月)、127 頁。

## 表図版の典拠

【表 1】 張裕釗「李剛介公殉難碑記」：湖北本、石印本の比較

○湖北本：前掲図 16

○石印本：前掲図 15



【表 2】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における大楷書作の変遷

【表 3】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における大楷書作の変遷

○同治前半期：第三章図 8

○同治後半・光緒前半期：第三章図 11、図 12

○光緒中期：前掲図 9、図 10、図 11

【表 4】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 5】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 6】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 7】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 8】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 9】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

【表 10】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

「縦画・横画において線の太さ」

【表 11】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

「間隔の広さ」

【表 12】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

「間隔の広さ」

【表 13】 同治後半・光緒前半期から光緒中期における中楷書作の変遷

「外方内円」

○同治後半・光緒前半期：第三章図 13～図 21

○光緒中期以降：前掲図 12、図 13、図 15、図 16、図 18～図 21

【表 14】 「弔比干文」特徴の影響：ハネ

【表 15】 「弔比干文」特徴の影響：ハネ

【表 16】 同治後半期の中楷・光緒中期以降の中楷における張裕釗の同  
特徴の比較

○同治後半・光緒前半期：第三章図 13～図 21

○光緒中期以降：前掲図 12、図 13、図 15、図 16、図 18～図 21

# 終章

## 第一節 各章の研究成果とまとめ

本論では、晩清官僚文化の視点から張裕釗の書法を検討した。張裕釗に関する現存の墨跡・碑文書法・文献資料から、張裕釗の経歴や書作を時期別（咸豊年間、同治前半期、同治後半期・光緒前半期、光緒中期以降の4期）に分類し、幕府や書院における張裕釗の交流と、書法スタイルの変遷について総合的に考察した。

4章により検討を進めた結果を、以下に、章ごとに整理したい。また、研究結果を踏まえつつ、先の問題提起に答えたい。

まず、第一章では、咸豊期において、張裕釗の書法が伝統的な帖学から導かれたものであることを指摘した。例えば、胡林翼の幕府においては曾国藩に宛てた書簡からは唐碑・二王を主とした伝統的な学書方法を基としたスタイルが看取された。また、范志熙に宛てた書簡では王羲之・米芾のスタイルが看取された。

第二章では、同治前半期に注目し、曾国藩の幕府における莫友芝との交流が、張裕釗の書学に影響を与えたと考えられることを述べた。張裕釗が同治5年9月に書した「鮑照飛白書勢銘」は、「隸楷相参」のスタイルを明確に打ち出したものである。その点画の払いやハネ・乙脚は非常に伸びやかであり、暢達した開放感は、従来の書法家には見られないものであった。

また、張裕釗の小楷においても、同治期に入ると曾国藩の影響を受けたのか、字形は左方に広がりを持ち、方筆の起筆と収筆を止めると

いう現象を示し始める。急速に倣書的姿勢は失われ、曾国藩・莫友芝からの書法の影響があったことが判断される。

第三章では、張裕釗の中楷書作の展開に注目した。曾国藩幕府において、莫友芝と知り合い、訪碑活動（梁碑）行ったことによって張裕釗の書の観念が変化したものと考えられる。特に中楷は、梁碑碑額の楷書様式である正方形の概形に近く、払いとその他の部分の幅に差がない、乙脚のある横画の斜度、他の横画の斜度は梁碑に近いという特徴があり、これらには梁碑の影響があったことが推測される。この時期の張裕釗は、それまでの開放感あるハネ・乙脚の特徴を継ぎつつ、莫友芝の訪碑文化（梁碑）により安定感ある概形・斜度を取り入れた。双方の動静を融合し、また独創性も備わっていることから、先学が言及していない梁碑の影響は、張裕釗の書法展開の上で重要な位置を占めると考えられる。

第四章では、張裕釗書法に袁昶・沈曾植が影響を与えていたことを導いた。張裕釗は保定蓮池書院期間にかけて鄭孝胥と交わり、莫友芝の収蔵品である「弔比干文」について語り合っている。中楷の作品では、三角形のハネを始めとして「弔比干文」の特徴が窺え、その受容も顕著である。また、縦画より横画を太くすることで、視覚的に立体観を感じさせる書法となっている。また更に、この時期において張裕釗の特徴として知られる「外方内円」が鮮明になり、洗練され完成したと考えられる。張裕釗の書は、当時にはない独創的なもので、それは点画を上・下・左・右へ延長する開放感や「弔比干文」の立体感が融合することによって実現したものといえる。

また、それぞれの時期に官僚である胡林翼・汪士鐸・曾国藩（胡林翼幕府、咸豊年間）、何璟・莫友芝（曾国藩幕府、同治前半期）、莫友芝（曾国藩幕府、同治後半期・光緒前半期）、莫繩孫・袁昶・沈曾

植・鄭孝胥（光緒中期以降）と交友があったことが日記・書簡等の資料から窺えた。

これらの官僚たちは、碑版拓本を収蔵しており、彼らと交流する過程で張裕釗の書法が形成され、展開した。前段階（咸豊年間、同治前半期）は、官僚たちの書風から直接影響を受けたが、張裕釗の書法の表現には新たに変化が見られた。後段階（同治後半期・光緒前半期、光緒中期）は官僚の訪碑（梁碑）活動や収蔵品である「弔比干文」について語り合ったことが確認でき、線の太さや宿墨を用いた技法を實現し、立体感を感じさせる表現を開発した。そして、それが独自の書風として定着するようになった。

先行研究で言及されていない晩清官僚文化の視点で張裕釗書法の形成と展開を検討した結果、幕府という交流場の重要性を提示することができた。官僚たちがお互いに碑帖を媒介とした交流をすることはその時代の特徴であったが、張裕釗は彼らの所蔵する各碑帖から書法を摂取し、独自のスタイルを創造した。特に隸書の筆法や結構から楷書の新たな表現を生み出し、晩期に「弔比干文」から得た「外方内円」を展開したことは、官僚である莫友芝などとの交流によって成し遂げられたものである。彼らの書法や書法観、収蔵品が重要な役割を果たしたことを解明したことに本論の意義がある。

## 第二節 今後の課題

本論の検討結果を踏まえ、最後に、今後の課題について三つ以下に述べておきたい。

## 一、年代・真偽未解明の張裕釗書作

張裕釗の現存する書作については、例えば宮島家が収蔵する書作は晩年に集中しており、真偽において信頼度が高い。魚住和晃氏の研究によれば、1990年代に入り宮島家から全面的な資料提供をいただけるようになったとのことである<sup>1</sup>。また、近年、陳啓壯氏は中国張裕釗書法研究会の会長として、張裕釗の書作の収集に全力を尽くしており、中国においても張裕釗の若年期の書作が続々と発見されている。中国の民間において張裕釗の書作品を最も多く収蔵しているのは、この陳啓壯氏であろう<sup>2</sup>。これらを活用し、更に張裕釗の書法について研究を進める必要がある。

本稿では、張裕釗の書に対する認識を段階を追って窺うことができたが、張裕釗の書作には干支が記入されないことが多く、執筆年代の推定には真偽も含めた慎重な検討が要求される。

本論の序章で整理した無紀年の大字書作（対聯、條幅、條屏、臨書作品）、中字書作（碑碣作品、一般作品）、小字書作（書簡、著作手稿、跋文・批語）についてはいくつか新たな知見を提起したが、複数の問題点も残された。例えば、第三章では現存する張裕釗の碑文書法を考察したが、「張樹珊墓誌銘」「黃孺人墓誌銘」「張公蔭穀墓碑」三つの碑碣作品年代には諸説があり、執筆年代は未解明のままである。これらの作品群も有紀年作品や確認できた基準作と検証し、また張裕釗の生涯に関する文献などから厳密に検討し、年代・真偽を明らかにする必要があると思われる。

---

<sup>1</sup> 序章注 61、魚住氏著、「後記」、315頁。

<sup>2</sup> 序章注 75、陳氏著、張書範「序言」、2頁。

## 二、莫友芝の生涯及び書学

張裕釗の書は、莫友芝の隸書から啓発された「隸楷相參」という表現性においてだけではなく、莫友芝の生涯と書学が投影されたものと思われる。その根源的な部分が把握されたときに、ようやくその理念が感得されると思うのである。従って、両者の交流活動において書は重要であるが、莫友芝とはあくまでも全人的な関わりにおいてこそ、その本質が存在すると考えている。莫友芝の書学の思想と書を合わせ見れば、張裕釗の書に果した貢献は、更に理解できるのではないかと思う。

確かに、莫友芝は訪碑活動や金石の研究に熱中をしており、莫友芝や張裕釗の書学思想を考えたとき、相通ずるものが見出される。莫友芝の研究に関しては序章で提起したが、その書法観に関しては未だに詳細にかつ全面的に検討されてない。そのため、より多くの資料の発見を待つ必要があるが、研究者は今後この点についても議論に加えるべきであろう。

## 三、張裕釗書法の受容

日本で張裕釗書法の「外方内円」様式の影響を受けたのは宮島詠士と上條信山であり、善隣書院や書象会を設立して、その書法を広め、さらに「信山流」として引き継いでいる。中国においては、地域（河北省と湖北省が大宗）によっていくつかの張裕釗書法の流派が存在している。李喜泰氏（河北省邯鄲市）・熊基権氏（河北省石家荘市）はその三

代目の門人として、一代目から三代目までの書を考察してきた<sup>3</sup>。それらの人物を挙げると、一代目の門人に張謇（1853～1926）、范当世（1854～1904）、查燕緒（1843～1917）、馬其昶（1855～1930）、または胡宗照（1884～1942）、王洪鈞（約 1864～1929）等がいる。二代目の弟子には、胡宗照の門人の孫文錦、周培福、王洪鈞の門人の盧相之（約 1893～1956）、李鶴亭（1904～1976）等がいる。三代目の門人で、現在の書壇で活躍しているのは李鶴亭の弟子である李守誠、または王樂同、張書範、田人、董毓明、熊基權などが挙げられる。こうした状況を見ると、中国にはいくつの流派が存在し、またそれぞれどのような系統にあるかという疑問が生じる。これらは未解明の問題であり、その考察は現地での調査が不可欠であると思われる。

本論の序章・第一章・第四章では、張裕釗の門人である張謇、張孝移、齊令辰、賀濤、賀培新に加え張裕釗と同時期の人物である康有為、袁昶、沈曾植、鄭孝胥についても少し触れた。彼らは張裕釗の書から影響を受けていたと思われ、今後も多くの新資料を発見し検証していく必要がある。

---

<sup>3</sup> 李喜泰「池中綠滿魚留子 庭下蔭多燕引雛—張裕釗書法芸術流派管窺」。董毓明編『第五屆全國張裕釗流派書法展作品集』（内部資料、2011年7月）、249～253頁。  
熊基權「張裕釗研究之四 燕趙大地的張裕釗盛流」『熊基權書作詩文集』（下）理論卷、詩聯卷、附卷（花山文芸出版社、2005年7月）、22～24頁。



【表】 本論における研究成果の整理

<p>咸豊年間</p> <p>胡林翼幕府</p>	<p>小字楷書</p> <p>唐楷</p> <p>↓</p> <p>胡林翼・汪士鐸の館閣体</p> <p>↓</p> <p>莫友芝の小楷</p>	<p>小字行書</p> <p>范鳴珂・范鳴猷による交遊</p> <p>王羲之・米芾を集字した倣書</p> <p>↓</p> <p>曾国藩の行書</p>	<p>大字行楷書</p> <p>莫友芝の隸書</p> <p>↓</p> <p>莫友芝の隸書</p>	<p>中字楷書</p> <p>碑文・題字</p>
<p>同治前半期</p> <p>曾国藩幕府、武昌勺庭書院</p>	<p>莫友芝の小行楷書</p>	<p>莫友芝による「梁碑碑額」の訪碑活動</p>	<p>莫友芝による「梁碑碑額」の訪碑活動</p>	<p>莫友芝による「梁碑碑額」の訪碑活動</p>
<p>同治後半期・光緒前半期</p> <p>鄂城書局、塩局、金陵鳳池書院</p>	<p>莫友芝の小行楷書</p>	<p>莫友芝・莫繩孫による北魏「弔比干文」の収蔵</p>	<p>莫友芝・莫繩孫による北魏「弔比干文」の収蔵</p>	<p>莫友芝・莫繩孫による北魏「弔比干文」の収蔵</p>
<p>光緒中期</p> <p>保定蓮池書院、武昌江漢書院、襄陽鹿門書院</p>				

## 参考文献

### 一、古籍法帖

- (清) 張善準『張廉卿先生家譜』(台湾国家図書館、清咸豐 10 年、(1860) 年、手抄本)
- (清) 『蔣元卿旧藏晚清和近代名人手札』(安徽省安慶市図書館古籍部蔵)
- (清) 張裕釗『張廉卿先生楷書千字文』(奥付なし)
- (清) 張裕釗「吳蘭軒墓表」拓本(中国・日本個人蔵二冊)
- (清) 張裕釗「張裕釗致蔣光燾書札」(38 通)、「張裕釗劉府君墓誌銘」(1 通)(浙江図書館蔵)
- (清) 張裕釗校刊、帰有光・方苞評点『史記』(南京図書館蔵)
- (清) 張裕釗『張裕釗帖』第一冊(斉令辰出版、日本個人蔵)
- (清) 張裕釗『張裕釗帖』第四冊(斉令辰出版、日本個人蔵)
- (清) 張裕釗「賀蘇生夫婦双寿序」拓本(中国個人蔵)
- (清) 張裕釗『張廉卿書千字文』(民国 3 年(1914) 7 月、初版)
- (清) 張裕釗『張廉卿書千字文楷書』(文明書局、1935 年 3 月、第 9 版)
- (清) 張裕釗『千字文』(張以南・張謇題、張孝移蔵、奥付なし)
- (清) 『陶風楼蔵名賢手札』(江蘇省立国学図書館出版、1930 年、初版、南京図書館蔵)
- (清) 『張廉卿書箴言(崔瑗座右銘)』(文明書局、民国 26 年(1937) 4 月、第 13 版。)
- (清) 張裕釗『張廉卿書李剛介公殉難碑』(文明書局、1911 年 3

月、初版)

- (清) 張裕釗『張廉卿書李剛介公殉難碑』(文明書局、1941年3月、第17版) 石印本の題跋
- (清) 張裕釗『張廉卿書箴言』(文明書局、宣統3年(1911)7月出版)
- (清) 張裕釗『張裕釗先生論学手札』(九思堂書局、民国石印)
- (清) 『張氏宗譜』卷47(敦義堂)
- (清) 鍾桐山修・柯逢時纂『中国地方志集成33・湖北府県志輯 光緒武昌県志』卷15(江蘇古籍出版社、清光緒11年(1885)刻本影印)
- (清) 范志熙『退思存稿(退思詩存)』(武昌范氏木犀香館刻本、清光緒14年(1888)年、中国国家図書館蔵)
- (清) 范志熙「鄂城喜晤張廉卿旋復別去」(『范月槎詩文稿』抄本、南京図書館蔵)
- (清) 汪士鐸「四君子詠」(『梅村賸稿』丙11汪賸下(『金陵叢書』、刻本、南京図書館蔵)
- (清) 汪士鐸『悔翁筆記(悔翁詩鈔)』(刻本、南京図書館蔵、上元吳氏銅鼓軒重雕民国廿四年十月版帰燕京大学図書館補刊印行、中国書局1985年再版)
- (清) 汪士鐸『汪梅村先生集殘帙』(抄本、南京図書館蔵)
- (清) 汪士鐸『汪子語録』(稿本、南京図書館蔵)
- (清) 汪士鐸『梅村賸稿』丙二十汪賸下「勺庭」(南京図書館蔵)
- (清) 汪士鐸「屈子祠堂後碑」(『汪梅村先生集』卷6、『近代中国史料叢刊』第13輯、文海出版社、1966年)
- (清) 汪士鐸『汪梅村先生集』(光緒7年、中国国家図書館蔵)
- (清) 曾國藩著、唐浩明責任編輯『曾國藩全集』(岳麓書社、1994

年第一版、2011年9月)

- (清)莫友芝「莫氏遺書不分卷」(『邵亭遺詩』、登錄号:索15024 貴州省圖書館藏)
- (清)莫友芝「莫友芝先生墨績」(清同治10年、内頁題名「徵君公摹魏孝文弔比干文三紙一開」、貴州省圖書館藏、索書號:08230)
- (清)莫友芝著·張劍、張燕嬰整理『莫友芝全集(全12冊)』(中華書局、2017年)
- (清)莫友芝著·張劍整理『莫友芝日記』(鳳凰書局、2016年4月)
- (清)莫友芝著、張劍·陶文鵬·梁光華編輯校点『莫友芝詩文集』(人民文學出版社、2009年1月)
- (清)莫友芝著『邵亭詩鈔』(張劍·陶文鵬·梁光華編輯校点『莫友芝詩文集』卷4、人民文學出版社、2013年11月)
- (清)莫繩孫『独山莫氏遺稿不分卷十三冊／清莫繩孫撰『日記四冊』』「手記 壬辰十月至甲午九月」(台灣、國家圖書館藏、古籍與特藏文獻資源、書号:15360-005)
- (清)黎庶昌「莫徵君別伝」(『拙尊園叢稿』卷4、『統修四庫全書』、上海古籍出版社、2002年)
- (清)黎庶昌著、黎鐸·龍先緒校正『黎庶昌全集(1~8冊)』(上海古籍出版社、2015年11月)
- (清)薛福成「叙曾文正公幕府賓僚」(『庸庵文編』卷4、近代中國史料叢刊第95輯、文海出版社)
- (清)張鳴珂『寒松閣談芸璣錄』卷5(『清代伝記叢刊』、明文書局、1985年)
- (清)張文虎『舒芸室隨筆』(金陵冶城賓館刊、1874年、哈佛燕

京圖書館藏)

- (清) 賀濤「唁張導岷」(甲午(1894年)、出版社不詳)
- (清) 李鴻章『李文忠公尺牘』第 32 冊(商務印書館、1916 年 10 月)
- (清) 李鴻章楷書『蒯公神道碑帖』(上海文明書局、中華民國 5 年(1916) 11 月初版、13 年(1924) 4 月再版)
- (清) 『陶風樓藏名賢手札』(江蘇省立國學圖書館出版、1930 年、南京圖書館藏)
- (清) 康有為『広芸舟双楫』卷 4、餘論第 19(上海書畫出版社、1981 年)
- (清) 鄭孝胥著、鄭謙焯納『海藏書法抉微』(崔爾平編『明清書法論文選(下)』上海書畫出版社、1994 年)
- (清) 鄭孝胥著、上海書店出版社編輯『張文虎日記』(上海書店出版社、2009 年 7 月)
- (清) 鄭孝胥著、勞祖德整理、中國國家博物館編『鄭孝胥日記(全五冊)』(中華書局、2016 年 4 月)
- (清) 賀培新著『賀培新集(上)·天游室文』(鳳凰出版社、2016 年 9 月)
- (清) 賀培新「書濂亭先生書撰曾大父母壽序石刻拓本後」(王達敏·王九一·王一村整理『賀培新集』、鳳凰出版社、2016 年)
- 趙爾巽主纂「張裕釗」『清史稿』卷 486、列傳 273、文苑 3(中華書局、1977 年)

## 二、專論·圖錄

- 劉再蘇『名人楹聯真蹟大全・附屏條堂幅』第 6 冊（世界書局、1925 年再版）
- 張蔭麟、李鼎芳「曾國藩與其幕府人物」『大公報・史地周刊』（1935 年 5 月 24 日）
- 神田喜一郎「中国書道史 14 清二」（下中邦彦編集『書道全集』第 24 卷、平凡社、1961 年）
- 服部竹風「張廉卿とその書」（『心画 張廉卿号』第 15 卷第 4 号、書道心画院、1962 年 4 月）
- 沈雲龍主編『桐城吳先生（汝綸）尺牘』（『近代中国史料叢刊』第 37 輯、文海出版社、1966 年 10 月）
- 伏見冲敬「北魏・孝文帝弔比干文」『書品』186 号（東洋書道協會、1967 年）
- 繆全吉「曾國藩幕府盛況与晚清地方權力之變化」『中国近代現代史論』第 5 編（中山學術文化集刊、1969 年）
- 富永覚『素描一人と画と一』（清泉社、1969 年 12 月）
- 郭立志撰『桐城吳先生（汝綸）年譜』雍睦堂叢書本（『近代中国史料叢刊』第 73 輯、文海出版社、1972 年）
- 張裕釗撰『張濂卿先生詩文手稿』（『近代中国史料叢刊続編』第 10 輯、文海出版社、1974 年）
- 魚住和晃『張裕釗書作集』（和泉書院、1980 年 1 月）
- 神田喜一郎「中国書道史 5 南北朝 I」（下中邦彦編集『書道全集』第 5 卷、平凡社、1980 年）
- 張裕釗「致曾國藩」、陶湘『昭代名人尺牘小伝続集』卷 18（文海出版社、1980 年）
- 張双錫「莫友芝的書法芸術」『貴州文史叢刊』1982 年第 4 期、（貴

州省文史研究館、1982年)

- 上條信山「解説」、張裕釗『宮島詠士旧蔵 張廉卿千字文』（同朋舎、1983年7月)
- 張裕釗執筆示範帖『書論第23号(特集:宮島詠士)』（書論研究会、1984年11月)
- 張廉卿著、王双啓・杉村邦彦・魚住和晃編『張廉卿先生論学手札(覆刻版)』（張裕釗宮島詠士師弟書法展覽実行委員会、1984年)
- 張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会編『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽図録』（張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽実行委員会、1984年)
- 李鼎芳編『曾國藩及其幕府人物』（岳麓書社、1985年)
- 黎鐸「黎庶昌年譜」（『遵義文史資料 第九輯(關於遵義人物1)』遵義市政協文史資料研究会、1986年7月)
- 杉村邦彦「張廉卿の伝記と書法」（『渠荷的歴「宮島詠士書法展」』書法文化交流会、1987年7月)
- 大沢義寛「張廉卿・宮島詠士の書表現上における工夫」（『渠荷的歴「宮島詠士書法展」』書法文化交流会、1987年7月)
- 魚住和晃「張廉卿・宮島詠士書法研究回想記」（『渠荷的歴「宮島詠士書法展」』書法文化交流会、1987年7月)
- 「莫友芝致小宋書信」（王迪諷、嚴宝善編『清代名人信稿 附小伝』浙江古籍出版社、1987年12月)
- 聞鈞天『張裕釗年譜及書文探討』（湖北美術出版社、1988年6月)
- 『書跡名品叢刊 梁貝義淵 蕭愴碑』田近憲三蔵本(二玄社、1988年11月)
- 黄萬機『黎庶昌評伝』（貴州人民出版社、1989年5月)

- 杜春和、耿来金編『胡林翼未刊往来函稿』（岳麓書社、1989年7月）
- 幸必澤「黎庶昌的文化外交和文史研究業績」（『貴州文史叢刊』貴州省文史研究館、1990年3月）
- 太平天国歴史博物館編『曾國藩等往来信稿真蹟』（河北人民出版社、1990年12月）
- 裴漢剛主編『莫友芝研究文集』（貴州人民出版社、1991年6月）
- 謝以蓉主編『遵義文史資料（内部資料）第二十輯』（『遵義文史資料』編輯部、1991年6月）
- 文物編輯委員会編『書法叢刊』第28輯（文物出版社、1991年12月）
- 黎庶昌国際学術研討会組織委員会編『貴州文史叢刊（黎庶昌專輯）』（1992年第3期、総第46期、貴州省文史研究館）
- 黄萬機『莫友芝評伝』（貴州人民出版社、1992年9月）
- 魚住和晃『〈悲憤と憂傷の書人〉』（柳原書局、1993年7月）
- 李世模「黎庶昌政治思想傾向弁析—兼与黄萬機先生商榷」（『貴州師範大学学報 社会科学版』1993年第2期、総第75期）
- 杉村邦彦著『書苑彷徨 第三集』（二玄社、1993年）
- 丁有国主編、張雪華・胡念征副主編『張裕釗〔論学手札〕助読』（湖北美術出版社、1994年9月）
- 朱東安『曾國藩幕府研究』（四川人民出版社、1994年12月）
- 西里喜行「黎庶昌の對日外交論策とその周辺：琉球問題・朝鮮問題をめぐって」（『東洋史研究』第53期、東洋史研究会、1994年）
- 劉錦「莫友芝書法成就淺識」（『書法叢刊』1994年第1期、文物出版社、1994年）



- 徐建融『清代書画鑑定与芸術市場』（上海書店出版社、1996年10月）
- 徐惠文編集『莫友芝年譜』（独山県政協文史資料委員会、1996年）
- 杉村邦彦「張裕釗的伝記与書法」（『書法之友』第5期、1996年）
- 楊祖武主編『張裕釗書法芸術』（華夏出版社、1997年5月）
- 黎庶昌「莫徵君別伝」（『拙尊園叢稿・外編』卷4、『統修四庫全書』集部、第1561冊、上海古籍出版社、1997年）
- 劉再蘇『名人楹聯墨蹟大觀』（湖北美術出版社、1998年3月）
- 唐浩明編『胡林翼集』（岳麓書社、1999年5月）
- 張裕釗撰『張濂卿先生詩文稿不分卷三冊』（台湾国家図書館蔵、番号：13456。国家図書館特蔵組編『国家図書館善本書志初稿・集部』国家図書館出版、1999年6月参照）
- 尚小明『学人游幕与清代學術』（社会科学文献出版社、1999年10月）
- 石田肇「『拙尊園存書目』翻印—黎庶昌の蔵書目録—」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第49巻、群馬大学教育学部、2000年）
- 石田肇「黎庶昌の蔵書—『拙尊園存書目』について—」（『汲古』第38号、古典研究会、2000年12月）
- 張裕釗專題「張裕釗作品選」（『中国書法』第6期、2001年）
- 『第四十回書象展記念—張濂卿・宮島詠士・上條信山作品集』（書象会、2001年7月6日）
- 葉賢恩『張裕釗伝』（中国三峽出版社、2001年12月）
- 陳捷「貴州省における日本関係典籍について—黎庶昌の古典籍蒐集およびその旧蔵書の行方を中心として—」（『中国に伝存の日本関

係典籍と文化財』国際日本文化研究センター、2002年)

- 李志茗『晚清四大幕府』（上海人民出版社、2002年1月）
- 魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』（研文出版、2002年6月）
- 凌林煌『曾國藩幕賓探究』（上、下）（文史哲出版社、2002年8月）
- 吳汝綸撰、施培毅・徐壽凱校点『吳汝綸全集』（黄山書社、2002年9月）
- 朱東安『曾國藩集團与晚清政局』（華文出版社、2003年1月）
- 郭堂貴「莫友芝書法与碑学」（『貴州文史叢刊』2004年第3期、貴州省文史研究館）
- 湛有恆主編『張裕釗国際學術研討会文集』（接力出版社、2004年3月）
- 湛有恆主編、丁有国注評『濂亭遺詩注評』（接力出版社、2004年3月）
- 薛雅文『莫友芝版本目錄学研究』（花木蘭文化工作坊、2005年12月）
- 尚小明『清代士人游幕表』（中華書局、2005年）
- 江貽隆、鄒子榮「胡林翼、張裕釗、江有蘭等致徐椒岑書」（『安徽史学』2005年第4期、安徽省社会科学院）
- 楊艷・李仕波「試論黎庶昌的文化外交」『六盤水師範高等專科學校学报』第19卷第1期、六盤水師範高等專科學校編輯部、2007年2月）
- 張裕釗著、王達敏校点『張裕釗詩文集』（上海古籍出版社、2007年10月）
- 劉恒「第三章 碑学的完善与發展」『中国書法史（清代卷）』（江

蘇教育出版社、2007年9月)

- 許全勝撰『沈曾植年譜長編』光緒16年庚寅(1890)閏2月21日。  
(中華書局、2007年8月)
- 莫友芝著·張劍撰『莫友芝年譜長編』(中華書局、2008年11月)
- 王宝平「日本国会図書館蔵黎庶昌遺札」(『文献』2008年第3期)
- 柳春蕊「蓮池書院与以吳汝綸為中心的古文圈子的形成」(『東方論壇』2008年第1期、青島大学東方論壇雜誌社)
- 王晓鐘「鄂博館蔵明清鄂籍名人書家概述」(書法叢刊編輯部『書法叢刊(湖北省博物館藏品專輯)』第5期、總第105期、文物出版社、2008年9月)
- 李志茗「伝統与現代之間：晚清幕府制度之演進」(『學術月刊』第40卷9号、2008年)
- 李志茗「衆流之匯：曾國藩幕府盛況探源」(『歷史教學問題』、2008年4期)
- 名家手稿欣賞「張裕釗致仲武函(局部)」(『書友』第250期、2009年10月)
- 菅野智明『近代中国の書文化』(筑波大学出版会、2009年10月)
- 杉村邦彦「『張廉卿先生論学手札』解題」(『書学叢考』、研文出版、2009年4月)
- 靳志朋「蓮池書院与晚清直隸文化」『燕山大学学报(哲学社会科学版)』第10卷第1期(燕山大学、2009年3月)
- 北京師範大学主編『清代名人書札』(北京師範大学出版社、2009年1月)
- 李松榮「張裕釗書牘輯補—『中国学报』上的『張廉卿先生論文書牘摘鈔』」、『古典文献研究』(2009年00期)

- 田野上人編集『張裕釗書法研究論文集』（華夏文芸出版社、1989年5月初版、2010年12月）
- 張劍著、梅新林·陳玉蘭主編『清代楊沂孫家族研究』（中國社會科學出版社、2010年9月）
- 胡林翼『誥史兵略』（中央編譯出版社、2010年7月）
- 丁有國『張裕釗詩文《濂亭文集》注釋』（中國民航出版社、2010年5月）
- 翰海拍賣會：『翰海2010春季拍賣會—法書楹聯』（翰海拍賣有限公司、2010年6月）
- 石田肇「黎庶昌をめぐる人々」『中國近現代文化研究』第11号、中國近現代文化研究会、2010年3月）
- 張濤「論曾國藩對吳汝綸的影響—以用人思想為例」（『湖南人文科技學院學報』、2011年第6期、湖南人文科技學院）
- 黃海龍「吳汝綸受曾國藩影響之探析」（『傳奇、伝記文學選刊』安徽省文學藝術界聯合會、2011年9月）
- 張小莊「袁昶『毗邪臺山散人日記』中的書法史料整理與研究」（『書法叢刊』第5期、文物出版社、2011年9月）
- 梁光華「莫友芝曾國藩交往述論」（『貴州大學學報 社會科學版』、第29卷第4期、2011年7月）
- 華佳強「莫友芝題跋文集中所見書學思想研究」（『神州』第24期、中國通俗文藝研究会、2011年）
- 吳鵬「莫友芝：晚清碑學的一個面向」（『中國書法』2011年第4期、中國書法家協會）
- 張劍·易聞曉主編『莫友芝文學及文獻學研究』（中國社會科學出版社、2012年3月）

- 隋邦平「治学游芸書学融通—莫友芝書法研究」（『遵義師範学院学报』第14卷第3期、遵義師範学院、2012年6月）
- 吳鵬「貴州省博物館藏莫友芝題跋雜稿考积」、（『文献』、2012年第3期）
- 瞿忠謀「從《評跋萃刊》看晚清書家对趙体書法的反思性評価」（『書法』2012年第11期）
- 張小莊「張裕釗書法評伝」（陳伝席主編『中国書法全集』73 清代編・張裕釗楊峴徐三庚楊守敬卷、榮宝齋、2012年12月）。
- 孫瑩瑩「上海図書館藏『張廉卿雜文』考論」（『書目季刊』46卷3期、2012年12月）
- 況周頤『蕙風簃二筆』卷1（広西師範大学出版社、2012年12月）。
- 張小莊『清代筆記、日記中的書法史料整理研究 上下冊』（中国美术学院出版社、2012年）
- 陳烈主編『小莽蒼蒼齋藏清代学者書札』上中下（人民文学出版社、2013年7月）
- 張廉卿著、丁有国注积『張廉卿詩文注积』（復旦大学、2013年8月）
- 黃萬機『黎庶昌評伝』（『黃萬機全集之二』中華巢經文化事業有限公司、2013年10月）
- 黃萬機『莫友芝評伝』（『黃萬機全集之一』中華巢經文化事業有限公司、2013年10月）
- 曾光光・唐靈「吳汝綸与曾国藩關係弁析」（『蘭台世界』、2014年第6期、蘭台世界雜誌社）
- 呂順長「吳汝綸日本教育視察の筆談記録（訳注）」（『四天王寺大学紀要』第57号、2014年3月）

- 葛明義編『莫友芝書法集』（貴州人民出版社、2014年7月）
- 隋邦平「莫友芝京城書法交游考」（『文芸研究』2014年第9期（總第465期、中國藝術研究院）
- 白謙慎「晚期官僚の応酬書法」（『中國近現代文化研究』第15号、中國近現代文化研究会、2014年3月）
- 張靖銘·李景燕「張裕釗曾祖題匾書法及相關文史考略」（『鄂州大學學報』第21卷第4期、2014年4月）
- 陳奕君「張裕釗書『鮑照飛白書勢銘』及其相關問題」（『文化南宮』秋冬合卷、2014年）
- 王紅光主編『莫友芝書法篆刻作品集』（廣西師範大學出版社、2014年12月）
- 葉瑩瑩『張裕釗年譜長編』（河南人民出版社、2014年12月）
- 李志茗「旧籍新刊与文化伝衍—以晚清官書局為中心的考察」（『福建論壇（人文社会科学版）』、2015年2期）
- 曾國藩著·王澧華校點『曾國藩詩文集』卷3（上海古籍出版社、2015年1月）
- 張劍「莫友芝人生及學術成就謏論—兼論『莫友芝全集』的編纂」、（『中國政法大學學報』、2015年第2期（總第46期））
- 張小龍「張裕釗和黎庶昌交游考」（『青年与社会：上』、2015年第7期、青年与社会雜誌社）
- 黃萬機、黃江玲『遵義沙灘文化史』（『黃萬機全集之三』中華巢經文化事業有限公司、2015年7月）
- 周愚文「吳汝綸日本教育考察与对晚清学制建立影響程度的再探討」（『師大學報：教育科学研究期刊』、第60卷第3期、台灣師範大學、2015年）

- 朱良津「從伝世作品看莫友芝書法」（『文物天地』、2015年5月、中国文物報社）
- 朱良津「大師頻出 黔書伝遠—清代貴州書法談之六」（『貴陽文史』、2015年第5期、貴陽市政協文史和學習委員會）
- 吳鵬「貴州省博物館藏莫友芝家書考釈」、（『文献』、2015年第6期）
- 北京保利拍賣會『中国近現代書画北京保利十周年秋季拍賣會』（北京保利拍賣會、2015年12月8日）
- 白謙慎、徳泉さち訳、「清代晚期官僚の日常生活における書法」（『美術研究』第418号、東京文化財研究所、2016年3月）
- 張紹銀、張靖鳴主編『張裕釗書法集』（張裕釗文化園、2016年8月）
- 陳啓壯『碑骨帖姿—張裕釗書道研究』（吉林文史出版社、2016年6月）
- 朱秀梅「前言」（吳汝綸著、朱秀梅校点『吳汝綸文集』、上海古籍出版社、2017年6月）
- 張靖鳴・黄彩萍・萬海訪「張裕釗家族書法群体調查研究」（『鄂州大学学報』第24卷第6期、2017年11月）
- 陳奕君「胡林翼幕府における張裕釗書法の形成—咸豊年間の書簡を中心として—」（『書学書道史研究』第27号、書学書道史学会、2017年11月）
- 朱東安『曾国藩幕府』（遼寧人民出版社、2018年1月）
- 田人編出版『重脩南宮県学記』（吳橋金鼎古籍印刷廠、2018年1月）
- 袁昶著、孫之梅整理『袁昶日記（上）（下）』（鳳凰出版社、2018

年 6 月)

- 張廉卿「節東都賦·西京賦」一～二十三、(『雪心』、刊行年不明)
- 張靖鳴「張裕釗文化園古墓區文史資料」(內部資料、張靖鳴藏)
- 張裕釗書法文化博物館 書法報社組編『荊楚墨象·張裕釗卷』(湖北省博物館藏、2018 年)
- 『名人翰札墨蹟—張廉卿』(書法研究 雪心會、刊行年不明)

### 三、學位論文

- 魚住和晃『張裕釗と宮島詠士』(東京教育大學大学院修士論文、1972 年 3 月)
- 凌林煌『曾國藩幕府之研究』(文化大學史學研究所博士論文、1995 年)
- 李志茗『晚清幕府研究—以陶、曾、李、袁幕府為例』(上海華東師範大學博士論文、2001 年 4 月)
- 金曉東『衍芬草堂友朋書札及藏書研究』(復旦大學中國古代文學研究中心博士論文、中國古代文學研究中心中國古典文學、2010 年 4 月)
- 李杰『張裕釗書法研究』(首都師範大學中國書法文化研究博士論文、2011 年 4 月)
- 周聰敏『張裕釗書法藝術研究—以蓮池書院時期為主線』(河北大學藝術學修士論文、2013 年 5 月)
- 楊沛沛『張裕釗碑味行書研究』(中國藝術研究院美術學修士論文、2013 年 5 月)
- 陳奕君『張裕釗書法研究』(台灣藝術大學美術學院 書畫藝術學系



研究所修士論文、2013年6月)

- 郭佳『南宮碑體—張裕釗書法的藝術特色與歷史影響』(山西大學美術學修士論文、2014年6月)
- 劉雨婷『莫友芝書法藝術研究』(南京大學美術學修士論文、2017年4月)
- 章國新『莫友芝隸書研究』(中國藝術研究院美術學修士論文、2017年5月)
- 帥幸微『晚清貴州文人書家的儒學思想研究—以莫友芝為例』(西南大學美術學修士論文、2018年3月)

#### 四、Web 情報

- 「清胡林翼致曾國藩五月十七日函」(購書890、國立故宮博物院藏)  
[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34921](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34921) (2016年7月25日閱覽)
- 「清胡林翼致曾國藩十二月初二日夜函」(購書897、國立故宮博物院藏)  
[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34906](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34906) (2016年7月25日閱覽)
- 莫友芝「楷書七言詩」(2017年7月15日閱覽)  
<http://book.kongfz.com/75119/566652570/>
- 「獨立蒼茫—湖南近代名人書法展」(長沙博物館、2015年12月28日~2016年6月26日)  
陶澍「行書七言聯」(湖南省博物館藏)  
<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.a>

[spx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=ZYFD&Guid=0c67592e-c070-45f1-95da-d5c853c9d747&rn=0.9190047659360536](http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=ZYFD&Guid=0c67592e-c070-45f1-95da-d5c853c9d747&rn=0.9190047659360536) (2018年6月4日閱覽)、

胡達源「行書七言聯」(長沙博物館藏)

<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=ZYFD&Guid=6a104cd4-f495-4363-a1ca-7f7ca7ef55e3&rn=0.8073967332384067> (2018年6月4日閱覽)、

胡林翼「楷書八言聯」(湖南省博物館藏)

<http://www.csm.hn.cn/Views/Subject/Dlcm/CalligraphyDetail.aspx?PNo=DLCM&No=SFXSD&CNo=JBFY&Guid=da52cb09-d0c4-4f2f-b0c0-723b6612bd21&rn=0.5477065787649882> (2018年6月4日閱覽)

- 「張裕釗書道研究網—學古堂論壇」<http://www.zhangyz.com/>(2018年8月閱覽)
- 「中央研究院歷史語言研究所／人名權威人物傳記資料庫」(2020年3月31日閱覽)  
<https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/sncaccgi/sncacFtp?@@0.5317171909383909> (2021年7月19日閱覽)
- 「京都大學人文科學研究所所藏石刻拓本資料」  
「南北朝 梁太祖文皇帝(蕭順之)建陵東闕」  
[http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type\\_b/html/nan0056a.html](http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_b/html/nan0056a.html) (2020年4月8日閱覽)
- 「南北朝 梁太祖文皇帝(蕭順之)建陵西闕」  
[http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type\\_b/html/nan0056b.html](http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_b/html/nan0056b.html) (2020年4月8日閱覽)
- 「清代職官資料庫」
- <https://newarchive.ihp.sinica.edu.tw/officerc/officerkm2?@@>

0.5909725081335535 (2021年3月29日閱覽)

- 「清張裕釗致桂卿函 冊頁」国立故宮博物院藏、購書 934

[https://painting.npm.gov.tw/Painting\\_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34926](https://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=34926) (2019年6月20日閱覽)



## 謝 辞

この論文については、資料を集めて、骨格を立てるところから初稿の作成と最終の改定まで、六年間の努力を経過して、最終が本稿を作成したこととなり、日本と台湾と中国と多くの方々からご指導、ご支援、ご厚意を賜りました。また、財団法人日本交流協会からの2年間に渡る奨学金のご援助をいただいて、この場を借りて、心より感謝申し上げます。

本論文の調査データの収集について、日本書象会、中国張裕釗書法研究会、中国張裕釗文化園、張裕釗の後人に関する学者や友人に対し、厚く御礼申し上げます。

本論文の副査として有益なご討論とご助言を賜りました筑波大学大学院の尾川明穂准教授、神戸大学の魚住和晃名誉教授には、本論文をご精読いただき、心より感謝の意を表します。

筑波大学大学院の菅野智明教授には、指導教員としてご指導を賜り、副査として本論文をご精読いただきました。先生の厳しいご指導がなければ、今日の私はなかったと思います。

筑波大学大学院の高橋佑太准教授には主査として、本論文をご精読いただき、貴重なご助言をいただきました。

菅野研究室の諸先輩方、所属学生の皆さんには、様々な形でお世話になって、感謝の意を表します。また、いつも温かく見守り、励ましてくれた家族、親戚、友人にも感謝いたします。

この論文を新たな出発として、張裕釗の研究に少しでも貢献できるよう、今後さらに精進することで、皆様へのご恩返しとしたいと存じます。

2022年3月 陳奕君

